

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第103集

八尾市亀井地内所在

久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V

—大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査—

財団法人 大阪府文化財センター



久宝寺1号墳(西から)



1号主体部検出状況(南から)



第1被葬者頭部
(南から)

序 文

今回の発掘調査区は、久宝寺遺跡の中でも南寄りに位置する旧国鉄竜華操車場跡地内（久宝寺遺跡・竜華地区）にある。この60,678坪の広範囲に及ぶ地域の過去の様子が、発掘調査によって明らかになりつつある。久宝寺遺跡における竜華地区の調査成果は、近畿自動車道建設に伴う調査を凌ぐものが期待できる。

今回の調査は、都市基盤整備公団の委託により実施されたもので、大阪竜華都市拠点土地区画整理事業（都市機能更新事業）に伴う発掘調査の一環であり、久宝寺駅の南西に建設される多目的広場地区を対象とする。

当調査区では、縄文時代晩期から中近世に至る遺構・遺物が検出され、また連続と続く堆積環境が明らかになるなど、多くの成果があげられた。縄文時代晩期末葉（長原式期）に属する遺構の検出は、河内平野における発見例として重要な事例といえる。また、昭和57年～60年度に行われた久宝寺南（その2）の調査で出土した準構造船はあまりにも有名であるが、今回の調査でも古墳時代の準構造船の一部が出土し、注目すべき遺物といえる。

また特筆すべき成果として、古墳時代前期に築造された久宝寺1号墳があげられる。墳丘自体の遺存状態の良さもさることながら、内部主体である割竹形木棺の完存事例は、全国的にも極めて珍しい。また明確な割竹形木棺の遺存例としては最古のものであり、今後の古墳時代研究に大きく寄与する資料となることは間違いない。

こうした成果を上げたのも、大阪府教育委員会、都市基盤整備公団をはじめとする関係各位のご指導、ご協力の賜物と感謝している。これからも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成15年10月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例言

1. 本書は大阪府八尾市亀井地内に所在する久宝寺遺跡（多目的広場）の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府都市拠点土地区画整理事業（都市機能更新事業）に伴う多目的広場の建設に先立ち、都市基盤整備公団の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センター（現・大阪府文化財センター）が実施した。
3. 当センターは、平成14年4月をもって実施された組織改編に伴い、財団法人大阪府文化財調査研究センターから財団法人大阪府文化財センターに改称した。
4. 現地における調査は「平成12年度大阪府都市拠点地区多目的広場埋蔵文化財発掘調査」として、久宝寺遺跡（多目的広場）を当センター調査部長井藤 徹、調整課長赤木克視、調整係長藤永正明（平成13年3月まで）・森屋直樹（平成13年4月以降）、中部調査事務所長藤田憲司、同所調査第1係中河内調査班長秋山浩三（平成13年4月より調査第3係長）の指示のもと、同係技師西村 歩・酒井泰子（大阪府教育委員会文化財保護課から出向、平成13年6月まで）、専門調査員南條直子（平成13年4月以降）が担当した。また調査にあたり同係技師岡本圭司・後川恵太郎・奥村茂輝、専門調査員新垣香苗・永野 仁の協力を得た。引き続き実施された久宝寺遺跡（多目的広場その2）は「平成13年度大阪府都市拠点地区多目的広場埋蔵文化財発掘調査」として西村・南條が担当した。遺物の写真撮影は中部調査事務所主査片山彰一、保存処理および木製品樹種鑑定は同所主査山口誠治が行った。
5. 現地調査のうち、久宝寺遺跡（多目的広場）は平成13年2月27日から平成14年2月28日まで、久宝寺遺跡（多目的広場その2）は平成14年2月12日から同年3月22日まで実施した。整理業務は「平成14年度大阪府都市拠点地区多目的広場遺物整理業務」として平成14年9月2日から平成15年2月28日まで、当センター調査部長玉井 功、調整課長赤木、調整係長森屋、中部調査事務所長藤田、第5係長金光正裕の指示のもと、西村・南條が担当し、平成15年10月31日の本書の刊行をもって全事業を終了した。
6. 調査では次の各位より有益なご指示・ご指導を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略・順不同）都出比呂志・清家 章（大阪大学）、和田晴吾（立命館大学）、米田敬幸・瀧 斎・吉田野乃（八尾市教育委員会）、原田昌則・成海佳子・西村公助・坪田真一・岡田清一・森本めぐみ・樋口 薫・金親満夫（財団法人八尾市文化財調査会）、松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）、野島 稔（四条畷市教育委員会）、関川尚功・小池香津江・今尾文昭・福田さよ子（奈良県立橿原考古学研究所）、大野 薫（大阪府教育委員会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、伊藤聖浩（羽曳野市教育委員会）、金 武重（畿甸文化財研究院）、光谷拓実（奈良文化財研究所）、寒川 旭（独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター）
7. 調査・整理作業には下記の諸氏の援助を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略・五十音順）今田明子・内田 充・大谷絵理・奥村福子・清水芳子・竹田博美・武智あゆみ・野口佳子・林 聡・平田淑子・福永弘美・松岡聖美・李 聖子・渡辺亜紀子・渡辺真弓
8. 本書の執筆は基本的に西村・南條が行ったが、歯牙の分析は安部みき子氏（大阪市立大学）・山口誠治（当センター）、地震痕跡の分析は寒川 旭氏（独立行政法人産業技術総合研究所）より玉稿を頂戴し、文責を目次に記した。編集は西村が担当した。

凡 例

1. 調査にあたっては国土座標第Ⅵ系を基準に、当センターが「発掘調査マニュアル」に定めた地区割り方法を使用した。その詳細は第1章第2節に記述した。遺構平面図には国土座標第Ⅵ系の座標値をX軸・Y軸についてmで表示したが、単位は省略して数値のみ記載した。
2. 遺構実測図その他の方位は、国土座標に基づく座標北を示す。なお座標北を基準とした場合、調査地点の磁北はN-6°40'-Wに、真北はN-0°7'-Eに偏位する。
3. 標高には全てT.P.(東京湾平均海面)+値を使用した。単位はmである。
4. 遺構番号は遺構の種類とは関係なく、調査時点での検出順に1からの連番号を付与した。同一番号が異なる遺構に付与されることはない。その番号を基本的に本書でも踏襲しており、3桁の遺構番号「001～」で表記する。
5. 遺構の略号は下記の通りとし、遺構番号の前に冠した。
SD一溝、SK一土坑、SP一ピット・柱穴、NR一自然流路
6. 遺物番号は、土器・石器の種類ごとに連番号を与えた。石器の連番号には種類を示す略号Sを冠した。土器は無記号である。
7. 遺物実測図の縮尺については、土器・瓦を基本的に1/3、石器・石製品を2/3に統一した。木器・木製品は遺物の寸法によって適宜縮尺を変更した。
8. 遺構実測図の縮尺は特に定めず、適宜設定した。
9. 調査・整理にあたって土色・土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』20版(1997)を基準として記録を行った。土器の色調は、他の諸特徴と共に遺物観察表に記載した。
10. 観察表では土器の復原口径、残存器高、石器の残存値について()内に数値を記載した。
11. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。

本文目次

巻頭図版

序文

第1章 経緯と方法	(南條)	1
第1節 調査に至る経過		1
第2節 調査の方法		1
第3節 久宝寺1号墳調査の経過と方法		3
第2章 位置と環境	(南條)	5
第1節 地理的環境		5
第2節 歴史的環境		8
第3章 遺跡の概要		12
第1節 既往の調査		12
第2節 調査の概要		17
第4章 調査成果		18
第1節 順序	(西村・南條)	18
第2節 遺構と遺物		28
第1項 中世	(南條)	28
第2項 古代～古墳時代	(南條)	34
第3項 弥生時代	(西村・南條)	57
第4項 縄紋時代	(西村・南條)	63
第5章 久宝寺1号墳	(西村)	69
第1節 墳丘・周溝		69
第1項 堆積環境		72
第2項 規模と構造		72
第3項 遺物出土状況		75
第2節 埋葬主体		79
第1項 墳頂部		79
第2項 周溝		87
第3節 出土遺物		89
第6章 久宝寺1号墳出土の白骨について	(安部・山口)	98
第7章 久宝寺遺跡(多目的広場)で検出された地震の痕跡	(寒川)	101
第8章 河内平野における古墳の出現	(西村)	111

挿 図 目 次

第 1 図	調査区地区割図	2
第 2 図	地形分類図	6
第 3 図	周辺遺跡分布図	9
第 4 図	調査地周辺の発掘調査位置図	13
第 5 図	調査区北壁・東壁土層断面図	20
第 6 図	調査区南壁・西壁土層断面図	21
第 7 図	土層断面模式図(北壁・東壁)	23～24
第 8 図	土層断面模式図(南壁・西壁)	25～26
第 9 図	第 7 層以下の層準	27
第 10 図	調査区内竜草操車場施設	28
第 11 図	島島 3 土層断面図	28
第 12 図	第 1 - 1 面島島と地籍図の対応関係	29
第 13 図	第 1 - 2 面遺構配置図	30
第 14 図	第 1 - 3 面遺構配置図	31
第 15 図	第 1 - 3 面遺構平・断面図	32
第 16 図	第 1 - 3 層出土遺物実測図	32
第 17 図	第 2 - 1 面遺構配置図	35
第 18 図	第 2 - 1 面NR071しがらみ平・立面図	36
第 19 図	第 2 - 1 面NR071出土大刀形木製品実測図	36
第 20 図	第 2 - 1 面溝断面図	37
第 21 図	第 2 - 1 面ピット群・土坑群配置図	37
第 22 図	第 2 - 1 面土坑平・断面図(1)	38
第 23 図	第 2 - 1 面SK001平・断面図	40
第 24 図	第 2 - 1 面土坑平・断面図(2)	41
第 25 図	第 2 - 1 面土坑平・断面図(3)	42
第 26 図	第 2 - 1 面出土遺物実測図	42
第 27 図	第 2 - 2 面遺構配置図	44
第 28 図	第 2 - 2 面SK018平・断面図	45
第 29 図	第 2 - 2 面土坑平・断面図	45
第 30 図	第 2 - 2 面出土遺物実測図	46
第 31 図	第 3 - 1 面遺構配置図	47
第 32 図	第 3 - 1 面土坑平・断面図	48
第 33 図	第 3 - 2・3 面遺構配置図	49
第 34 図	第 3 - 2 面土坑平・断面図	50
第 35 図	NR054準構造船出土状況	50
第 36 図	第 3 層出土遺物実測図	50

第37図	NR 054出土構造胎実測図	51
第38図	第4-1面遺構配置図	52
第39図	耕作溝群土層断面図	53
第40図	第4-1面・第4-1層出土遺物実測図	54
第41図	第4-2面遺構配置図	55
第42図	第4-2面道路状遺構 (SD 130・131) 土層断面図	56
第43図	第5-1面遺構配置図	58
第44図	第5-2面遺構配置図	59
第45図	第5-1面出土杵実測図	60
第46図	第5-2面大畦畔2・SD 160横断面図	60
第47図	第5-2面・5-2層出土遺物実測図	60
第48図	第6-1面遺構配置図	61
第49図	第6-1面・6-1層出土遺物実測図	62
第50図	第6-2面遺構配置図・等高線地形図	64
第51図	第6-2面土坑平・断面図、溝断面図	65
第52図	第6-2面出土遺物実測図	66
第53図	第6-3・4面NR 201構造模式図・等高線図	67
第54図	第6-3・4層出土遺物実測図	68
第55図	久宝寺1号墳平面図(検出時)	69
第56図	久宝寺1号墳墳丘断面図(南北方向)	70
第57図	久宝寺1号墳墳丘断面図(東西方向)	71
第58図	トレンチ配置図	72
第59図	久宝寺1号墳墳丘復原図	73
第60図	墳丘下部・周溝底構造平面図	74
第61図	墳頂部出土土器配置図	75
第62図	墳頂部出土土器平・断面図	76
第63図	周溝内遺物出土状況平面図・見通し立面図	77
第64図	主体部配置図	78
第65図	墳頂部埋葬主体部配置図	79
第66図	1号主体部平・断面図	80
第67図	割竹形木棺棺身実測図	81
第68図	割竹形木棺棺蓋実測図	82
第69図	割竹形木棺仕切板実測図	83
第70図	1号主体部被葬者頭蓋部および歯列検出状況図	84
第71図	2号主体部平・断面図	85
第72図	2号主体部被葬者頭蓋部および歯列検出状況図	86
第73図	3号主体部平・断面図	86
第74図	周溝内主体部配置図	87

第75図	4・7号主体部平・断面図	88
第76図	5・6号主体部平・断面図	88
第77図	8号主体部平・断面図	89
第78図	久宝寺1号墳出土土器実測図(1)	90
第79図	久宝寺1号墳出土土器実測図(2)	91~92
第80図	久宝寺1号墳出土土器実測図(3)	93
第81図	久宝寺1号墳出土土器実測図(4)	94
第82図	久宝寺1号墳出土土器実測図(5)	95~96
第83図	久宝寺1号墳出土用途不明木製品実測図	97
第84図	調査区東部における砂礫の分布図	101
第85図	砂礫の平面図	102
第86図	液状化跡の断面図(その1)	103
第87図	液状化した砂礫の粒径加積曲線	103
第88図	液状化跡の断面図(その2)	103
第89図	液状化跡の断面図(その3)	104
第90図	液状化跡の断面図(その4)	104
第91図	液状化跡の断面図(その5)	105
第92図	地滑り跡の断面図	105
第93図	地割れ跡の断面図	106
第94図	大阪平野周辺の活断層と伏見地震の痕跡を検出した遺跡	108
第95図	巨大地震の発生時期	109
第96図	割竹形木棺縦・横断面模式図	112
第97図	久宝寺・加美墳墓群分布状況	116
第98図	前期古墳に伴う底部穿孔土器・壺形埴輪	118

表 目 次

第1表	久宝寺遺跡および周辺の発掘調査一覧表	14~16
第2表	土層名一覧	22
第3表	第2-1面ビット法量表(1)	39
第4表	第2-1面ビット法量表(2)	43
第5表	第4-2面溝法量表	56
第6表	第6-1面溝法量表	62
第7表	第6-2面ビット法量表	63
第8表	埴輪部直口壺の主軸方向と仰角	76
第9表	割竹形木棺法量表	79
第10表	甕の残存部位	99

第11表	久宝寺1号墳出土人骨の齒の計測値	100
第12表	土器・瓦観察表	121~126
第13表	石器観察表	126

写真目次

写真1	墳丘斜面の直口壺出土状況	77
写真2	周溝外遺物出土状況	78
写真3	周溝外の炭化木材	78
写真4	2号主体部人骨レントゲン写真	99
写真5	砂脈の平面形	102
写真6	砂脈を構成する砂礫	102
写真7	液状化跡の断面形	103
写真8	液状化跡の断面形	104
写真9	液状化跡の断面形	105
写真10	地滑りと地割れの断面形	105
写真11	地割れの断面形	106

巻頭図版目次

- 巻頭図版1 久宝寺1号墳
 巻頭図版2 1号主体部検出状況
 第1被葬者頭部

図版目次

- 図版1 第1-2面 SD004
 第1-3面 SD002・耕作溝群
 第1-3面 SD005・006
 図版2 第1-3面 SD074・007
 図版3 第2-1面 全景 I・II区
 図版4 第2-1面 NR071
 しがらみ検出状況
 大刀形木製品検出状況
 図版5 第2-1面 SD074・078

- SD 074・078断面
SD 081
SD 081底で検出した足跡
SD 081断面
- 図版6 第2-1面 土坑・ピット群
SD 008・012・SK 044~046
SK 044断面・SK 045断面・SK 046断面
- 図版7 第2-1面 SK 001
SK 001土器出土状況
SP 072・SK 095・SK 088・SK 093
SD 010断面・SD 008断面・SD 011断面
- 図版8 第2-2面 全景 II区
SK 018・SK 018土器出土状況
SK 091
- 図版9 第3-1面 全景 I区
水田
水田畦畔断面
- 図版10 第3-2・3面 全景 II区
NR 054準構造船検出状況
準構造船柄穴
- 図版11 第4-1面 全景 I・II区
- 図版12 第4-1面 耕作溝群
耕作溝群断面
SD 119・120
- 図版13 第4-1面 SD 115・117・118
出土石塊1・2
断層・断層土層断面
- 図版14 第4-2面 全景 I・II区
- 図版15 第4-2面 道路状遺構 SD 130・131
耕作溝群
- 図版16 第4-3面 全景 I・II区
- 図版17 第5-1面 全景 I・II区
- 図版18 第5-1面 水田
水田内で検出した足跡
- 図版19 第5-2面 全景 I・II区
- 図版20 第5-2面 水田 大畦畔2
I区水田
SD 160

大陸群 1

- 図版 21 第 6-1 面 全景 I・II 区
- 図版 22 第 6-2 面 SK 171・SK 181・SP 140~143・SD 138・144
墳砂・墳砂断面
- 図版 23 第 7 面 全景 I・II 区
NR 201 土層断面 自然堤防部分
後背湿地部分
- 図版 24 久宝寺 1 号墳検出過程 第 2-1 面
第 3-1 面
- 図版 25 久宝寺 1 号墳検出過程 第 4-1 面
第 4-2 面
- 図版 26 第 4-1 面 久宝寺 1 号墳
- 図版 27 陸橋部
1 号墳検出作業風景
- 図版 28 墳頂土器群
墳頂土器 112~115
墳頂土器出土位置
- 図版 29 北辺周溝土器出土状況
- 図版 30 北辺周溝断面
南辺周溝断面
北辺周溝土器出土状況
- 図版 31 北辺周溝遺物出土状況
用途不明木製品出土状況
- 図版 32 1 号主体部検出状況
- 図版 33 1 号主体部棺蓋除去直後
木棺北側小口部内堆積土
木棺南側小口部内堆積土
- 図版 34 仕切板検出状況
- 図版 35 仕切板復原配置
- 図版 36 第 1 被葬者頭部検出状況・歯牙
第 2 被葬者頭部検出状況・歯牙
- 図版 37 1・2 号主体部検出状況
- 図版 38 2 号主体部
棺蓋・棺身
- 図版 39 2 号主体部
棺蓋小口部・仕切板・歯牙
- 図版 40 1・3 号主体部
3 号主体部

周溝外土器（116b）出土狀況

- 図版 41 4号主体部検出状況
4号主体部周辺土層断面
5号主体部
- 図版 42 6号主体部
7号主体部
8号主体部
- 図版 43 1号主体部棺身除去後
1・2号主体部墓壇完掘状況
- 図版 44 周溝完掘状況
- 図版 45 第2-1・2面出土土器
- 図版 46 第3-1・2層、第3-3・4-1面出土土器
- 図版 47 第4-1層出土土器、第1-3層出土瓦
- 図版 48 第6-1面・6-1層、第6-2面出土土器
- 図版 49 第6-3・4層出土土器
- 図版 50 第5-2層・第6-1面出土石器
- 図版 51 NR 054準構造船・NR 071大刀形木製品
- 図版 52 久宝寺1号墳出土土器（1）
- 図版 53 久宝寺1号墳出土土器（2）
- 図版 54 久宝寺1号墳出土土器（3）
- 図版 55 久宝寺1号墳出土土器（4）
- 図版 56 割竹形木棺棺蓋
- 図版 57 割竹形木棺棺身
- 図版 58 割竹形木棺仕切板・第4-1面出土石塊

第1章 経緯と方法

第1節 調査に至る経過

今回の調査地は久宝寺遺跡の中でも南寄りにあたる竜華地区に位置する。竜華地区は正式名称を「大阪竜華都市拠点地区」といい、八尾市亀井・渋川両地内に所在している。当地は旧国鉄が関西本線(大和路線)久宝寺駅とその周辺において1938年(昭和13年)に設置した竜華操車場の跡地である。操車場は総面積60,768坪、場内建物160棟を数える大規模な施設であったが、国鉄民営化に先立って1986年(昭和61年)に廃止された。残された広大な跡地を利用すべく、同年7月に地元の八尾市が「竜華操車場跡地の基本構想」を発表し、大阪府・八尾市・都市基盤整備公団の三者が事業主体となり、再開発事業の実施が具体化した。敷地の南北に別れていた上下各線路、および久宝寺駅舎施設を北側に集約し、道路網や駅前整備、土地区画整理、下水処理場や市民病院など公共施設の建設を主たる目的とする。これに伴う調査は、1988年の八尾市教育委員会による駅舎新設に先立つ試掘調査を嚆矢とし、これ以後、事業主体等により(財)八尾市文化財調査研究会・八尾市教育委員会と当センターが分担して実施している。

今回の調査は、都市基盤整備公団関西支社の委託を受け、大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う多目的広場・多目的広場その2の発掘調査である。

第2節 調査の方法

調査区は八尾市亀井地内に所在し、JR大和路線久宝寺駅南西に建設される多目的広場地区を対象に実施した。現地における発掘調査は平成13年2月20日から平成14年2月28日まで行った。調査区は東西約62m、南北約50mの長方形を呈している。現地では便宜上、東西二区に分割して交互に調査を実施した。西側をⅠ区、東側をⅡ区とする。

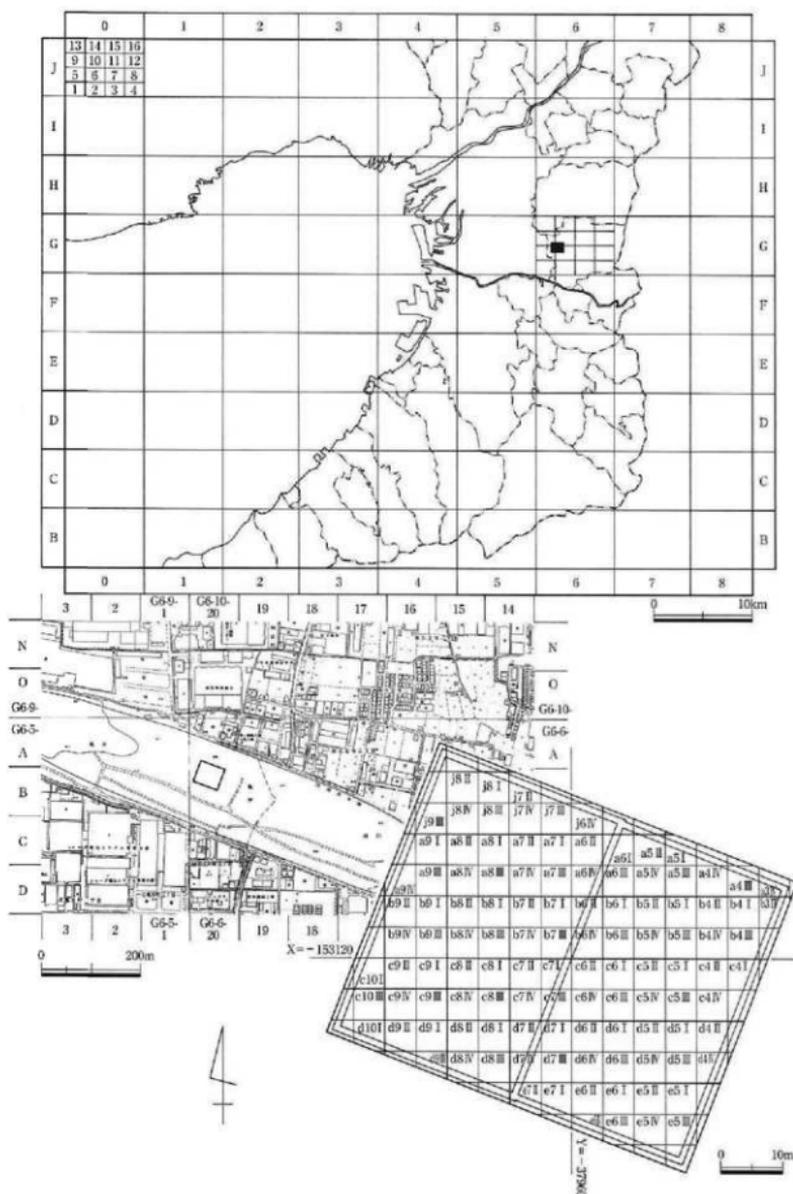
調査区の現地盤高はT.P.8.64mである。調査最終深度との差が4.5m近くになるため、公団側の事業として調査区周囲の土留め用鋼矢板を打設、さらに調査区内の現地表面から機械掘削を実施し、攪乱・盛土・近世以降の形成層を排除した(平均T.P.7.19m)。これ以下をセンターの事業として人力掘削の対象とし、1次掘削(多目的広場)でT.P.4.45mまで、2次掘削(多目的広場その2)でT.P.4.00mまで調査を行った。掘削の進行に伴い、1次掘削中に鋼矢板倒壊防止のための鉄骨切梁を一段設置した。

トレンチの呼称については、竜華地区において複数の発掘調査が実施されており、混乱を避けるために従前の慣例に従い、年次毎に着手順で調査区番号を付与した。今回の調査区名は久宝寺遺跡(多目的広場)2001-1(多目的広場その2は2001-2)とし、遺物ラベル・写真ラベル等の遺跡名欄には、このトレンチ名を使用した。

機械掘削終了後、人力掘削を開始する面を「第1面」とし、以下、上から順次調査面の番号を付した。また層名は調査面から次の調査面までを一つの層として番号を付した。ここでいう層とは掘削と遺物取り上げの単位であり、調査面と次の調査面までの堆積層は、土層観察の結果によって細分されることもある。また同一層でも土壌層と、その下の土壌化を受けずに堆積時の状態をとどめている層を分別して認識しているものもある。堆積環境については、土層観察用トレンチを調査区の四周に設け記録した。

全ての遺構には、それぞれ上から下へ検出順に通し番号を与えている。

地区割については、国土座標系第Ⅱ系を基準に当センターが定めた地区割法を使用した(第1図)。調



第1图 调查区地区剖面

査時は100×100mの大区画の中を10×10mの小区画に分割し、それぞれアルファベットとアラビア数字の組み合わせで地区名を表した。必要に応じて小区画をさらに5×5mに4分割した。遺物取り上げや遺構の位置の特定は基本的にこの地区割を用いた。地区名は、北東隅の杭の名称を用いた。なお、この地区割法は2001年度をもって廃止されたが、本書ではそのまま踏襲している。

方位は座標北で表示した。なお座標北を基準とした場合、調査地点の磁北はN-6°40'-Wに、真北はN-0°7'-Eに偏位する。

高さは東京湾平均海面(T.P.)で表示した。

遺構面全体は測量業者委託によりクレーン使用の空中写真測量を行い、1/100および1/50の図化作業を行った。また必要に応じて平板測量図を作成した。土層断面図は1/20で作成したが、個々の遺構や遺物出土状況などは適宜スケールを決定した。

遺構面、個々の遺構、土層、土層断面、遺物出土状況などは、35mmカメラによるモノクロ・リバーサル撮影、6×7カメラによるモノクロ(重要なものはリバーサルも使用)撮影を行った。またメモ代わりにネガカラーを適宜使用した。

出土遺物は調査区・層位ごとに分類の上、選別作業を経て、実測を行った。また遺存状態の良好な遺物については写真撮影を実施し、本報告書に掲載した。

第3節 久宝寺1号墳調査の経過と方法

1. 久宝寺1号墳の発見

久宝寺1号墳は、調査開始時に側溝(土層観察用トレンチ)を設けた時点で確認した。西辺側溝の土層断面には人工的な砂礫層の起伏が観察され、また掘削時に同層位から古式土師器の直口壺が出土した。当調査区西側の隣接地では八尾市文化財調査研究会が2基の方形周溝墓の存在を確認している。そのため、この地形の起伏は墳丘と周溝の断面と考えられ、側溝の東側に未確認の墳丘の存在が想定された。

2. 墳丘の検出(図版24・25)

第2-1面(T.P.7.00m前後)を検出した際に、墳頂部の輪郭を確認した。第3-1面(T.P.6.50m前後)を検出する際には、墳頂部が周辺遺構面より高くなるため、墳丘の西側を除く三方向に土層観察用セクションを設定した。古墳築造の基盤となる第4-1面を検出する際には、墳頂部を除く遺構面を平面的に検出し、その後、周溝埋土を掘削した。墳丘を検出する際に、墳頂部の南西を除く三隅で直口壺が出土した。側溝設置の時点で出土した直口壺を加えると、四隅で検出したことになる。

3. 周溝の検出

周溝検出の際には、墳丘に設けたセクションとは別に、周溝内堆積層観察用セクションを北東部・南東部に補助的に設けた。周溝東側では陸橋を検出した。陸橋の調査および墳丘の東西セクションを設定するため、トレンチを入れると、組合式木棺が出土した。その他、周溝埋土掘削時に、周溝南東部および北東部で土壘墓を2基、陸橋付近で土器棺墓を2基検出した。周溝北側では、土器が集中して出土した。また墳丘斜面上で用途不明木製品を検出した。

4. 墳丘に伴う遺物の取り上げ

墳頂部分検出の際には、設けたセクションによって分断された四箇所を北東・北西・南東・南西の順にⅠ～Ⅳの番号をあてた独自の地区割を設け、遺物を取り上げた。出土土器群は、個体ごとに独自の通番号を設けて取り上げた。周溝底と墳丘周辺に散在していた木材は、平板で位置を記録し、樹種鑑定を実施した。

5. 主体部検出

1号主体の検出 主体部検出を開始するにあたり、副葬品として鏡の出土を想定し、事前に金属探知機による探査を行ったが、主体部の位置を特定するには至らなかった。墳丘盛土が砂礫であることに加え、表面から土壌化が進行していたため、主体部掘形の検出は困難を極めた。検出作業にはセクションを残しつつ墳頂部を水平に5cmごとに掘削を行ったが、10cm下げた時点まで確認できなかった。このため南北セクションに隣接して幅50cmのトレンチを掘削し掘形の検出を試みた。墳頂部上面から20cm掘り下げた時点で木棺の一部が現れ、これを手がかりに墓壙の掘形を検出、これに伴う土層観察用セクションを南北・東西方向に設定した。墓壙埋土は4ブロックに分けてすべて採取し、篩にかけたが遺物等は検出されなかった。木棺は天井部が湾曲することから割竹形木棺と予想され、墓壙を徐々に掘削して棺蓋を全検出した。その後、棺蓋の下部に棺身を確認し、棺蓋が棺身より僅かに西にずれていることが判明した。当調査区内には、竜華操車場建造物に伴う松杭やPC杭が多数打ち込まれていたが、これらによる被害は割竹形木棺の北西端部と、墳頂部北東の直口壺など比較的低微であった。

割竹形木棺の棺蓋を除去したところ、棺身の南北に仕切板が確認された。土砂の流入はこれによって遮断され、棺内部は空洞のまま保たれていた。棺身底には、黒褐色を呈する粘土状の物質が約2cmの厚さで堆積しており、崩壊した遺骸に由来するものと考えられた。この堆積物は副葬品の分布状態を把握するため任意に等分割し、ブロック毎に分けて細かく検出を行った。その結果、遺物は出土しなかったが、棺身の南北からそれぞれ歯牙が検出され、二体埋葬の実態が判明した。北側の歯牙周辺には水銀朱の分布が肉眼で観察できた。

3号主体の検出 1号主体部の割竹形木棺の確認作業中に、その西側において土器棺の本体を検出した。墳丘盛土、主体部埋土ともに砂礫を主体とするため、墓壙掘形の検出は困難であったが、トレンチを掘削して確認を試みた。

2号主体の検出 第1・3主体部の写真撮影時に墳頂部の精査を行った際、1号主体部の東にある攪乱坑壁面に木質遺存体が確認され、新たな木棺の存在が明らかとなった。しかしこの主体部は棺体の直上まで近世以降の大きな攪乱を受けており、墓壙の検出は極めて困難であった。この2号主体部の墓壙検出と、1・2号主体部の切り合いを検討するため、南北・東西にトレンチを設定した。

2号主体部の木棺は土圧により圧縮され、棺蓋・棺身が密着して一体化した状態で検出されたが、それぞれの木目が僅かに方向を違えることから、かろうじて両者を区別できた。蓋材を取り除くと、棺身上に仕切板と考えられる材と、歯牙を検出した。木棺の遺存状態は極めて悪く、木棺全体を取り上げることが不可能なため、頭部周辺については周囲の土ごと取り上げを行い、他の部材は樹種鑑定用試料のみ採取した。木棺内部の埋土は南北に分けた上で篩にかけたが、遺物は全く検出されなかった。

保存処理 割竹形木棺(棺蓋・棺身・仕切板)は現地調査終了後、直ちに中部調査事務所に搬送し、写真撮影の後、凍結乾燥法を経てPEG処理による保存処理を行った。

分析・鑑定 1号主体木棺・2号主体木棺・組合式木棺、および用途不明木製品、周溝内出土の木材については、可能な限り樹種鑑定を行った。1号主体から検出した歯牙周辺の堆積物を分析した結果、南側の歯牙周辺にも水銀朱が確認され、南北双方の被葬者頭部付近に朱が用いられていたことが判明した。

出土した木棺の仕切板は、奈良文化財研究所の光谷拓実氏に年輪年代測定を依頼したが、年輪が鑑定基準に及ばず測定できなかった。

木棺・土壌裏から検出した歯牙の分析は、大阪市立大学の阿部みきこ氏に依頼した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

久宝寺遺跡は、八尾市の北西部を中心に大阪市・東大阪市のそれぞれ一部にまたがる遺跡で、その範囲は南北1.6km、東西1.7kmに及ぶ。

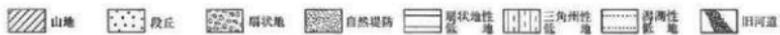
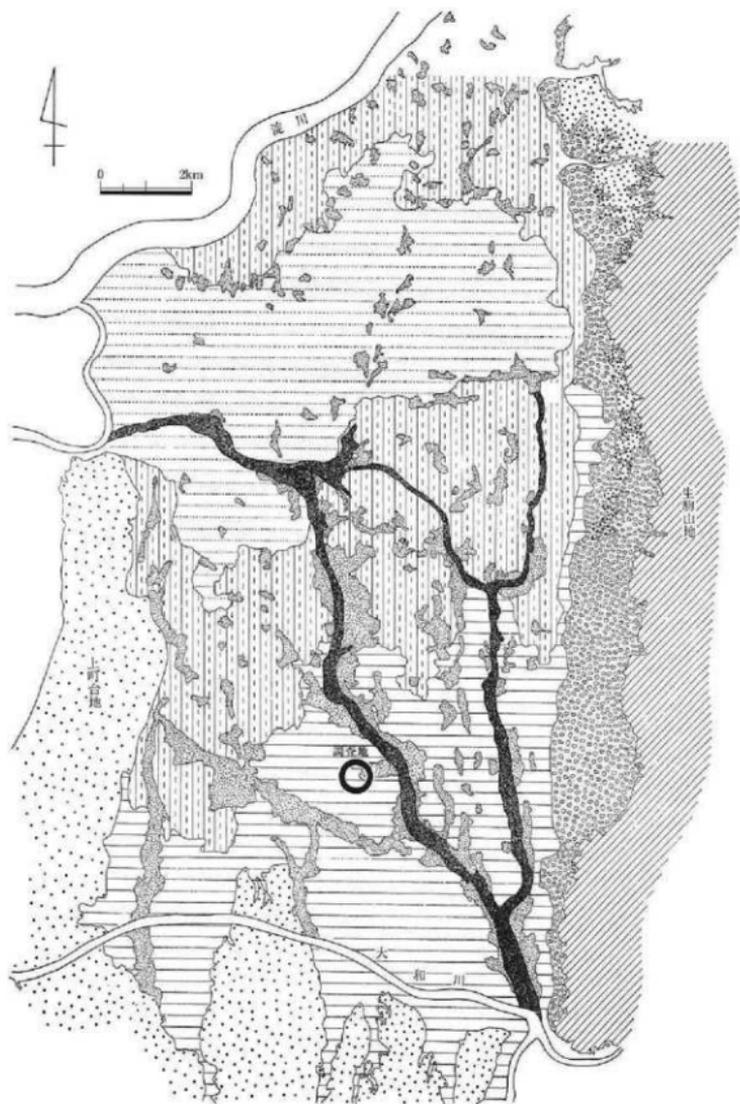
当遺跡の立地する河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、南を河内台地によって囲まれた沖積低地である。河内平野の低地は扇状地性・三角州性・潟湖性などの要因によって形成される、いわゆる後背湿地である。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流路で平野部を北西に流れる長瀬川と、南側を流れて上町台地の東斜面まで達する平野川とに挟まれた扇状地性低湿地上に立地する(第2図)。以下に旧石器時代から縄紋時代の河内平野の地形環境を概観する。

旧石器時代～縄紋時代草創期 当遺跡が立地している現在の河内平野一帯には、古大阪平野と呼称される陸地が広がっていた。現在より海水準が低く、海岸線が紀伊水道まで後退していたため、生駒山地から上町台地をはさんで淡路島まで平野が広がっていた。この古大阪平野は、北は六甲山・北摂山地、南は和泉山脈にしきられた盆地の中の平野であった。当時の年平均気温は現在より低く、雨量も多くなかったため、景観としては、針葉樹と広葉樹の森が広がっていたと考えられる。平野の北部には、桂川・宇治川・木津川の水を集めた淀川が南西に流れていた。平野の南部には、奈良盆地と石川の水を集めた古長瀬川が北西に流れていた。古長瀬川は、近鉄久宝寺駅付近では幅約300m、深さ約10mの谷となり、上町台地の東側で古平野川に合流して進路を北に変え、上町台地の山裾を削り、JR森ノ宮駅の東側で幅約600m、高さ約20mの大崖を作りながら淀川に合流する。その後、進路を西に変え、千里山丘陵と上町台地の谷間を流れていた。

縄紋時代 縄紋時代前期になると、極寒期が終わって気温が上昇するとともに、海水準の上昇(縄紋海進)が起こる。上町台地の北端を開口とし、海岸線が古大阪平野まで浸入し、北は高槻・枚方、東は生駒山地、南は美園遺跡付近にまでおよぶ広大な河内湾が形成された(河内湾Ⅰの時代)。北の淀川、南の大和川も海が浸入してきたため後退を始める。上町台地は半島状に海に突き出して、河内湾と西に広がる大阪湾を隔てていた。縄紋時代後期から晩期になると、淀川・大和川は三角州・砂州の発達によって土砂が堆積し、河内湾を埋め始め、広い干潟を形成するようになる(河内湾Ⅱの時代)。

弥生時代 河内湾は、上町台地先端の砂嘴が発達して河内湾出口をふさいだ結果、淡水化が進んだ。河内湾の水位は低下したが、低地中央部の河川は湿地を掘り込んで流れたため、土砂はそれほど堆積しなかった。しかし、淀川や大和川流域では、上流から砂礫などが大量に運搬されて堆積し、自然堤防が発達し、後背湿地が形成された。低地中央部にはヨシ原などの湿地が広がっていたと考えられる。弥生時代中期になると、河内湖の水位が再び上昇を始めた。水位の低いときに湿地を掘り込んで流れていた河川は、運搬作用が低下して氾濫し、自然堤防や後背湿地が形成された。淀川や大和川の周辺も自然堤防地帯が拡大していった。後期になると河内湾は完全な淡水湖に移り変わった(河内湖Ⅰの時代)。その後、河内湖と称される湖は、淀川・古川・寝屋川・大和川・東除川・西除川などの三角州によって埋め立てられていく。湖面の上昇と川の氾濫による自然堤防と後背湿地の形成は古墳時代初頭まで続き、自然環境は非常に不安定であった。

古墳時代 古墳時代になると自然環境は比較的安定したが、洪水時には河内湖の水位が上昇し、砂州の



第2図 地形分類圖 (原秀初氏原図)

基部より湖水が溢れ出した。この頃になると、労働力を組織する権力が現れていたため、洪水対策として、大規模な河川改修が行われるようになる。『日本書紀』には、河内湖の滞水を排除するために、宮の北に難波堀江が開削されたとある(河内湖Ⅱの時代)。人間の手によって、自然地形が大きく変化させられることになる。

古代以降 その後は、人間による自然環境改変が行われる。天平宝字六(762)年に「長瀬堤」(志紀・澁川・炭田堤)などが旧大和川や淀川に築かれる(『続日本紀』)。安土・桃山時代には、豊臣秀吉によって淀川左岸に文録堤が築かれ、寝屋川や古川が淀川から切り離された。江戸時代には、玉串川や長瀬川も大和川の付け替えによって、上流の集水域を失った(大阪平野Ⅰ・Ⅱの時代)。

参考文献

- 梶山彦太郎・市原 実 1972 「大阪平野の発達史」『地質学論集』第7号
- 原 秀禎 1980 「第二章第一節 自然地理的背景」『亀井・城山』(財)大阪文化財センター
- 只塚爽平・成瀬 洋・太田陽子 1985 『日本の自然4 日本の平野と海岸』
- 渡辺昌宏他 1985 『美園』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 原 秀禎 1987 「第三章第一節第4項 河内低地の地形分類」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 日下雅義 1998 『平地は語る』
- 地学団体研究会大阪支部 1999 『大地のおいたち』
- 赤木克復他 2001 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ ――般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査―』(財)大阪府文化財センター

第2節 歴史的環境（第3図）

旧石器時代 河内平野周辺地域で人類の営みがみられるのは、現在のところ旧石器時代後期が最古である。国府台地上の国府遺跡では、横剥ぎのナイフ形石器が出土し、国府型ナイフの標式遺跡となっている。旧石器時代の遺跡としては、河内台地上に立地する長原・八尾南・瓜破遺跡、上町台地に立地する山之内・桑津遺跡が挙げられる。これらの遺跡は洪積段丘・台地上で発見されており、平野部には認められない。

縄紋時代 平野部に集落が出現するのは、現在のところ縄紋時代晩期が最古である。日下貝塚・山賀・長原・船橋・久宝寺遺跡などが挙げられる。中でも船橋・長原遺跡は、晩期縄紋土器の標式遺跡となっている。美園遺跡・若江北遺跡では、晩期と弥生時代前期の土器の共伴例が見られる。

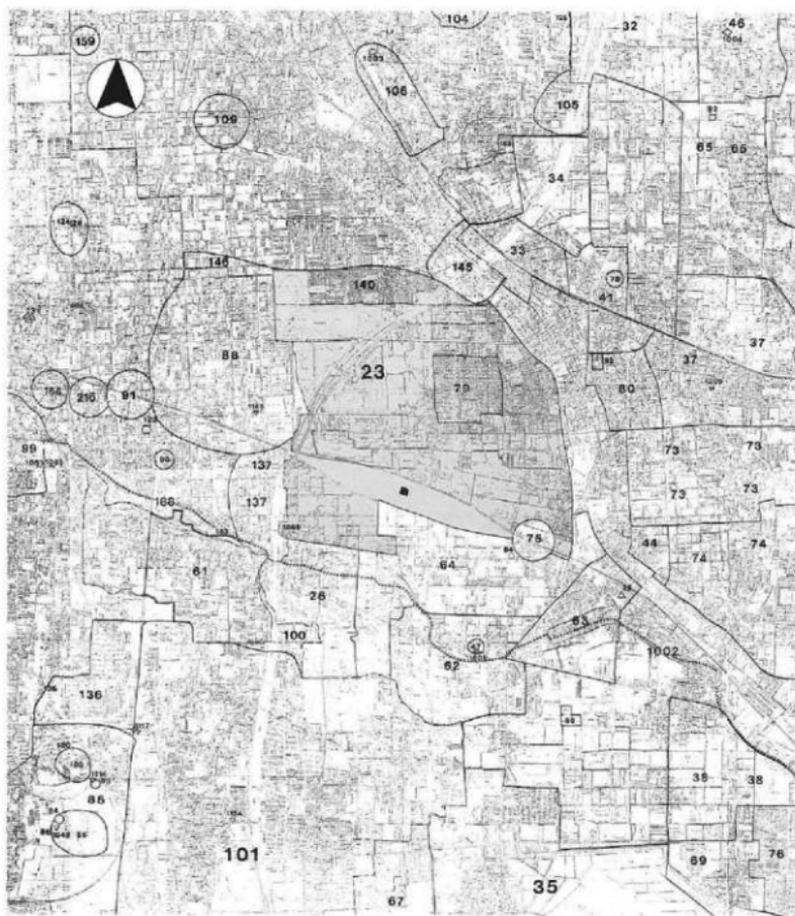
弥生時代 弥生時代になると、河内潟湖周辺の平野低地部でも人々が定住するようになる。自然堤防・微高地に集落を営み、後背湿地を利用して水田を作り、稲作を始める。前期古段階の遺跡には若江北・山賀・八尾南遺跡、中段階～新段階の遺跡には美園・亀井・城山・瓜破・長原・跡部・中田・田井中・久宝寺遺跡がある。中期になると河内潟湖周辺の肥沃な土壌を利用した稲作が活発になり、大規模な集落が出現する。瓜生堂・巨摩麿寺・若江北・加美・東郷・小阪合・木の本・東弓削・弓削・山賀・美園・亀井・長原・久宝寺遺跡が挙げられる。また、瓜生堂遺跡の2号方形周溝墓や加美遺跡のY1号墓に代表される墳丘墓が築かれるようになる。この頃から、低地には水田、微高地には墳丘墓を築造するというような、土地利用の区別が認められるようになる。後期から自然環境は不安定になる。瓜生堂・巨摩麿寺遺跡では、河川氾濫により集落や水田が洪水砂で厚く覆われてしまった例が検出されている。この時期、小規模な集落が多く検出されるのは、洪水で集落を破壊される度に、居住地を変えて移動していたためと考えられる。

古墳時代 古墳時代になると自然環境が比較的安定する。そのため生産性の高い河内平野では、古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)において、集落の増加が顕著にみられる。山賀・美園・亀井・長原・西岩田・瓜生堂・佐堂・友井東・小若江北・加美・萱振・東郷・小阪合・中田・東弓削・八尾南・瓜破・竹瀬・成法寺・木の本・久宝寺遺跡など多数挙げられる。各集落は一定の距離を置いて存在し、集落内は、水田域・畠域・墓域・居住域など意図的に区画されていたことが明らかになっている。

庄内式期新相～布留式期古相段階では、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海などの各地域からの搬入土器が多く認められ、物的交流と人的交流が窺われる。また、久宝寺遺跡出土の朝鮮半島南部に淵源を持つ形土器・軟質土器や、加美遺跡1号方形周溝墓出土の陶質土器の存在は、交流が海外まで及んだことを示している。その中でも河内湖南岸に立地する久宝寺遺跡は、槨構造の出土が示すように「津」として機能していたことが分かる。平野部では、方形周溝墓の系統を持った比較的小規模な墳丘を持つ古墳が築造される。河内平野において古墳が検出されている遺跡を、時代別に列挙すると、庄内式期では加美・亀井北・東郷・成法寺・萱振・八尾南・久宝寺遺跡、布留式期古相では加美・友井東・萱振・東郷・成法寺・久宝寺遺跡、布留式期新相では萱振1号墳・美園古墳・塚ノ本古墳である。

中期には、羽曳野丘陵の古市古墳群のような巨大古墳・中小の古墳が築造されるようになる。このような大規模な土木工事は、『記紀』にみる治水事業も含め、5世紀の河内平野南部に集落を構成した集団が推進していたと考えられる。当該期には須恵器や韓式土器、馬飼などの技術導入が認められるため、渡来系集団との関係も留意される。

後期になると、古墳築造地が平野部から山部に移動する。長原古墳群が造営を停止し、生駒山地西麓



- | | | | | |
|------------|----------------|-----------|-----------|-------------|
| 大崎市 | 136 弥生末遺跡 | 165 友舟集遺跡 | 33 佐堂遺跡 | 67 八尾尾遺跡 |
| 83 花塚山古墳 | 137 亀井志(加美南)遺跡 | 166 狭刀遺跡 | 34 築根遺跡 | 69 田井中遺跡 |
| 84 コマ登山遺跡 | 143 竹渡遺跡 | 169 衣宿遺跡 | 35 木の木遺跡 | 71 弓瀬遺跡 |
| 85 狐殿遺跡 | 166 平野寺前遺跡 | 125 山賀遺跡 | 37 東塚遺跡 | 72 池崎・樺方寺遺跡 |
| 86 狐殿寺 | 180 成本観寺 | 140 久堂寺遺跡 | 38 老堂遺跡 | 73 成法寺遺跡 |
| 88 加美遺跡 | 216 加美西1丁目所在遺跡 | 145 佐堂遺跡 | 41 宮町遺跡 | 74 矢作遺跡 |
| 90 藤作庵寺 | 1048 瓜成遺跡 | 146 加美遺跡 | 44 冠華寺跡 | 75 赤川庵寺 |
| 91 長宗庵寺 | 1114 花塚山古墳 | 159 西郷遺跡 | 46 西郷庵寺遺跡 | 76 志比羅跡 |
| 99 平野塚部寺遺跡 | 1117 長原古墳群 | 162 赤瀬遺跡 | 47 藤軍寺跡 | 78 穴太庵寺 |
| 104 亀井遺跡 | 1124 長原高船り古墳群 | 丸尾町 | 61 竹瀬遺跡 | 81 弓別寺跡 |
| 101 瓜成遺跡 | 1144 加美遺跡 | 23 久堂寺遺跡 | 62 太子堂遺跡 | 82 雲崎1号墳 |
| 103 平野野衣遺跡 | 東大崎市 | 26 亀井遺跡 | 64 跡部遺跡 | 84 跡部陣跡出土地 |
| 125 瓜成北遺跡 | 104 小若江遺跡 | 32 山賀遺跡 | 65 笠原遺跡 | 88 横松南遺跡 |

0 2km

第3図 周辺遺跡分布図

部の高安古墳群などが築かれるようになる。しかし、久宝寺・長原遺跡では横六式石室が検出されており、平野部において貴重な例である。後期の集落としては、山賀・友井東・萱振・矢作・中田・小阪合・東郷・太子堂・跡部・竹淵・長原・久宝寺遺跡が挙げられる。これらの集落は、比較的規模が小さく後期を通じて継続するものが少ない。

終末期になると、古墳の築造場所は、平地から生駒山麓などの高地へ移動し、山畑古墳群・高安古墳群などに見られるような群集墳を作るようになる。

古代 飛鳥時代に入ると、豪族の権力象徴が古墳築造から寺院建立へと変わっていった。大和と難波津を結ぶ交通の要所であった中河内地域は、仏教文化の受容が早く、渡来系氏族集団によって多くの寺院が建立された。渋川庵寺・竜華寺跡・東郷庵寺・五条宮跡・瓜破庵寺・弓削庵寺・鞍作庵寺・西郡庵寺・高麗寺跡が挙げられる。

奈良時代に入ると、大化の改新によって律令制度が設けられ、行政区画がなされる。『和名抄』によると、本遺跡は河内国渋川郡に属する。渋川郡は竹淵・跡部・賀美・邑智・余戸郷の5郷からなる。郡名は『日本書紀』持統天皇三年(689)七月二〇日の条に「箇の兵衛河内国の渋川郡の人柏原広山を土左国に流す」とあるのが所見である。当郡には、古代屈指の豪族である物部氏の本拠地があったと考えられており、物部大連守屋に關連する地名が多数存在する。『日本書紀』には、用明天皇二年(587)四月、崇仏庵問題で物部氏が蘇我氏と険悪になった際、「大連聞きて、即ち阿都(現・八尾市跡部)に退きて、阿都は大連の業所の在る所の地の名なり」とある。またその数日後、用明天皇が没し、皇位継承をめぐる両氏の対立が激しくなり、崇峻天皇元年(588)七月に蘇我馬子が守屋を攻撃した際には、「俱に軍兵を率い、志記郡より渋河(現・八尾市渋川)家に至る。」とある。物部氏が勢力を築いた原因は、旧大和川水系の水運を支配したためと言われている。東西に長瀬川・平野川の舟運、また「磯前津路」(渋河路)という陸路の存在により、交通の要衝であった当地は物部氏が勢力を築くにふさわしい地であったと考えられる。

中世 室町時代～戦国時代の河内地区は、戦国時代末期まで戦乱の渦中であった。八尾市周辺には恩地城・八尾城・萱振城などの城郭が築かれた。渋川郡一帯を領したのは畠山氏で、久宝寺城が築造されている。集落としては若江・萱振・東郷・亀井遺跡などがある。集落数が前代に比べて減少するのは、村落形態が防壁目的の集約された集落へ変化したためと考えられる。

当郡域で最初に都市的集住形態をみせたのは、久宝寺であった。聖徳太子建立と伝えられる寺院久宝寺(久宝寺の地名の由来が鎌倉時代まで存在し、その跡地に親鸞の有力門弟・法心が慈願寺を建立し、明応年間には蓮如によって西証寺(のち顕證寺と改称)が建立された。その顕證寺を中心に、天文10年(1541)頃に久宝寺寺内町が形成された。住民は商業に従事するものが多く、物資の集散地として発展していた。

調査区一帯は中世時期に「橘島」と称されていた。由来は、龍(竜)華寺の訓読の「たちばな寺」から転じたものと考えられている。1801年に発行された『河内名所図会』の龍華寺古蹟の項には「同村(河内国渋川郡植松村)にあり、訓に称えてたちばな寺という」とみられる。

近世 河内一帯は豊臣秀吉により直轄地とされて都市化し、大消費地となった大阪への製販売の供給や流通を担う役割を果たした。陸路として、八尾街道・奈良街道が挙げられるが、輸送の中心は水路であった。旧大和川は、その支流である長瀬川・玉串川も合わせ貴重な水路であった。しかし、たびたび氾濫したため、1704年に付け替え工事が行われた。結果、水路から外れた久宝寺は、船着場としての機能を失い、川跡地には新田が開発された。八尾周辺では湿地帯を利用した「半田」(橘揚げ田)「島品」と呼

ばれる田畑混在の耕地形態がとられた。特に、渋川郡では綿作・木綿織が盛んで、「久宝寺木綿」が特産物であった。

近代～現代 明治4年の鹿藩置県により、河内・和泉両国一円は併せてすべて堺県の管轄となった。

明治6年には地租改正条例が公布された。それに伴って地籍図が作成されている。“堺県渋川郡亀井村の地籍図”が作成されたのもこの頃と考えられる。昭和23年には市制が施行され、八尾町・竜華町・大正村・久宝寺村・西郡村が合併して現在の八尾市が成立した。

今回の調査区は、旧国鉄電車操車場跡地に設定された。竜華操車場が再開発に至るまでの経過を列挙する。大阪湊町(現・JR難波)―柏原の路線建設は、地元有志による数年来の願いであった。1887年、私設鉄道条例の発布を機に大阪鉄道会社が設立され、大阪湊町―柏原間、ついで湊町―奈良間が開通した。これが、現在のJR西日本大和路線の前身となる。1900年、大阪鉄道は関西鉄道に合併、大阪一名古屋間が結ばれたことにより、利便性が飛躍的に向上した。1907年には国有化されて、湊町―名古屋間は関西本線と称されるようになる。1910年には久宝寺停車場が設けられ、1938年には、久宝寺駅周辺に24.6haにも及ぶ広大な竜華操車場が建設、操業を開始する。しかし1986年、国鉄民営化を受けて廃止されたため、操車場跡地は再開発される運びとなり、現在に至る。

参考文献

- 秋里藤島編 1801『河内名所図会』巻4
西岡三四郎・沢井浩三他 1958『八尾市史』八尾市史編纂委員会
原 秀禎・尾谷雅彦 1980「第Ⅱ章 遺跡地周辺の地理的・歴史的背景」『亀井・城山』(財)大阪文化財センター
渡辺昌宏他 1985『美園』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
西村 歩 1985「堺県渋川郡亀井村の地籍図」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会
1986『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名大系28
村上年生 1987「第Ⅳ章 基本図面について―解説―」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
赤木克視他 2001『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪府文化財調査研究センター
原田昌剛 2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告68

第3章 遺跡の概要

第1節 既往の調査（第4図・第1表）

久宝寺遺跡の発見は1935年まで遡る。小字西口・栗林(現・八尾市久宝寺5丁目)で行われた道路工事に、弥生時代中期から古墳時代の遺物と制船の残片が発見され、遺跡として認識されるようになった。本格的な考古学の発掘調査が行われるのは1973年以後である。久宝寺遺跡の西端部を南北に縦断する近畿自動車建設に伴って、(財)大阪文化財センター(現・当センター)が試掘調査を行った結果、弥生時代後期～現代に至るまでの広範囲にわたる複合遺跡で、その中心時期が弥生時代末～古墳時代前期であることが確認された。なお、文中の番号は第1表と一致する。

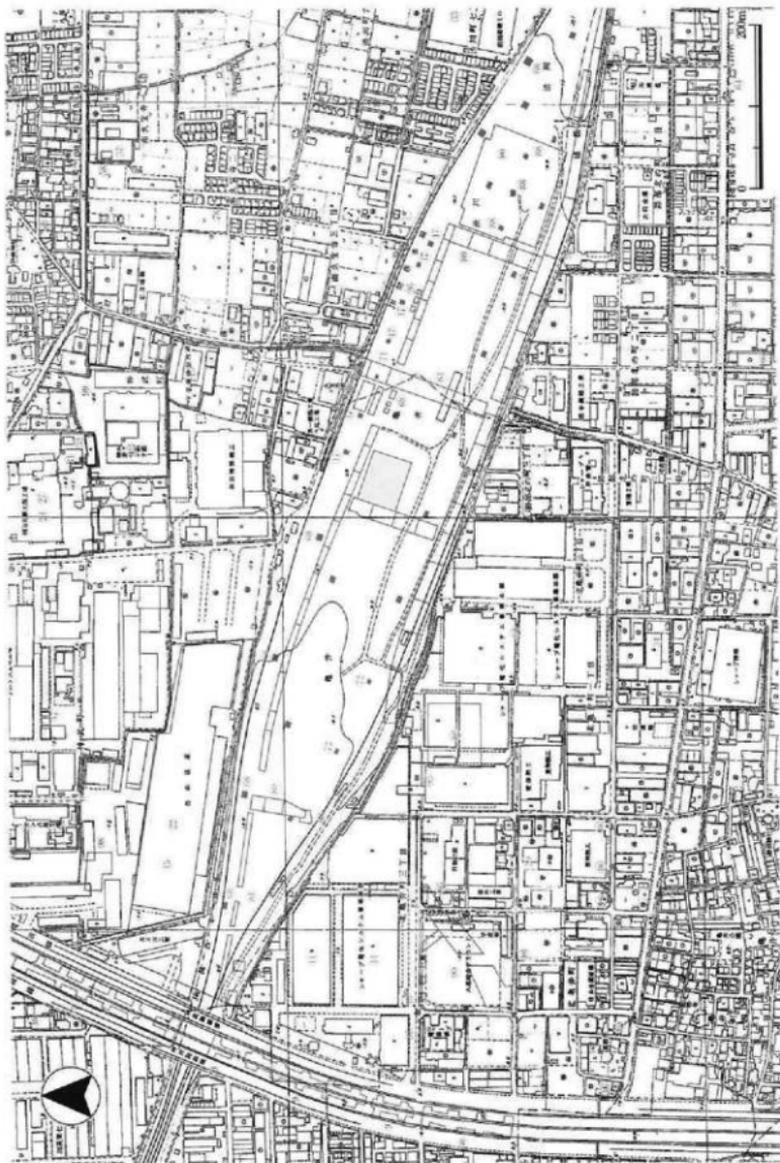
その後に引き続いて実施された本調査(4・6・7・12)では、弥生時代中期の方形周溝墓群が検出された。これらの存在は、大阪市内に西接する加美遺跡の周溝墓群との関連性を窺う上で重要である。また古墳時代初頭後半の準構造船の一部が良好な状態で出土し、河内湖南岸に立地する当遺跡が津的な役割を果たした集落であったことを示す重要な資料となった。その他、縄紋時代晩期土器のほか、大阪湾型銅戈を転用した青銅製品、古墳時代中期の大陸系土器などが出土し、また古墳時代前期の古式土師器(とくに布留式土器)は夥しい量の一括資料を得ている。

これ以降も久宝寺遺跡では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会等、各団体や機関によって随所で発掘調査が実施されている。その結果、古墳時代初頭から前期にかけての遺構を中心に、多くの成果が上げられている。主要な成果のみ列挙すると、八尾市文化財調査研究会による第9次調査(41)においては、墳丘長35mの前方後方墳(久宝寺古墳)を検出した他、古墳時代前期前半の竪穴住居から重圓文鏡と素文鏡が出土している。また第18次調査(62)では、古墳時代初頭後半の朝鮮半島南部に淵源を持つ埴形土器・軟質両耳甕が出土している。近接する加美遺跡第1次調査では、1号方形周溝墓から陶質土器が出土しており、上記例と合わせると遺跡範囲内に渡来系集団の存在が窺える。

1986年には、久宝寺遺跡の南部に位置する旧国鉄竜華操車場が廃止され、その跡地である大阪竜華都市拠点地区が再開発されることになった。この再開発事業に伴い、1988年の八尾市教育委員会による試掘調査が行われ、竜華地区の発掘調査が開始する。竜華地区は、久宝寺遺跡総面積の約1/7を占めており、調査成果は当遺跡の性格を決定する上で大きな割合を占める。

当センターでは、1995年に操車場跡地北側の新線路建設予定地において試掘調査(68)を、またそれに並行してJR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う発掘調査(66)を実施している。この調査では、旧大和川水系の本流もしくは支流に施工された5世紀代の大規模な堰を検出し、古墳時代中期に行われた大がかりな開発行為の実態を明らかにした。1996年には、一般府道往吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査(84)により、横穴式石室を主体部に持つ6世紀中葉の七ツ門古墳が検出された。石室の基底部のみ残存している状況であったが、造墓活動が平野部から山麓部に移行していた古墳時代後期にあっては、長原遺跡の七ノ坪古墳と合わせて沖積部における稀有な事例として重要な成果となった。また、弥生時代中期の水田を当該地区で初めて検出している。

八尾市文化財調査研究会による調査も行われており、これらの成果を合わせると、各時代の具体的な様相が面的に明らかとなってきている。特に、庄内・布留式期の遺構面は竜華地区全域で検出されており、平野部において、居住域・生産域・墓域としての分化が図られた集落構造が判明しつつある。



第4図 調査地周辺の発掘調査位置図

第1表 久宝寺遺跡および周辺の発掘調査一覧表

調査期間	調査名	調査主体	地区名	文 献	主な調査成果
35(5)18	遺跡工事中	個人	小宮町1-豊後 久宝寺7丁目		地の境、養生所〜古墳の遺物。
73(5)81〜74(5)80		株式会社			養生〜中庭に至る、広範の埋没遺物。
77(5)02-08-09	久宝寺遺跡及び久宝寺遺跡周辺の発掘調査	八咫教育	神武町	1979年「久宝寺遺跡」大岡町大正町地区埋没遺物調査工事「埋没文化財発掘調査報告書」(昭和54年)久宝寺遺跡発掘調査報告書(八咫教育委員会)	
80(5)00-1200-84(5)00(03)	久宝寺北(その1)〜(その1)	株式会社セナー	東大塚町大塚第1丁目	1987年「久宝寺北(その1)〜(その1)遺跡発掘調査」埋没文化財発掘調査報告書(八咫教育委員会) (附)大塚文化財センター	埋没施設群の上部、古墳前期の土器、古墳中期の土器等。
81(5)00-1100-1119	跡部(5)00調査	八咫教育	春田1丁目1307	佐本貞史 1983年「跡部地区埋没遺物発掘調査報告書」(八咫町埋没文化財発掘調査機関)1980-1981年度「八咫町教育委員会」	古墳前期の古墳群第1期。
82(5)07-0700-85(5)00(03)	久宝寺南(その1)	株式会社セナー	神武町東	1987年「久宝寺南(その1)遺跡発掘調査」埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) (附)大塚文化財センター	埋没施設群の河川より大岡町方面、養生所の大塚遺跡群の上部、古墳中期の土器等。
82(5)07-0700-85(5)00(03)	久宝寺南(その2)	株式会社セナー	神武町東	佐本貞史 一冊巻上 1987年「久宝寺南(その2)遺跡発掘調査」埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) (附)大塚文化財センター	赤土層の付着群、中央の溝状遺構、古墳中期の専ら遺物。
82(5)07-1000-86(5)00(03)	跡部(A782)1	八咫文	跡部4丁目1313	西村公昭 1983年「跡部遺跡」(昭和57年度)における埋没文化財発掘調査「八咫町教育委員会」	
84(5)00-0200-86(5)00(03)	亀井北(その1)	株式会社セナー	大塚町平塚区亀井北2丁目	小野大輔-飯島文子 1986年「亀井北(その1)遺跡」(跡部地区埋没文化財発掘調査報告書) (八咫町教育委員会) (附)大塚文化財センター	
84(5)00-0200-86(5)00(03)	亀井南(その1)	株式会社セナー	大塚町平塚区亀井南4丁目	佐藤浩二-山本 1986年「亀井南(その1)遺跡」(跡部地区埋没文化財発掘調査報告書) (八咫町教育委員会) (附)大塚文化財センター	
84(5)00-0300-0625	久宝寺北(北104)1	八咫文	北旭町第2丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡第2期調査報告書」(八咫町埋没文化財発掘調査報告書) (附)八咫町教育委員会調査報告書(2) 八咫町教育委員会 堀田昌博 1985年「久宝寺遺跡」(昭和59年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	古墳(布式式)古墳の上層部(古墳期)。
85(5)00-07-85(5)00(03)	久宝寺南(その1)	株式会社セナー	西大塚寺	1986年「久宝寺南(その1)遺跡」(跡部地区埋没文化財発掘調査報告書) (八咫町教育委員会) (附)大塚文化財センター	古墳前期の住居、古墳中期の住居に付く土上層部。
86(5)00-0200-0029	久宝寺南(北106)2	八咫文	南大塚4丁目15	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡第2期調査報告書」(八咫町埋没文化財発掘調査報告書) (附)八咫町教育委員会 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
88(5)00-0600-1107	久宝寺(北105)1	八咫教育	神武町169-165-164	江村俊孝 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 江村俊孝 1986年「久宝寺遺跡」(昭和60年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	古墳前期の土器。
88(5)00-0600-26-130	久宝寺(北106)1	八咫教育	亀井-赤羽	江村俊孝 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 江村俊孝 1986年「久宝寺遺跡」(昭和60年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
88(5)00-0600-363-001	久宝寺(北103)1	八咫教育	矢野4丁目74-75	江村俊孝 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 江村俊孝 1986年「久宝寺遺跡」(昭和60年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
88(5)00-1000-1022	跡部(A786)4	八咫文	跡部4丁目1114-4-2	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡第2期調査報告書」(八咫町埋没文化財発掘調査報告書) (附)八咫町教育委員会 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
89(5)00-1200-1228	久宝寺南	八咫文	大塚4丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡第2期調査報告書」(八咫町埋没文化財発掘調査報告書) (附)八咫町教育委員会 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	古墳前期の古墳群(古墳期)の上部と土器。
89(8)110425	法川庵寺153-47	八咫教育	法川庵寺1丁目4	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
89(8)110911	久宝寺(北105)1	八咫教育	神武町169-165-164	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
89(8)110916-1130	跡部(A786)5	八咫文	春田1丁目131	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡第2期調査報告書」(八咫町埋没文化財発掘調査報告書) (附)八咫町教育委員会 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	副塔の上。
90(8)120149-0120	久宝寺(北106)2	八咫教育	神武町17-22-20	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)120307-0115	法川庵寺153(100)4	八咫文	法川庵寺1丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	奈良〜古墳時代の土器2系統、土器製造。
90(8)120402-0012	久宝寺北(北100)4	八咫文	亀井-赤羽	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)120409-0147	久宝寺(北100)3	八咫教育	神武町17-22-20	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)120415-0122	久宝寺南(北100)3	八咫文	北旭町第2丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	養生所(遺構群)の上部と土器。
90(8)120500	久宝寺(北104)2	八咫教育	北旭町第2丁目15	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)120522	久宝寺南(北100)3	八咫教育	本町2丁目153-151	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)120606	久宝寺(北106)2	八咫教育	神武町17-22-21	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)120607-1012	久宝寺南(北100)4	八咫文	神武町17-26-27	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	古墳前期(布式式)の祭祀建物。
90(8)121113	久宝寺(北100)3	八咫教育	法川庵寺1丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)121114	久宝寺(北100)3	八咫教育	法川庵寺1丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)121115	久宝寺(北100)3	八咫教育	大塚4丁目2	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)121207	法川庵寺153(100)4	八咫教育	法川庵寺1丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	
90(8)121217-1221	久宝寺南(北100)3	八咫文	法川庵寺1丁目1	堀田昌博 1993年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会) 堀田昌博 1988年「久宝寺遺跡」(昭和62年度)埋没文化財発掘調査報告書(八咫町教育委員会)	

調査期間	調査名	調査主体	地区名	文 庫	主な調査成果
91 (H31)0221-0225	大宮寺(96-066)	八木政孝	大宮寺4丁目3-31		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(96-066)の調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会(平成3年度発掘調査委員会)文化財委員会
91 (H31)0620-0727	大宮寺(北)(K101-6)	八木政孝	大宮寺5-33		菅 啓 1997.3 『大宮寺遺跡(北)調査(北)01-6』『大宮寺遺跡(北)内陸部文化財調査報告書1』八尾市文化財調査委員会 菅 啓 1997.3 『大宮寺遺跡(北)調査(北)01-6』『大宮寺遺跡(北)内陸部文化財調査報告書1』八尾市文化財調査委員会 菅 啓 1997.3 『大宮寺遺跡(北)調査(北)01-6』『大宮寺遺跡(北)内陸部文化財調査報告書1』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)0711	大宮寺(南)(91-130)	八木政孝	笠原町6丁目31-35		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『大尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)0801-1203	大宮寺(南)(K101-9)	八木政孝	北尾町7丁目1-72		成瀬浩子 1997.12 『大宮寺遺跡(南)調査』『大尾市内遺跡(平成7年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会 成瀬浩子 1992.11 『大宮寺遺跡(南)調査』『平成3年度(南)八尾市文化財調査報告書1』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)0903	大宮寺(南)(91-247)	八木政孝	榑武町2-35		吉田野乃 1992.3.10 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)1002-1022	大宮寺(南)(K101-10)	八木政孝	北尾町2丁目2丁目		原田昌樹 1992.9 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会 原田昌樹 1992.9 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)1007-1018	大宮寺(北)(K101-11)	八木政孝	笠原町6丁目31-35		西村孝雄 1992.9 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会 西村孝雄 1992.9 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)1120-1202	大宮寺(北)(K101-12)	八木政孝	北尾町2丁目2丁目		高橋千寿 1992.9 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会 高橋千寿 1992.9 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)1304	大宮寺(南)(91-158)	八木政孝	北尾町南3丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H31)1216-92 (H41)0123	大宮寺(北)(K101-13)	八木政孝	榑武町2-35		西村孝雄 1992.17 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会 西村孝雄 1992.17 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0217	大宮寺(南)(91-479)	八木政孝	榑武町190-1		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0528-0810	大宮寺(北)(K101-14)	八木政孝	榑武町190-1		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0622	藤原(92-12)	八木政孝	藤原本町4丁目1-20		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)1027-1029	藤原(92-16)	八木政孝	藤原本町4丁目1-47		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0519-0519	藤原(北)(792-7)	八木政孝	藤原1丁目1141-6		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0805-0900	大宮寺(北)(K101-15)	八木政孝	榑武町2-35		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0805-0900	藤原(北)(792-8)	八木政孝	藤原本町4丁目1-20		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)1007-1013	藤原(北)(792-9)	八木政孝	藤原1丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0321-0309	大宮寺(北)(K101-16)	八木政孝	北尾町南3丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0719-0719	大宮寺(南)(91-454)	八木政孝	南大宮寺1丁目49		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0719-0719	大宮寺(北)(K101-17)	八木政孝	大宮寺1丁目1310		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)1128-1216	藤原(北)(792-14)	八木政孝	藤原北の町1丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0217-0221	亀井(北)(91-4)	八木政孝	亀井町1丁目1丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0516	大宮寺(南)(91-454)	八木政孝	榑武町142-175		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0901-0922	大宮寺(北)(K101-18)	八木政孝	榑武町142-175		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0908-1017	大宮寺(南)(91-33)	八木政孝	榑武町12番		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0916-1116	藤原(北)(792-17)	八木政孝	太子町1丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0413-0527	大宮寺(南)(91-454)	八木政孝	南大宮寺		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0529-1230	大宮寺(南)(91-454)	八木政孝	南大宮寺		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0627-0627	大宮寺(北)(K101-19)	八木政孝	北尾町1丁目100-107		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0705-1230	大宮寺(南)(91-454)	八木政孝	南大宮寺		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0829-1114	大宮寺(北)(K101-20)	八木政孝	北尾町1丁目		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0109-0712	大宮寺(南)(91-365)	八木政孝	榑武町(北)寺		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0331-0911	大宮寺(南)(91-131)	八木政孝	榑武町(北)寺		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)0806	大宮寺(南)(91-378)	八木政孝	大宮寺5丁目36		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(南)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会
91 (H41)1229-98 (H41)0120	大宮寺(北)(K101-21)	八木政孝	北尾町(北)寺		菅 啓 1992.3 『大宮寺遺跡(北)調査』『八尾市内遺跡(平成3年度発掘調査報告書1)』八尾市文化財調査委員会

調査期間	調査名	調査主体	地区名	文 献	主な調査成果
74	97/109/0221-0331	新田久(AT96-23)	八木町	和田昌昭 1997『新田久の調査(AT96-23)』第233-234頁「平成8年度(1)八木町文化財調査研究委員会調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
75	97/109/0013	大矢守(96641)	八木町	神武田79-81 和田昌昭 1998『大矢守の調査(96641)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
76	97/109/0020-0023	八木町内藤(VC97-2)	八木町	本郷171149-3 和田昌昭 1996『大矢守の調査(97-2)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
77	97/109/0022	大矢守(97-129)	八木町	大矢守17120-1 和田昌昭 1998『大矢守の調査(97-129)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
78	97/109/0070-1106	大矢守(97-180)	八木町	大矢守17131-3 和田昌昭 1996『大矢守の調査(97-180)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
79	97/109/0070	大矢守(97-298)	八木町	北島南野17145-4 和田昌昭 1998『大矢守の調査(97-298)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
80	97/109/1020-99/1011/0030	大矢守22次(K107-23)	八木町	亀井-清川 和田昌昭 1999『大矢守の調査(107-23)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
81	97/109/1022-98/1010/0113	大矢守22次(K107-23)	八木町	和田昌昭 2001『大矢守の調査(107-23)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
82	97/109/1200-1215	八木町内藤(VC97-2)	八木町	本郷17155-3 高橋千枝 2000『大矢守の調査(97-2)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
83	98/1010/0020-99/1011/0120	大矢守24次(K109-24)	八木町	亀井-清川 和田昌昭 2001『大矢守の調査(109-24)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
84	98/1010/0210-99/1011/0228	大矢守(99-2)	セナア 清川	赤木友太郎 2001『大矢守の調査(99-2)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
85	98/1010/0320-0404	大矢守(97-404)	八木町	大矢守17132-2 藤井孝宏 1999『大矢守の調査(97-404)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
86	98/1010/0514-0519	大矢守(97-230)	八木町	大矢守17132 藤井孝宏 1999『大矢守の調査(97-230)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
87	98/1010/0519-0706	新田久(AT98-28)	八木町	藤井孝宏 2002『新田久の調査(AT98-28)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
88	98/1010/1126-1127	大矢守(98-415)	八木町	清川11006 藤井孝宏 1999『大矢守の調査(98-415)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
89	98/1010/1125-99/1011/0223	大矢守19次(K107-19)	八木町	大矢守17120-1 和田昌昭 1999『大矢守の調査(107-19)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
90	98/1010/1102-99/1011/0533	大矢守25次(K109-25)	八木町	北島南野17120 和田昌昭 1999『大矢守の調査(109-25)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
91	99/1011/0216-0318	大矢守98-281	八木町	大矢守17120 藤井孝宏 2002『大矢守の調査(98-281)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
92	99/1011/0223-0250	大矢守26次(K109-26)	八木町	神武田83-1 和田昌昭 1999『大矢守の調査(109-26)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
93	99/1011/0517-0721	大矢守27次(K109-27)	八木町	北島南野17172 西村公孝 2000『大矢守の調査(109-27)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
94	99/1011/0901-00/1012/0319	大矢守28次(K109-28)	八木町	亀井 西村公孝 2000『大矢守の調査(109-28)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
95	99/1011/0801-00/1012/1130	大矢守29次(K109-29)	八木町	清川 村岡昌之 2000『大矢守の調査(109-29)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
96	00/1012/0120-0307	大矢守30次(K109-30)	八木町	亀井-清川 村岡昌之 2000『大矢守の調査(109-30)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
97	00/1012/0308-0320	大矢守31次(K109-31)	八木町	北島南野17120 西村公孝 2000『大矢守の調査(109-31)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
98	00/1012/0312-0008	大矢守32次(K109-32)	八木町	神武田168 藤井孝宏 2001『大矢守の調査(109-32)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
99	00/1012/0500-0510	大矢守(2000-48)	八木町	神武田179 西村公孝 2001『大矢守の調査(2000-48)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
100	00/1012/0521-01/1013/0228	大矢守33次(K1200-20)	八木町	清川 和田昌昭 2001『大矢守の調査(1200-20)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
101	00/1012/0513-0516	大矢守(1999-60)	八木町	北島南野37日41 藤井孝宏 1999『大矢守の調査(99-60)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
102	00/1012/0718-1125	大矢守34次(K1200-34)	八木町	北島南野17131 和田昌昭 2001『大矢守の調査(1200-34)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
103	00/1012/1016-1114	大矢守35次(K1200-35)	八木町	神武田179 藤井孝宏 2001『大矢守の調査(1200-35)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
104	01/1013/0110-0322	大矢守36次(K1200-36)	八木町	北島南野 坪田一 2001『大矢守の調査(1200-36)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
105	01/1013/0510-1117	大矢守37次(K1200-37)	八木町	北島南野17120 藤井孝宏 2001『大矢守の調査(1200-37)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
106	01/1014/1000-0320	大矢守38次(K1200-38)	八木町	北島南野17120 藤井孝宏 2001『大矢守の調査(1200-38)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
107	01/1014/0110-0320	大矢守39次(K1200-39)	八木町	北島南野17120 藤井孝宏 2001『大矢守の調査(1200-39)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。
108	01/1014/0120-0320	大矢守39次(K1200-39)	八木町	亀井 和田昌昭 2001『大矢守の調査(1200-39)』調査「八木町内藤野中野の史跡調査報告書」	古墳群→後継の河川施設。

番号は本文と一致せず。

調査名：大阪府教育委員会

八木町教育委員会

センター2-1 大阪府文化財センター

八木町：八木町文化財調査研究委員会

第2節 調査の概要

久宝寺遺跡は、弥生時代後期から古墳時代初期を中心とする遺跡として周知されている。当調査区でも、古墳時代を主体とし、縄紋時代晩期から近世の遺構を検出した。本節では、各時代を通じて主要な遺構を概観する。旧国鉄竜華停車場に伴う近代～現代の盛土・攪乱層を除去し、これ以下で検出した遺構面は、中世～近世面から縄紋時代晩期面まで計14面に及ぶ。

中世以降 第1-1面では、島畠を4畝検出した。明治初年に製作された“堺県浪川郡亀井村地籍図”に示された島畠の位置とほぼ一致する。第1-2面では、島畠に平行する溝を1条検出した。第1-3面では、調査区の中央部で南北方向の溝1条と、調査区のほぼ全域で条里に沿う畝間溝群を検出した。その他、ピット・溝を検出している。遺物は稀少である。

古墳時代～古代 第2-1面では、古墳時代後期～古代にかけての遺構を同一面検出した。調査区の北端でピット群・土坑群を検出した。周囲から奈良時代以降の瓦片が出土しており、何らかの建造物の存在を想定できる。北東隅では河川の西岸を検出した。立杭と横木が組まれた状態のしがらみが検出され、またその北東部では大刀形木製品が出土している。古墳時代後期前後の遺構であろう。調査区の全域には、南北に横断する道路状遺構と考えられる2条の溝を検出した。溝内から古墳時代後期の須臾器等が出土している。第2-2面では基盤となる層が不安定な堆積環境のもとで形成されたため、全体的に遺構の分布は稀薄であった。検出した遺構は土坑・ピットであるが、いずれも上層から切り込まれた可能性がある。第3-1面では、Ⅰ区において水田遺構を部分的に検出した。その他、溝・土坑を検出している。第3-2・3面では部分的に河川堆積層を検出し、第3-2層中から準備造船の一部が出土した。第4-1面では、調査区西端で古墳時代前期に築造された古墳1基を検出した。この古墳は方墳で久宝寺1号墳と称し、周辺の既往の調査で検出された墳丘の中で最も遺存状態が良好なもので、築造された当時の様子をほぼそのまま残している。本墳については第5章で詳述する。本墳は極めて土壌化の進行した層位を基盤として築造されているが、この層位は古墳時代初期～前期に帰属し、久宝寺遺跡において広範囲に認められる。当該層上面で検出される遺構は、住居・水田・畠・溝溝墓・古墳が主であり、当該期の集落構造を良好に伝えるものである。当調査区においては、東西方向に等間隔で平行に並び、耕作に伴う畝間溝とみられる複数の溝を検出した。また、第4-2面では、南北に平行に走る道路状遺構を示すと考えられる2条の小溝を検出した。

弥生時代 第5-1面ではⅠ区でのみ水田遺構を検出した。層位的にみて後期と考えられる。東西方向の大畦畔と、それに直交する畦畔を数条検出した。遺物は僅少である。第5-2面では水田遺構を検出した。遺構の帰属時期は中期と考えられる。調査区中央部の微高地西側に大畦畔を作り、以東に畦畔が派生している。大畦畔の西側には用水路と考えられる溝が平行して検出された。調査区の東端でも大畦畔を検出し、それ以東は湿地の未利用地であると考えられる。遺物は僅少である。第6-1面では溝を12条検出した。層位的にみて前期と考えられるが、これらの溝には第5-2面の水田に属するものが含まれる可能性がある。縄紋時代晩期末～弥生時代前期の土器が出土している。

縄紋時代晩期 第6-2面では縄紋時代晩期末の深鉢埋納土坑を2基検出した。また主にⅡ区において大規模な噴砂を検出した。縄紋時代晩期頃に発生した大地震による液状化現象と考えられる。第6-3・4面では調査区全域で晩期中葉頃までに形成された河川を検出した。調査区中央部で南北方向の流路帯を検出しており、流芯を含む川筋と思われる。この河川痕跡は、続く弥生時代の地形に大きく影響を及ぼしている。堆積層内から縄紋時代後期～晩期土器、稀にサヌカイト剥片が出土している。

第4章 調査成果

第1節 層序 (第5～8図、第2表)

今回の調査では、縄紋時代から中世まで大別7層に分層した。

第0層 近世耕土層と近代の竜草操車場設置に伴う盛土と攪乱層である。層の上面はT.P.8.64m前後である。機械掘削で除去したが、最終掘削面でも一部攪乱が残っていた。

第1層 中世以降の作土層である。シルトを主体とし、第1-1～1-3層に細分できる。島晶の高まりの中に遺存する包含層として分布し、部分的に遺構を保存する。関連施設造成時の削平・攪乱による地形の改変が著しく、いずれも遺存状態が不良である。

第1-1層 上面はT.P.7.60m前後で、灰白・浅黄色の極細砂・粗砂まじりシルトなどで構成され、層厚は15cm前後である。土器の細片を比較的多く含むが、大半は島晶造成や耕作時の攪拌により下層から巻き上げられたものである。

第1-2層 上面は凹凸がありT.P.7.30～7.60mである。灰オリーブ色極細砂まじりシルトなどで構成され、層厚は10cm前後である。当該層も土器細片を比較的多く含むが、下層からの混入物と考えられる。残存状態は不良である。

第1-3層 上面は凹凸がありT.P.7.10～7.40mである。オリーブ褐・黄灰色極細砂まじりシルトなどで構成され、層厚は15cm前後である。須恵器・土師器・瓦器・陶器・黒色土器などが出土している。その他、瓦が多数出土しているが、第2-1面の遺構に関連するものと考えられる。当該層の上面では耕作にともなう溝を多数検出している。

第2層 古墳時代中～後期の堆積層である。基本的に細砂とシルトの薄い互層で構成され、不安定な堆積環境のもとで形成された層位とみられる。第2-1～2-3層に細分できる。

第2-1層 古墳時代後期の堆積層で、その上面には主に古代の遺構が形成されている。上面は凹凸がありT.P.6.90～7.30mほどである。黄灰色細砂と暗灰黄色極細砂まじりシルト層の互層で構成される。層厚は20～30cmである。須恵器・土師器片が出土した。管状斑や植物遺体が観察できる。

第2-2層 古墳時代中期の堆積層である。上面は凹凸がありT.P.6.90～7.10mほどである。上層はオリーブ褐色極細砂・中砂混じりシルトと黄褐色粘土質シルトの互層で構成される。下層は黄灰色粘土が堆積し、植物遺体が観察できる。層厚は10～30cm前後である。須恵器・土師器片が出土した。

第2-3層 古墳時代中期の堆積層である。上面はT.P.6.70～6.80mである。暗灰黄色粘土と灰色極細砂混じりシルトの互層で構成される。層厚は10cm前後である。土師器片が出土した。

第3層 古墳時代前～中期に形成された層位である。基本的に緻密な粘土・シルトから構成される不透水層で、第3-1～3-3層に細分できる。

第3-1層 古墳時代中期に形成された層である。灰・暗緑灰色粘土・シルトで構成される層位で、不透水層を形成する。上面はT.P.6.50m前後でほぼ水平に堆積し、層厚は10～20cmである。層中より須恵器が出土している。当該層の上面では、北西部において水田畦畔を検出した。

第3-2層 古墳時代前期～中期の形成層である。第3-1層と第3-3層の間に存在するが全面には及ばず、調査区の東端と北半に分布している。この範囲が自然河川NR054の流域を示し、および南北方向の流れをもっていたようである。この層準は灰オリーブ色極細～粗砂・砂礫で構成された河

川堆積層で、層厚は最大40cmである。層中より準構造船の一部が漂着したような状態で検出され、また土師器等が若干出土した。

第3-3層 古墳時代前期の形成層である。灰色粘土で構成された不透水層で、上面はT.P.6.10～6.40m前後、層厚は約30cmである。層中、特に上層から古墳時代前期の土師器のほか、製塩土器が出土している。第4-1層と接する下層では有機物を多く含み、腐植質に富んだ灰色粘土で構成され、北西までは及んでいない。

第4層 弥生時代末～古墳時代前期の形成層である。基本的に調査区の南西方向から派生する自然堤防状の河川堆積層で、調査区内の西側を中心に分布する。第4-1～4-3層に細分できる。第4-3層は河川堆積構造を良好に残すが、第4-1・2層はその表層部が土壌化して形成された層位である。

第4-1層 古墳時代初頭～前期の形成層である。人為的に攪拌され、土壌化が極めて進行している。上面からは平行した畝間溝状の窪みが検出され、畑作の耕地であった可能性が高い。極細砂・細砂・粗砂・砂礫を多く含むオリブ黒色シルトで構成されている。当該層の上面は、調査区の南西部が高くT.P.6.40mほどで、層厚は約10cmであるが、東側に向かってレベルを下げることもに層厚を減じ、調査区内で消滅する。久宝寺1号墳は当該層上面を基盤に築造されており、その中でもレベルの高い場所が選択されている。当該層から古墳初頭、上面から古墳前期の土師器が出土している。

第4-2層 古墳時代初頭～前期の形成層である。第4-1層に伴う層位で、人為的な攪拌を受けて土壌化している。極細砂・細砂を多く含む暗オリブ灰色シルトで構成されている。第4-1層の耕地に対する床土層に相当するとみられる。上面は南西の高いところでT.P.6.30mあり、層厚は約10cmあるが、上層と同様に東へ向かって高さ・厚さともに減じ、調査区内で消滅する。また上面において道路状遺構が検出されている。当該層から遺物はほとんど出土しなかった。

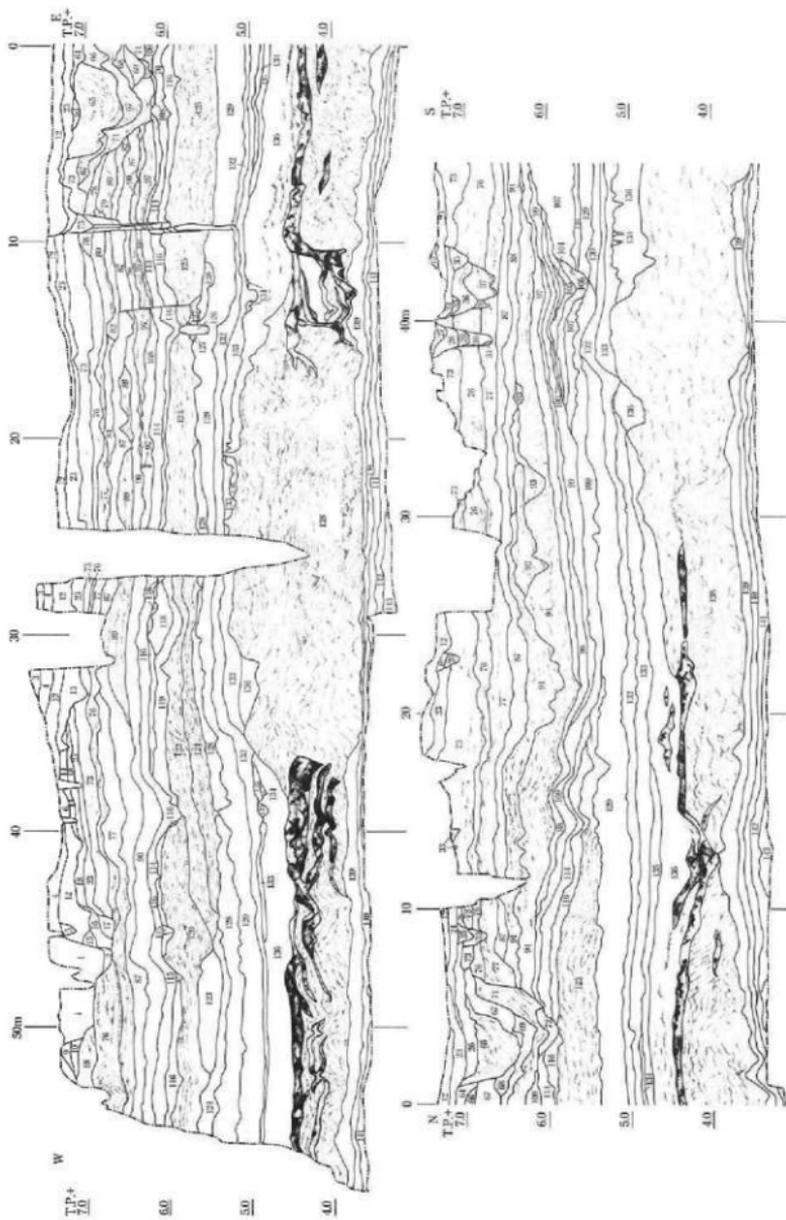
第4-3層 弥生時代末～古墳時代初頭に堆積した自然河川堆積層である。上面は南西の最も高いところでT.P.6.20mである。灰色極細砂・細砂・粗砂・砂礫・粘土で構成されている。層厚は最大1mである。この層位は調査区全面に及ばず、南西部から東に向かって層厚を減じ、東端部では消滅する。出土遺物は極めて少ないが、弥生土器・古墳初頭土師器の細片が僅かに出土している。

第5層 弥生中期～後期の形成層である。基本的にシルトで構成され、第5-1・2層に細分できる。調査区の中央部において南北方向に隆起し、東西側へレベルを下けているが、これは当該層の下層にあたる第6層の起伏に沿ったものである。

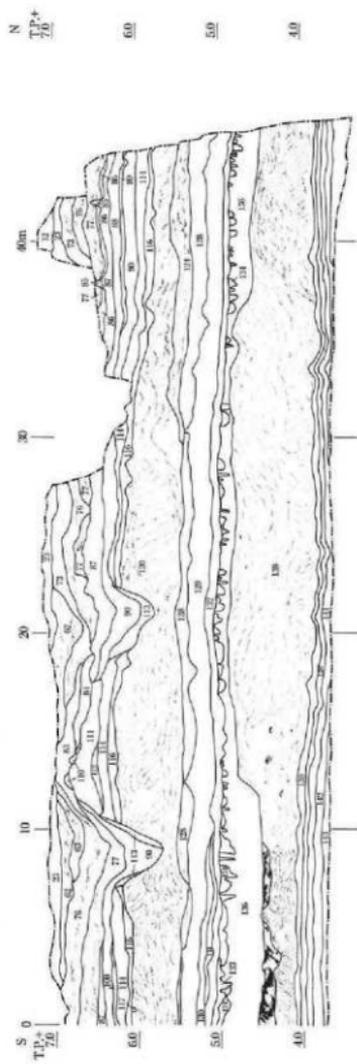
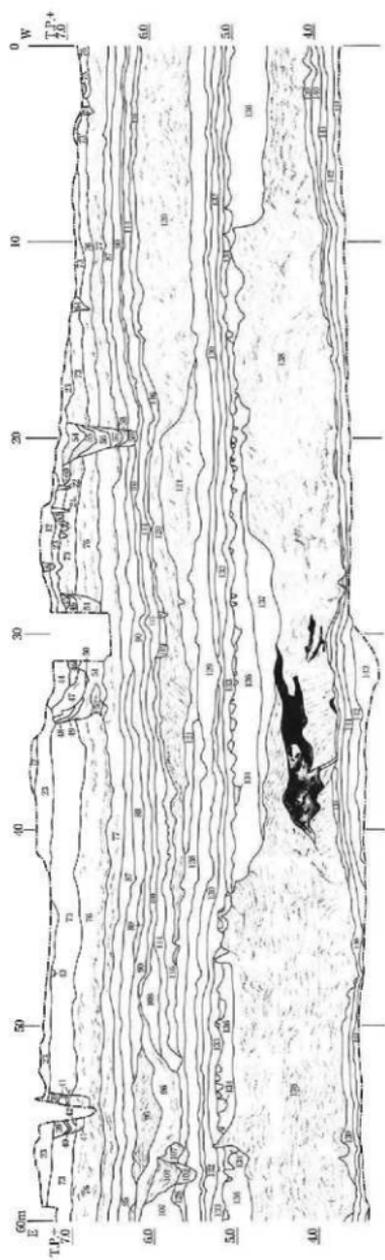
第5-1層 弥生時代後期の形成層で、暗オリブ灰色粘土で構成される。層厚は最大30cmで、調査区の北西と南西に分布する。上面のレベルは最高部でT.P.5.70m、東西の低地部でT.P.5.30mほどである。調査区北西の当該層上面では水田畦畔を検出し、多数の足跡が観察された。当該層の下面には踏み込みによる凹凸が多く見られる。弥生時代後期の遺物に混じって、縄紋時代晩期の遺物が出土しているが下層からの混入と考えられる。

第5-2層 弥生時代中期の形成層である。暗オリブ灰色粘土層で構成され、当該層の上面、調査区の中央部において水田畦畔を検出した。上面は高低差があり、レベルはT.P.5.70m～5.20mである。層厚は最大で30cmある。弥生時代中期の土器片、サヌカイト製石鏝等が出土している。

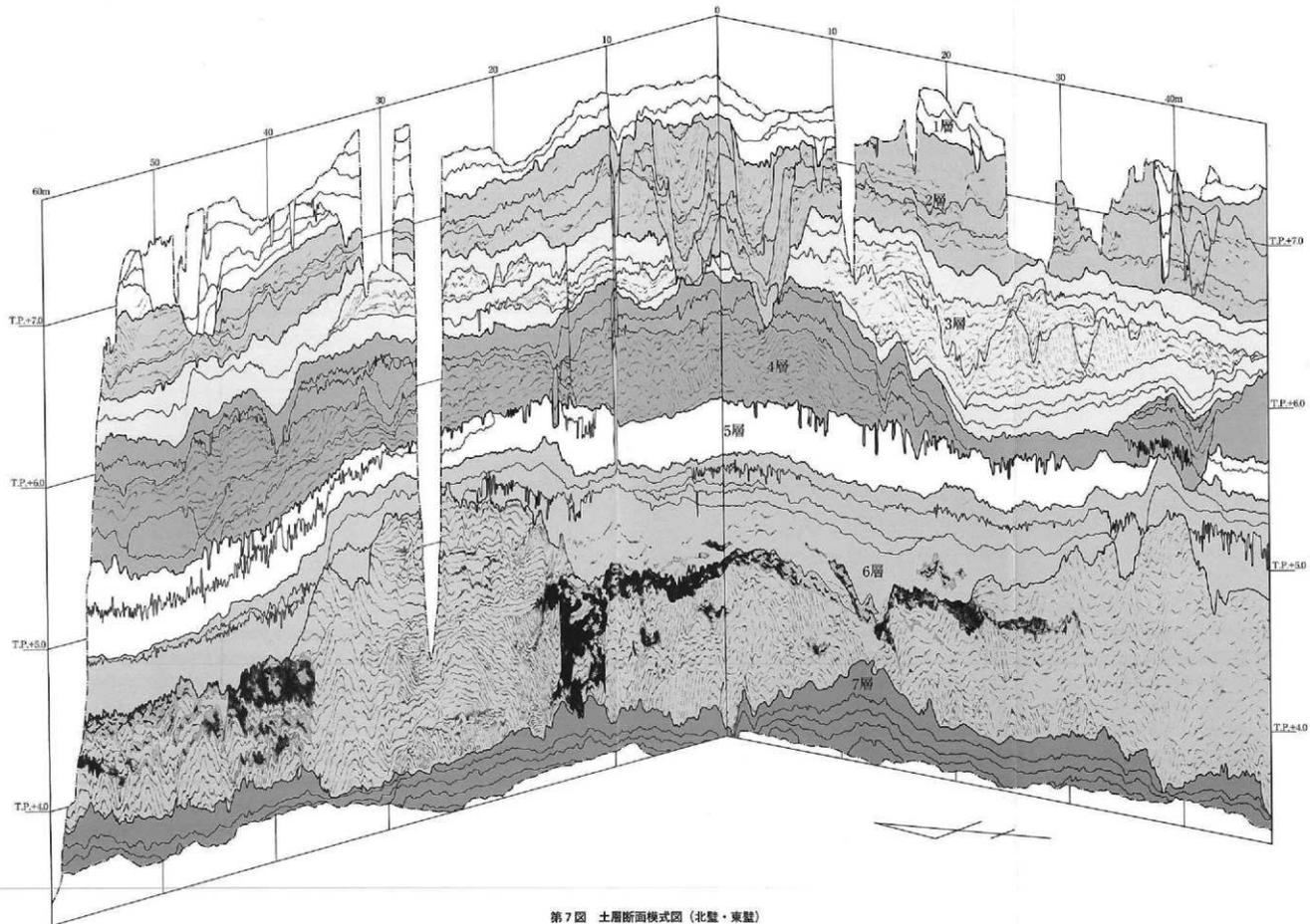
第6層 調査区全面に分布する縄紋時代晩期の河川堆積層を基盤とし、表層部の堆積は弥生時代前期に至る。第6-1～6-4に細分でき、第6-3・4層は河川堆積構造を良好に残す。当該層上面は、調査区中央部で南北方向へ緩やかに隆起し、第5層の地形の起伏に大きな影響を与えている。



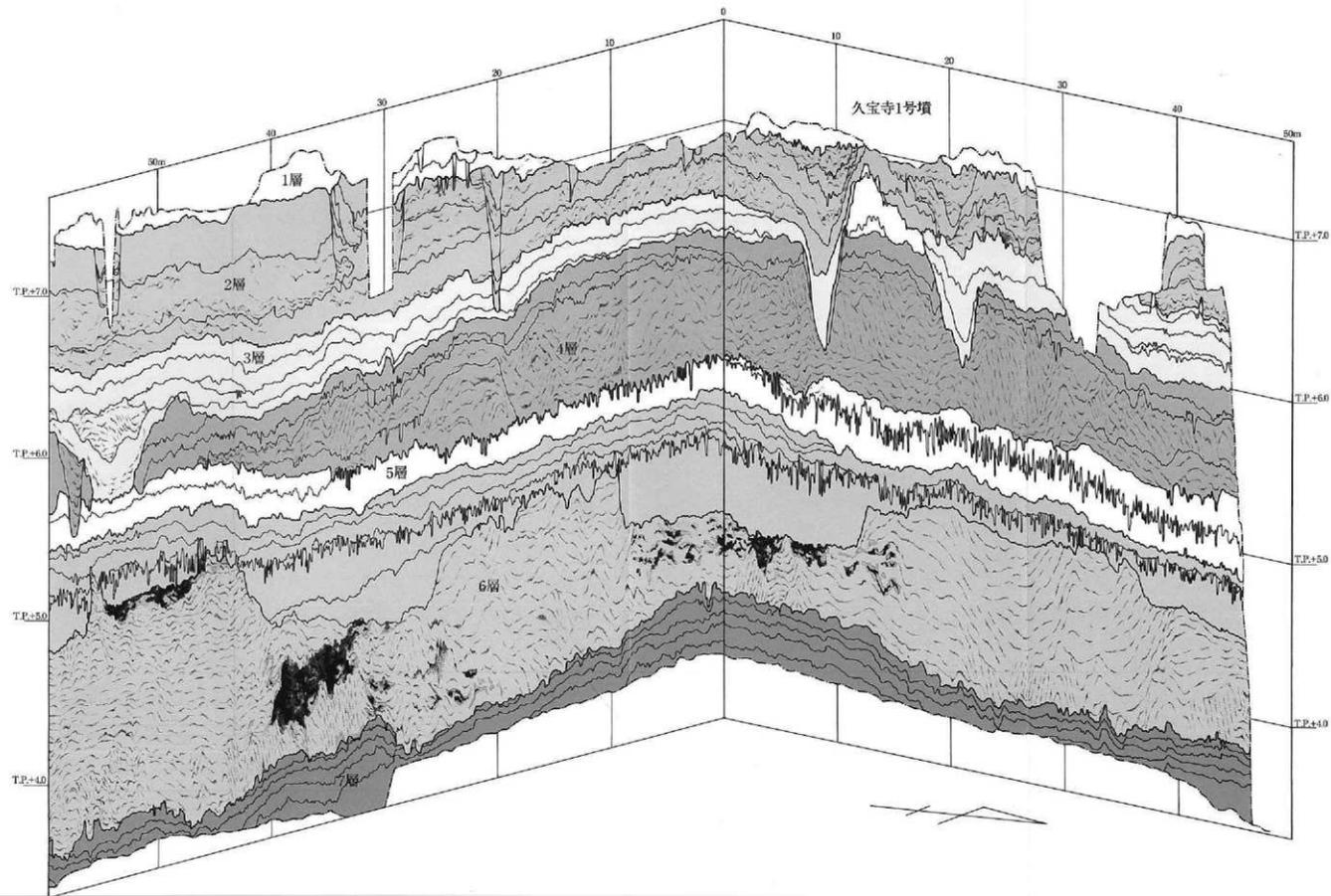
第5图 調查区北壁・東壁土層断面図



第6图 调查区前壁·西壁土层断面图



第7圖 土層断面模式圖 (北壁・東壁)



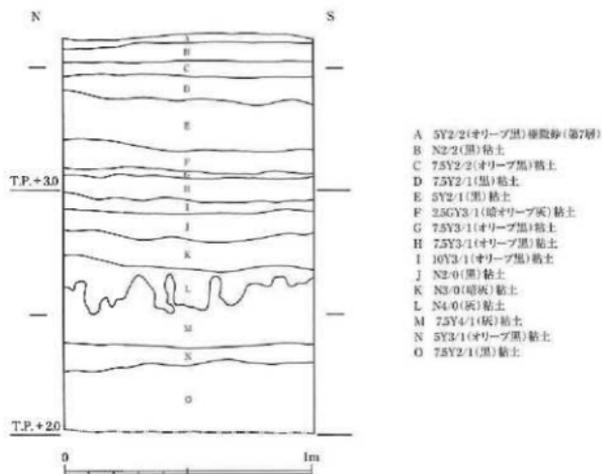
第8図 土層断面模式図（南壁・西壁）

第6-1層 弥生時代前期の形成層である。極細砂・細砂を多く含んだオリブ黒色粘土層で、河川堆積層の表層部が土壌化を経て形成されている。レベルは最高部でT.P.5.45m、東西両端の低地部でT.P.4.90～5.00m、層厚は最大で20cmである。縄紋晩期土器・前期弥生土器が出土した。

第6-2層 縄紋時代末の形成層である。河川堆積層の表層部が土壌化して形成された層位で、灰色・暗緑灰色粘土層で構成される。上面では第6-4層に由来する大規模な噴砂が顕著に観察された。この噴砂は第6-2・3層を貫くが、第6-1層下面で途切れる。そのため第6-1・2層は不整合の関係にあるといえ、第6-1層が人為的攪拌を受けた可能性もある。T.P.5.00m前後で、層厚は平均20cmである。当該層は、北西部分に向かってレベルを下げるとともに、厚さを減じて消滅する。上面から縄紋時代晩期末の遺構が検出された。

第6-3・4層 縄紋時代晩期中葉の河川堆積層である。上面は河川の流芯に沿って、調査区中央部で南北方向へ緩やかに隆起している。レベルは最高部でT.P.5.30m、東西端の低地部でT.P.4.70mほどである。第6-3層は有機物・木片等を多く含む腐植質に富んだ暗緑灰色極微砂層で、第6-4層を構成するオリブ黒色砂礫層とは分層できる。しかし、これらが互層を形成する部分があり、両者の堆積時期差は認められない。第6-4層は流路帯の本体、第6-3層は自然堤防および後背湿地である。後期中葉から晩期末の縄紋土器片、サヌカイト片が出土した。晩期中葉の遺物を主体とするが、晩期末のものは極めて少なく、上層から混入した可能性がある。

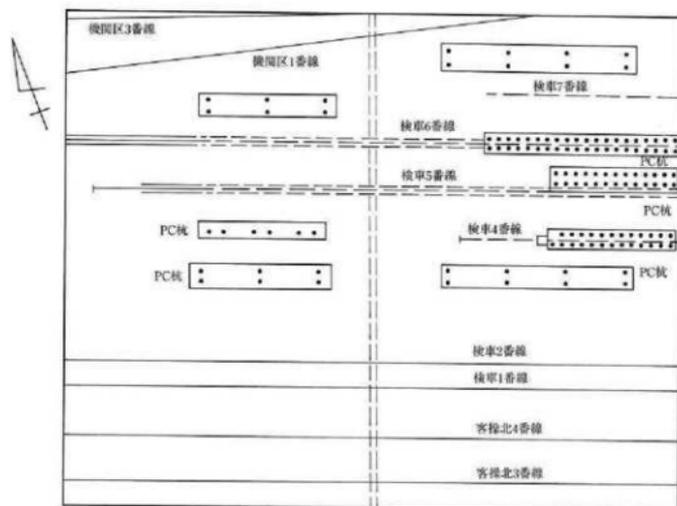
第7層 縄紋時代晩期中葉以前の形成層である。第6層の自然河川の川底に相当する自然堆積層で、上面はT.P.3.70～4.00m前後である。第6-4層直下の表層部は、同層の河川機能時における水流により、深く削られ抉られた部分が認められる。基本的にオリブ黒色・黒色粘土の水平堆積層によって構成され、土壌化の度合いによって幾つかの層に分層できる。これ以下は調査区中央部に深さ1.6mのトレンチを掘り、T.P.2.00mまで粘土層を主体とする層準を確認し、15層に細分を行った(第9図)。いずれも比較的安定した状況下での自然堆積層とみられる。遺物は全く出土していない。



第9図 第7層以下の層準

第2節 遺構と遺物

今回の調査区は、旧国鉄竜華操車場敷地内に位置するため、操車場関係のPC杭・松杭が調査区内に多数打ち込まれていた。杭の長さは4 mにもおよび、同地点の遺構面を著しく損傷していた。また、中央部には伏樋に伴う大きな掘乱坑が、また調査区の随所において操車場施設に伴う大規模な掘乱坑が存在する。この掘乱は最終遺構面でも一部残っていた(第10図)。

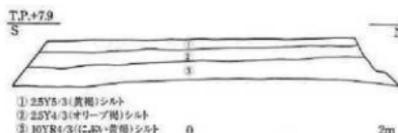


第10図 調査区内竜華操車場施設 (S-1:500)

第1項 中世

中世面Ⅱ：第1-1面 (第12図)

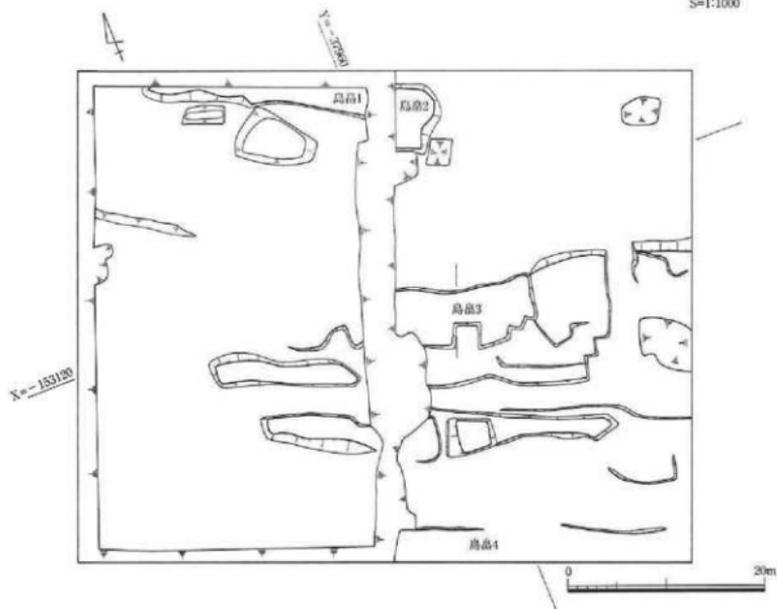
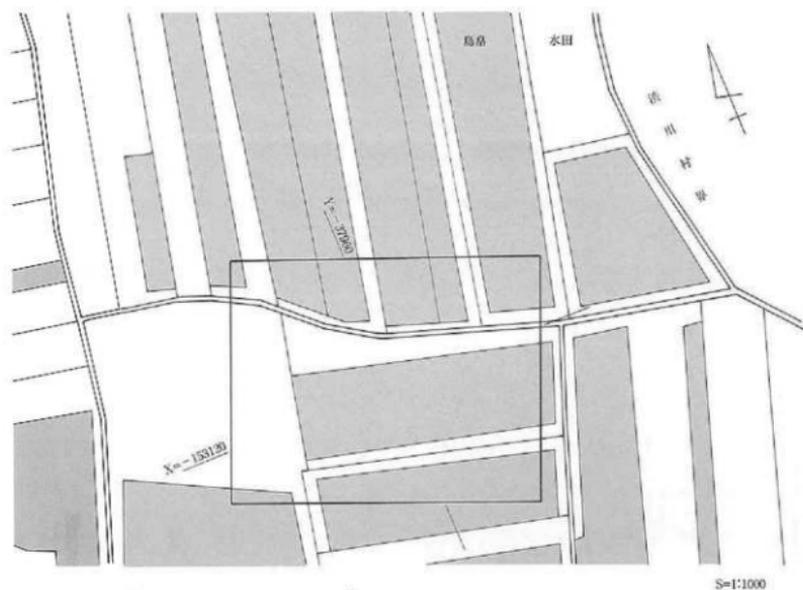
近代以降の掘乱層を除去した面で、機械掘削終了面である。上面はT.P.7.60m前後で凹凸が著しい。当該面では島島が検出され、その盛土内に中世包含層が存在する。島島に関する資料としては“堺県淡川郡亀井村地籍図”がある。この地籍図は明治初期に製作されたと見られ、旧亀井村の土地利用が記録されている。検出した島島の位置が、地籍図のそれとほぼ一致したため、1畝ごとに遺構番号をあてた。島島1 調査区の北西端、J6Ⅳ～J8Ⅰで検出した。検出幅は東西23m、南北最大3mである。島島2 調査区の北部中央、a5Ⅱ～a6Ⅲで検出した。検出幅は東西5m、南北7mである。



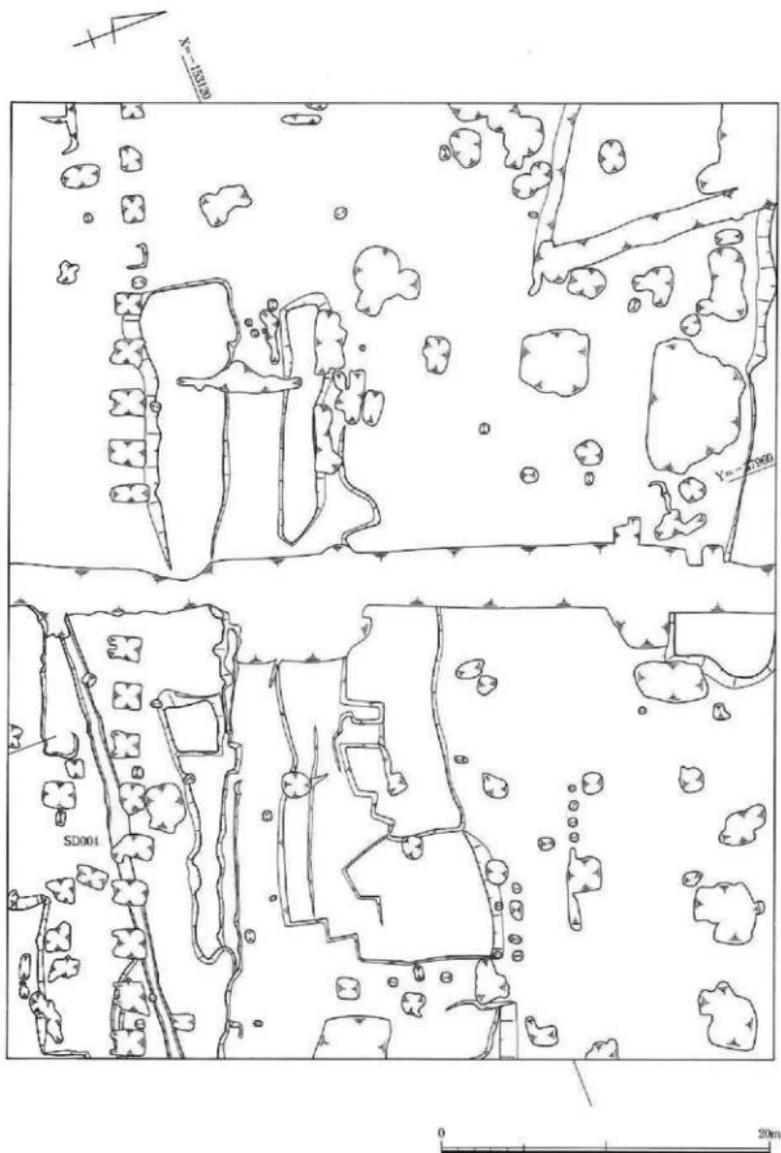
第11図 島島3土層断面図

島島3(第11図) 調査区の中央で検出した。掘乱により切られるが、東西方向に主軸を持つ南北幅約18mの島島と想定できる。盛土は黄褐色極細砂まじりシルトを主体とし3層に細分できる。

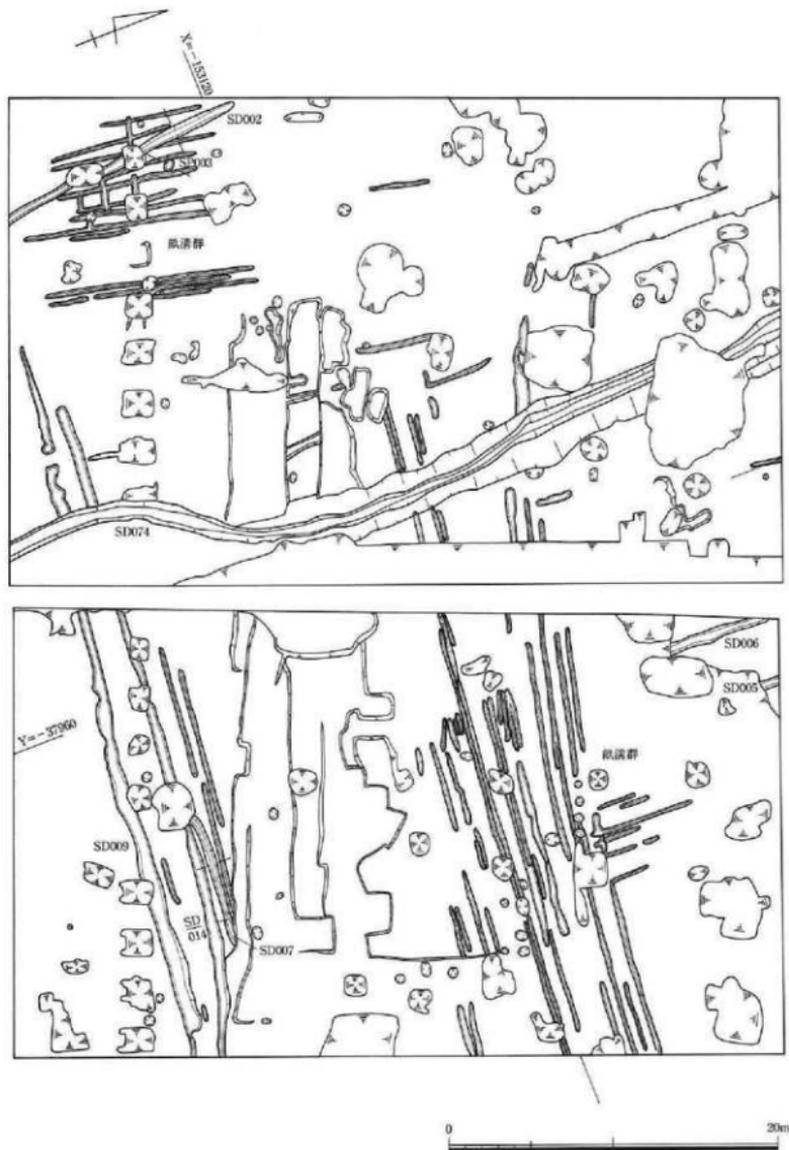
島島4 調査区の南端f5Ⅰ～e7Ⅱで検出した。東西に主軸を持つ島島で検出長東西30mである。



第12図 第1-1面鳥居と地籍図の対応関係



第13圖 第1-2面遺構配置圖



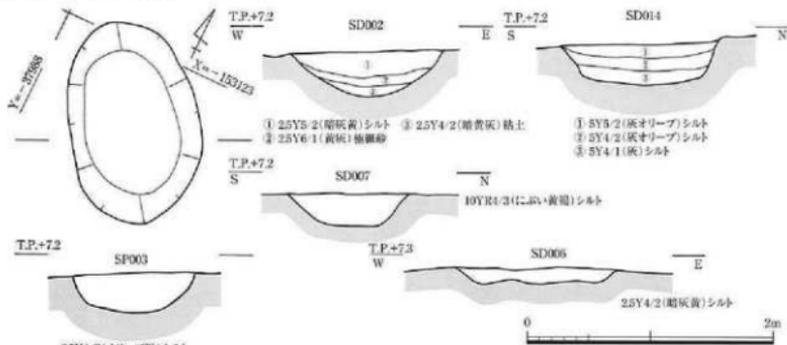
第14图 第1—3面遺構配置図

中世面Ⅱ：第1-2面 (13図)

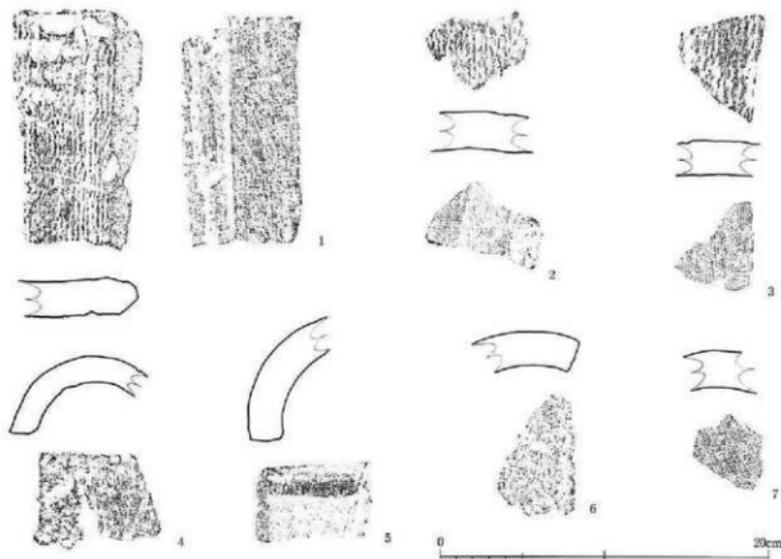
第1-1層を除去した面で、上面はT.P.7.30～7.60mと凹凸が著しい。遺構はd7Ⅳ～e4Ⅱで検出したSD004(図版1)のみである。検出長27m、幅0.8m、深さ0.12mで、島島に沿って東西に走る。

中世面Ⅰ：第1-3面 (第14図)

第1-2層を除去した面で、上面はT.P.7.10～7.40mと凹凸が著しい。検出された遺構は耕作溝群・溝・ピットである。



第15図 第1-3面遺構平・断面図



第16図 第1-3層出土遺物実測図

耕作溝群(図版1) 調査区の南西端c10～c9付近と、北東部b4～b6付近で検出した。幅0.1～0.4m、深さ0.05mの溝が東西・南北方向に格子状に走る。溝内からは須恵器・土師器の碎片が出土している。SD002(第15図、図版1) c10 I～c10 Iで検出した南北方向の溝である。検出長15.6m、幅0.6m、深さ0.2mで、埋土は暗灰黄色極細砂混じりシルトを主体とする3層からなる。

SD005(図版1) a5 IIの島畠2盛土内で検出した。SD006と平行して南北方向に走る。検出長1.0m、幅0.5m、深さ0.08mである。

SD006(第15図、図版1) a6 I～a6 IIIの島畠盛土内で検出した。検出長5.6m、幅0.6m、深さ0.08mである。埋土は暗灰黄色極細砂混じりシルトの単一層である。

SD007(第15図、図版2) d6 III～d5 IIIで検出した。検出長8.0m、幅0.5m、深さ0.14mの東西に走る溝である。埋土はにぶい黄褐色極細砂混じりシルトの単一層である。

SD009 d9 III～e4 IIで検出した東西方向の溝である。検出長44m、幅0.9m、深さ0.15mで、埋土は灰色極細砂まじりシルトである。

SD014(第15図) d8 II～e4 IIで検出した。検出長40m、幅0.6m、深さ0.2mの東西に走る溝である。埋土は灰オリーブ色極細砂混じりシルトを主体とする3層である。

SD074(図版2) e8 I～f7 IIで検出した。第2-1面で検出した同遺構である。

SP003(第15図) c9 IIで検出した。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.16mである。埋土はオリーブ褐色極細砂混じりシルトである。

出土遺物(第16図・図版47) 第1-3層のa5 IVからは、奈良時代～平安時代前半の瓦片(1～7)が出土している。これらは第2-1面で検出したピット群・土坑群と関係をもつ可能性がある。

第2項 古墳時代～古代

古墳時代後期～古代画：第2-1面（第17図、図版3）

第1-3層を除去した面で、上面はT.P.6.90～7.30mである。検出された遺構は自然河川・溝・土坑・ピットである。古墳後期のものもあるが稀薄で、遺構の大半は古代に属する。

NR071(第18図、図版4) 調査区の北東隅にあたるb3Ⅱ～a3Ⅳで、自然河川の西岸を検出した。流路はおよそ南北に方向をもち、おそらく南から北への水流を伴っていたとみられる。西岸すなわち左岸に沿ってこれに伴うしがらみを検出した。しがらみの構造は、垂直に打ち込まれた立杭に、横木を組んだものである。構築材は約80本を数え、木材の保存状態は比較的良好であった。立杭は直径4～8cm、長さ40～90cmで、下端部を削って尖らせてある。横木は直径3～8cm、長さは140cm前後の長いものから、50cm前後の短いものがある。しがらみの北東部にあたる流路内から大刀形木製品が出土した(第19図、図版4・5I)。この木製品の樹種はヒノキで、全長51.1cm、最大幅3.3cm、厚さ0.3～0.5cmで、柄の長さは8.7cmである。層位から古墳後期に属するものとみられる。

SD008(第20図、図版6・7) f5Ⅱ～c4Ⅰで検出した。南北方向にのびる検出長30m、幅1.0～1.8m、深さ0.3～0.4mの溝で、北へ行くに従い浅くなる。埋土は灰色シルトが主体で5層に細分できる。

SD010(第20図、図版7) c4Ⅱ～a6Ⅲで検出した。検出長40m、幅1.1～1.3m、深さ約0.7mである。c6Ⅱ～a6ⅢではSD011と平行して南北に伸びるが、c6Ⅱで北西-南東に移行する。e5ⅠでSD008に切られている。埋土は灰色極細砂まじりシルトを主体とし、3層に分けられる。

SD011(第20図、図版7) d6Ⅰ～a5Ⅱで検出した南北方向の溝で、d6ⅠでSD010から分岐する。検出長30.5m、幅1.0m、深さ0.3mで、埋土は褐色シルトを主体とする。

SD012(第20図、図版6) d5Ⅰ～a4Ⅲで検出した南北に伸びる溝で、南に行くに従い浅くなる。検出長27m、幅0.7m、深さ0.26mで、埋土は灰色シルトが主体で、2層に細分できる。

SD015(第20・26図) d6Ⅲ～e4Ⅱで検出した東西方向の溝である。検出長14m、幅0.4m、深さ0.06mで、埋土は灰色極細砂混じりシルトが主体で、2層に細分できる。瓦器椀(17)が出土している。

SD043(第20図) b4Ⅰ～b3Ⅱで検出した。検出長2m、幅0.6m、深さ0.1mで南北に伸びる。北側は擾乱に切られている。埋土は灰色シルトである。

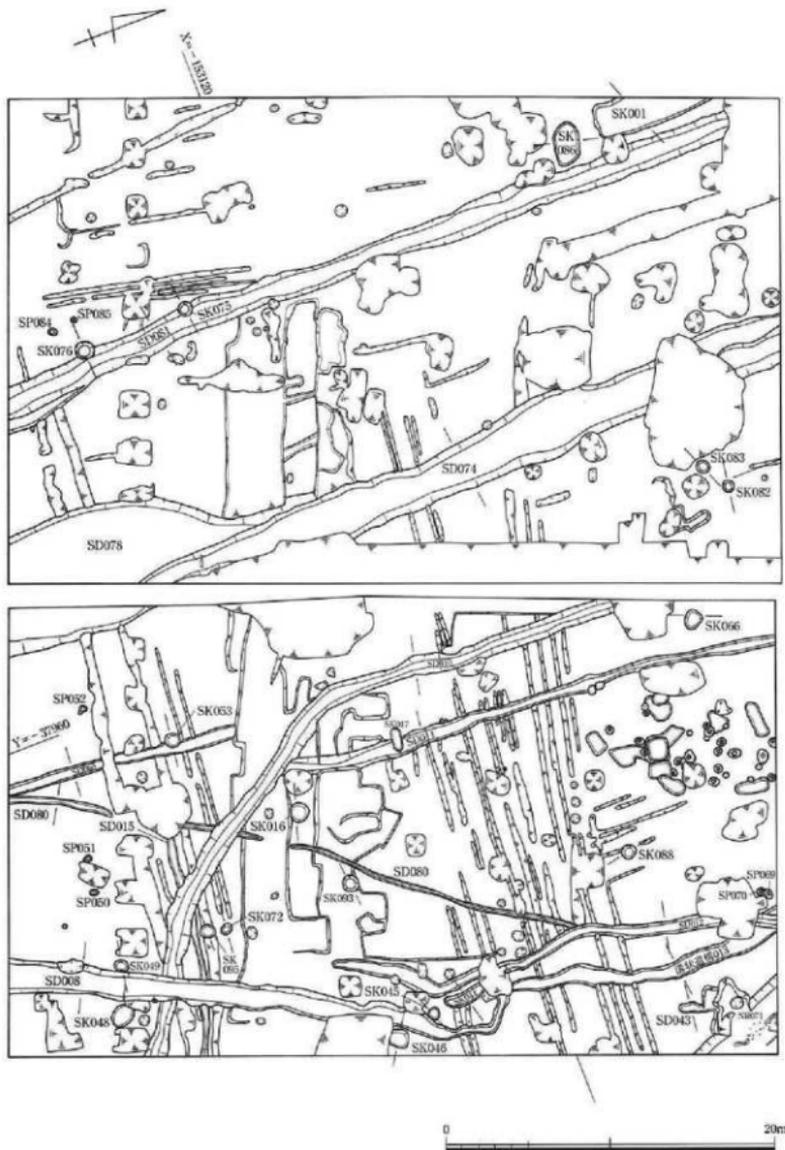
SD065(第20図) e6Ⅳ～d6Ⅱで検出した。d6Ⅱ以北は擾乱で切られているが、SD010につながると考えられる。幅0.6m、深さ0.14m、検出長14mで、埋土は褐色極細砂混じりシルトを主体とする。

SD074・078(第20・26図、図版5・45) e8Ⅰ～j7Ⅱで検出した。SD074がSD078の前身と考えられる。幅約2.8m、深さ約0.6m、検出長50mで、南北に伸びる。埋土は灰オリーブ色極細砂まじりシルトを主体とし、8層に細分できる。5世紀前半の須恵器杯蓋(18)が出土している。

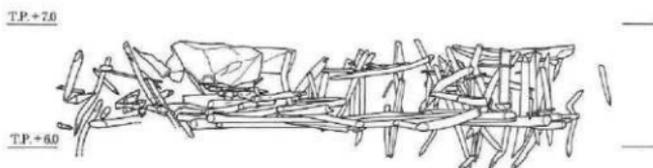
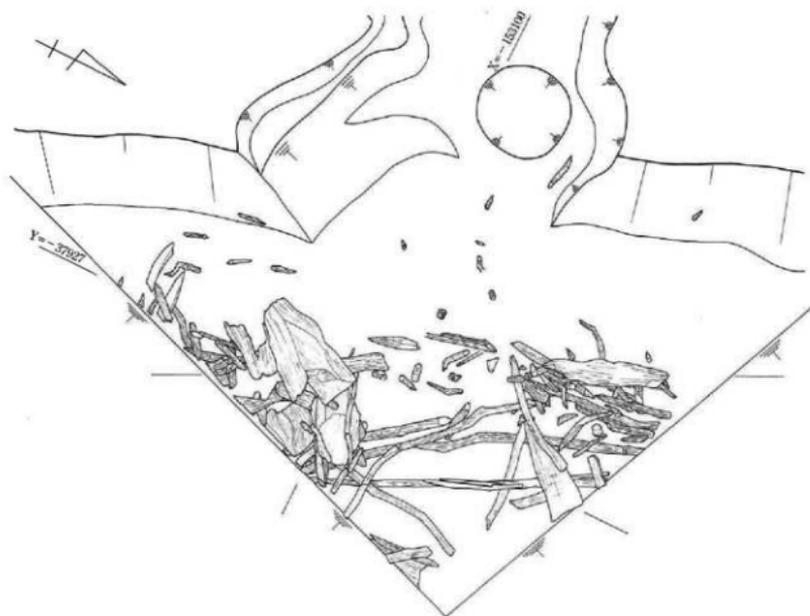
SD080(第20図) e6Ⅳ～b4Ⅳで検出した。幅0.3m、深さ0.1m、検出長6.4mで、南西-北東に伸びる。埋土は褐色極細砂混じりシルトと灰オリーブ色極細砂混じりシルトの2層である。

SD081(第20・26図、図版5) d8Ⅳ・d9Ⅲ～j8Ⅱ・j9Ⅰで検出した。幅1.5～1.9m、深さ0.3～0.4m、検出長47mで、埋土は灰色極細砂まじりシルトを主体としている。SD074とSD081は南北方向に走っており、調査区を横断する。その間が道路などの遺構となる可能性も考慮する余地がある。11世紀の瓦器椀(19)が出土している。

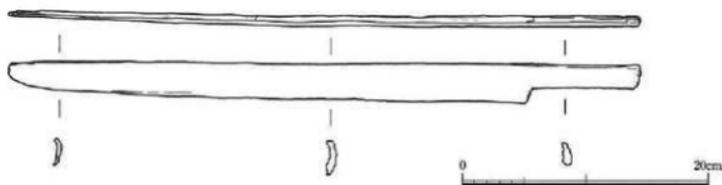
土坑・ピット群(第21図、図版6) a5Ⅰ～a5Ⅳで、直径0.3～0.5m前後のピットと1.0～2.2m前後の土坑を集中的に検出した。ピットは規則的に並ばず、建物など復元することはできなかった。しかし



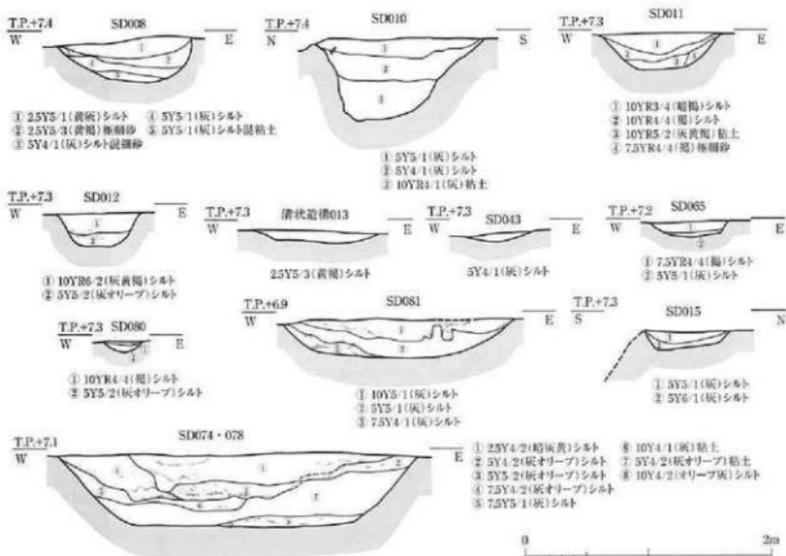
第17図 第2-1面遺構配置図



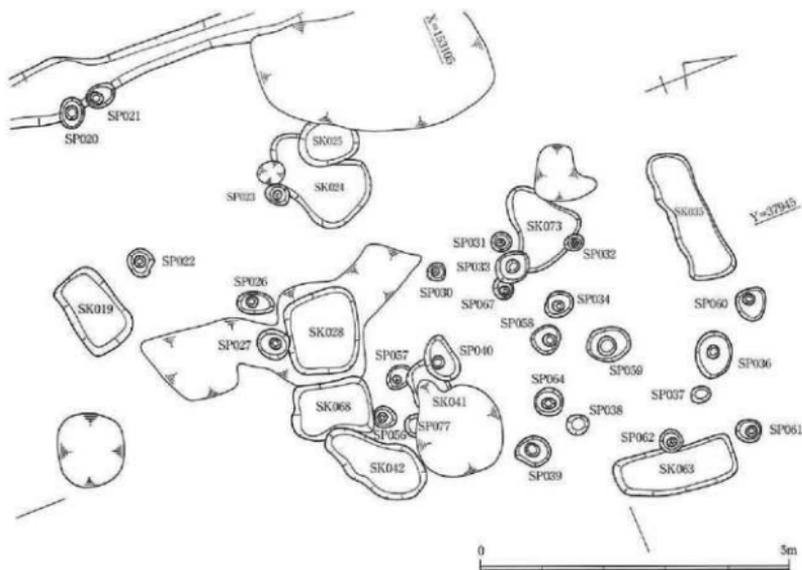
第18図 第2-1面NR 071しがらみ平・立面図



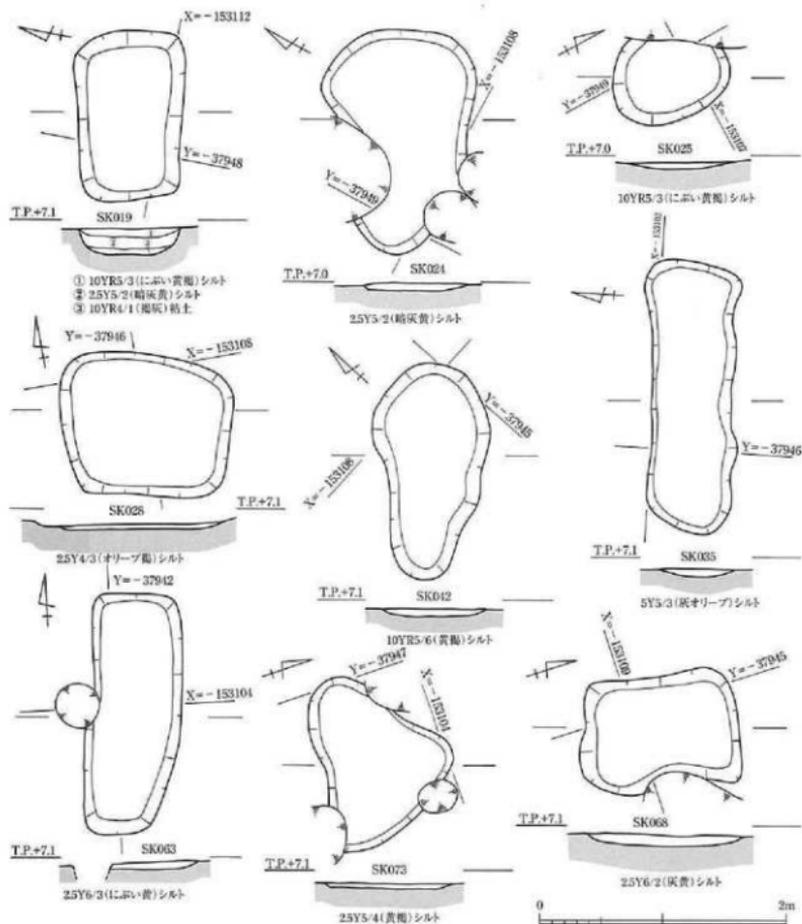
第19図 第2-1面NR 071出土大刀形木製品実測図



第20図 第2-1面溝断面図



第21図 第2-1面ピット群・土坑群配置図



当該面を覆う包含層(第1-3層)で瓦片が比較的多くまとまって出土しており、建物などに関わる遺構の可能性もある。

SK019(第22図) b5 IIで検出した。長径1.4m、短径0.86m、深さ0.08mで、平面形は長方形である。埋土は黄褐色シルトを主体としている。

SK024(第22図) a5 IVで検出した。長径1.8m、短径1.1m、深さ0.06mで、平面形は不定形である。埋土は暗灰黄色シルトである。

SK025(第22図) a5 IVで検出した。長径0.96m、短径0.76m、深さ0.04で、平面形は楕円形である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

第3表 第2-1面ビット法量表(1)

遺構番号	地区名	長さ(m)	短径(m)	平面形状	出土遺物	遺構番号	地区名	長さ(m)	短径(m)	平面形状	出土遺物
SP020	b6 I	0.52	0.42	楕円形	-	SP038	a5 III	0.37	0.34	円形	-
SP021	b6 I	0.5	0.38	楕円形	-	SP039	a5 III	0.56	0.5	不定形	-
SP022	b5 II	0.46	0.42	円形	-	SP040	a5 II	0.56	0.51	不定形	-
SP023	a5 IV	0.43	0.38	楕円形	-	SP056	a5 III	0.38	0.36	楕円形	-
SP026	a5 IV	0.6	0.4	楕円形	-	SP057	a5 III	0.43	0.35	楕円形	-
SP027	a5 IV	0.53	0.49	楕円形	-	SP058	a5 III	0.53	0.46	不定形	-
SP030	a5 IV	0.3	0.3	円形	-	SP059	a5 I	0.7	0.6	楕円形	-
SP031	a5 IV	0.34	0.33	円形	-	SP060	a5 I	0.56	0.49	楕円形	-
SP032	a5 II	0.34	0.26	楕円形	-	SP061	a5 I	0.4	0.4	円形	-
SP033	a5 IV	0.6	0.54	楕円形	-	SP062	a5 I	0.38	0.36	円形	-
SP034	a5 I	0.51	0.42	楕円形	-	SP064	a5 III	0.48	0.46	円形	-
SP036	a5 I	0.77	0.59	楕円形	-	SP067	a5 III	約0.4	0.36	楕円形	-
SP037	a5 I	0.34	0.3	楕円形	-						

SK028(第22図) a5IVで検出した。長径1.38m、短径1.18m、深さ0.04mで、平面形は方形である。埋土はオリーブ褐色シルトである。

SK035(第22図) a5I～a5IIで検出した。長径2.24m、短径0.68m、深さ0.06mで、平面形は長方形である。埋土は灰オリーブ色シルトである。

SK041 a5IIIで検出した。SP040と攪乱に切られており全容は不明である。

SK042(第22図) a5IIIで検出した。長径1.78m、短径0.82m、深さ0.06mで、平面形は不定形である。埋土は黄褐色シルトである。

SK063(第22図) a5Iで検出した。長径1.98m、短径0.78m、深さ0.06mで、平面形は長方形である。埋土はにぶい黄色シルトである。

SK068(第22図) a5IIIで検出した。長径1.24m、短径0.94m、深さ0.09mで、平面形は方形である。埋土は灰黄色シルトである。

SK073(第22図) a5IIで検出した。長径1.44m、短径1.04m、深さ0.04mで、平面形は不定形である。埋土は黄褐色シルトである。

ビット群 集中して検出されたビット群の詳細は第3表にまとめた。ビット群調査時は悪天候により崩壊したため断面調査を行うことができず、平面の記録のみにとどまった。

SK001(第23・26図、図版7・45) 19I～19IIIで検出した。東西幅2.6m、深さ0.4mで、北部端は側溝および攪乱にあたっており全容は不明である。埋土は灰色極細砂混じりシルトを主体とする3層からなる。東屑付近で土師器皿が2点(8・9)出土している。当遺構は第1～3面の認識で検出したが、出土遺物から当該面に所属すると判断した。

SK016(第24図、図版7) c6Iで検出した。東西径1.2m、南北径1.17mの円形を呈し、深さ0.21mである。埋土は黄褐色極細砂を主体としている。

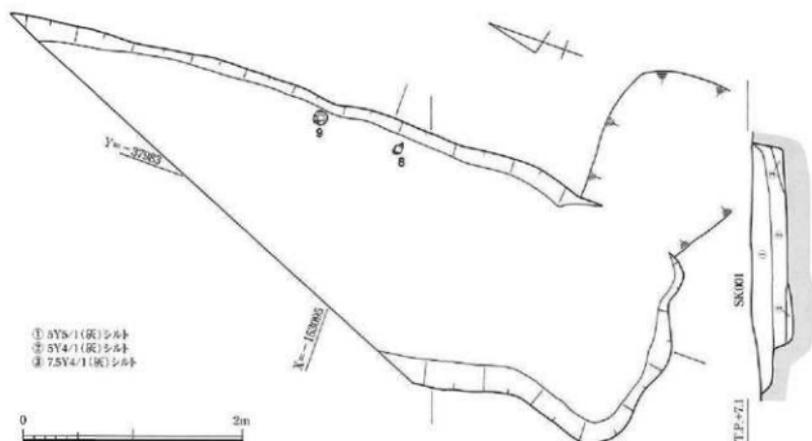
SK017(第24図、図版7) c6Iで検出した。長辺1.45m、短辺0.6mの楕円形を呈し、深さ0.09mである。埋土は灰色極細砂まじりシルトである。

SK044(第24図、図版6) c4I～c4IIIで検出した焼土遺構である。長辺2.4m、短辺0.8mの楕円形で、深さ0.23mである。埋土は黄褐色シルトを主体としており、炭まじりの焼土が堆積している。

SK045(第24図、図版6) c4IVで検出した焼土遺構である。東西0.8m、南北0.7mの楕円形で深さ0.16mである。埋土は黄褐色シルトを主体としている。炭まじりの焼土が5cmほど堆積している。

SK046(第24図、図版6) c4IV～c4IIIで検出した。埋土は暗灰黄色粘土を主体としている。東西長1.1m、南北検出長1.1m、深さ0.19mである。

SK048(第24図) e5I～e5IIIで検出した。東西径1.17m、検出南北径1.47mの楕円形を呈し、深さは



第23図 第2-1面SK 001平・断面図

0.16mである。埋土は灰色極細砂まじりシルトを主体としている。

SK049(第24図) e5 I～e5 IIで検出した。東西径0.7m、南北径0.8m、深さ0.13mで、埋土は灰黄褐色極細砂まじりシルトを主体としている。

SK053(第24図) d6 IVで検出した。東西径0.9m、南北径0.9m、深さ0.23mで、埋土は灰色極細砂まじりシルトを主体としている。

SK066(第24・26図) a6 Iで検出した。東西検出径0.8m、南北1.1m、深さ0.08mで、埋土は黄灰色シルトを主体としている。黒色土器A類碗(10)が出土している。10世紀。

SK072(第24図、図版7) d5 IVで検出した。東西径0.54m、南北径0.6m、深さ0.22mである。埋土は灰色極細砂まじりシルトを主体としている。上面を平らに加工した石材が出土している。

SK075(第24図) c9 IIIで検出した。東西径0.9m、南北径0.8m、深さ0.15mである。埋土は暗灰黄色シルトを主体としている。

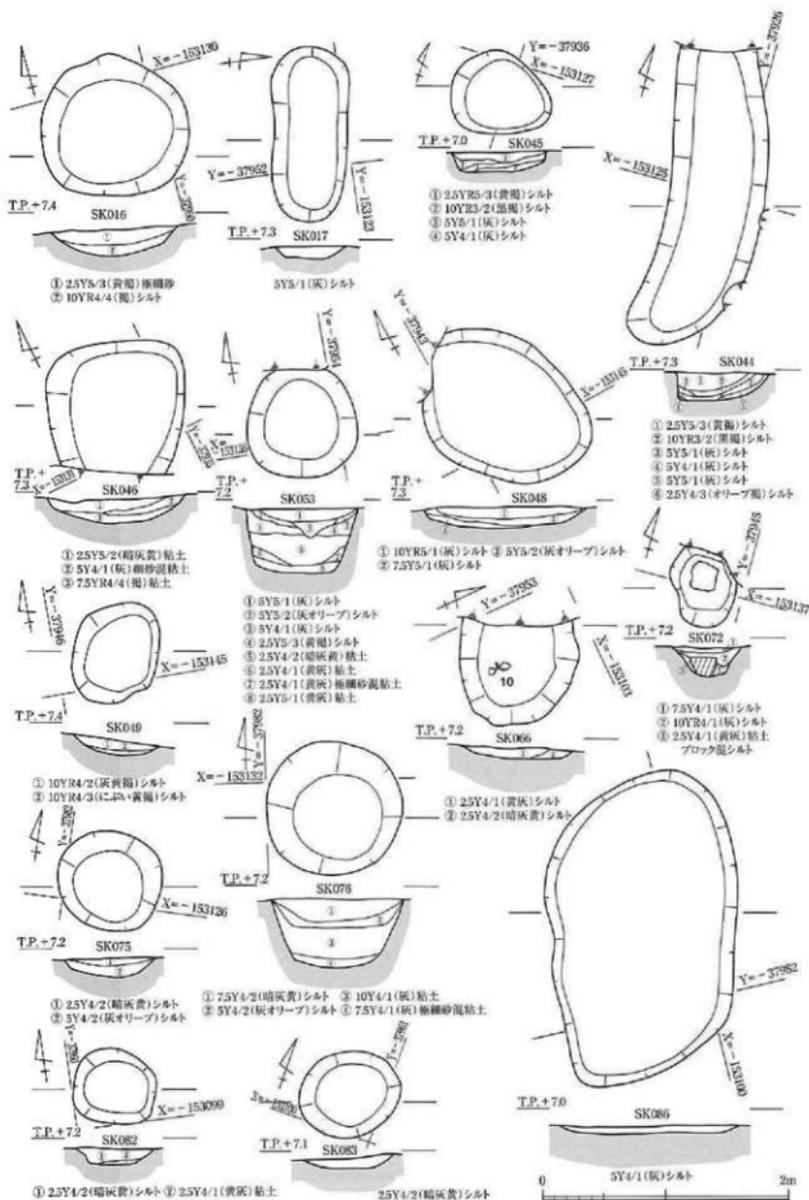
SK076(第24図) d9 Iで検出した。東西径1.1m、南北径1.1m、深さ0.24mである。埋土は暗灰黄色極細砂まじりシルトを主体としている。

SK082(第24図) j6 IVで検出した。東西径0.7m、南北径0.6m、深さ0.08mである。埋土は暗灰黄色極細砂まじりシルトを主体としている。

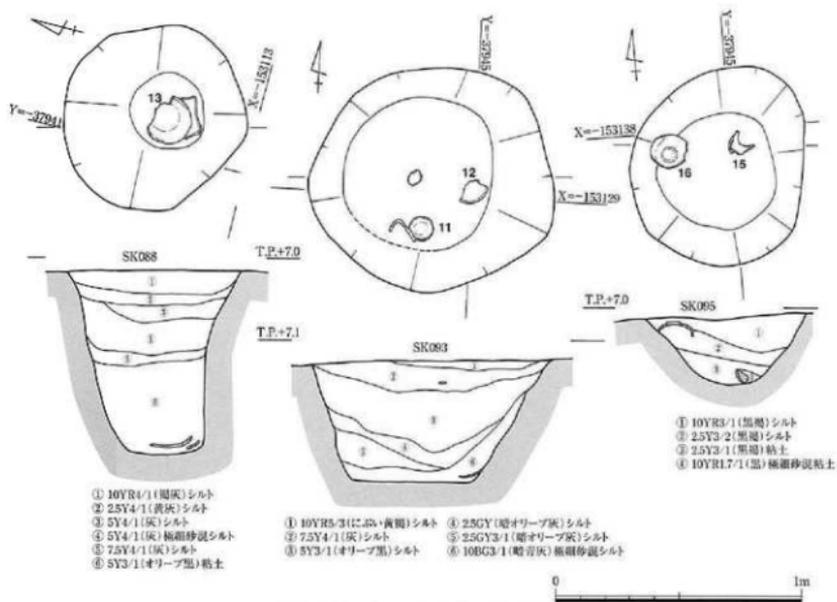
SK083(第24図) j7 IIIで検出した。東西径0.7m、南北径0.8m、深さ0.08mである。埋土は暗灰黄色極細砂まじりシルトを主体としている。

SK086(第24図) j9 III～a9 Iで検出した。東西径2.6m、南北径1.5mの楕円形を呈しており、深さ0.06mである。埋土は灰色極細砂まじりシルトを主体としている。

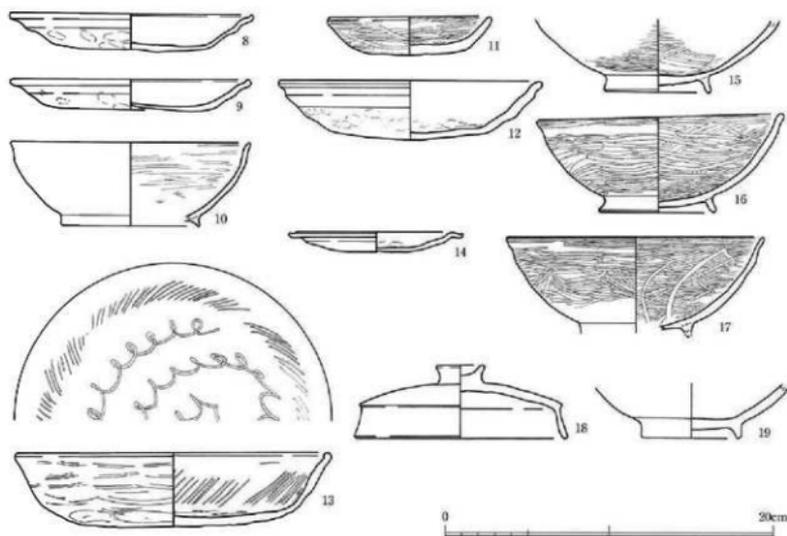
SK088(第25・26図、図版7・45) b5 Iで検出した。東西径0.8m、南北径0.7m、深さ0.74mである。埋土は褐灰色極細砂まじりシルトを主体としている。底部から8世紀初頭の土師器中皿(14)と11世紀の杯(13)が出土している。当遺構は2-2面で検出したが、出土遺物から当該面に所属すると判断した。井戸の可能性はある。



第24図 第2-1面土坑平・断面図(2)



第25図 第2-1面土坑平・断面図(3)



第26図 第2-1面出土遺物実測図

第4表 第2-1面ビット法量表(2)

通稱番号	地区名	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	埋 土	出土遺物
SP050	e6 I	0.5	0.28	0.07	楕円形	10YR5/3(にぶい黄褐)シルト・10YR5/2(灰黄褐)シルト	-
SP051	e6 I	0.4	0.34	0.07	楕円形	10YR5/3(にぶい黄褐)シルト	-
SP052	e7 I	0.44	0.4	0.18	不定形	5Y5/1(灰)細砂混シルト・5Y4/2(灰オリーブ)細砂混シルト	-
SP069	a4 IV	0.54	0.44	0.02	楕円形	5Y5/3(灰オリーブ)シルト	-
SP070	a4 IV	0.48	0.43	0.04	楕円形	5Y5/1(灰)シルト	-
SP084	d9 I	0.51	0.48	0.12	円形	5Y5/2(灰オリーブ)シルト	-
SP085	d9 I	0.36	0.32	0.19	円形	5Y4/2(灰オリーブ)細砂混シルト・2.5Y4/2(暗灰黄)シルト	-

SK093(第25・26図、図版7・45) c5 III～c5 IVで検出した。東西径1.0m、南北径0.9m、深さ0.6mで、断面形は台形を呈する。埋土は上層が灰色シルト、中層がオリーブ黒色シルト、下層が暗オリーブ灰色シルトなどで構成されている。底面付近では11世紀の瓦器皿(11)と土師器皿(12)が出土した。当遺構は第2-2面で検出したが、出土遺物から当該面の所屬と判断した。井戸の可能性はある。

SK095(第25・26図、図版7・45) d5 III～d5 IVで検出した。東西径0.7m、南北径0.8m、深さ0.3mである。埋土は黒褐色シルトを主体とした3層で構成されている。11C後半～末の瓦器桶(15・16)が出土した。当遺構は第2-2面で検出したが、出土遺物から当該面の所屬と判断した。

溝状遺構013(第20図) a4 III～c4 IIで検出した南北方向の溝状遺構である。検出長16m、幅0.5m、深さ0.1mで、埋土は黄褐色極細砂混じりシルトの単一層である。当初溝として検出したが、第4-1面の同位置で断層を確認した。従って、断層による土層陥没を溝状に検出したと考えられる。

ビット SP050～052・069・070・084・085は第4表にまとめた。

古墳時代中期：第2-2面(第27図、図版8)

第2-1層を除去した面で、上面はT.P.6.90～7.10mである。Ⅱ区でのみ遺構を検出した。検出された遺構は土坑である。

SK018(第28・30図、図版8・45) c6 Iで検出した土坑である。一辺約2.7mのほぼ方形を呈している。深さは0.4mで、埋土は黄灰色シルトを主体としている。遺構の中央部に焼土が分布している。土坑内からは、土師器の甕(20)、片口鉢(21)が出土している。竪穴住居の可能性も考えられたが、ビットは検出されなかった。第2-1面の認識で検出したが、出土遺物から当該面の所屬とした。

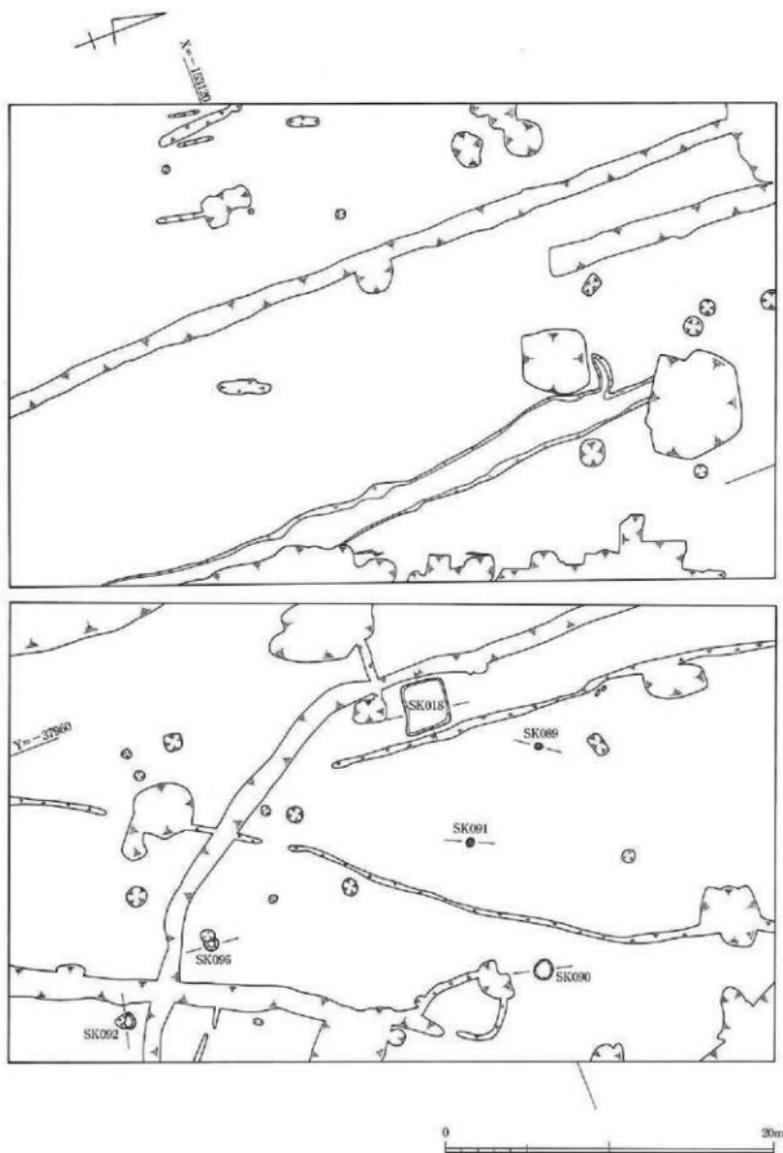
SK089(第29図) b5 IVで検出した長径0.6m、短径0.4mの方形で、深さ0.3mである。埋土は灰色系粘土を主体とする。遺物は出土しなかった。

SK090(第29図) b4 IV～c4 IIで検出した。直径1.2m、深さ0.6mである。埋土は灰色系の粘土を主体としている。遺物は出土しなかった。

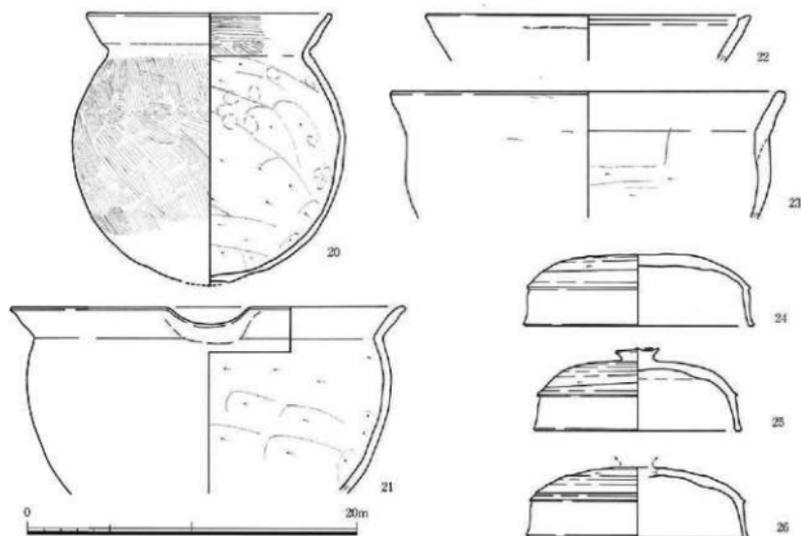
SK091(第29図、図版8) c5 I～c5 IIで検出した。東西径0.5m、南北径0.56m、深さ0.4mである。埋土は灰オリーブ系のシルト、粘土が3層堆積している。上面を平らに加工した石材が出土している。柱穴の礎石の可能性もあるが、周囲にこれに対応するビットなどは認められなかった。

SK092(第29・30図、図版45) e5 Iで検出した。東西径1.3m、南北径1.5m、深さ0.3mである。埋土は黄灰色・灰色・オリーブ黒色のシルトを主体とした4層で構成されている。土師器の甕(22)、鉢(23)、須恵器の杯蓋(24～26)が出土している。

SK096(第29図) d5 IIIで検出した。西側をSK095に切られている。東西径約0.7m、南北径0.64m、深さ0.2mである。埋土は黄灰色系シルト3層で構成されている。



第27図 第2-2面遺構配置図



第30図 第2-2面出土遺物実測図

古墳時代前期～中期：第3-1面（第31図、図版9）

第2-2・3層を除いた面で、上面はT.P.6.50m前後である。検出された遺構は水田畦畔・溝・土坑で、全体に遺構密度は稀薄である。

畦畔(図版9) I区の北西半を中心に、水田畦畔を部分的に検出した。j9Ⅲ～j8Ⅱでは、幅0.15m、高さ0.05mの畦畔を検出し、その周囲には足跡も確認された。当該面では検出面上において、古墳時代前期に築造された古墳(久宝寺1号墳)の墳丘が姿を表しており、水田畦畔はその北側に認められる。またこれらの畦畔の方向は、墳丘の北辺とほぼ平行することから、1号墳墳丘の隆起をある程度意識して形成されたものと考えられる。

SD102 j7Ⅱ～b9Ⅱで検出した北東-南西方向の溝で、幅約0.8m、深さ0.1m、検出長28mである。

SD103 a9Ⅳで検出した北東-南西方向の溝である。幅0.4m、深さ0.05m、検出長3mである。

SD104 c10Ⅳ～c9Ⅱで検出した北西-南東方向の溝で、幅0.4m、深さ0.05m、検出長12mである。

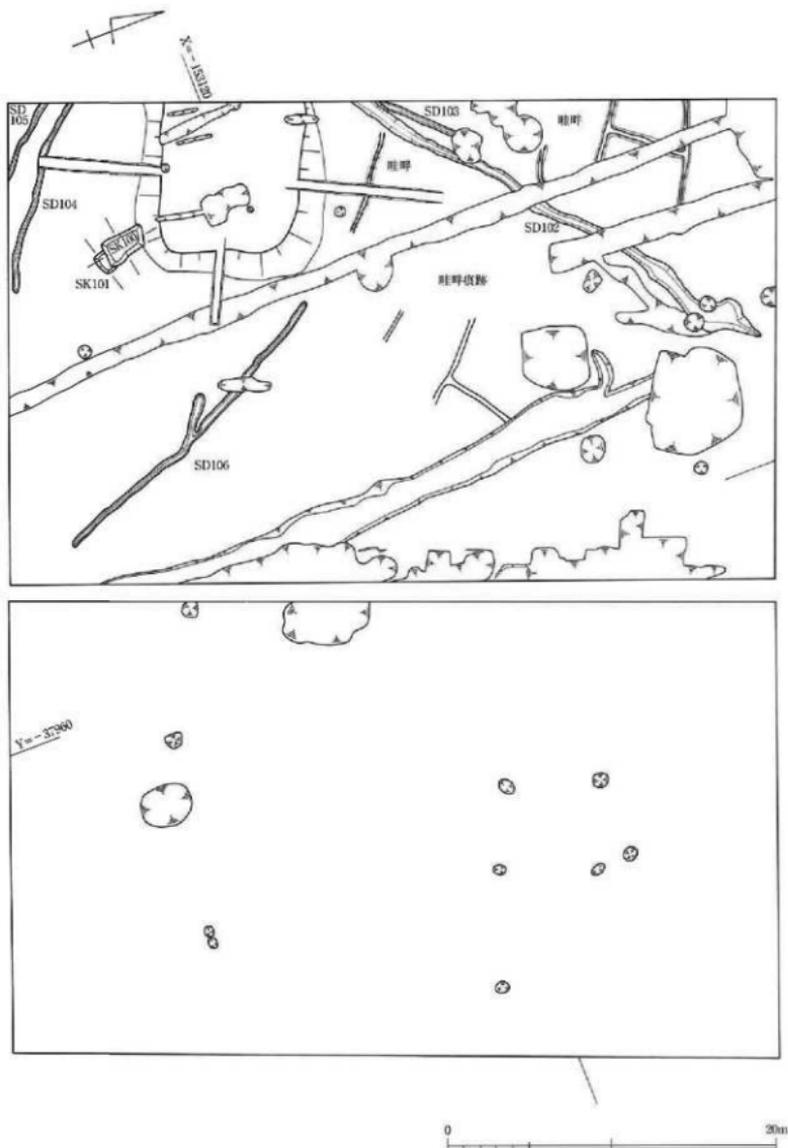
SD105 c10Ⅳ～c10Ⅰで検出した北西-南東方向の溝で、幅0.4m、深さ0.05m、検出長5mである。

SD106 b8Ⅳ～c8Ⅲで検出した北西-南東方向の溝で、幅0.4m、深さ0.06m、検出長20mである。

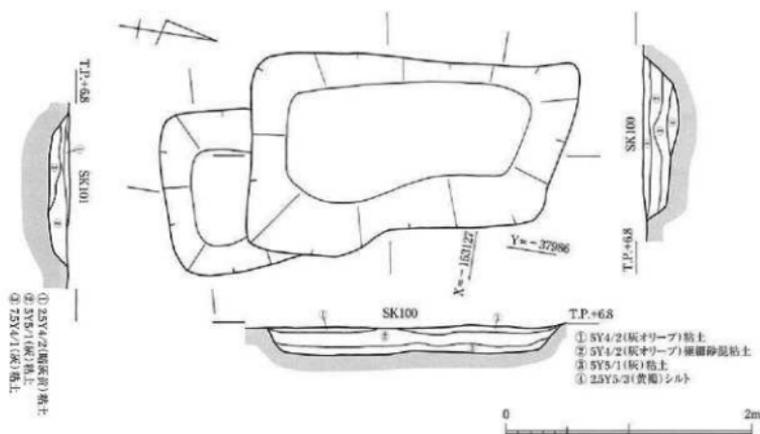
SK100(第32図) c9Ⅳで検出した。長辺2.6m、短辺1.6mのほぼ長方形を呈し、深さは0.3mである。埋土は灰色粘土と黄褐色シルトなどで構成されている。

SK101(第32図) c9Ⅳで検出した。北部をSK100に切られているため全容は不明であるが、ほぼ長方形を呈するものとみられる。東西軸1.3m、南北軸は1m以上で、深さは0.16mである。埋土は灰色粘土を主体とする。

遺構に伴った遺物は皆無であるが、第3-1層から5世紀の須恵器壺(27)が出土した(第36図、図版46)。



第31圖 第3-1面遺構配置圖



第32図 第3-1面土坑平・断面図

古墳時代前期期：第3-2・3面（第33図、図版10）

第3-1層を除去した面で、第3-2、3-3層が共に検出され、上面は弱い土壌化が認められる。上面はT.P.6.10～6.40m前後である。第3-3面をベースとして、洪水砂層である3-2層が調査区の北・東側を中心に分布する。検出遺構は、自然河川・畦・溝・土坑である。

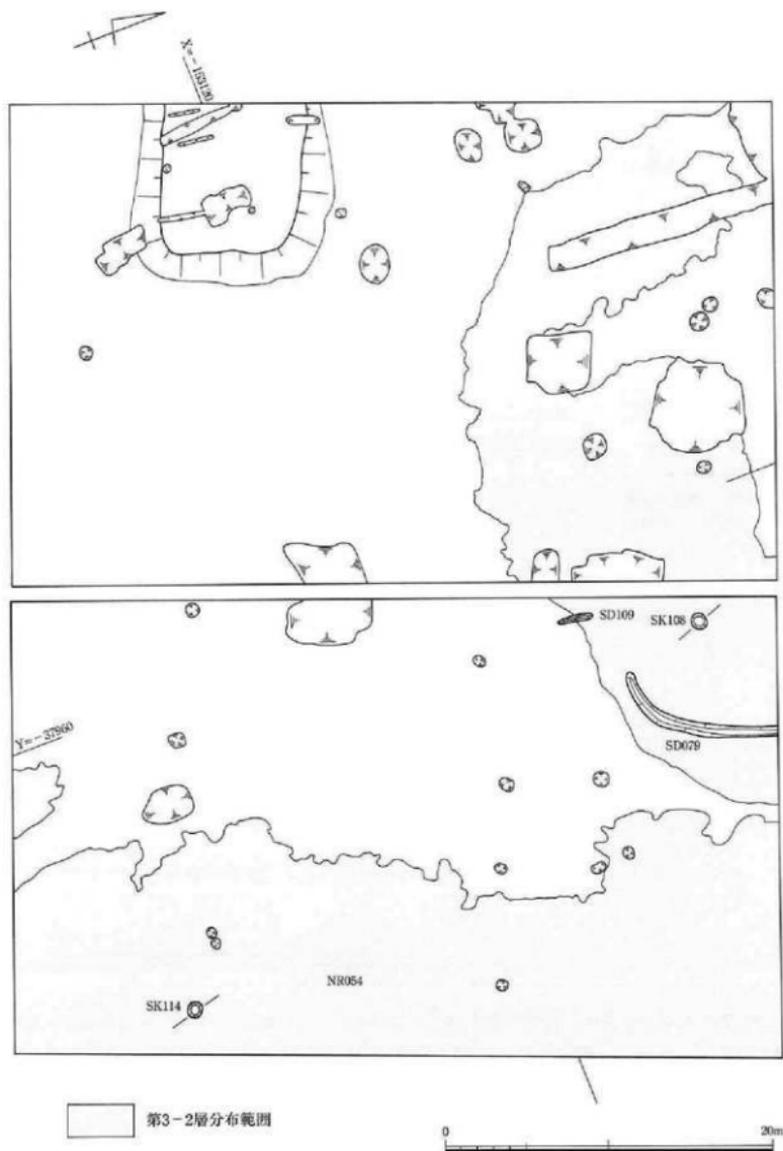
SD079 第3-2面上のa5Ⅰ～a5Ⅳで検出した。幅1m、深さ0.3m、検出長10mである。

SD109 第3-2・3面上面にかけてa6Ⅳ～b6Ⅱで検出した小溝である。幅0.35m、深さ0.05m、検出長2mである。

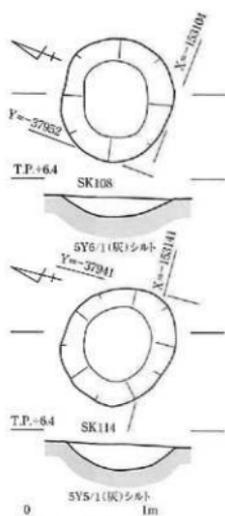
SK108(第34図) a6Ⅰで検出した。東西径1.0m、南北径0.86m、深さ0.14mの円形の土坑で、埋土は灰色極シルトである。

SK114(第34図) 第3-2面e5Ⅰで検出した東西径1.0m、南北径0.9m、深さ0.2mの円形の土坑で、埋土は灰色極微砂である。

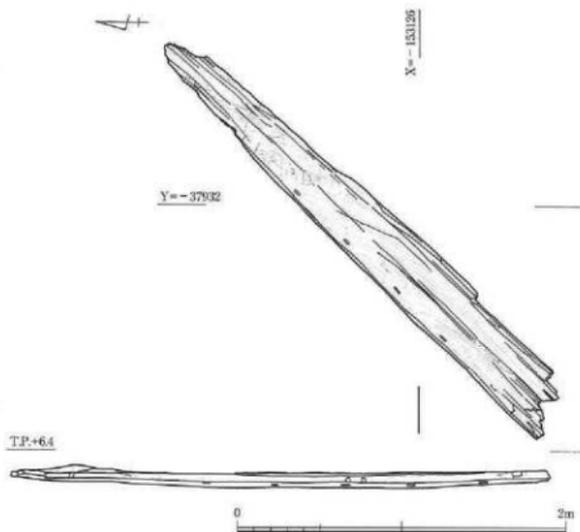
NR054 第3-2層の分布範囲が自然河川の流域を示す。同層は第3-3面の一部を川床面として調査区の北および東側に分布する。第3-3面上面の損傷は軽微で、河川は比較的短期間に機能していたものとみられる。本河川洪水砂(第3-2層)中のc4Ⅲで準構造船の一部と考えられる船材が出土した(第35・37図、図版10・51)。調査区の東端にあたる。船材は長さ3.17m、最大幅0.38m、最大厚0.08m前後の板状で、内面を上に向けてほぼ水平の状態出土した。樹種はスギで、一木をおよそ板目に削りだして作られている。両面に加工痕が観察される。北にいくに従い幅を減じて細くなり、上面がわずかに弓形に反りあがっている。南端部は人為的に切断されており、東側は欠損している。材の西側端部には38～39cm間隔で長幅4～5cm、短幅1～1.5cmのホゾ孔が7箇所穿たれ、そのうち4箇所木栓が残存していた。西側面には縦横2cm、奥行1.5～2cmの孔が2箇所あけられている。よって船底材の左船首部、もしくは右船尾部に近い部材と考えられる。凹面西端と凸面北半分を中心に、弱く炭化している。船本体が解体された後、河川によって流され漂着した状態と考えられる。



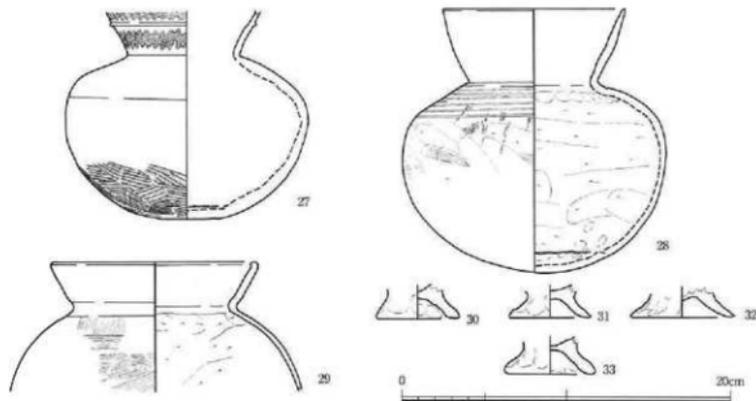
第33圖 第3-2・3面遺構配置圖



第34図 第3-2面
土坑平・断面図



第35図 NR 054 準構造船出土状況

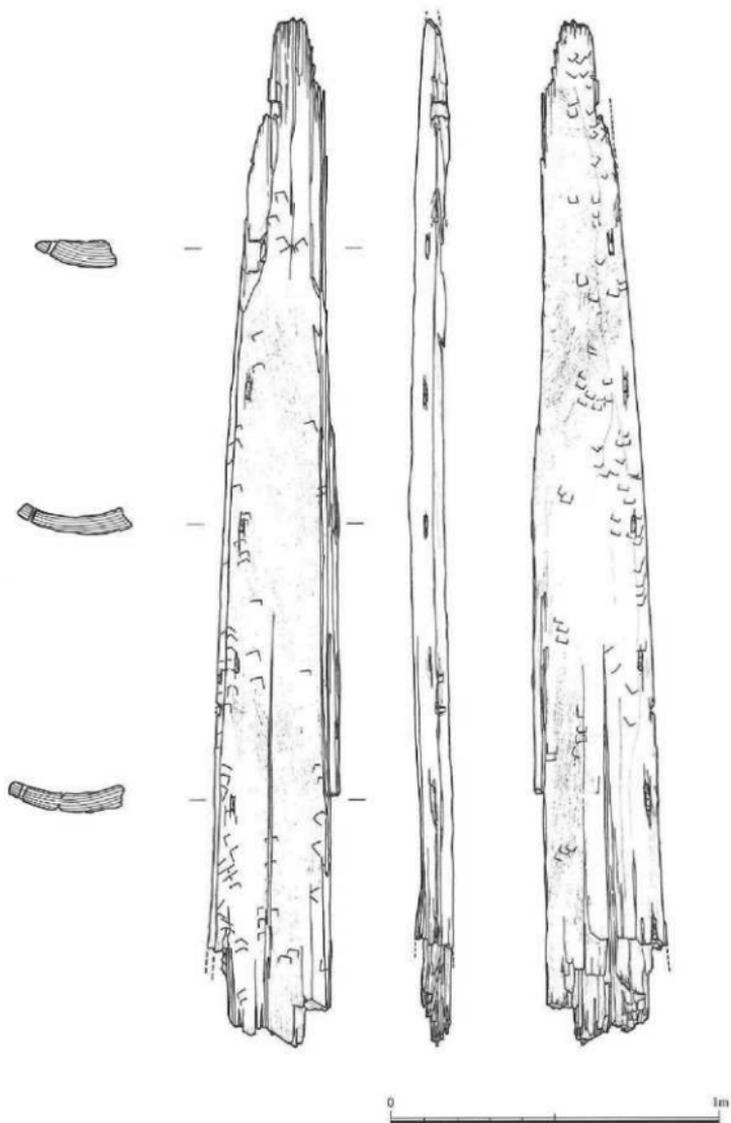


第36図 第3層出土遺物実測図

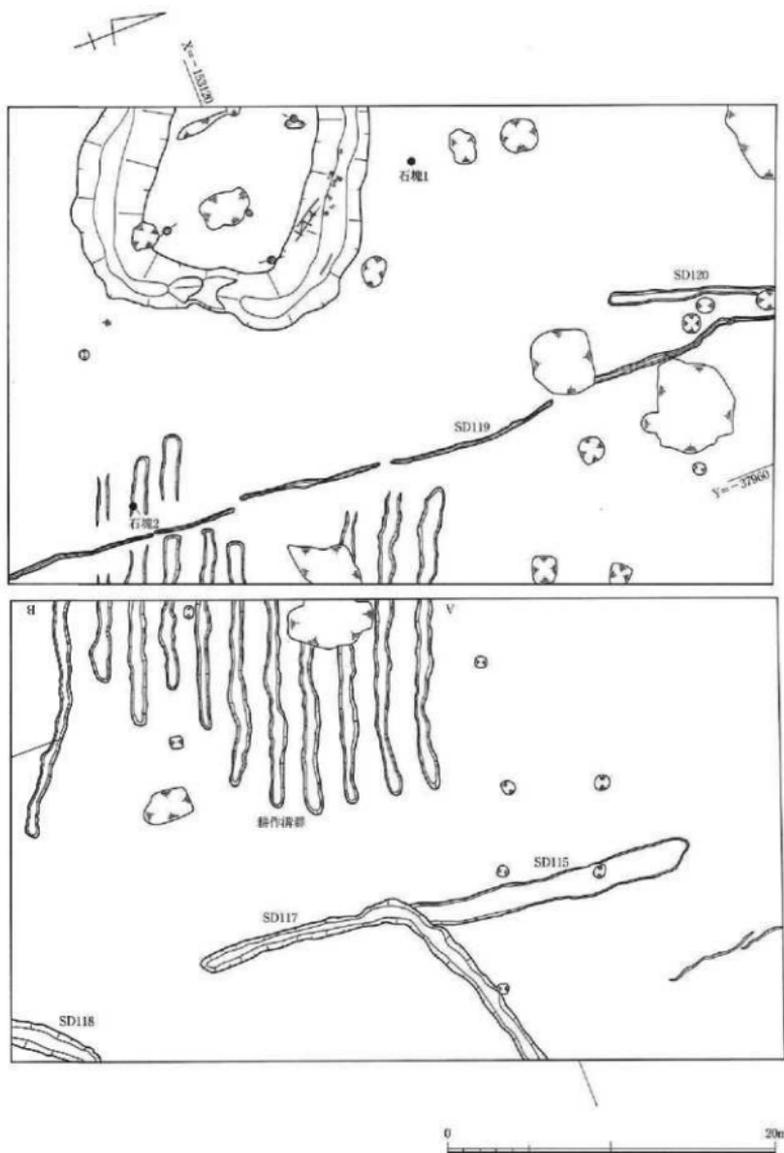
出土遺物(第36図、図版46) 全体的に遺物量は少ないが、3-2層の上面に近い土壌化層から土師器壺(28)が出土したほか、e6Ⅱ～e6Ⅲからは脚台Ⅲ式の製塩土器(30～33)が集中して出土している。また3-3面に密着して布留式甕(29)が出土した。

古墳時代初頭～前期面：第4-1面(第38図、図版11)

第3-3層を除去した面である。第4層の上部層である黒色土壌層の上面にあたる。当該面は、北西



第37图 N R 054出土準構造船実測图



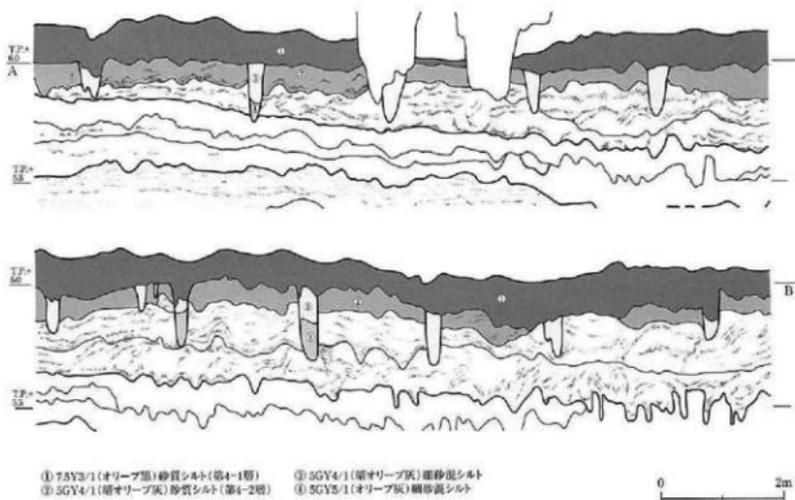
第36圖 第4-1 面遺構配置図

が高くT.P.6.40 mあり、南東に向かってレベルを下げ、調査区内で消滅する。これより東に存在する自然河川の影響で、東地域が未利用地であり、土壌化のための条件が阻害されたためであろう。したがって当調査区が生産域の東端と考えられる。検出遺構は古墳・耕作に伴う溝群・溝である。古墳に関しては第5章で詳述する。

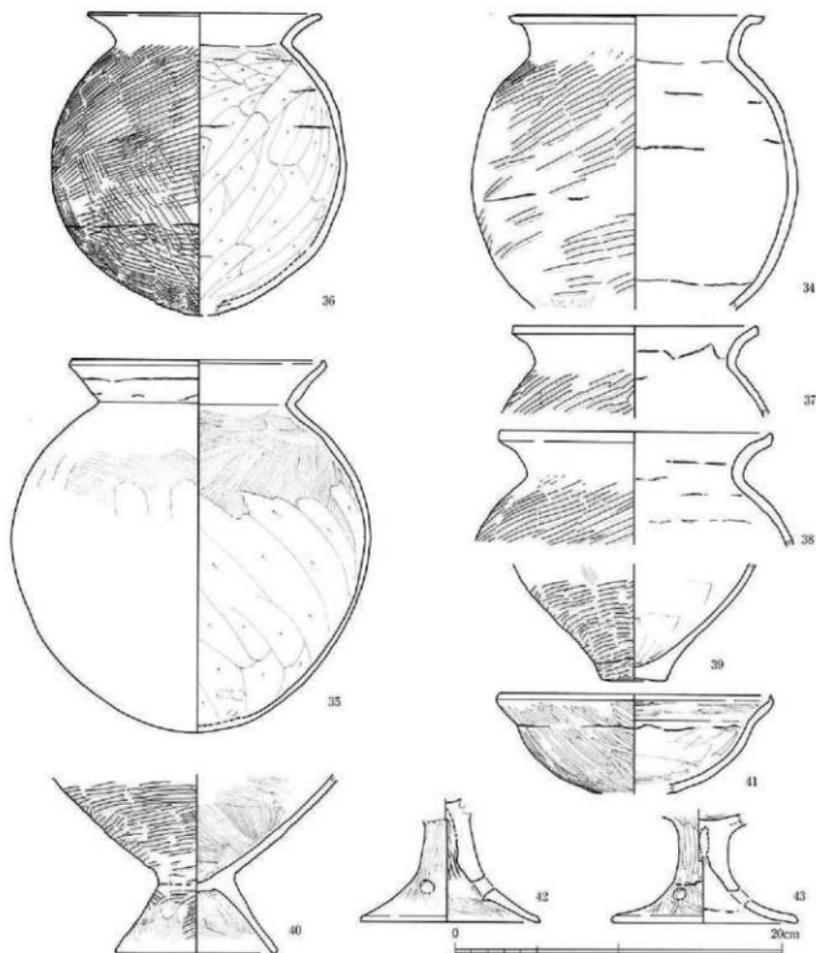
耕作溝群(第39図、図版12) 久宝寺遺跡一帯では、当該層を耕作土として利用し、耕作に伴う溝が広範囲で検出されている。当調査区でも、調査区中央部南半分の土壌化層上面において、約2m間隔で平行する11条の溝群を検出した。これらの溝は掘り込まれた後に埋め戻されており、溝の部分は僅かに凹んだ状態で検出された。幅0.2~0.4m、深さ0.2~0.3mで、検出長は12~18mである。埋土は暗オリーブ灰色の極細砂まじりシルトを主体としており、細砂・中砂を多く含み、灰オリーブ色のシルトブロックが入る。2層に細分できるものもあり、暗オリーブ灰色の極細砂まじりシルトの下にオリーブ灰色極細砂混じりシルトの層が存在する。当該遺構の存在する地点では、基本的に4-1層は耕土層とみられ、溝は畝間溝であり、溝と溝の間が畝と考えられる。

既往の調査では、同様の溝が方向を違えて何回も切り込まれ、格子状に検出される例が多く見られる。当調査区の溝群は、既往調査で検出されている溝群と性質は同じであるが、利用期間が短かったようで、切り合い関係は認められない。このような耕作溝群で構成される生産域を所有していた集団が存在したであろうが、当調査区では、居住施設を検出しなかった。その他、第4-2面で検出した道路遺構と対応する南北方向に走行する溝SD119・120を、土壌化層の上で検出している。またSD115・117は第4-2面SD125・127の後身である。

SD118(図版13) 調査区南東端にあたるe5Ⅲ~f5Ⅰで検出した。幅1.6m、深さ0.3m、検出長5mである。埋土はオリーブ黒色シルトに灰白色の細砂・中砂がラミナが形成されている。遺物は出土しなかった。南壁および東壁から検証すると、SD118を挟んで東西両方に堤状の高まりが認められる。



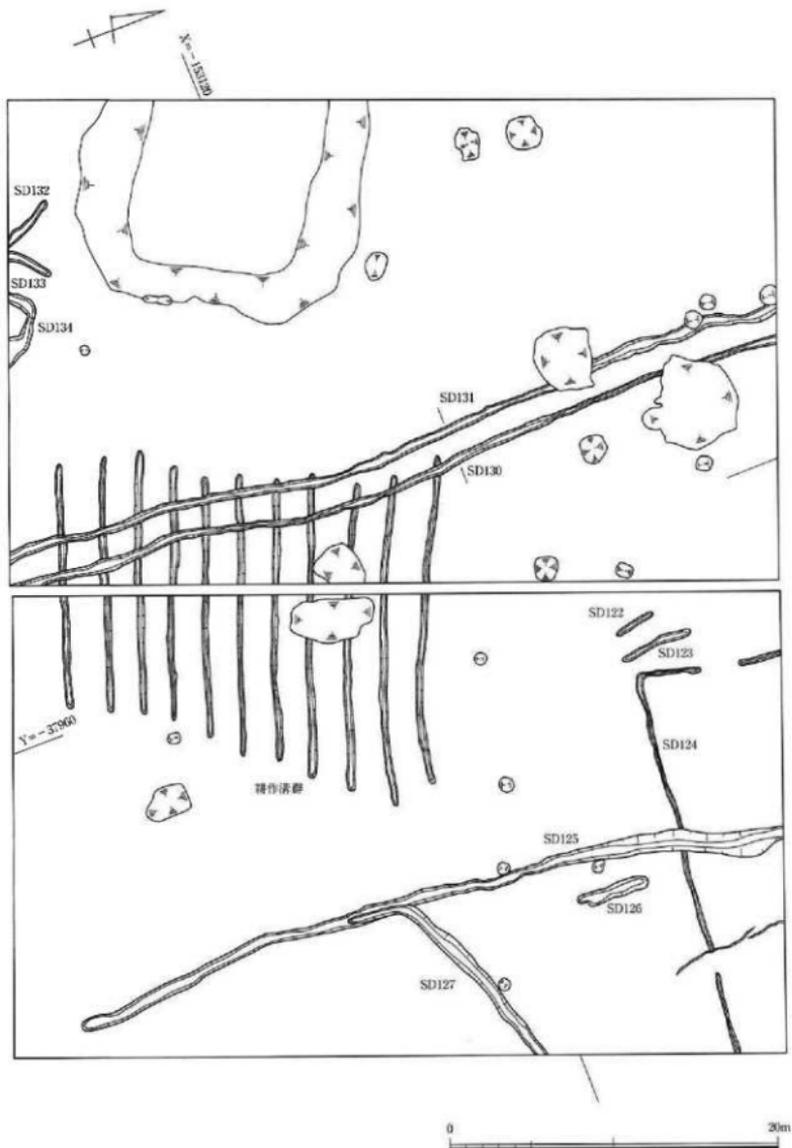
第39図 耕作溝群土層断面図



第40図 第4-1面・第4-1層出土遺物実測図

調査区の北東端では断層(図版13)を検出した。全長は南北方向に8mで、東側が地割れにより0.1mほどの段差を形成する。この地割れは中世末の地震によるが、この面で平面的に確認した(第7章)。

出土遺物(第40図、図版46・47) 第4-1面では遺構に伴わない土器が3点(34~36)と、石塊2点(図版13・58)が出土した。34~36は土師器甕である。石塊はa9Ⅳ(石塊1)とd8Ⅰ(石塊2)で検出した。加工痕は認められないが、久宝寺1号墳に近く、自然石とは考えにくい。人為的に運搬されてきた可能性がある。全長は石塊1が32cm、石塊2が39cmである。第4-1層からは土師器(37~43)が出土した。(37~39)は弥生形甕、(40)は台付甕である。(41)は鉢、(42・43)は高杯の脚部である。



第41図 第4-2面遺構配置図

古墳時代初頭面：第4-2面（第41図、図版14）

第4-1層下部層の上面にあたる。上層である第4-1層は土壌化の極めて進行した層位であるため、遺構検出が困難であり、そのため下面遺構の検出を行った。基本的に当該面で検出した遺構は第4-1面に帰属すると考えられる。検出した遺構は道路状遺構・溝・土坑である。

道路状遺構(SD130・SD131)(第42図、図版15) j7Ⅱ～e7Ⅱで南北方向に検出した。第4-1層上面でも不明瞭ながら検出された遺構の下部構造である。幅0.4～0.6m、深さ0.1m前後の溝が約2m間隔で平行に2条走り、その間が道路として機能した可能性がある。検出長は49mで、埋土はオリーブ黒色細砂～粗砂である。この北側に連続すると考えられる遺構が、(財)八尾市文化財調査研究会により実施された23次調査で検出されている。



第42図 第4-2面道路状遺構(SD130・131)土層断面図

SD125 a4Ⅱ～e5Ⅲで南北方向に検出した。幅約1.0m、深さ0.14m前後で南に向かって浅くなる。検出長44mで、埋土はオリーブ黒色極微砂である。当遺構以東は、土壌化層が消滅し、未利用地となるため、当遺構が境界線の役割を果たした可能性が考えられる。

SD127 c5Ⅰ～c4Ⅰで検出した。検出長15mである。

第4-2面で検出したその他の溝の法量は第5表にまとめた。

第5表 第4-2面溝法量表

遺構番号	地区名	最大幅(m)	検出長(m)	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD122	a6Ⅲ	0.3	2.5	0.1	2.5Y3/1(黒褐)シルト	-
SD123	a6Ⅲ～a6Ⅰ	0.4	4.5	0.05	2.5Y3/1(黒褐)シルト	-
SD124	b3Ⅱ～a5Ⅱ	0.2	3.3	0.04	5Y3/1(オリーブ黒)シルト	-
SD126	b4Ⅳ～b4Ⅱ	1.6	4.4	0.14	5Y3/1(オリーブ黒)シルト	-
SD132	d9Ⅱ～d10Ⅰ	0.4	3.5	0.1	5Y3/2(オリーブ黒)シルト	-
SD133	d9Ⅱ	0.5	2.8	0.08	2.5Y3/2(黒褐)シルト	-
SD134	d9Ⅲ～d9Ⅱ	0.7	5	0.08	2.5Y4/2(暗灰黄)シルト	-

古墳時代初頭面：第4-3面（図版16）

第4-2層までの土壌層を除去し、非土壌化部で意図的にそろえた面である。第4-1・2面で検出された遺構が攪乱状に遺存するのみで、この面から形成された遺構は皆無である。

第3項 弥生時代

弥生時代後期面：第5-1面（第43図、図版17）

第4-3層を除去した面である。遺構面は調査区のほぼ中央部が南北方向に隆起して高まりを作るが、これからはずれた東西方向にかけてはレベルが下がっている。当該地区の下層に縄紋時代河川(第6層)があり、これが形成した地形の高まりが後の地形にも影響を与えているためである。当然ながらこのような状況は、当該面直下の第5-2面においても同様に見られる。上面のレベルはT.P.5.30~5.70mで、約40cmの比高差がある。遺構面において水田畦畔を検出し、またI区を中心とした広範囲で足跡を確認した。時代を示す遺物に恵まれないが、層位的な上下関係から当該時期に帰属するものとした。水田(図版18) 部分的な検出にとどまるが、I区を中心として畦畔が確認された。畦畔の遺存状態は不良で、ほとんど痕跡的にしか確認できなかった。規模はおよそ幅0.8m、高さ0.05mである。確認された範囲では、約6mの間隔で2条の畦畔が東西に延び、その間を南北方向の畦畔が連結する。田面の形状は東西方向に長い長方形を呈する。I区では畦畔周辺の水田面に相当する部分で、足跡が広範囲に検出されている。またII区ではほとんど畦畔を確認できなかったが、その北端部では足跡がまとまって検出されたことから、II区にも同様の水田が形成されていた可能性がある。畦畔および水田耕土を構成する土層は、基本的にベースを構成する第5-1層であり、分層はできなかった。

出土遺物(第45図) 水田面にあたる遺構面のa9I地点から、杵の搗部とみられる木製品が出土した。樹種はアカガシで、把部から搗部の片側が残存するが、把部には切削加工痕が施されているので、何らかの二次利用が考えられる。全長49cm、直径7.5cmである。

弥生時代中期面：第5-2面（第44図、図版19）

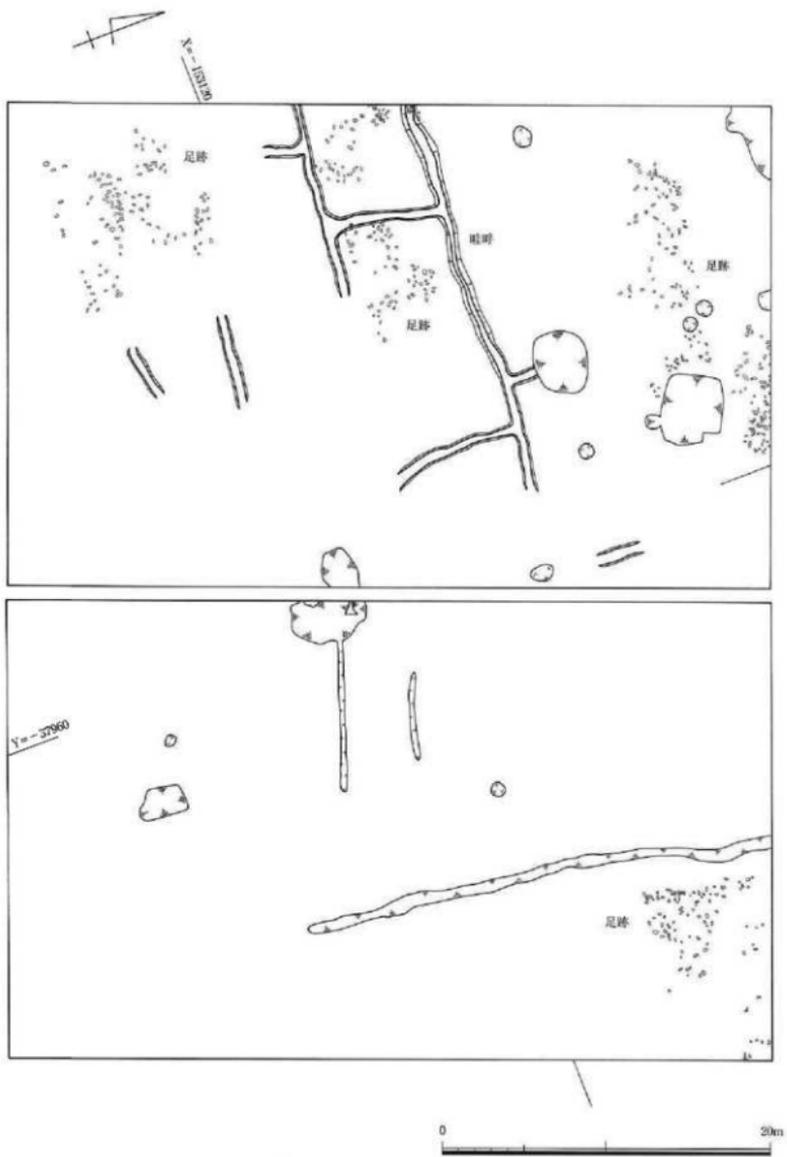
第5-1層を除去した面である。下層に存在する縄紋時代河川の影響で調査区中央部が南北方向に隆起することは、第5-2層と同様である。遺構面上面のレベルはT.P.5.20~5.70mで約50cmの比高差がある。遺構としては弥生時代中期の水田畦畔とそれに伴う溝を検出した。水田畦畔は調査区中央の隆起した部分を中心に検出された。I区北側からII区南側にかけて、地形の変化点に南北方向の蛇行する大畦畔があり、その西側には大畦畔に沿った水路と考えられる溝SD160を検出している。

大畦畔1(図版20) c5Ⅲ~a4Ⅱで幅1.5~2.5mの緩やかな帯状隆起を検出した。地形が隆起する東端の傾斜変換点に近いこともあって、かなり痕跡的ではあるが遺存状態の不良な大畦畔と判断した。I区で検出した大畦畔2に対応する南北方向の大畦畔であろう。周辺に小畦畔などは検出されていない。

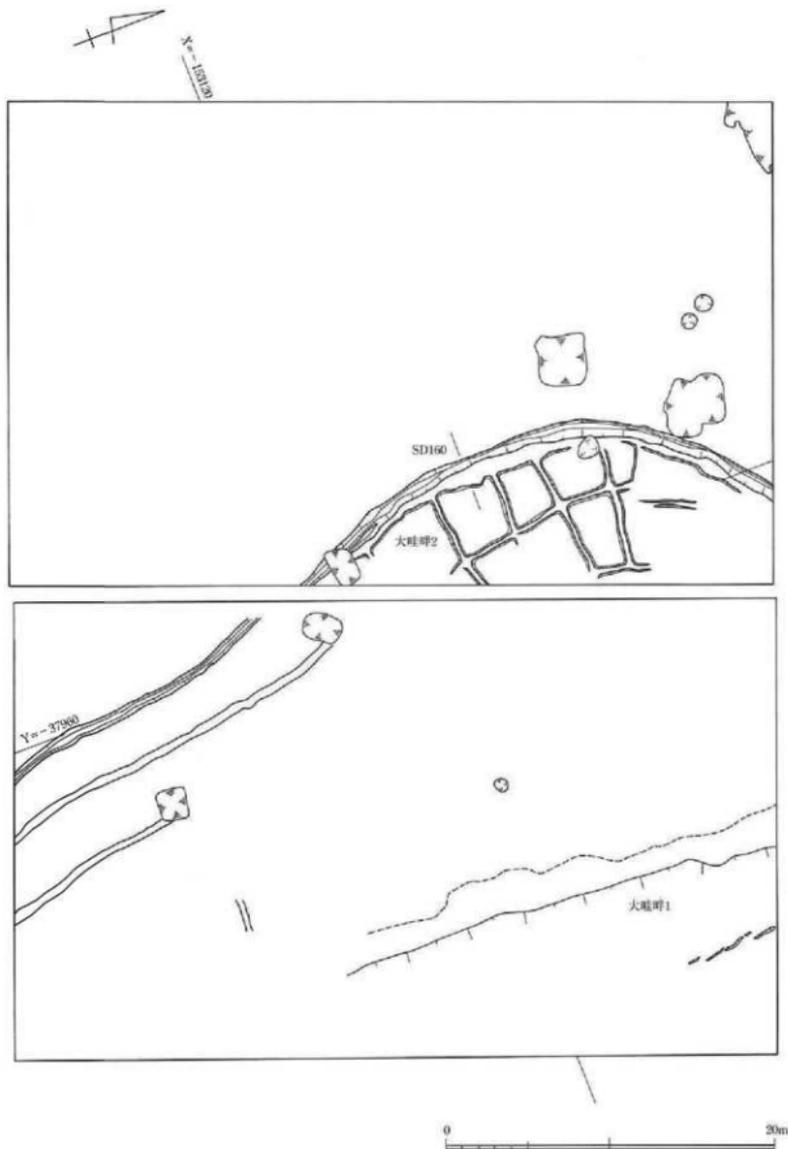
大畦畔2(第46図、図版20) c7Ⅰ~ⅥⅣで検出した。中央の地形隆起部から西側にレベルを下げる段差の西端傾斜変換点に設けられた畦畔である。幅0.5~1m、検出高0.02mで、畦畔の上面は平らである。この大畦畔の東側の微高地には、小畦畔が約2.5~3mの間隔で格子状に取りつく。水田区画の面積は第5-1面検出のものに比べ小規模である。大畦畔2に沿った東側では、南北方向の痕跡的な小畦畔がみられる。なお、大畦畔2とこれに沿った溝SD160より西側では、畦畔を確認できなかった。

SD160(第46図、図版20) e6Ⅳ~ⅥⅣで検出された。幅約0.3m、深さ0.1mである。埋土はオリープ黒色細砂まじりシルトである。大畦畔上面と溝底の比高差は約45cmである。

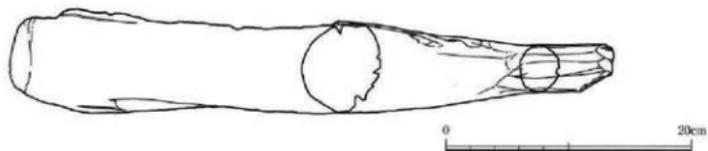
出土遺物(第47図、図版50) 弥生土器5点(44~48)と石器(S1~6)が出土した。大畦畔2の畦畔内から出土した(44)以外は5-2層中から出土した。弥生土器はいずれも中期に属する。(44)は把手付壺片、(45~47)は甕、(48)は壺である。石鎌(S1~5)、削器(S6)はすべてサヌカイト製である。



第43圖 第5-1面遺構配置圖

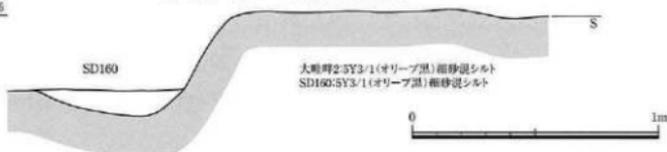


第44图 第5-2面遺構配置图

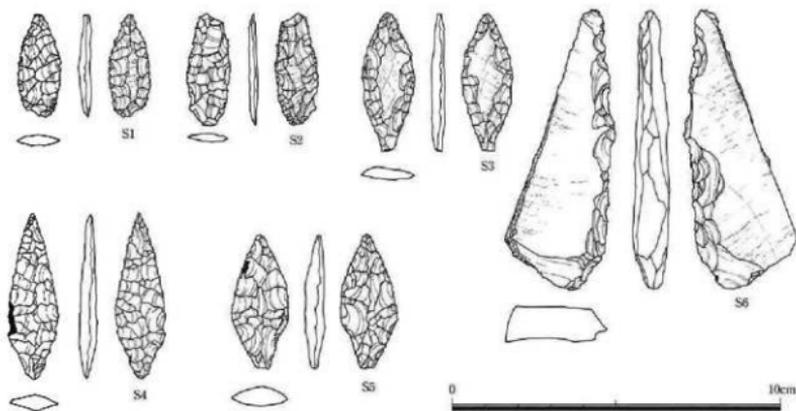
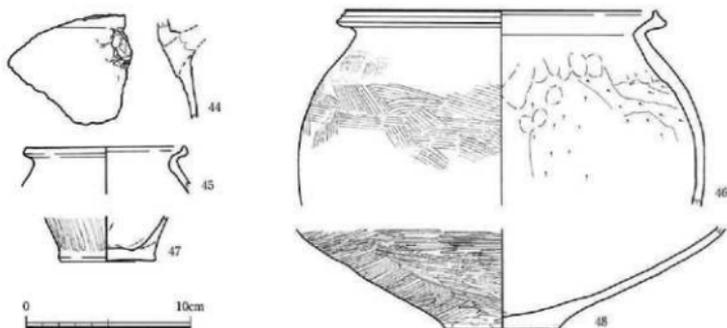


第45図 第5-1面出土杵実測図

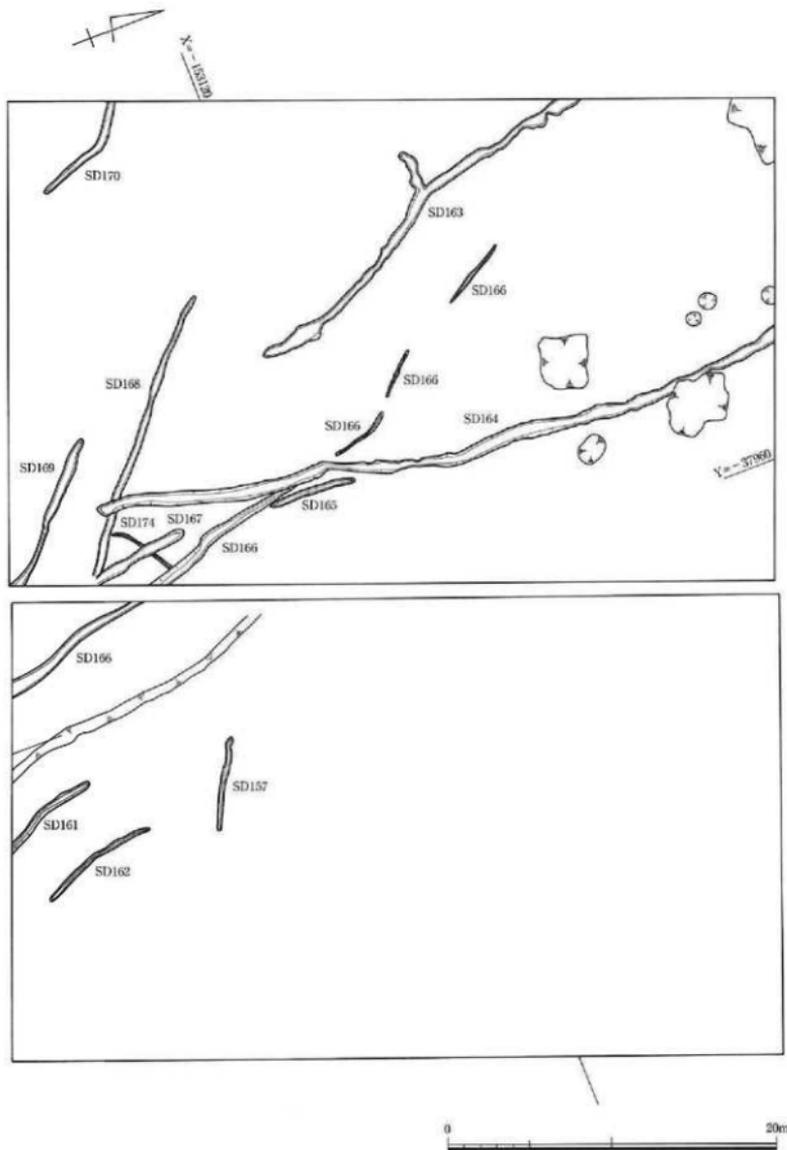
T.P.+56
N



第46図 第5-2面大畦畔2・S D 160横断面図



第47図 第5-2面・5-2層出土遺物実測図



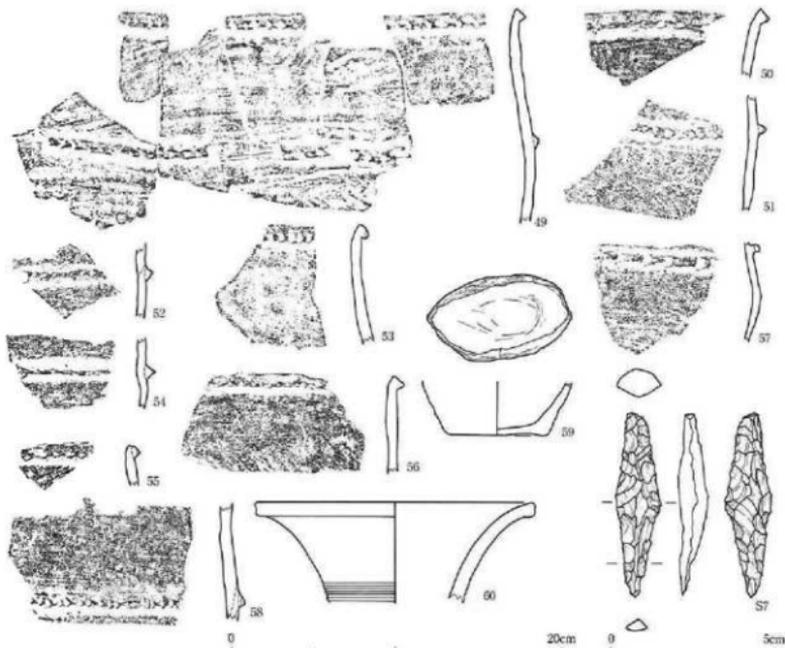
第48図 第6-1面遺構配置図

弥生時代前期面：第6-1面（第48図、図版21）

第5-2層を除去した面で、上面のレベルはT.P.4.90～5.45mで、55cmの比高差がある。検出された遺構はいずれも溝であるが、その方向などから本来は上層の第5-2面に帰属するものを含む可能性もある。溝はおよそ地形の起伏に沿って南北方向に蛇行する。溝群の詳細は第6表にまとめた。当該面から土器は出土していないが、ベースとなる第6-1層出土遺物から弥生前期に帰属するとみられる。出土遺物(第49図、図版48・50) SD164の縄紋土器(52)、SD165のサヌカイト製石錐(S7)以外は、すべて第6-1層から出土した。縄紋土器を主体とし、前期弥生土器を僅かに含む。(49～58)は長原式を主とする晩期の深鉢、(59)は手捏ねの異形土器浅鉢、(60)は弥生前期後半の広口壺である。

第6表 第6-1面溝法量表

遺構番号	地区名	最大幅(m)	検出長(m)	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD157	d6Ⅱ～d6Ⅲ	0.22	5.75	0.04	5GY5-1(オリーブ灰)粗砂混シルト	-
SD161	e6Ⅱ～e6Ⅲ	0.34	6.3	0.03	7.5Y3-1(オリーブ黒)粗砂混シルト	-
SD162	e6Ⅱ～d6Ⅲ	0.3	7.9	0.03	7.5Y3-1(オリーブ黒)粗砂混シルト	-
SD163	c8Ⅰ～d9Ⅲ	0.8	24.5	0.06	7.5Y3-1(オリーブ黒)シルト	-
SD164	d8Ⅰ～j7Ⅱ	0.87	42.4	0.1	7.5Y4-1(灰)細砂混シルト	縄紋土器破片
SD165	e7Ⅱ～e8Ⅲ	0.33	5.5	0.06	7.5Y4-1(灰)細砂混シルト	石錐
SD166	e7Ⅱ～e8Ⅲ	0.44	40.6	0.05	7.5Y4-2(灰オリーブ)粗砂混シルト	縄紋土器破片
SD167	d7Ⅱ～d7Ⅲ	0.56	7	0.07	7.5Y4-2(灰オリーブ)粗砂混シルト	-
SD168	d7Ⅱ～e9Ⅰ	0.21	18.7	0.05	7.5Y2-1(黒)重砂混シルト	-
SD169	e7Ⅱ～d8Ⅲ	0.49	10.2	0.04	7.5Y3-1(オリーブ黒)シルト	-
SD170	d10Ⅰ～c10Ⅰ	0.3	6.8	0.04	7.5Y3-1(オリーブ黒)シルト	-
SD174	d8Ⅰ～d7Ⅱ	0.2	4.4	0.03	7.5Y3-2(オリーブ黒)シルト	-



第49図 第6-1面・6-1層出土遺物実測図

第4項 縄紋時代

縄紋時代晩期面Ⅰ：第6-2面（第50図）

第6-1層を除去した面で、遺構面の高さはT.P.5.00m前後である。検出された遺構の帰属時期は縄紋時代晩期最終末(長原式期)で、弥生土器は検出されていない。検出遺構は溝・土坑・ピットである。

SD138(第51図、図版22) ⅦⅢ～b4Ⅲで検出された東西方向の溝である。幅0.5～0.9m、深さ0.1～0.15mで、埋土はオリブ黒色極細砂混粘土である。

SD144(図版22) b4Ⅰで検出された溝である。幅0.17m、検出長3.5mで埋土は粗砂を含んだオリブ黒色極微砂である。

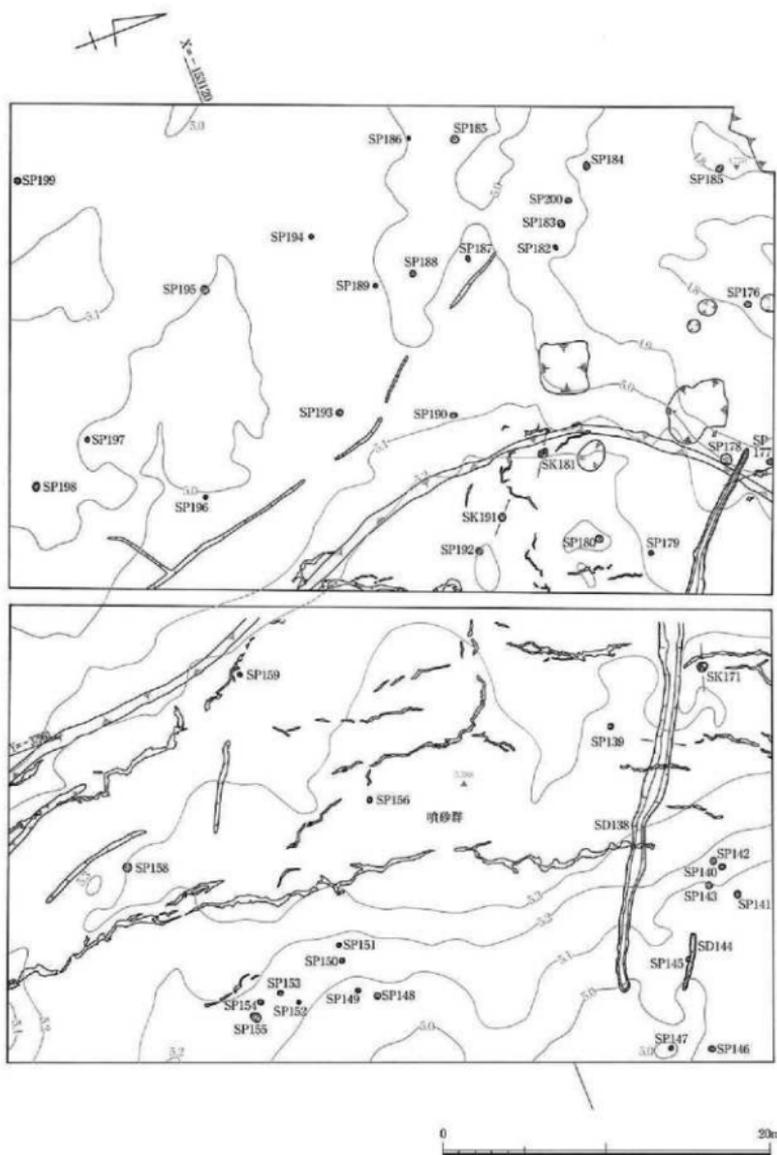
SK171(第51図、図版22) a6Ⅰで検出した、東西径0.54m、南北径0.6m、深さ0.14mの円形を呈する土坑である。埋土はオリブ黒色砂礫で、土坑内から縄紋晩期の深鉢(61)が正立状態より僅かに傾いて出土した。

SK181(第51図、図版22) a7Ⅳで検出した。東西径0.4m、南北径0.42mの不定形な平面形を呈し、検出面からの深さ0.04mの土坑である。埋土は暗オリブ灰色極細砂混シルトで、土坑内から縄紋晩期の深鉢(62)が出土した。

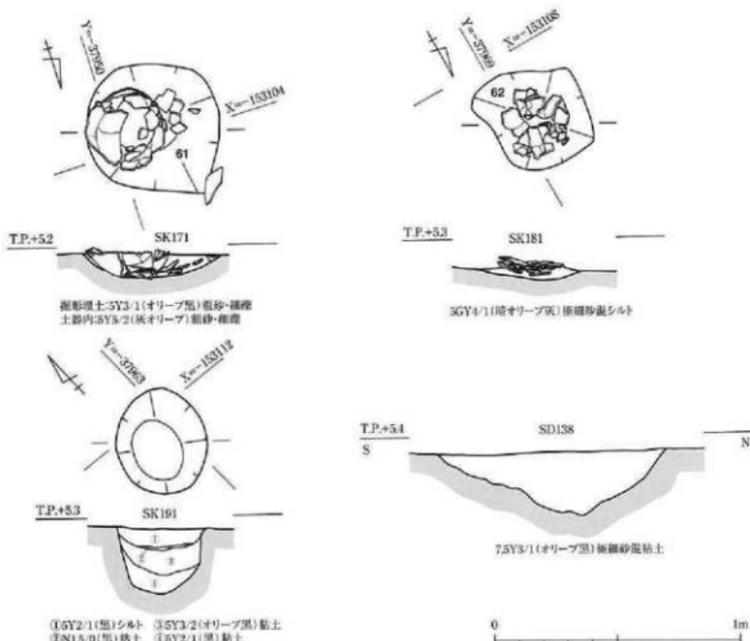
SK191(第51図)b7Ⅰで検出された、長径0.44m、短径0.37m、深さは0.28mの土坑である。埋土は黒色粘土を主体としており、4層に細分できる。

第7表 第6-2面ピット法量表

遺構番号	地区名	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	埋土	出土遺物
SP139	b5Ⅱ	0.3	0.3	0.18	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP140	a4Ⅳ	0.32	0.23	0.13	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP141	a4Ⅳ	0.4	0.4	0.14	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP142	a4Ⅳ	0.4	0.36	0.25	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP143	a4Ⅳ	0.36	0.32	0.12	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	縄紋土器破片
SP145	b4Ⅰ	0.3	0.26	0.1	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土・10Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP146	b3Ⅱ	0.43	0.31	0.18	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土・10Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP147	b3Ⅱ	0.22	0.22	0.12	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土・10Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP148	c4Ⅳ	0.37	0.3	0.07	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP149	d4Ⅱ	0.27	0.2	0.12	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP150	d5Ⅰ	0.3	0.28	0.11	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP151	d5Ⅰ	0.26	0.26	0.11	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP152	d4Ⅱ	0.24	0.22	0.12	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP153	d5Ⅲ	0.34	0.32	0.16	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP154	d5Ⅲ	0.34	0.3	0.08	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP155	d4Ⅳ	0.58	0.48	0.08	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP156	c5Ⅳ	0.32	0.3	0.02	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP157	e6Ⅰ	0.48	0.44	0.09	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP159	d9Ⅲ	0.26	0.2	0.08	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP175	d8Ⅲ	0.4	0.2	0.1	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP176	ⅦⅢ	0.42	0.36	0.18	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP177	ⅦⅢ	0.41	0.3	0.09	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)シルト	-
SP178	ⅦⅢ	0.61	0.6	0.19	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	縄紋土器破片
SP179	a6Ⅱ	0.29	0.27	0.07	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP180	a6Ⅳ	0.45	0.4	0.1	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP182	a8Ⅱ	0.18	0.18	0.12	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP183	a8Ⅱ	0.5	0.46	0.16	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP184	a9Ⅲ	0.43	0.4	0.13	楕円形	10Y2/1(黒)粘土	-
SP185	a9Ⅳ	0.44	0.4	0.13	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP186	a9Ⅳ	0.2	0.18	0.13	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP187	a8Ⅳ	0.32	0.26	0.18	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP188	b6Ⅱ	0.36	0.36	0.08	円形	5Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP189	b6Ⅱ	0.35	0.3	0.07	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP190	b6Ⅰ	0.33	0.43	0.11	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘土	-
SP192	b7Ⅰ	0.38	0.38	0.14	円形	10Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP193	b8Ⅲ	0.31	0.28	0.15	円形	5Y3/1(オリブ黒)シルト	-
SP194	b9Ⅲ	0.3	0.24	0.13	楕円形	5Y3/1(オリブ黒)シルト	-
SP195	c9Ⅰ	0.42	0.34	0.24	楕円形	75Y2/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP196	c8Ⅲ	0.28	0.23	0.25	楕円形	5Y2/1(黒)粘質シルト	-
SP197	d6Ⅱ	0.27	0.22	0.12	楕円形	10Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP198	d8Ⅳ	0.41	0.3	0.11	楕円形	10Y3/2(オリブ黒)粘質シルト	-
SP199	d10Ⅰ	0.4	0.4	0.42	円形	75Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-
SP200	d8Ⅱ	0.36	0.34	0.08	楕円形	75Y3/1(オリブ黒)粘質シルト	-



第50圖 第6-2面遺構配置圖・等高線地形圖



第51図 第6-2面土坑平・断面図、満断面図

ビット(図版22) ビットの詳細は第7表にまとめた。ビットから遺物は出土しなかった。

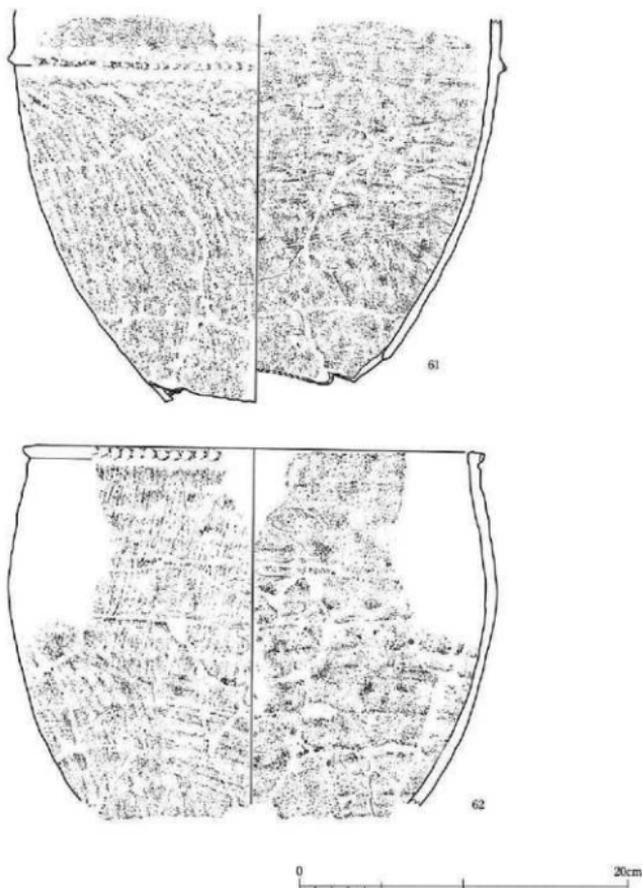
墳砂(図版22) 地震発生による噴砂(液状化現象の痕跡)を検出した。縄紋時代晩期頃に発生した大地震によるものと推定される。噴砂を構成する砂礫の供給源は、下層に存在する洪水砂の第6-4層である。第6-4層は縄紋時代晩期の河川NR201の流路帯本体をなす砂礫層で、第6-2面における噴砂もこの上部に形成されている。砂礫はⅡ区を中心に、南北方向に走っており、最長のもので検出長約40mに達するものがある。噴砂の砂礫は第6-2・3層を引き裂いて上方へ延びるが、第6-1層下面で途切れて断絶する。砂礫中には細砂〜粗砂が観察できるが、中には直径5mmを超える砂粒もあり、地震規模の大きさを読み取ることができる。

出土遺物(第52図、図版48) 遺構に伴う遺物はSK171出土の縄紋土器深鉢(61)、SK181出土の同じく深鉢(62)の2点である。いずれも長原式である。

縄紋時代晩期面Ⅱ：第6-3・4面(第53図、図版23)

第6-2層を除去した面で、縄紋時代晩期中葉までに形成された自然河川NR201を検出した。第6-3・4面は基本的にNR201堆積層の上面で、調査区全域に広がっている。

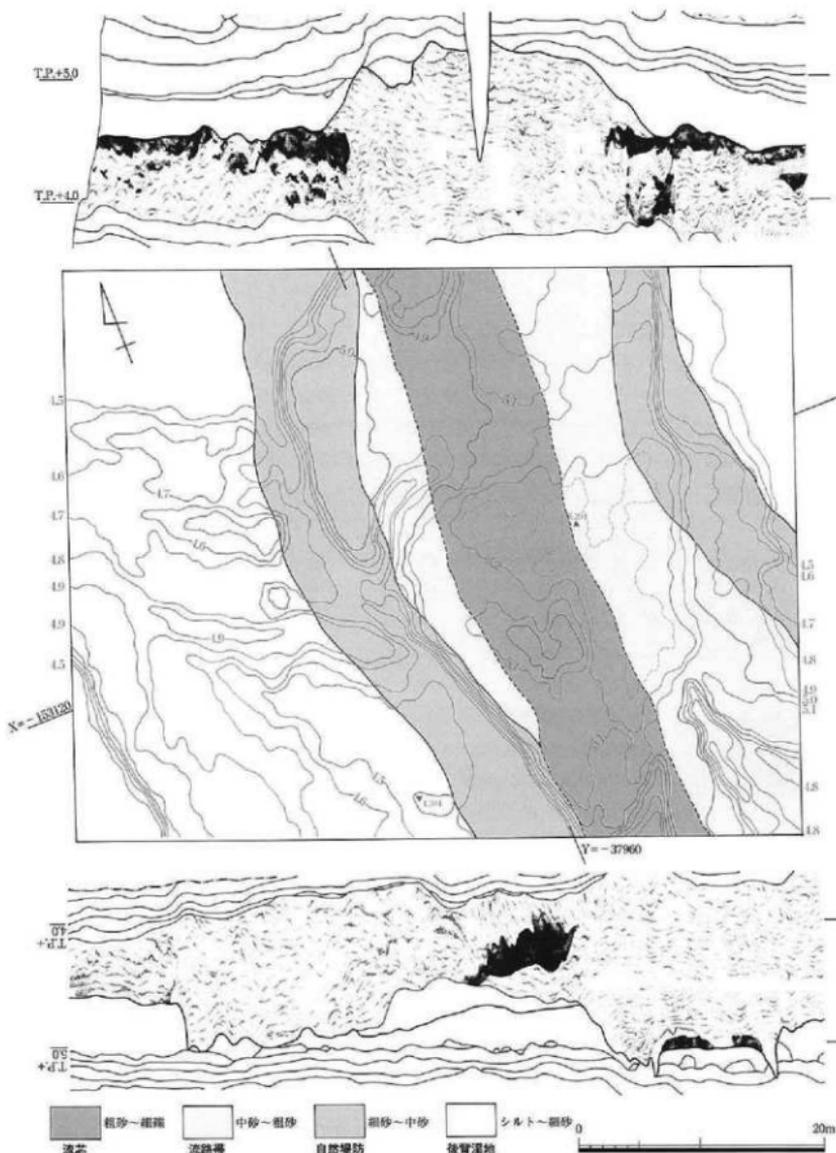
NR201(第53図、図版23) 調査区の中央では、南北方向に洪水砂層(第6-4層)による高まりが形成されており、同地点の砂粒は周辺よりも粗い。その東西両端には腐植質に富んだシルト(第6-3層)が堆積する。以上の2層はさらに細分が可能であるが、両者間で互層の形成もみられることから堆積時期



第52図 第6-2面出土遺物実測図

差は認められない。この高まりは洪水砂が形成した流路帯で、河川の流は南北方向に蛇行し、調査区の中央部が流芯に近いと考えられる。粒度の異なる礫・砂粒の分布からみて、流路帯の幅は約21m、流芯部の幅は約10mで、最大厚は1.8mである。流路帯の底は第7層を深く抉り込んだ部分も観察された。第6-3層は流路帯を画する自然堤防であるが、その東西に広がる後背湿地も第6-3層とした。

出土遺物(第54図、図版49) 第6-3・4層は分別せず同時に掘削した。これらの層準からは縄紋時代後期中葉以降の遺物(63~97)を出土し、最新相の土器は晩期最終末(長原式期)である。長原式土器は量的にごく僅かであり、晩期中葉の縄紋土器が主体を占める。第6-1・2層が長原式を主体とすることから、第6-3・4層中の長原式は上層に帰属する可能性もある。また後期の土器はかなり磨耗しており、上流域からの流入遺物と考えられる。土器以外にも稀にサヌカイト剥片が出土している。



第53図 第6-3・4面NR 201構造模式図・等高線図



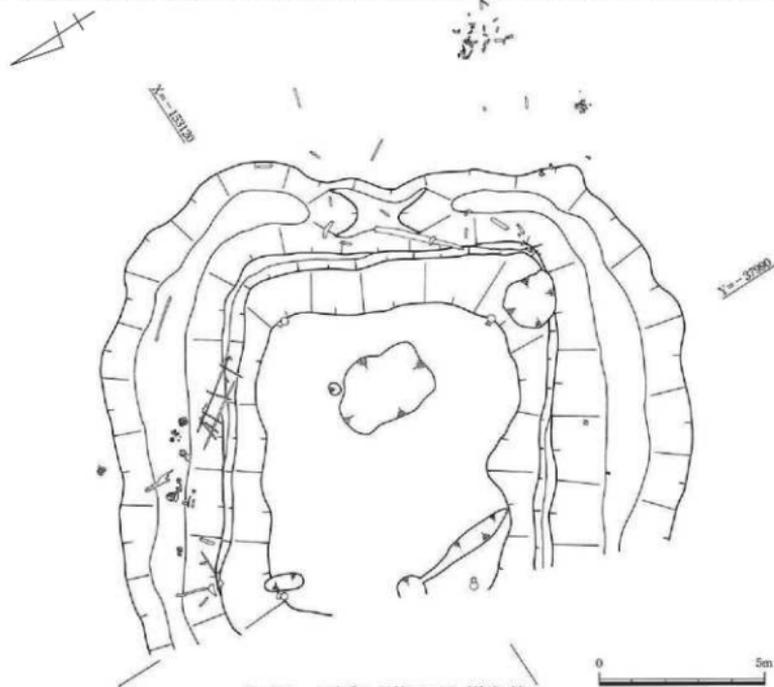
第54图 第6-3·4层出土器物实测图

第5章 久宝寺1号墳

久宝寺遺跡では、多数の周溝墓もしくは古墳が検出されている。またこれらが群在して墓域を形成する具体的様相も、周辺地域における調査の進展と共に明らかになってきている。従って、これら個々の評価は当然ながら、墓域の中での位置付けを重視する必要性が生じてきた。このため当センターでは、本墳の検出を契機として当地一帯の墓域を「久宝寺墳墓群」と総称し、今後、センターで確認した墳墓については、周溝墓・古墳の区別なく従来の遺構番号とは別に連番を付して、個々を識別する方針が立てられた。以降、センター内においてこの命名法は事業者、調査原因、調査年度に関わらず踏襲されることとなり、今回の調査で検出された古墳は「久宝寺1号墳」と命名された(第55～57図、図版26)。また、本墳の主体部番号については調査時点で独自の連番を付したが、整理の段階において1号墳内で完結するよう番号を変更した。

第1節 墳丘・周溝

調査時に設定した土層観察用トレンチの位置図を第58図に示す。断面図の位置を示す記号は本図のもの一致する。久宝寺1号墳はI区の南西端付近で検出された。このため墳丘西端や周溝西辺部は鋼矢板



第55図 久宝寺1号墳平面図(検出時)

に遮られて調査区外に及び、全体像を把握することができなかった。しかしながら側溝以東に限っても墳丘は全体の90%の範囲が検出されており、基本的なデータは取得できたといえる。本墳は旧国鉄時代における検車区の基本杭や、今回の調査に先立って打設されたH鋼、その他後世の掘乱坑・耕作痕等で墳丘および周溝の一部が相当乱されていた。しかしこれら障害物は、墳丘および付属構造物の主要部分を偶然にも避けるような位置にあり、損傷は比較的軽微であった。

本墳は調査区の端部に位置しており、調査開始当初に設定した土層観察用のトレンチが墳丘の一部を貫く結果となった。また調査の基本方針として、土層観察用割溝より鋼矢板側の調査区際は、矢板圧入時の水流による損傷が激しく、通常は平面部分の調査を実施していない。しかし、1号墳の存在が確認されたことにより、その周囲に限って側溝と鋼矢板の間も可能な限り平面補足調査を行った。こうして得られたデータを断面実測図や記録写真等と照合し、欠落したトレンチ部分の墳丘を補い、矢板際までの範囲を含めて検出時点の墳丘平面を復元した(第59図)。

第1項 堆積環境

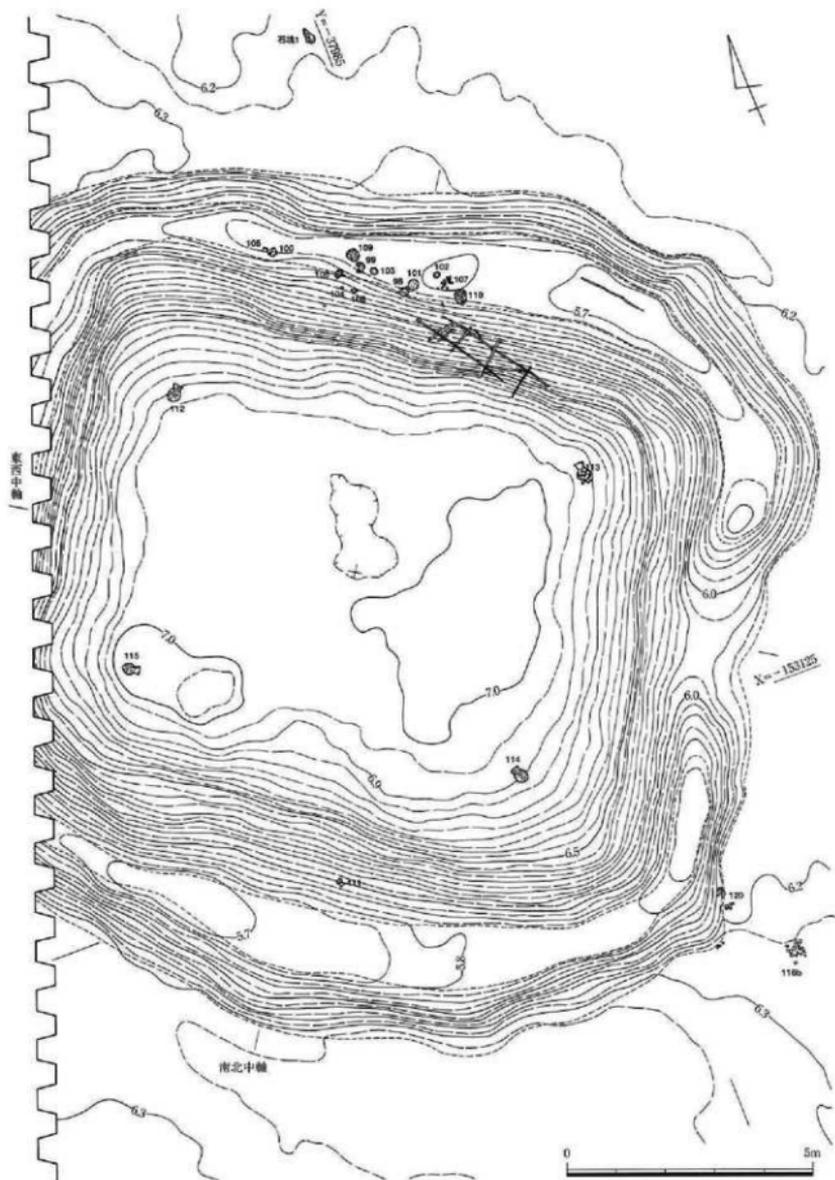
1号墳周溝内の最下層には粘土層が5~8cmの厚さで堆積しており、周溝内における初期の堆積物と認められる。この粘土層とその直下のベース面はやや土壌化が進んでいて、周溝はこの段階までほぼ開放状態であったことを示す。次の段階では、墳丘と周溝は第3-3層によって段階的に埋設している。第3-3層は墳丘斜面から1号墳の外側周辺一帯を広範囲に覆い尽くしている。周溝中央部での同層の厚さは約60cmで、基本的に粘土質の成層堆積を示し、カラス貝に類した淡水産の貝殻を含む層も確認された。また植物に由来する微細炭化物を含んだ薄い層位が何層も重なっており、比較的安定した状況下で堆積が進んだことを示している。1号墳の構築基盤となる第4-1層以下は透水層であるが、第3層の形成過程で不透水化した状況が窺え、第3-3層の形成期には泥土に覆われた湿環境であったことが分かる。なお、同層中には加工木片や自然木が含まれており、周溝内にも若干量が流入していた。第3-2層は1号墳周辺には及ばず、墳丘の北側では第3-3層の直上に第3-1層が堆積する。北側周溝中央部の第3-1層の厚さは約30cmで、この上層に2層が堆積する。これに対して墳丘の南側周辺では第3-1層の堆積は稀薄で、第3-3層直上に第2-3層が堆積する。南側周溝中央部での第2-3層の厚さは約40cmである。1号墳墳丘は第2層の堆積によってほぼ完全に埋設している。

第2項 規模と構造

墳丘周辺における第4-1層の標高はT.P.6.15~6.35m前後で、西から東へ徐々に標高を下げてい



第58図 トレンチ配置図



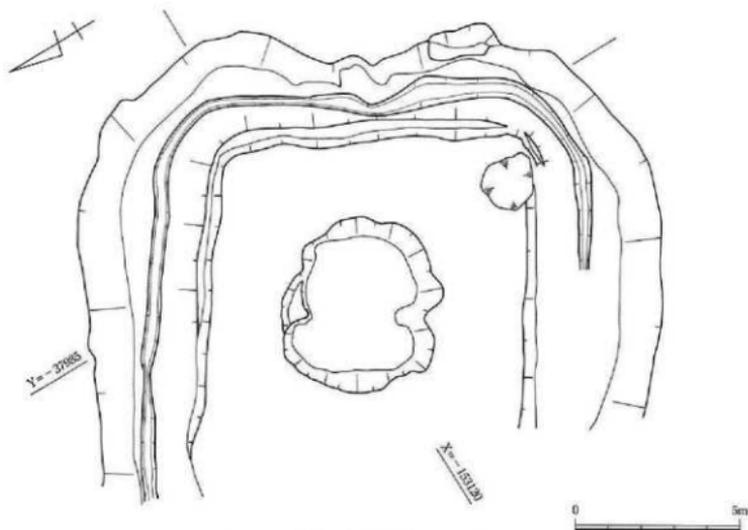
第59図 久宝寺1号墳丘復原図

る。墳丘の築造基盤面は同層上面であり、これ以上の土層はすべて墳丘構築時の盛土層である。

墳丘の主軸はN-33°Eで、実際には北東方向に振れているが、以下、説明の便宜のため、墳丘主軸の北方向を北と呼称する。墳丘の規模は盛土部分での計測では東西軸復原値12.5m(現存値11.5m)、南北軸10.5m、東西軸がやや長い長方形プランをもった方墳の墳丘形態をとる。周溝を含めた規模は東西軸復原値18m(現存値15m)、南北軸17.5mである。墳丘の高さは構築基盤面から0.7~0.8m、周溝底から1.3~1.4mである。なお、周溝最低部はT.P.5.61m、墳丘最高部はT.P.7.07mで、比高差は最大1.46mである。墳頂部、墳丘斜面および周溝内は、それぞれ表面から5~20cmの深度で土壌化が進んでいた。

周溝は西辺を除く三辺が検出されている。周溝はおよそ幅2.5~4.0m、深さ0.5~0.7mで墳丘を取り囲むが、東辺中央部では周溝底が幅4.5mで中心軸に向かって隆起し、低い陸橋部を形成する。この部分では周溝外縁が幅3.5m、長さ0.5mで墳丘側に張り出して幅を狭め、周溝幅は2.0m、深さは0.2mとなっている。陸橋部の墳丘に接する部分は一旦周溝として掘削された後、墳丘と共に一体で盛土されている。また外縁に接する部分はベースとなる第4-1層と、その下層の第4-2・3層を一部掘り残すことで作り出されている。すなわち陸橋部の設置は、墳丘の築造当初から設計に組み入れられていたとみられる。陸橋部およびその周辺からは5基の埋葬主体部が検出されている。

墳丘盛土には基本的に周溝の掘削土が用いられており、墳丘構築土として概ね第4-2層以下の砂層が供給されている。墳丘の構築に先立ち、第4-1層に由来する土壌化したシルト層を方形の墳形外縁に沿って土手状に運らせている。この土手は外周から内側に向かって積み増しされて幅を広げており、さらに墳丘の構成主体となる砂層はこの上部から内側にかけて盛られている。軟弱な砂層で構成された封土の流出を防ぐための措置であろう。このため、墳丘斜面の傾斜角はおよそ23~30°の範囲内にあるが、中腹付近でこれより強い傾斜部分が巡り、外観上は擬似的に緩やかな2段築成の形状を呈する。



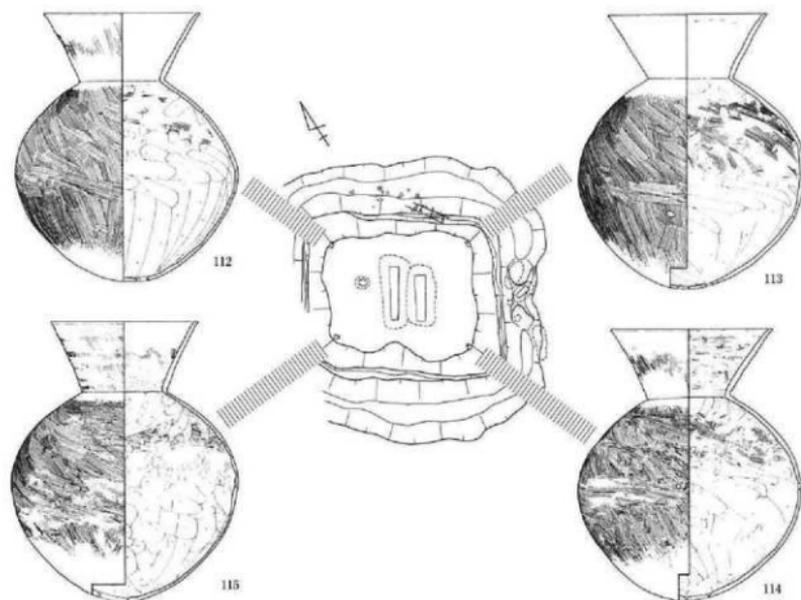
第60図 墳丘下部・周溝底構造平面図

この下段が周溝掘削部分、上段が盛土部分に相当する。なお、墳丘表面には墳頂部から周溝にかけて封土の流出に伴う薄い堆積層が形成されており、1号墳調査の最終局面において、墳丘の基盤面以下を対象として同層を除去した（第60図、図版43・44）。この形状が本来の設計に近いものといえるが、各辺はより直線的、隅角はより鋭角であって、築造当初はさらに方形に近い平面プランをもっていたことが分かる。周溝底の中央からは、部分的ではあるが幅0.3～1m、深さ5～10cm前後の浅い溝が検出された。設計プランに関わるものか、あるいは築造時における排水施設の可能性も考えられる。この溝は陸橋の下部にも存在し、この部分は後に墳丘側から盛土されている。

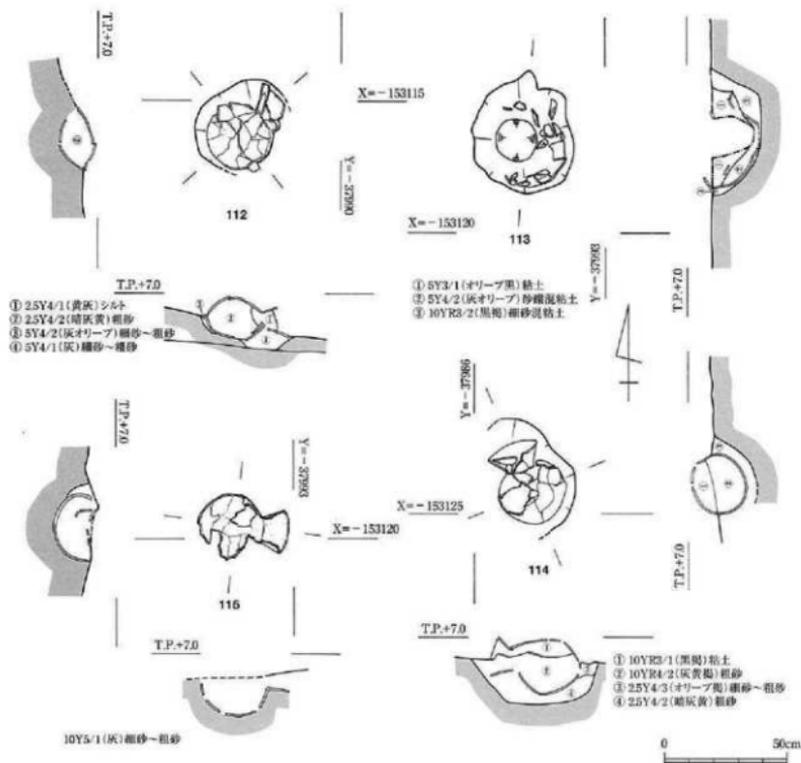
調査範囲の関係上、本墳の全景は明らかにし難いが、少なくとも側溝の東側ではその75%が検出されたと推定されることもあり、復元的に墳丘盛土と周溝内、それぞれの土量計算を行った。なお、墳丘の盛土は第4～1層の上に積まれた砂層を対象とした。その結果、墳丘の主軸より南側の部分について体積を求め、北側へ反転、すなわち倍体積した場合、墳丘盛土土量は37.83m³、周溝掘削土量が35.90m³となる。また別の計算方法も併せて実施し、側溝ラインまでの墳丘および周溝内の実際の土量を求め、欠けた西辺を東辺から反転して数量を加算すると、墳丘盛土土量が37.22m³、周溝掘削土量が35.90m³となり、両方の計算式でほぼ一致した数値が得られる。すなわち復原値で墳丘盛土土量は37～38m³前後、周溝掘削土量は36m³前後となり、誤差を考慮してもこの数値から大きく外れるものではなからう。この数値は墳丘盛土が概ね周溝内掘削土に由来することを裏付けている。

第3項 遺物出土状況

墳丘から出土した遺物には墳頂部出土の(I12～115)、墳丘斜面出土の(I11)がある。



第61図 墳頂部出土土層配置図



第62図 墳頂部出土土器平・断面図

墳丘の上面には東西9～9.5m、南北約6.5～8mの不整長方形を呈する平坦面があり墳頂部を形成する。墳頂部の標高は、T.P.7.07mを最高値としてT.P.6.9～7.00m前後である。墳頂部では直口壺(112～115)が特殊な状態で検出された(第61図)。直口壺はほぼ同形同大のもの計4個体が検出されており、墳頂部平坦面の四隅に1個体ずつ配置されていた。墳頂部では僅かな細片を除けば、これら以外に土器は出土していない。直口壺は墳頂部を区画するように配置されており、ほぼ原位置を保って検出されたことは確実で、墳頂部は後世の削平をほとんど免れていることがわかる。壺の中軸方向と仰角を第8表に示す。直口壺はいずれも横倒しの状態で検出され、下方にあたる土器の半分が墳丘の砂に埋まった状態で出土している(第62図、図版28)。墳丘および掘形埋土がほぼ同質の砂層であり、また土壌層であるため検出は困難であったが、(115)以外では不完全ながら掘形を確認した。掘形の大きさは土器法

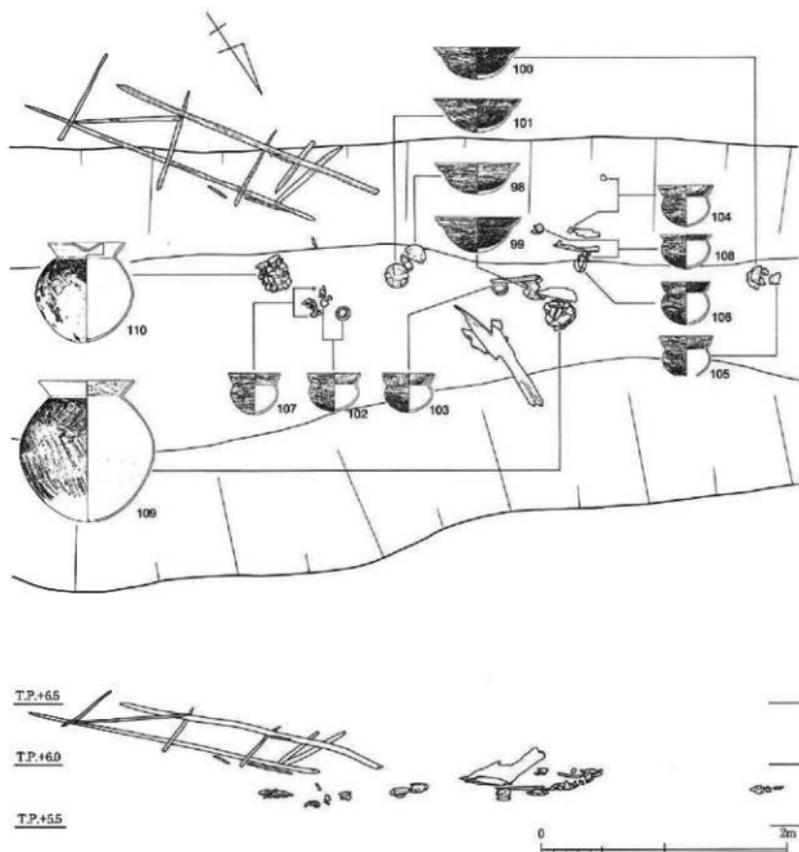
第8表 墳頂部直口壺の主軸方向と仰角

土器番号	112	113	114	115
座標北からの角度	N-51°-E	N-3°-E	N-23°-W	N-102°-E
墳丘主軸からの角度	C-18°-E	C-30°-W	C-56°-W	C-69°-E
水平からの仰角	+3°	+4°	+12°	+17°

量より僅かに大きい程度である。横倒し状態における土器内部の下半には墳丘の構築土に類した砂が充填し、上半には後の堆積土の流入がみられる。すべての土器が墳頂部で検出され、周溝内には転落したものはない。このような出土状況から直口壺は原位置を保つ可能性が高く、当初から横倒しの状態で半身を地中に埋没し、半身を墳丘上に露出した状態で設置されたものと解しておく。各個体間の距離は体部中心を基準に、東西方向に並ぶ(112・113)間が8.4m、(114・115)間が8.2m、



写真1 墳丘斜面の直口壺検出状況



第63図 周溝内遺物出土状況平面図・見通し立面図



写真2 周溝外遺物出土状況



写真3 周溝外の炭化木材

南北方向に並ぶ(113・114)間が6.3m、(112・115)間が5.6mである。これら4個体の土器中心間を外周で結んで得られる方形区画の面積は約49㎡である。

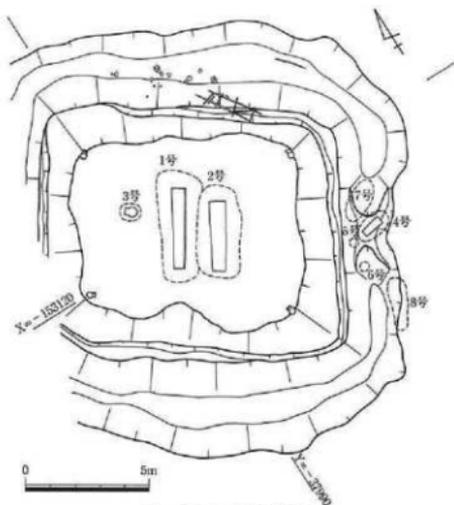
小形の直口壺(111-写真1)は墳丘南側中央の斜面から、墳丘面にはば接触した状態で検出された。

周溝内およびその付近からは土器と木製品、木片等が出土した。土器はすべて墳丘の北側に集中し、周溝底から墳丘の裾部にかけて分布する(第63図、図版29～31)。器種と出土点数は小形丸底土器7点、有段口縁鉢4点、庄内形甕2点である。いずれも周溝底や墳丘裾のベース面にほとんど密着した状態で検出されており、周溝内の初期堆積層がこれらの土器を覆っていた。土器は南北1.3m、東西4.3mの範囲に分布し、ほぼ完形のまま土圧で押し潰された状態で検出されたものが多いが、破片のみが出土した器体もある。

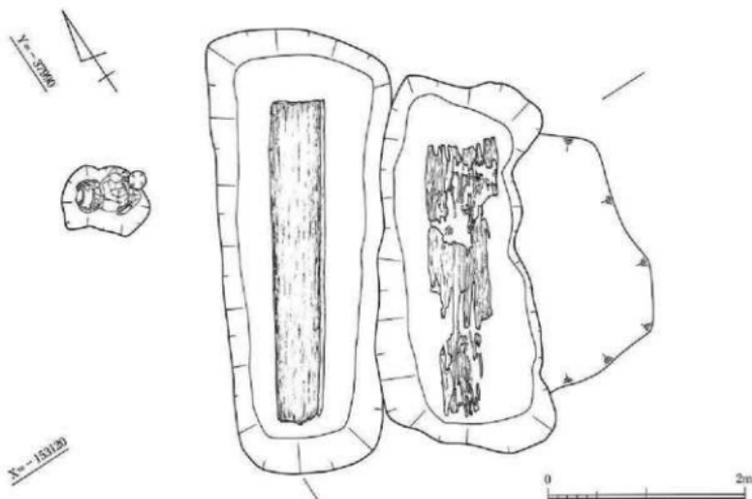
木製品としては、北側周溝から用途不明木製品が出土した。周溝の斜面に密着した状態で検出され、周溝内出土土器と位置的に近いがレベルはやや高い。これ以外にも周溝内から木片類が検出されているが、いずれも第3～3層による周溝の堆積が進んだ段階での流入物で、樹種はスギなどである。

周溝外でも遺物が認められた。器種は庄内式甕(120-写真2)や大甕(116-b)等で、いずれも第4～1層の直上で出土している。位置はすべて墳丘東側の南寄りの区域に限られ、周溝から約1.5m離れた位置で疎らに分布する。周溝南東隅の外側から出土した大甕の破片は、墳頂の2号主号主体部土器棺蓋(116-a)と同一個体である。

周溝外から出土した土器より、さらに東側では木片が集中した区域がある(写真3)。これらは周溝の縁から約3m離れた位置で、南北・東西とも約1.5mの範囲で分布する。炭化木材片の集合である。



第64図 主体部配置図



第65図 墳頂部埋葬主体部配置図

第2節 埋葬主体

1号墳では墳頂部で3基、周溝内で5基の埋葬主体部が検出され、1～8号までの主体部番号を付した(第64図)。

第1項 墳頂部

墳頂部からは3基の主体部を検出し、1～3号として墳頂部埋葬と総称する。このうち墳丘の主軸に近い位置を占めるものを1号主体部とし、これを挟んで東側に平行するものを2号主体部、西側の土器棺墓を3号主体部とする(第65図)。

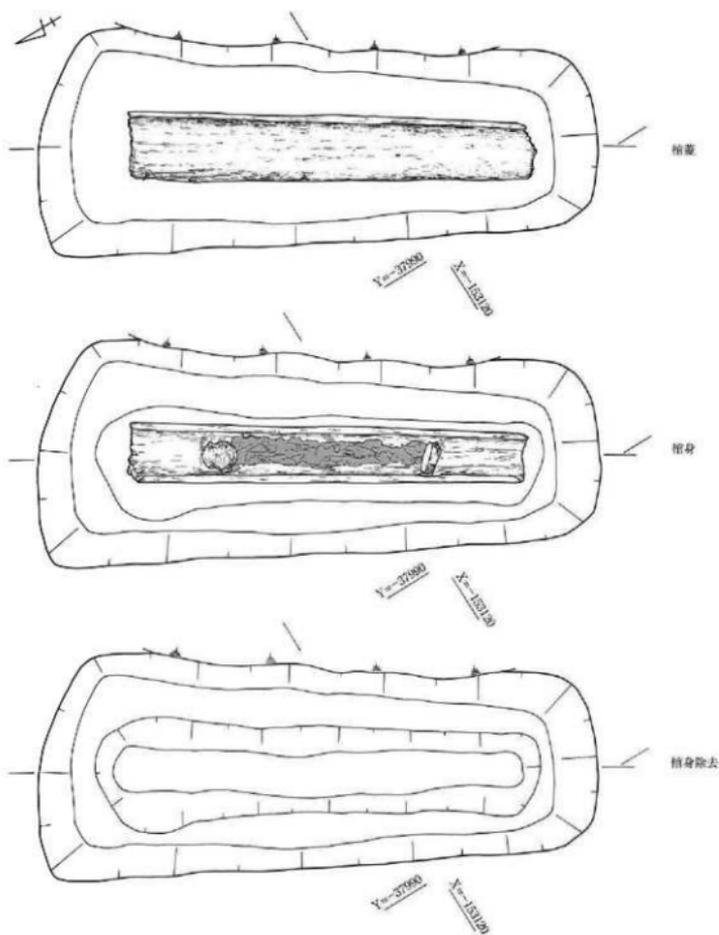
(1) 1号主体部

1号主体部は割竹形木棺を用いた木棺墓である(第66図、図版32・33)。墳丘上面は土壌化が進んでいたため、墓壇の輪郭を確認することができなかった。このため墳丘上面を徐々に掘削し、約20cm掘り下げたところで墓壇を検出した。この墓壇の掘り込みが墳丘上面からであるのか、後に化粧土等で覆われていたのか断面の検討からも明らかにできなかった。墓壇内埋土は墳丘を構成する砂層と近似している。墓壇は南北約4.5m、東西約1.8mの隅丸長方形で、北側より南側の幅が狭くなっている。墓壇の底は平坦面になっており、中央に割竹形木棺が据えられている。棺体の設置方法は木棺直葬によっており、粘土床などの棺床施設は存在しない。墓壇底に棺身を据えるため棺の形状にあわせてベースを掘り窪めている。墓壇検出面から木棺上面までの深さは約20～25cm、墳丘上面からは約40cmである。なお、1号主体部の掘形は、東側部分において2号主体部掘形によって一部が切り崩されている。

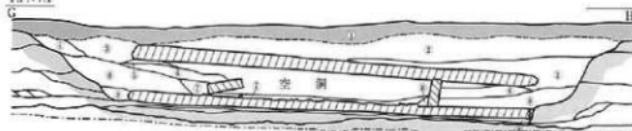
棺体の主軸はN-32°10'-Eで墳丘の主軸方向とほぼ一致するが、墳丘の中軸線と比べると西へ約

第9表 割竹形木棺法量表

(単位cm)	全長	(外径) 幅	(内径)	高	(天井・底) 厚	(側)	(長)埋葬区画(幅)	
棺蓋	328	47～38	38～31	22～18	7～5	6～4	/	
棺身	328	49～37	40～29	24～18	10～7	6～4		



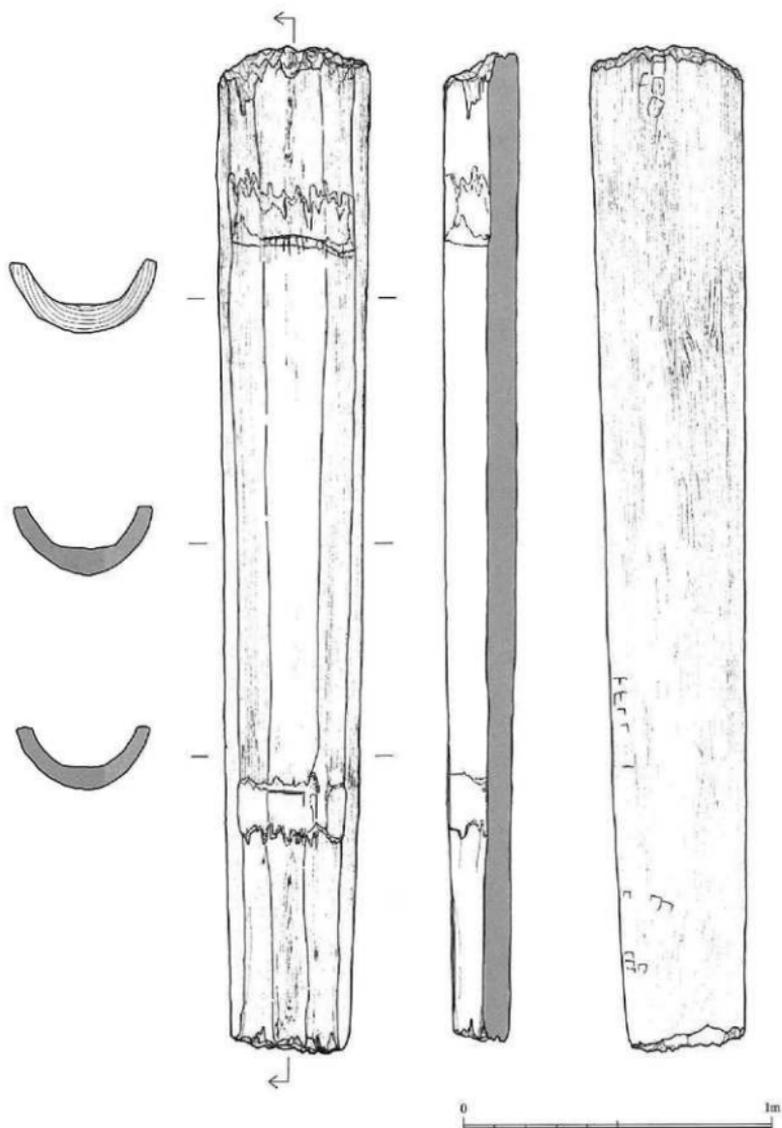
T.P.+71



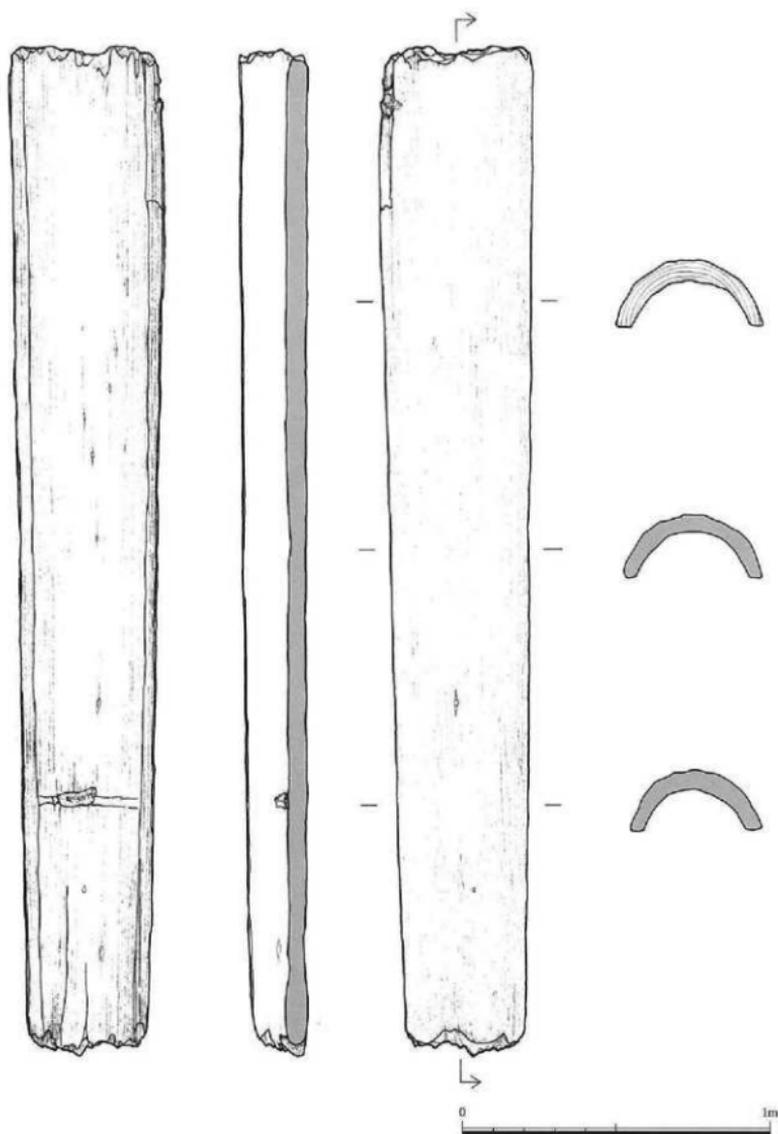
- ① 2.5V4-2(暗灰黄)粗砂~粗砂(土埃層)
- ② 10V25-3(1.25・黄褐)粗砂~粗砂
- ③ 10V25-1(褐灰)粗砂~粗砂
- ④ 2.5V5-3(黄褐)粗砂~粗砂
- ⑤ 2.5V5-3(黄褐)粗砂
- ⑥ 10V4-1(灰)粗砂混シルト
- ⑦ 7.5V3-1(オリーブ黒)細粒混シルト
- ⑧ 2.5G74-1(暗オリーブ灰)粗砂
- ⑨ 10V4-1(灰)粗砂

0 2m

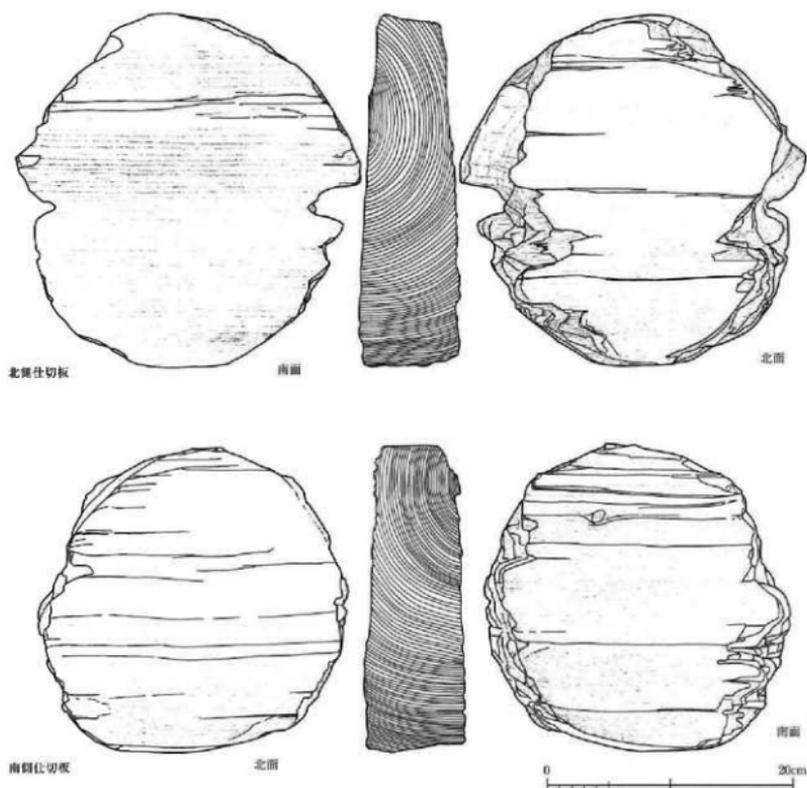
第66図 1号主体部平・断面図



第67图 新竹形木棺棺身实测图

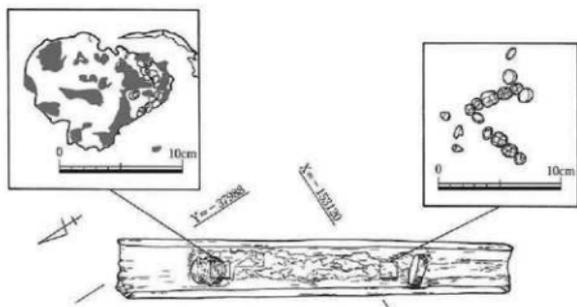


第68图 割竹形木棺棺盖实测图



第69図 割竹形木棺仕切板実測図

55cmずれている。棺材はコウヤマキで遺存状態は極めて良好である(第67・68図、図版56・57)。棺身・棺蓋ともにほぼ原形をとどめていたが、棺蓋の北西端の一部は近代以降に打設された木杭によって損傷を受けていた。棺身の上を棺蓋が覆った状態で検出されたが、蓋が身に対して西側へ約3~4cm平行に横ずれていた。棺の法量は第9表にまとめた。棺内面の形状は棺蓋が外表面に沿ってU字状に削り込まれているのに対し、棺身は緩やかではあるがコの字状を呈し、埋葬床面が意識されているようである。棺材の表面はやや劣化しているが、内外面ともに切削痕跡の認められる箇所がある。全面に加工が加えられており、外表面に樹皮は全く残存していない。棺身外面底部にあたる中軸線上は、10~15cmの幅で周囲より僅かに削り込まれている。この仕様は棺蓋にはみられず、棺身の底部を固定し棺体の安定を図る目的があったとみられる。木口面については凹凸が顕著で、直線的に裁断した痕跡は現状では見当たらないが、木質自体がかなり瘦せているため、加工の詳細は明らかでない。棺蓋内面には面的に変色した部分があり、その形状は雨水等の浸入によって木棺内部が水没した時期のあることを示している。棺身内面には、北側および南側付近にそれぞれ円形の仕切板が立てられていた(第69図、図版58)。この仕切板が埋葬区画とその外部の空間とを分かち機能をもつ。仕切板の外側にあたる小口部は、



第70図 1号主体部被葬者頭蓋部および歯列検出状況図

南北ともに主体部掘形の埋土が流入してほぼ内部が埋め尽くされていたが、仕切板内側の埋葬区画は木棺周囲からの土砂の流入から守られ、ほとんど中空のまま保たれていた。仕切板は腐蝕して周囲が痩せていたが、原面をとどめた部分も僅かに認められる。北側の仕切板は高さ(最大径)28.7cm、厚さは下端が8.0cm、上端が5.5cmである。北側から流入した土砂の圧力によって南側に倒されており、検出位置も原位置からやや南側に寄っているとみられる。南側の仕切板は高さ(最大径)24.9cm、厚さは下端が8.0cm、上端が5.3cmである。時計回りにやや捻れてはいたが、ほぼ正立した状態で検出され、およそ原位置を保つものとみてよい。これらはいずれもコウヤマキで、芯を外した木取りを行って円板状にカットしたものである。板面の木目は詰んでおり、またその方向が棺底に対して水平になるように設置されていた。板の厚みは下方が上方より厚めで、安定するように作られている。棺身内面は両仕切板が接する部分の周辺にごく浅い割り込みを作っている。この仕様は棺蓋にはみられないが、南側の内面には仕切板側面の接触痕跡が一部に認められる。また棺身南北の割り込み間の内側には仕切板の圧痕が残されていた。これによって仕切板の正確な設置位置が復原でき、両仕切板間の内法、すなわち埋葬区画の長さは182cmであることが判明した。木棺内部の遺骸はほとんど朽果てており、棺底を中心に黒褐色の物質が南北約1.5m、東西約0.2～0.3mの範囲で、帯状の分布をみせていた。厚さは1～2cm前後である。この物質はほとんどペースト状であったが、部分的に骨の内部にみられる海綿質構造が観察され、人骨が崩壊してできた塊であることがわかる。埋葬区画内の棺底からは、北側仕切板の南、また南側仕切板の北から、それぞれ一体分の歯牙が検出された(第70図、図版36)。従って二体の被葬者が頭位を逸え、対向埋葬の状態で葬られていたことになる。歯牙はいずれもエナメル質のみ残存し、象牙質を含め内部の構造体はすべて失われていた。北側に頭位をもつ人物を第1被葬者、南側に頭位をもつ人物を第2被葬者とする。ただ、遺骸に骨格の形状を残した部分は皆無で、残存歯牙から埋葬頭位等が推定できるのみであり、これら二体の被葬者の詳細な埋葬状況は不明である。

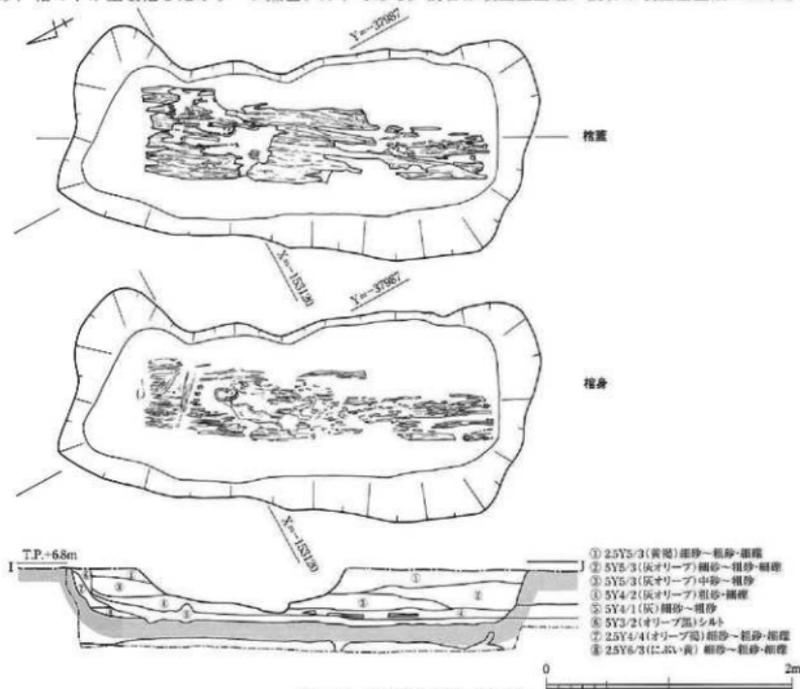
1号主体部の被葬者の頭蓋部および歯列の検出状況を第70図に示す。第1被葬者の歯牙群は、倒れ込んだ仕切板の下から検出された。歯牙の検出位置は、北側仕切板の設置箇所から南へ約22cmの地点である。歯牙を含めてその北側寄りには朱の痕跡がある。朱の分布範囲は南北12cm、東西8cmで、その位置や形状から被葬者の頭部に相当する。下顎骨は顎骨を失っているが、V字形を呈した生理的排列を良好に残し、咬合面をすべて上に向けた状態で検出されたことから、原位置をかなりよく保った状態といえる。また上顎骨は咬合面をおよそ下に向けて検出されたが、その排列はやや乱れており上顎骨の

崩壊に伴い原位置から若干のずれが生じたものとみられる。下顎歯の位置から、仰臥位の伸展葬と推定される。第2被葬者の歯牙群は、南側仕切板の設置箇所から北へ約19cmの地点である。朱の痕跡は肉眼では全く認められなかったが、その周辺物質を試料採取して分析を行った結果、やはり頭部相当部分に朱の塗布されていたことが判明した。第2被葬者も歯列には知歯が萌出している。下顎の位置から、仰臥位の伸展葬と推定される。歯牙および人骨から推測される被葬者像については、第6章に分析結果を記載している。

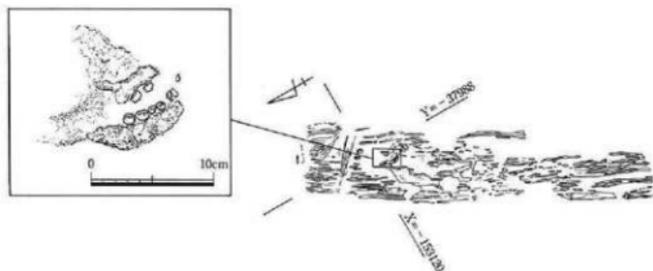
なお、1号主体部の墓墳および棺体の内外からは、土器を含め遺物は一切出土しなかった。

(2) 2号主体部

2号主体部は1号主体部の東側に隣接する木棺墓である(第71図、図版37・38)。墓墳は墳頂部から掘削されていた可能性もあるが、墳頂部では土壌化が進行していたため検出できず、水平に20～30cm掘り下げた時点で輪郭を確認した。墓墳は掘乱坑によって東側を中心に破壊され、正確な形状や規模は明らかではない。検出時点での平面形は不整隅丸長方形、規模は南北の長さ3.7～3.8m、東西の幅1.7m以上である。墓墳は掘形上面から急角度で掘り込まれ、墓墳底はほぼ平坦面をなす。墓墳底の規模は南北の長さ3.4～3.5m、東西の幅1.2mである。墳頂部から墓墳底までの深度は0.7mで、底面は第4-1層の上面を一部掘り込んでいる。墓墳内の埋土は、棺より上が黄褐色～灰オリーブ色の粗砂・細砂、棺の下が土壌化したオリーブ黒色シルトである。前者は墳丘盛土層、後者は墳丘基盤層に由来する



第71図 2号主体部平・断面図



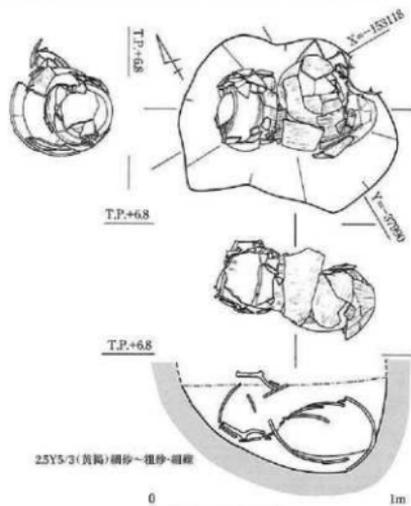
第72図 2号主体部被葬者頭蓋部および骨列検出状況図

二次堆積層である。

墓壇内からは主体部となる木棺が検出された。設置方法は木棺直葬で、粘土床などの棺床施設は存在しない。棺体は蓋と身の存在が確認されたが、腐蝕して繊維状にほぐれ、遺存状態は極めて不良であった。厚さは最大1cm前後で、皮膜状の木質繊維のみ遺存する部分も多い。材質は蓋、身ともにスギである。棺の内外から遺物は全く検出されなかったが、棺身からは木質繊維に混じって、ヤマザクラの樹皮を加工した襷紐の細片が2点ほど出土した。棺体構造は明らかでないが、出土襷紐は船底と舷側板を結索する緊縛材の可能性があり、棺蓋・棺身ともに材質が同じであることから、準構造船の船底を構成する丸木船材の転用と考えられる。

2号主体部の主軸はN-32°-Eで、墳丘および1号主体部の主軸方向とほぼ一致する。棺蓋は棺身の直上を覆うが、蓋が身に対して僅かに東へ振れている。蓋・身とも扁平に近い状態であり、棺全体が土圧によって押し潰され、変形したものとみられる。棺体はおおよそ扁平化しているが、断面形状をみると棺蓋は上方方向に、棺身は下方方向にそれぞれ緩やかな弧を描くように湾曲している。蓋と身との間隙は最大でも5cm以下である。棺蓋の規模は現存値で最大長285cm、最大幅70cmである。形状は不明であるが、比較的原形をとどめた可能性がある北半部の状態から、おそらく長方形かそれに類した平面形状を呈するとみられる。

棺身の遺存状態は棺蓋と比べてさらに不良で、ベース土の上に木質繊維が乗った状態である。規模は現存値で最大長285m、最大幅60mである。平面形は概ね長方形を呈するが、南側約1m部分の幅は約0.4mと狭くなっており、これが本来の形状なのか、腐蝕によって幅を減じたのかは不明である。棺身底面の標高は北がT.P.6.4m、南がT.P.6.35mで、北側が僅かに高くなっている。棺身の北端から南へ約30～40cmの位置には仕切板の痕跡がある。この仕切板は棺体の主軸に対し、



第73図 3号主体部平・断面図

およそ直交している。残存長45cm、幅7cmであるが、腐蝕が進んで木質を皮膜状に残すのみとなり、詳細は不明である。なお仕切板は棺体の南側では確認されなかった。

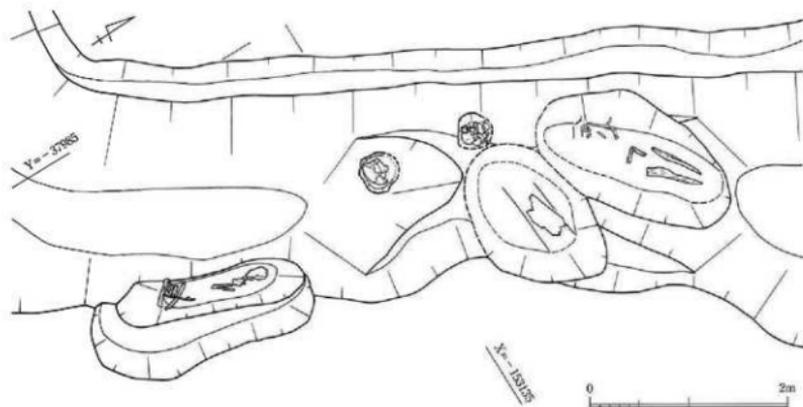
棺内の北側からは歯牙が検出され、頭位を北側にとっていたことが判明した(第72図、図版39)。また骨格などは全く残されていなかったが、被葬者の頭蓋骨、下顎骨および上半身の一部は、棺内に堆積した砂質土とは異なるシルトに置換され、およその形状は推測できる状況であった。被葬者の歯牙群は棺身北端から南へ約65cm、仕切板から南へ約35cmの地点で検出された。下顎の歯列は比較的良好に残されており、また上顎歯の排列などの位置関係から、仰臥位で頭の前方は東斜上方を向いていたようである。

(3) 3号主体部

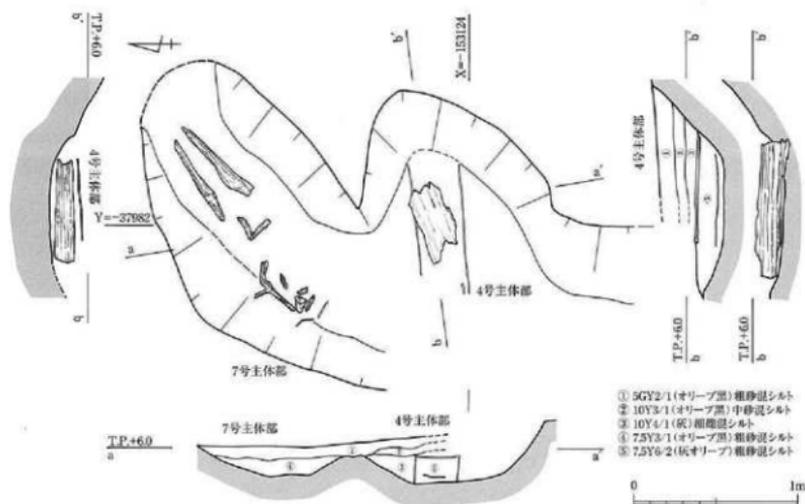
3号主体部は土器棺墓で、1号主体部の西側に位置する(第73図、図版40)。主体部の土器棺は墳丘盛土を掘削した墓壇に埋設されている。墓壇は長軸87cm、短軸60cmで、埋土は墳丘構築土とほぼ同質の砂である。墳頂面から土器棺までの深度は土器棺上端で約30cm、下端で約70cmである。1号主体部の主軸から3号主体部の中心まで1.93mの距離がある。土器棺は棺身(117)と棺蓋(116 a)で構成されている。棺身となる壺は讃岐地域産の大形複合口縁壺で、口縁部を西側に向けて埋設されていた。主軸の方位はN-59°-W、口縁部の仰角は15°である。棺身は破損し、内部には墓壇埋土の砂が流入し充填されていた。棺蓋は棺身の口縁部を覆うように被せられていたが、かなり破損していた。棺蓋は大形複合口縁甕の体部下半で、前述のように同一個体の口縁部(116 b)が周溝外から出土している。土器棺内外ともに人骨や遺物等は検出されなかった。

第2項 周溝

本墳では墳頂部以外に、墳丘東側の周溝付近から木棺墓1基、土壇墓2基、土器棺墓2基、計5基の埋葬主体部が検出されている。これらを周溝内埋葬と総称し、第4～8主体部とする(第74図)。東側の周溝内は調査当初より、周溝の他の部分と比較してかなり汚れた埋土が充填していた。これは墳丘封土からの流出土の他、2次的、3次的に手が加えられた結果と捉えられ、遺構の掘形を明確に検出できなかった事例が多い。



第74図 周溝内主体部配置図



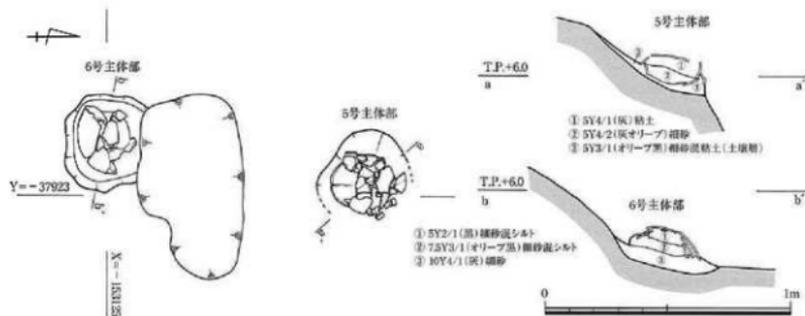
第75図 4・7号主体部平・断面図

(1) 4号主体部

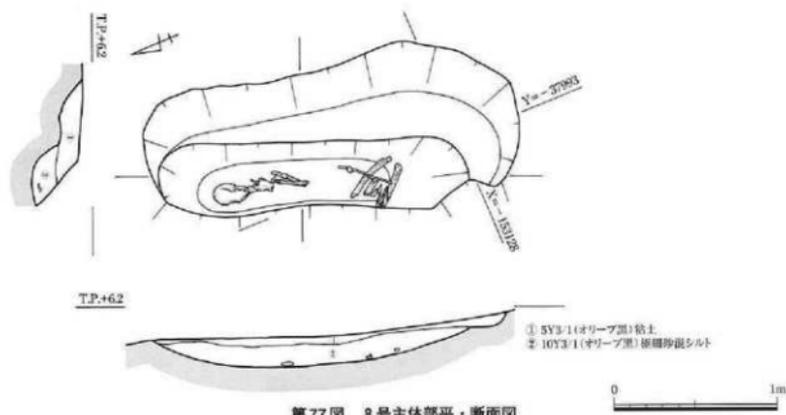
陸橋部の中央に位置する木棺墓である(第75図、図版41)。木棺は長さ1.4m以上、幅1.1mの墓塚に納められていた。墓塚は第4-1層の砂層をベースとし、その北側において7号主体部の墓塚と切合いをもつが、前後関係は明らかにできなかった。棺体は木質部分が劣化して痩せ、ほとんど皮膜状に朽ちていたが、蓋板・底板・両側板を遺存しており、主体部は箱型の組合式木棺と推定される。材質はスギである。棺の幅は東側が西側よりやや広くなっており、主軸の方位N-85°-Eに頭位を向けていたとみられる。棺の平面形状は概ね長方形である。状態は不良であるが、遺存する部材の計測値を総合すると、全長90cm、全幅30cm、高さ15cm前後である。木棺内部には砂が充填し、遺骸や遺物は出土しなかった。

(2) 5号主体部

広口壺を用いた土器棺墓である(第76図、図版41)。陸橋部中心より僅かに南側の墳丘斜面に沿って検出されたが、掘形等は明確にできなかった。土器は口縁部を北に向けた横倒しの状態で出土した。底



第76図 5・6号主体部平・断面図



第77図 8号主体部平・断面図

部を欠いている。

(3) 6号主体部

複合口縁壺を用いた土器棺墓である(第76図、図版42)。陸橋部の南側附で検出されたが、掘形等は明確にできなかった。口縁部を下向きに伏せて埋設されており、体部は破損して口縁部を覆う状態で出土した。

(4) 7号主体部

陸橋部北の墳丘側に位置する土壇墓である(第75図、図版42)。掘形は長さ2.3m前後、幅1.2m前後、深さ0.2m以上である。南側において4号主体部と切合っているが、前後関係は明らかにできなかった。墓壇内には人骨が一部遺存していたが、その状態は極めて不良であった。人骨の残存部位は左腕骨・大腿骨の一部、下肢骨などで、頭骨や歯牙をほとんど失い、一部しか遺存しない。頭部を南西方向にもち、また膝蓋骨が上向きで、仰臥位伸展葬であることが分かる。頭部は墳丘斜面、体部・脚部は陸橋部の斜面にかかるように傾斜した状態で埋葬されていた。

(5) 8号主体部

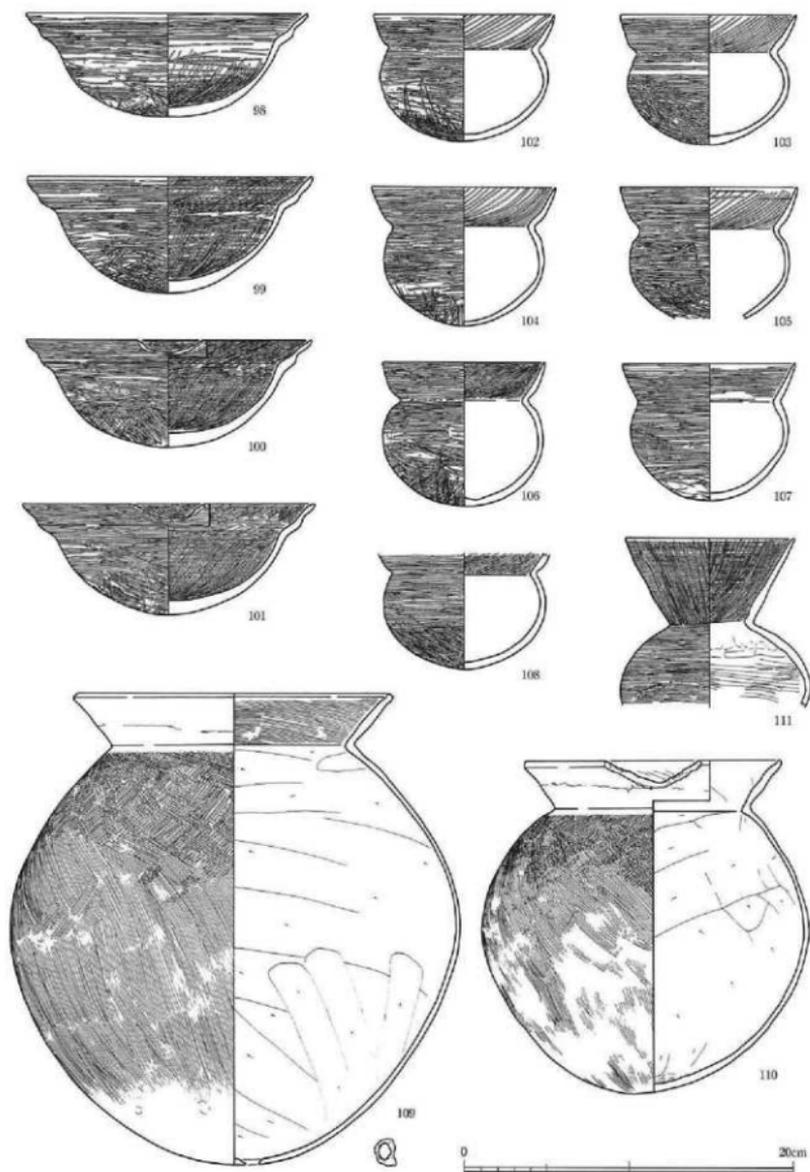
陸橋南側の周溝東側外縁に位置する土壇墓である(第77図、図版42)。墓壇は周溝の縁に沿って南北に長く、掘形は長さ2.3m、幅0.9m以上、深さ0.2mである。掘形の周溝側は、周溝内の2次堆積土を構築面としていたようであるが、明確に把握できなかった。墓壇内には頭蓋骨、腕骨、下肢骨などが遺存する。残存骨の位置関係から、頭部を北側にとり、脚部を溝側に折り曲げた側臥位屈葬の埋葬形態であった可能性が高い。

第3節 出土遺物 (第78～82図、図版52～55)

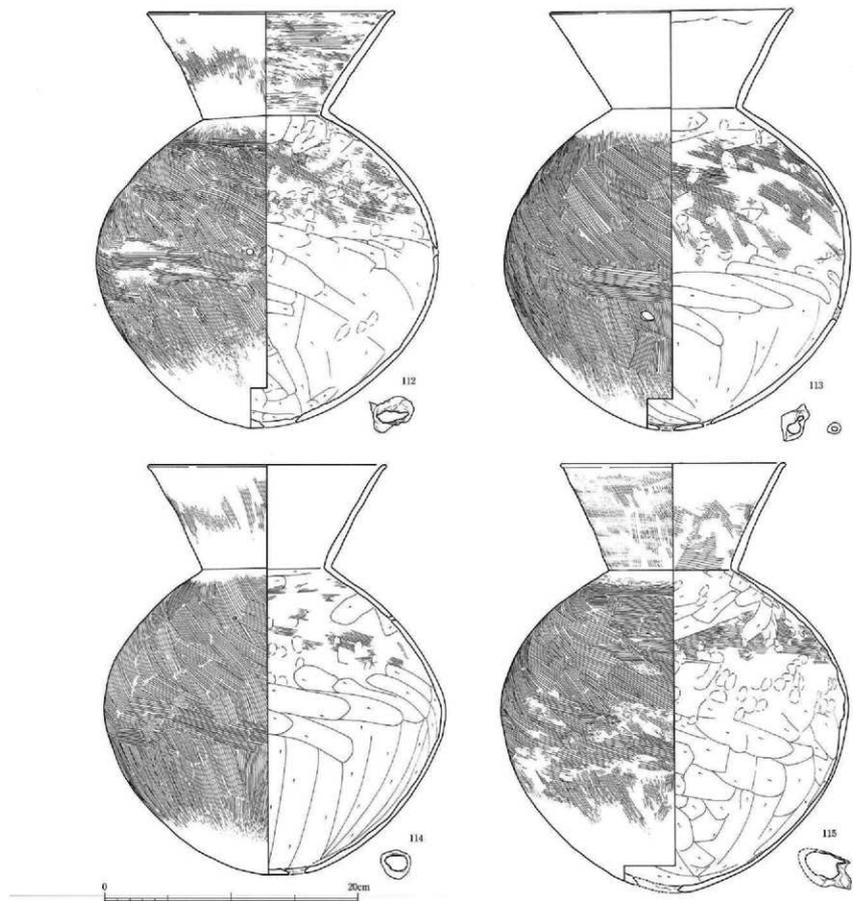
遺物のうち、土器は周溝から出土した(98～110)、墳丘から出土した(111～115)、および土器棺墓の棺体(116a・117～119)に大別できる。周溝部外周からも少数の土器が出土しており(116b・120)、(116b)は本墳と直接に関わる個体である。

周溝内からは計13個体の土器が出土したが、すべて周溝の北側に集中している。内訳は有段口縁鉢(98～101)、小形丸底土器(102～108)、庄内形甕(109・110)である。有段口縁鉢(100・101)の口縁部には打欠き、庄内形甕(109)の底部には小さな穿孔がある。

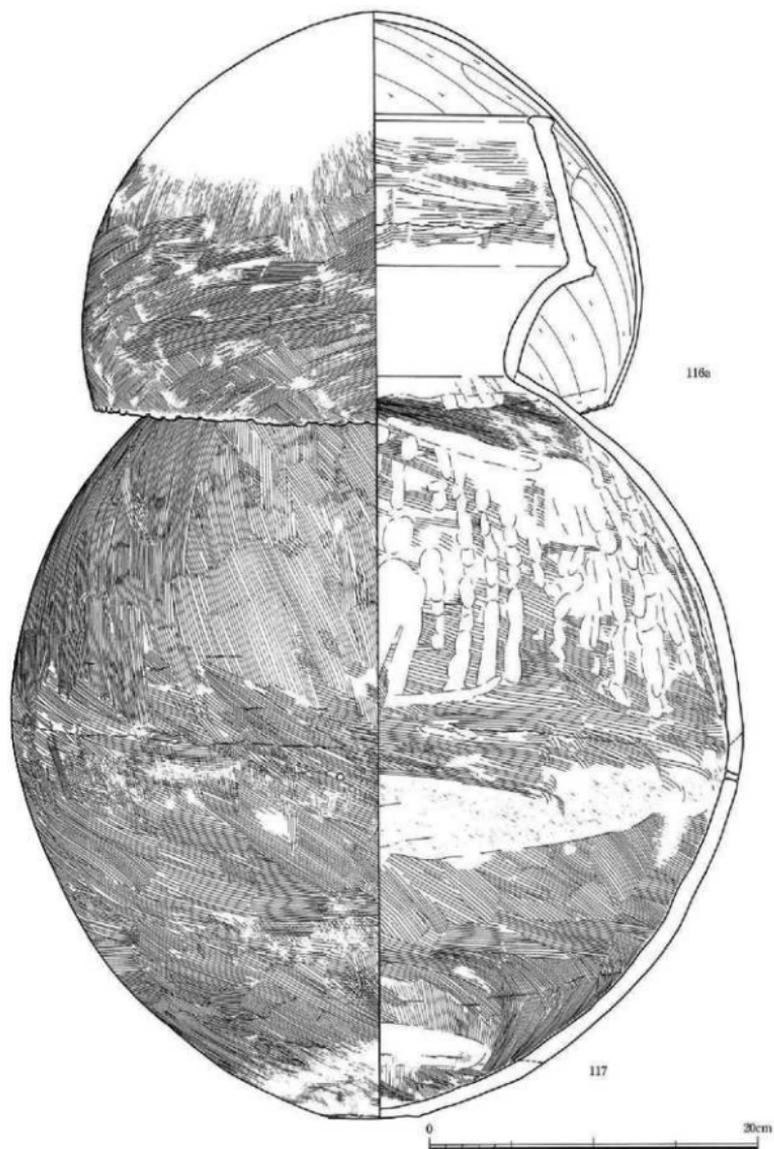
墳丘出土土器のうち直口壺(112～115)は墳頂部の四隅から出土した。いずれもほぼ同形同大で、調



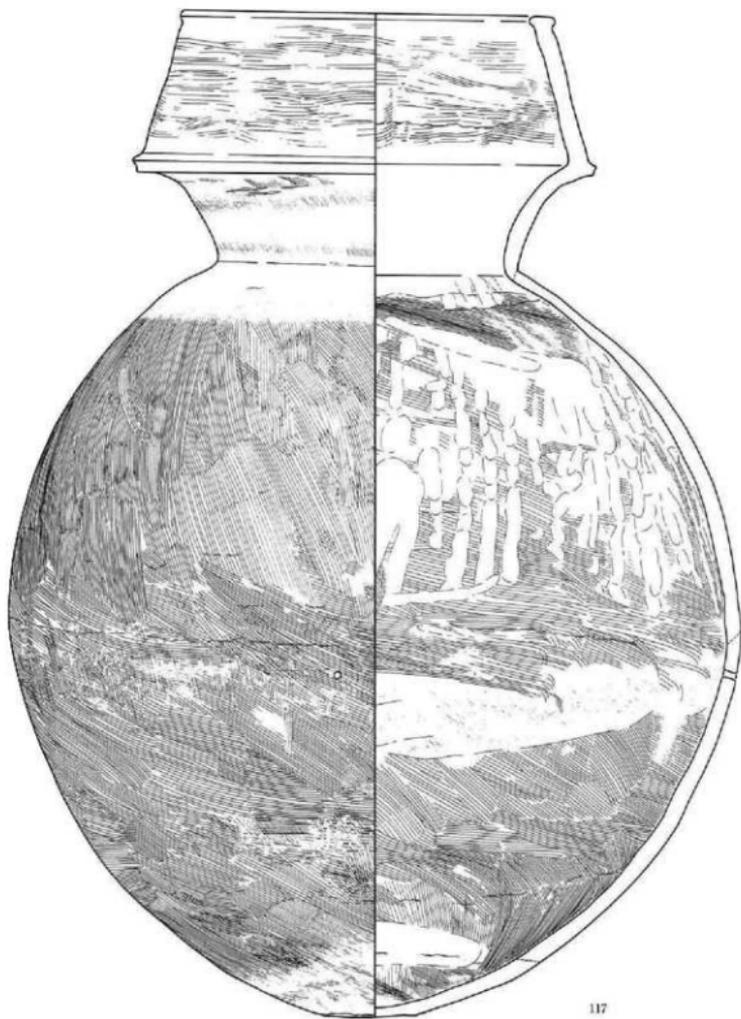
第78图 久宝寺1号墳出土土器実測図(1)



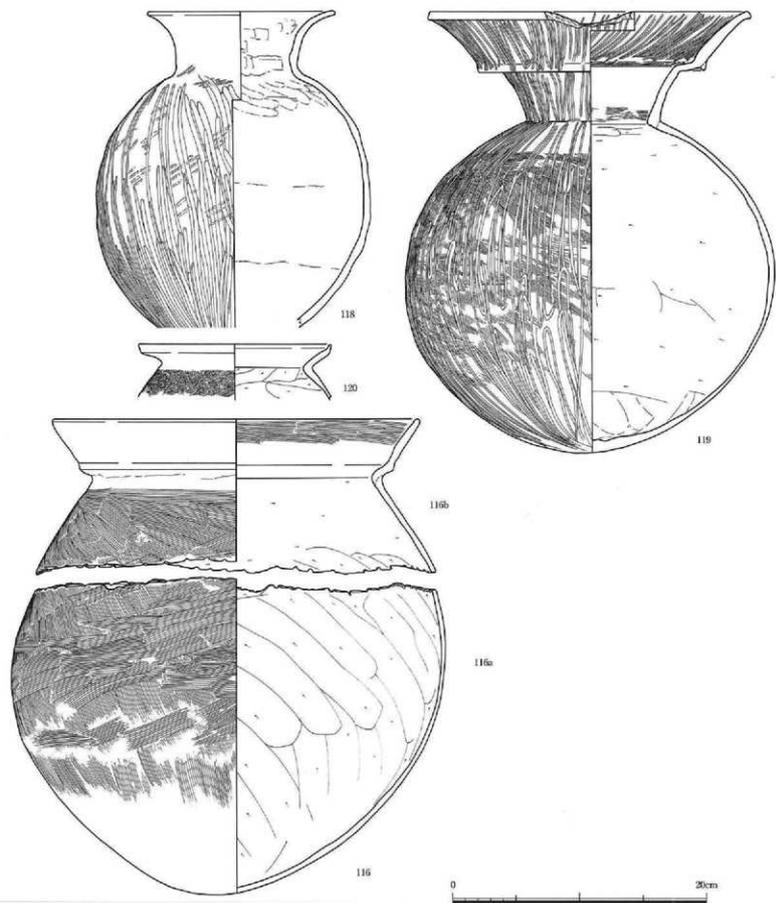
第79图 久宝寺1号墳出土土器実測图(2)



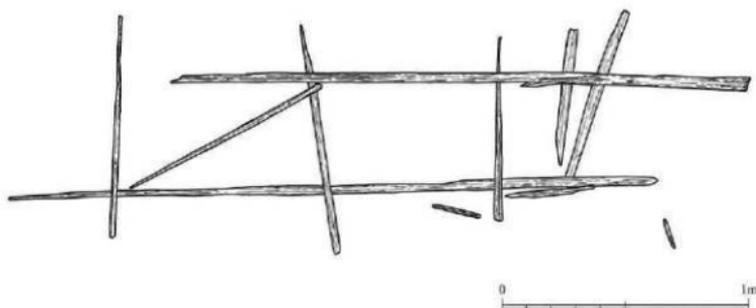
第80图 久宝寺1号出土土器实测图(3)



第81图 久宝寺1号墳出土土器実測図(4)



第62图 久宝寺1号墳出土土器実測図(5)



第83図 久宝寺1号墳出土用途不明木製品実測図

整や技法上の細かい特徴などに共通する部分が多い。いずれも角閃石を含んだ生駒西麓産の胎土をもつ土器である。全個体の底部に焼成後の穿孔を有し、また(115)を除いて体部に焼成前穿孔がある。(115)は遺存状態が不良なため確認できなかったが、他例から推して本来焼成前穿孔を伴っていた可能性が高い。また現状ではほとんど剥離しているが、口縁部と体部のそれぞれ外面に朱彩の痕跡がある。小形の直口壺(111)は墳丘南斜面の中軸線上に近い位置から単独で出土した。

棺体のうち、大形複合口縁甕(116a)は3号主体部の棺蓋、大形複合口縁壺(117)は同じく棺身として用いられた土器である。(116a)は1号墳東方の周溝外側で検出された妻口縁部(116b)と接合し、それぞれが同一の大形複合口縁甕(116)の片割れである事が判明した。この甕は丸底で球形の体部をもち、胎土に角閃石を含む生駒西麓産の土器である。焼成後に個体の肩部付近に小円孔を水平方向に多数穿ち、さらに円孔を中心に水平方向に工具で研磨して上下を切断している。このうち体部を棺蓋に転用し、口縁部を周溝外に廃棄したものとみられる。棺身の(117)は讃岐地域産のもので、精緻な作りである。広口壺(118)は5号主体部の土器棺である。底部を欠くが、本来より欠落するものか否かは不明である。タタキ目をよく残す粗雑な作りである。複合口縁壺(119)は6号主体部の土器棺で、口縁部に打欠きをもつ。

これらのほか、周溝外東側の第4-1層上面からは少数の土器片が出土した。3号主体部棺蓋の片割れである(116b)は、8号主体部南側の周溝南東隅付近で検出された。この他、庄内形甕(120)が出土している。

木棺以外で本墳と直接的な関連が求められる木製品は、墳丘北側斜面に密着した状態で出土した用途不明木製品である(第83図、図版31)。幾つかの部材が組み合わされた製品で、墳丘封土に由来する流出した堆積土が部材の一部を薄く覆い、その表面は土壌化していた。遺存状態が極めて悪いため、全体の形状や法量は不明である。部材はいずれも本来より傷んで瘦せていると考えられるが、検出時点で直径3cm前後の棒材を主体とし、幅5~6cm、厚さ2~3cm程度の薄い板材なども認められた。素材にはコウヤマキとスギの2種がある。残存長2.3~2.6m前後の棒材2本を平行に置き、また残存長0.4~0.5m前後の棒材、板材をこれに直交するように4列ほど配置するが、詳細は不明である。各部材の配置に規則性があり、本来は部材の各交点が緊縛されていたもので、一部が腐敗消滅し、一部が本来の位置からずれた状態で検出されたと考えられる。同様の棒材は、その直下の墳丘底でも検出されており、同一製品から遊離した部材の一部とみられる。

なお、遺物ではなく、また久宝寺1号墳と直接関わる証拠はないが、墳丘周辺の第4-1層上面で、2個の石塊(石塊1・2)が検出されている(第38図、図版13・58)。いずれも自然石で加工痕はないが、自然の堆積環境下で当地に存在することはありえず、人為的に運搬されてきた可能性が高い。

第6章 久宝寺1号墳出土の人骨について

大阪市立大学 安部みき子・(財)大阪府文化財センター 山口誠治

久宝寺遺跡の古墳時代前期の古墳から出土した人骨は5体であった。そのうち、1号主体部と2号主体部は墳丘の中心部に位地するが、7号と8号は周溝にそって出土している。1号主体部の木棺から2体分の人骨が出土しているが、埋葬の形態はわからない。出土した人骨はいずれも保存状態が悪く、歯冠のみ観察および計測ができた。

1号主体部 北側人骨

出土した木棺の形から伸展葬であったと思われるが、骨の保存は非常に悪く、歯冠以外の骨格はほとんど遺存していない。年齢は、上顎第1大臼歯の咬頭のエナメル質が摩耗し象牙質が露出していたと見られる小孔が歯冠に認められ、また第2大臼歯の咬頭にわずかに摩耗が見られることより25才前後と推定される。性は歯の計測値より男性の可能性が高い(第10・11表)。切歯の形状はシャベル状を呈している。赤色顔料が付着しており、蛍光X線分析で水銀朱であると確認した。

1号主体部 南側人骨

北側人骨と同じ木棺に埋葬され、北側人骨の足にあたる所から歯冠が多数出土している。歯の摩耗は第3大臼歯以外の臼歯の咬頭にわずかにみられ、第3大臼歯は咬耗が見られないことより萌出途中と思われる。これらのことより推定年齢は18才前後と推察され、性は歯の計測値より男性の可能性が高い。切歯の形状は北側人骨と同様、シャベル状を呈している。南側人骨にも赤色顔料が付着しており、蛍光X線分析で水銀朱であると確認した。

2号主体部人骨

出土した歯は上下の顎骨を噛み合せ歯が顎骨に釘植していたと思われる状態で、歯冠のみ遺存している。これらの歯は土中に埋没していたためレントゲン撮影(写真4)を行いそれぞれの位置を確認したうえで取り上げた。遺存していた歯は上顎の切歯片と臼歯で、わずかではあるが顎骨の破片も出土している。歯の摩耗状態は、第1大臼歯の咬頭のエナメル質に小孔があり象牙質が露出していたと推測され、第3大臼歯に咬耗はなく萌出が完了していない段階である。年齢は18才前後と推定され、性は歯の計測値から女性の可能性が高い。切歯の形状は破損が大きいため観察できなかった。

7号主体部人骨

頭頂骨の一部と下顎骨の歯槽部が出土しているが保存状態が非常に悪く、下顎骨は歯根が歯槽に釘植しているが歯冠部はすべて破損している。性と年齢の推定はできなかった。

8号主体部人骨

土壌墓から出土した人骨の保存状態は非常に悪く、左上顎中切歯と右上顎側切歯のみ遺存し(第10・11表)、これらの切歯はシャベル状を呈している。性と年齢の推定は出来なかった。

第10表 歯の残存部位

1号墳1号主体部北側

左					右										
—	M2	M1	P2	P1	—	—	I1	I1	I2	C	P1	P2	—	M2	—
—	—	—	P2	P1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

1号墳1号主体部南側

左					右										
—	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	—	—	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1	—	—	C	—	I1	I1	—	—	P1	P2	M1	M2	M3

1号墳2号主体部

左					右										
M3	M2	—	P2	P1	C	—	—	—	—	—	—	M1	M2	M3	
M3	M2	M1	P2	P1	—	—	—	—	—	—	—	P2	M1	M2	M3

1号墳8号主体部

左					右										
—	—	—	—	—	I1	—	I2	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

—：不明

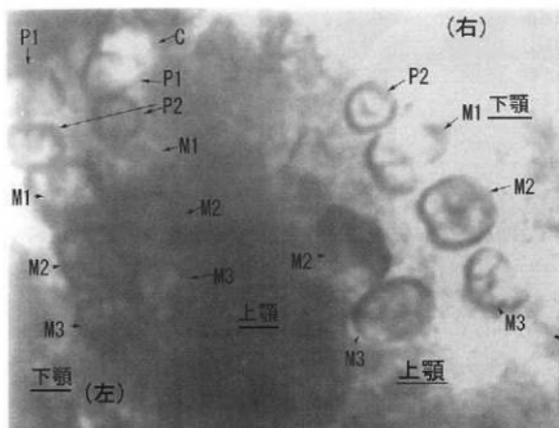


写真4 2号主体部人骨レントゲン写真

第11表 久宝寺1号墳出土人骨の歯の計測値

		1号主体部北側		1号主体部南側		2号主体部		8号主体部	
		左	右	左	右	左	右	左	右
上顎									
I1	頬舌径	7.49	7.43	7.96	7.94	—	—	6.48	—
	近遠心径	8.28	—	9.74	9.35	—	—	9.20	—
I2	頬舌径	—	6.58	5.81	5.81	—	—	—	6.14
	近遠心径	—	6.90	7.32	7.32	—	—	—	7.93
C	頬舌径	—	9.04	8.29	—	7.29	—	—	—
	近遠心径	—	7.94	6.77	—	7.28	—	—	—
P1	頬舌径	10.01	9.74	9.37	—	9.59	—	—	—
	近遠心径	7.22	7.47	6.76	—	7.40	—	—	—
P2	頬舌径	9.80	8.96	9.51	9.37	9.02	—	—	—
	近遠心径	7.08	7.55	6.99	6.68	7.02	—	—	—
M1	頬舌径	10.39	—	12.13	11.50	—	—	—	—
	近遠心径	11.50	—	11.10	11.14	—	—	—	—
M2	頬舌径	11.24	10.88	11.63	10.74	11.19	11.89	—	—
	近遠心径	9.73	—	9.60	9.53	9.55	9.60	—	—
M3	頬舌径	—	—	—	—	10.19	10.83	—	—
	近遠心径	—	—	—	—	8.59	9.90	—	—
下顎									
I1	頬舌径	—	—	4.17	5.81	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	6.44	7.95	—	—	—	—
I2	頬舌径	—	—	—	—	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	—	—	—	—	—	—
C	頬舌径	—	—	8.43	—	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	7.01	—	—	—	—	—
P1	頬舌径	7.20	—	—	8.02	7.77	—	—	—
	近遠心径	—	—	—	7.64	7.42	—	—	—
P2	頬舌径	7.59	—	—	7.80	7.78	7.78	—	—
	近遠心径	8.81	—	—	7.76	7.67	7.18	—	—
M1	頬舌径	—	—	11.67	11.44	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	12.23	12.35	—	—	—	—
M2	頬舌径	—	—	10.71	10.15	10.57	10.02	—	—
	近遠心径	—	—	11.54	11.61	10.97	11.29	—	—
M3	頬舌径	—	—	—	—	9.27	9.94	—	—
	近遠心径	—	—	—	—	9.69	9.20	—	—

単位はmm

第7章 久宝寺遺跡(多目的広場)で検出された地震の痕跡

独立行政法人産業技術総合研究所 寒川 旭

大阪府文化財調査研究センターが行った久宝寺遺跡(多目的広場)の発掘調査において、大地震に伴う液状化現象や地割れの痕跡が検出されたので概要を報告したい。

I. 液状化現象の痕跡

I-1 砂脈の平面形態

液状化現象にともなう砂脈が調査区の東半分で顕著に認められた。これらの砂脈は最大幅42cmと規模

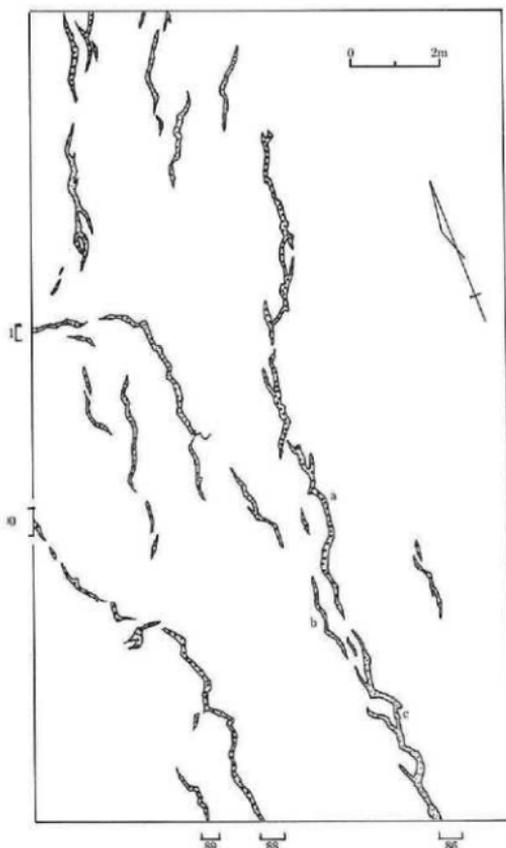
が大きく、調査区の南部では南北方向、北部では北北東-南南西方向が卓越する(写真5)。砂脈の内部は最大径7cmの礫を含む粗粒砂で構成されているが(写真6)、中～細粒砂で構成される砂脈もある(第84図)。

第85図A～Dは、調査区東部で南北方向にのびる砂脈について詳しく示したものである。以下、砂・礫層の分類基準は、径2mm以上が礫、2mm～0.5mmが粗粒砂、0.5mm～0.25mmが中粒砂、0.25mm～0.125mmが細粒砂、0.125mm～0.063mmが極細粒砂、0.063mm～がシルトとした。また、中～細粒砂と表現した場合、中粒砂の方が卓越することを示している。

Aは長さ約5mの砂脈aの中部で、この図における最大幅は27cmで、砂脈の内部は最大径7cmの礫～粗粒砂で満たされている。また西側には長さ最大40cm、最大幅7cmの小さな砂脈を伴っている。

Bは砂脈aの南部にあたり、砂脈の内部は最大径1.3cmの礫～粗粒砂で構成されている。ここでは、西側に最大幅10cm、長さ約2mの砂脈bが見られるが、北半分は最大径1cmの礫を含む粗粒砂、南半分は中～粗粒砂(一部は中～細粒砂)で構成されている。

Cでは最大幅18cmの新たな砂脈cが生じ、北半分では粗～中粒砂、南半分では



第84図 調査区東部における砂脈の分布図

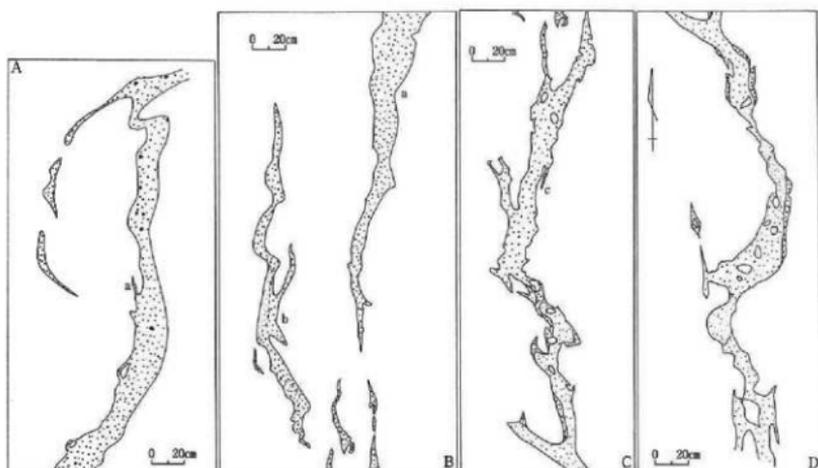
図中のドットの大きさは砂・礫の粒子の大きさに対応させている(以下の図でも同じ)。以下の図の位置と番号も示した。



写真5 砂脈の平面形



写真6 砂脈を構成する砂礫
最大径7cmの礫を含む。



第85図 砂脈の平面図

細～中粒砂で構成されている。また、砂脈の縁に沿って最大径6mmの礫～粗粒砂が分布している。

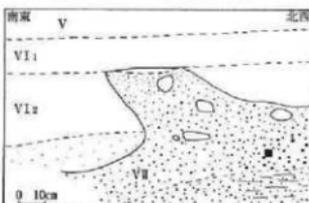
Dでは最大幅25cmとなり、内部は主に細～中粒砂で構成されているが、一部で極細粒砂～細粒砂が見られる。ここでも、砂脈の縁に沿って最大径1cmの礫を含む粗粒砂が分布している。

I-2 液状化跡の断面形態

第86図は調査区南東側の壁面における断面図である。この図における地層は、V層・VI1層・VI2層・VII層と区分した。この分類は、本報告書の年代区分に対応させたもので、VI1層の上面が報告書における6-1面（弥生時代前期）、VI2層の上面が6-2面（縄文時代晩期）である。

この図において、V層は暗褐色粘土、VI1層の上部は厚さ約6cmの暗灰色粘土で下部は厚さ約8cmの暗褐色シルト、VI2層の上部は厚さ約30cmの暗褐色シルトで下部は厚さ約25cmの極細粒砂、VII層は最大径1.4cmの礫を含む粗粒～中粒砂層である。

VII層の上部で液状化現象が発生して、幅約35cmの砂脈（噴砂で満たされた割れ目）が斜め上方方向にのびている。砂脈の内部では、上ほど細かい粒子が卓越する「級化」が顕著で、砂脈の下部は中～粗粒砂、上部は中～細粒砂となっている。



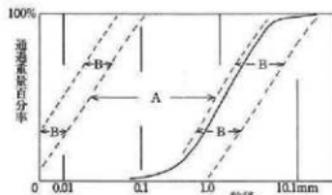
第86図 液状化跡の断面図（その1）

■は粒度分析試料の採取位置を示す。

VII層の下部には、最大径1cmの礫を含む粗～中粒砂が堆積しているが、堆積時に形成された水平方向の葉理が良く保存されており、ここでは液状化現象にともなう地層の乱れはほとんど認められない。一方、VII層上部は堆積当時の堆積構造が残されていない。

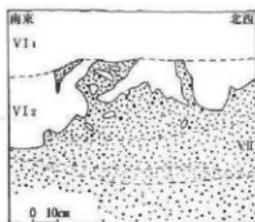
第87図はVII層上部から採取した試料の粒径加積曲線を示したものである。図中のA・Bは日本港湾協会（1979）による液状化し易さの分類で、Aは“特に液状化の可能性あり”、Bは“液状化の可能性あり”となる。試料はBのランクに入り、特に液状化し易いわけではないが、液状化し易い条件の下でなら液状化する粒度組成となる。

第88図は第86図の9.3m西に位置している（写真7）。VI1層は濃灰色シルト、VI2層は灰色の極細粒砂～シルトである。



第87図 液状化した砂礫の粒径加積曲線

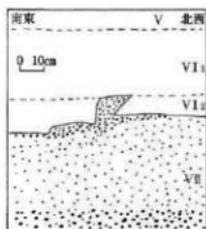
A・Bは液状化し易さの分類。試料の採取位置は第86図に示す。



第88図 液状化跡の断面図（その2）



写真7 液状化跡の断面形 第88図に対応している。



第89図 液状化跡の断面図（その3）

Ⅶ層の上部（層厚約15cm）は最大径1.5cmの垂円～円礫を含む粗粒砂である。Ⅶ層の中～下部（層厚60cm以上）は最大径2cmの礫を含む粗粒砂で、この層中に層厚最大5cmの地層（最大径5mmの礫を含む細～中粒砂）をレンズ状に含んでいる。

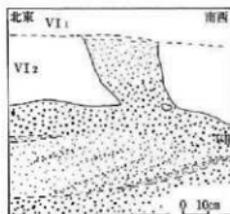
ここでもⅦ層の上部で液状化現象が発生して、幅約20cmおよび約5cmの2本の砂脈が上昇している。Ⅶ層の上部と中～下部の境界はスムーズに連続し、液状化現象に伴う変形はⅦ層の上部に限られている。

第89図は第88図から3.3m西に位置している（写真8）。この図において、Ⅴ層は褐色のシルト、Ⅵ1層は濃灰色のシルト、Ⅵ2層は灰～うす褐色のシルト～極細粒砂である。Ⅶ層上部は最大径8mmの礫～粗粒砂、最下部は最大径2.5cmの礫～粗粒砂である。

Ⅶ層から最大幅12cmの砂脈が上昇しており、砂脈の内部は粗粒砂で構成されている。図に示したように、Ⅶ層の最上部の層厚約5cmの部分だけに礫（最大径8mm）が密集しているが、これは、噴砂の上昇に伴う級化によって、礫を含む粗い粒子だけが砂脈の底部に取り残され、粗粒砂が砂脈内部を上昇したことを示している。

第90図は南北方向の溝における壁面を示したものである。ここでは、Ⅵ1層は暗灰色シルト、Ⅵ2層は暗灰色～灰色シルトである。Ⅶ層は上部が最大径1cmの礫を含む粗～中粒砂、中部が粗～中粒砂、下部が最大径1.2cmの礫～粗粒砂である。また、Ⅶ層の中部には斜層理が発達し、細粒砂層をレンズ状に含んでいる。

Ⅶ層から最大幅30cmの砂脈が上昇しているが、砂脈内部では級化が顕著で、砂脈の上部は中粒砂で側面から供給されたシルトの小ブロックを多く含み、中部は粗粒砂、下部は最大径1cmの礫が卓越している。また、Ⅶ層の中部では堆積当時の構造が良く保存されており、液状化現象による変形はⅦ層の上部だけに限られている。



第90図 液状化跡の断面図（その4）

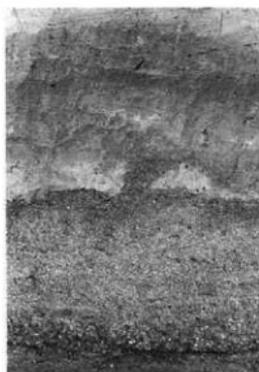
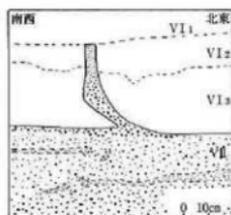


写真8 液状化跡の断面形 第89図に対応している。

第91図は第90図から3.5m北に位置する（写真9）。ここでは、本報告書の6-3面（縄紋時代晩期）が認められるので、これに対応する地層をⅥ3層とする。Ⅵ1層は暗灰色シルト、Ⅵ2層は暗灰色シルト、Ⅵ3層は灰色シルトである。Ⅶ層の上部は最大径2cmの礫を含む粗～中粒砂で、図の左側では厚さ2cmの極細粒砂をレンズ状に含んでいる。Ⅶ層下部は最大径2cmの礫を含む粗～中粒砂で構成されるが、上部と下部の境界には、厚さ最大3cmの極細粒砂～シルトが水平に堆積している。



第91図 液状化跡の断面図 (その5)

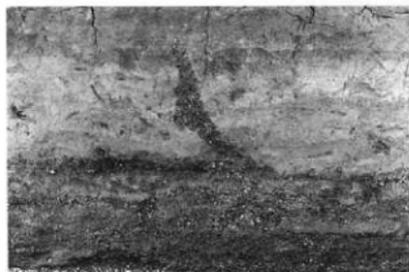


写真9 液状化跡の断面形 第91図に対応している。

Ⅵ層から、最大幅10cmの砂脈が上昇しているが、砂脈内部では緩化が顕著で、砂脈の最上部は極細粒砂、上部は細粒砂、中～下部は最大径8mmの礫を含む礫～粗粒砂となる。噴砂はⅥ層の上部から供給されているが、Ⅵ層最上部の厚さ2cmの部分では礫(最大径1.2cm)が卓越しており、噴砂の大部分はここから供給され、緩化によって粗い粒子が取り残されたものと思える。また、図の左下では、極細粒砂～シルト層を、5cm程度の幅で引き裂いて、Ⅵ層下部の砂礫が上昇しており、Ⅵ層下部でも液状化現象が生じたことがわかる。

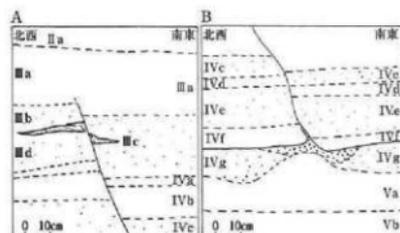
Ⅱ. 地滑りと地割れの痕跡

発掘区の北側壁面において、地滑りと地割れの痕跡が検出された。

第92図はA・Bに分かれているが、最初にAを観察し(写真10)、ついで発掘が進行した段階で、下位に位置するBを観察した。このため、AからBに到る過程で、壁面が10cm程度後退している。そして、説明の便宜上、図の地層を上位からⅡa～Ⅴb層に細分している。

Ⅱa層は水平方向のラミナが発達した極細粒砂～シルトである。Ⅲa層は灰色シルトで、この層の上面が本報告書の3-1面(古墳時代前～中期)に対応する。Ⅲb層はシルト～極細粒砂、Ⅲc層はレンズ状に含まれる中～粗粒砂、Ⅲd層は極細粒砂～シルトである。

Ⅳa層は暗灰色の粘土で、この層の最上部が本報告書の4-1面(古墳時代初～前期)に対応する。また、Ⅳb層はAでは灰色のシルト、Bでは灰色の極細粒砂～シルト、Ⅳc層はうす灰色の極細粒砂、Ⅳ



第92図 地滑り跡の断面図



写真10 地滑りと地割れの断面形
左の地滑りは第92図Aに対応、右の地割れは第93図のさらに上に相当する。地滑りは途中まで、地割れはすべての地層を食い違わせている。

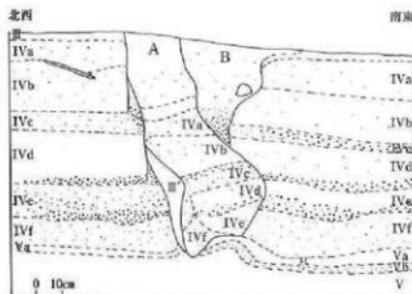
d層は灰色の極細粒砂～シルト、IVe層はうす灰色の極細粒砂、IVf層は灰色のシルトである。IVg層は粗粒砂と極細粒砂で構成され、最上部と最下部に粗粒砂が分布している。

Va層は非常に柔らかい灰色の粘土で、この層の最上部が報告書の5-1面（弥生時代後期）になる。Vb層は少し柔らかくて植物繊維を含む粘土である。

第92図AからBにかけて、中央に正断層（滑り面）があり、図の右側（南東側）が低下している。食い違い（変位）量は、IIIc層とIII d層で約5cm、IVa層で約6cm、IVd層で約5cm、IVf層で約5cmと概ね一定している。断層の下端は、IVg層の最上部でレンズ状に堆積した、最大径5mmの礫を含む粗粒砂（IVg'層）まで達しており、この層も約2cm食い違っているが、これより下には変位が及んでいない。また、IVg'層から断層沿いに約5cmの高さまで噴砂が上昇している。一方、断層の上端はIIIa内では不明となり、IIa層には食い違いが生じていない。

第93図は第92図より約6m東における断面である（写真11）。説明の便宜上、上位からIIIx～V層と細分する。III層はうす灰色の粘土、IVa層は濃灰色の極細粒砂で、IVa層の最上部が報告書の4-1層になる。IVb層は極細粒砂で最下部で厚さ2cmの部分がシルト～極細粒砂である。IVc層は細～極細粒砂、IVd層は灰色の極細粒砂～シルトで最下部で厚さ約3cmが最大径1cmの礫を含む粗粒砂である。IVe層では最下部が最大径1cmの礫を含む礫～粗粒砂、中部が中～粗粒砂、上部が細粒砂となる。IVf層は灰色の極細粒砂である。また、V層は粘土で、このうち最上部で幅最大5cmの部分（Va層）が特に柔らかく、図の右側では、その下に幅3cmの極細粒砂層（Vb層）をレンズ状に含んでいる。

この図では、最大幅40cm（上部では20cm、下部で40cm）の大きな地割れ（A）が見られ、III層の上



第93図 地割れ跡の断面図



写真11 地割れの断面形 第93図に対応している。

位に堆積していた厚さ30cmの地層（下位は極細粒砂で上位は粘土）からIVf層まですべてが、堆積当時の上下関係を保ったまま、約30cm落下している。一方、図の中で、地割れの左側の縁に当たる位置では、IVb層とIVd層の最下部に堆積した砂が液状化して、噴砂として10～15cm程度上昇している。また、IVb層からIVa層にかけて幅1cmの砂脈が斜めにのびている。

この他、図の上部には幅40cmで深さ40cmの逆三角形の地割れ（B）も生じており、IIIa層の上位に存在したと推定される地層（最下部が礫～粗粒砂で上部がシルト）が、この中に落下している。また、Vb層から生じた幅1cmの砂脈が3cm上昇してIVf層に達している。砂脈の内部は極細粒砂で満たされているが、IVf層も極細粒砂で構成されているためIVf層中で吸収されている。さらに、地割れAの左下部には上位にあったシルト～粘土（III）が細長く流れ込んでいる。

Ⅲ、考察とまとめ

Ⅲ-1 液状化の痕跡

液状化に伴う砂脈は、第84図に示したように、今回の発掘区の東半分が集中し、系統的に北北西-南南東から南北方向にのびている。そして、砂脈の下位には北北西-南南東から南北方向にのびる埋没河道が存在し、河道の中心付近に砂-砂礫が堆積している。この堆積物が液状化して噴砂を供給したため、河道の中心にそった方向で砂脈が形成されたと考えられる。

第86・88～91図では砂脈の先端がⅣ2層上面（6-2面）で削平されており、図8では、砂脈が6-3面を引き裂いている。6-2・6-3面ともに縄紋時代晩期の生活面ということから、液状化現象の発生した時期も縄紋時代の晩期頃に限定される。

第86・90図において、砂脈の最上部に灰白色のシルトが薄く堆積している。これは、砂脈の先端が浸食された際に、砂脈に沿って少し掘り窪められ、ここにシルトが薄く堆積したものと思える。

砂脈の内部を噴砂が上昇する過程で、上部ほど細かい粒子が卓越する「級化」が第86・87・90・91図で顕著に認められる。これは、寒川（1999）に示したように、液状化現象に伴って上昇した噴砂に共通して認められる現象である。逆に言えば、級化の存在によって、砂脈内の砂が、落下したものでなく、上昇したものであることが検証できる。第89・91図のように、液状化した地層の最上部（砂脈の基底）に粗い粒子が卓越する現象も級化に伴うものである。

Ⅶ層の上部のみに液状化現象に伴う顕著な変形（あるいは堆積構造の消滅）が認められる。そして、それより下位では、堆積した当時の堆積構造が保存されており、液状化にともなう顕著な変形は見られない。このことは、顕著な液状化現象が、地層全体に一律に広がるのではなく、地層内部の特定の位置（主に砂層と、これを覆う粘土・シルト層の境界）に集中しやすいことを示している。

Ⅲ-2 地滑り跡

第92図に示した地層の食い違いは、Ⅲb層からⅣf層までを約5cm変位させているが、Ⅳg層は約2cmと半分以下の変位となり、それより下位には変位は及んでいない。また、Ⅳg層から断層に沿って噴砂が上昇していることから、この層で液状化が発生したことが考えられる。

このように、強い震動の中で、液状化したⅣg層を境にして、図の右側（東側）の地層がわずかに滑り落ちたものと思える。

さらに下位に位置するⅤa層（柔らかい粘土層）が、断層の直下で上に凸な形態を示しているが、これも（あるいはこの一部が）地震動にともなって流動した可能性が高い。

断層（“地滑りに伴う滑り面”）は、Ⅲa層下部を変位させているが、Ⅲa層上部には変位が認められない。このため、Ⅲa層堆積中に生じた地震による地滑りの痕跡と思われる。そして、本報告書では、3-1面（Ⅲa層上面）が古墳時代の前～中期、4-1層（Ⅳa層上面）が古墳時代の初頭から前期なので、古墳時代の前期後半頃に生じたことになる。

Ⅲ-3 地割れ跡

第93図において、Ⅴ層最上部の極めて柔らかいⅤa層を境にして、上位の地層が大きく引き裂かれて幅40cmの空間が生じ、この空間へⅣfを含めて上位の地層が落下している。この地割れ（A）は図の右下に向かって傾斜が少し緩やかになっている。さらに、地割れの平面的な分布（大阪府文化財調査研究

センターが確認)も東(図の右方向)に向かって開く円弧状の形態を示している。このため、V a層より上の地層が右方向に向かって移動したことともなって生じた地割れと解釈される。地割れBはAの形成に引き続いて生じたものである。V aおよびV b層が図の中央で上に盛り上がるような変形を受けているが、これも、上位の地層が図の右方向に向かって移動したことに伴うものと考えられる。

これらの地割れは、第93図よりさらに上位の地層まで達している。大阪府文化財調査研究センターによる資料では、1-2面(中世末期頃)までが切断され、近世から現代に相当する地層は影響をうけていない。

このように、中世末期頃に生じた激しい地震動によって、軟弱なVa層を覆う地層が横方向(図の右方向)に約40cm滑り動き、これに伴って生じた地割れに上位の地層が落下したものと解釈される。

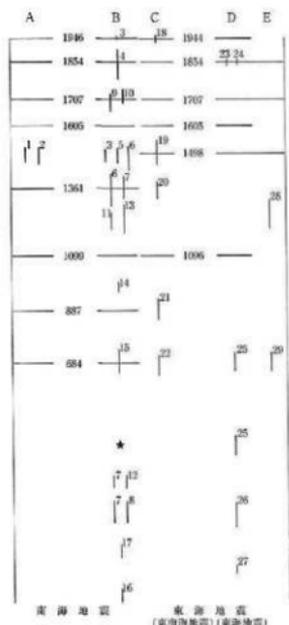
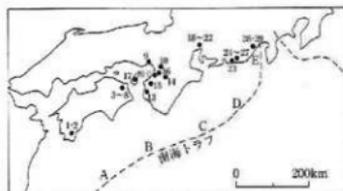
Ⅲ-4 地震の時期

今回検出された地震の痕跡について、第93図に示した地割れ(地滑りに伴う)の痕跡は中世末期頃に限定される。この時期に当遺跡の周辺地域を襲った大地震としては、1596(文祿5・慶長元)年9月5日の伏見地震があげられる(文部省震災予防評議会編, 1941, 宇佐美, 2003など)。この地震は、大阪平野の北縁を限る有馬-高槻構造線活断層系をはじめ、淡路島の活断層が活動したことが確かで、六甲断層系も同時に活動した可能性が高い(地質調査所, 1996, 寒川, 2001aなど)。第94図には伏見地震によって生じたと考えられる地震の痕跡を検出した遺跡が示されているが、久宝寺遺跡(大阪府文化財調査



第94図 大阪平野周辺の活断層と伏見地震の痕跡を検出した遺跡(寒川, 2001aより)

●は伏見地震による可能性の高い地震跡を検出した遺跡、★は久宝寺遺跡を示す。
1995年に活動したのがNF: 野島断層。
1596年に活動したと考えられるのが、AFS: 有馬-高槻構造線活断層系、HF: 東浦断層、OF: 野田尾断層、SF: 狭山断層。1596年に活動した可能性が高いのが、RFS: 六甲断層系、KP: 構本断層。その他の活断層は、UFS: 上野断層系、IFS: 生駒断層系、HaF: 花所断層、MTL: 中央構造線活断層系、NFS: 奈良盆地東縁断層系。



第95図 巨大地震の発生時期 (寒川, 2000より)

西暦は史料から求めた発生年でAndo(1975)が示したもの。縦線は遺跡から検出された地震跡の年代幅である。20-22は服部(1998)による。★は本誌の地滑り跡の推定年代。
 1アノノ 2船戸 3宮ノ前 4陣宅 5古城 6中島田 7黒谷川宮ノ前 8黒谷川郡頭 9小阪邸跡 10池島福万寺 11石津太神社 12下田 13藤並 14菅尾 15川辺 16田井中 17下内跡 18東畑庵寺 19尾張国府跡 20門間沼 21地藏越 22田所 23新殿二之宮 24袋井宿 25坂尻 26鶴松 27原川 28上土 29川合(1~29は遺跡名)

研究センター, 2001, 寒川, 2001b)をはじめ、大阪平野でも多くの遺跡で地震の爪痕が検出されている(寒川, 1992, 2001aなど)。

第84~91図に示した液状化現象の痕跡は、かなり規模が大きく、激しい地震動の存在が推測される。そして、このような痕跡を与えた地震の年代については、縄文時代晩期頃に限定されている。この時代については、もちろん文字記録はなく、地震が発生に関する情報も決して多くはない。ただ、有馬-高槻構造線活断層系の発掘調査において、茨木市の耳原遺跡で実施したトレンチ壁面の観察結果から、この断層系の一つ前の活動が、縄文時代晩期の遺物を含む地層を切断し、弥生時代前期の遺物を含む地層に覆われることが確認されている。また、この活動の年代に相当する放射性炭素年代測定値は約2800年前と求められている(地質調査所, 1996, 寒川, 2001aなど)。このため、有馬-高槻構造線活断層系において、伏見地震を引きおこした西暦1596年の活動よりもう一つ前にあたる、縄文時代晩期の活動(古伏見地震)によって、当遺跡の液状化跡が生じた可能性が高い。

第92図に示された地滑りの痕跡は、地層の食い違い量が最大6cmと比較的小規模なので、必ずしも大きな地震に対比が可能とは言えない。ただし、地滑りによる地層の変位の上端から、古墳時代前期末頃の年代が得られる。この年代に発生した内陸地震についてはまだ把握されていないが、太平洋海底のプレート境界を震源とする南海地震が、この年代に発生した可能性が高い。

第95図は文字記録(古文書)と遺跡の地震痕跡から作成した南海地震と東海地震(東海地震については、東海地震と東南海地震に細分する呼び方がよく使われている)の発生時期である(寒川, 2000, 2001abなど)。これを見ると、これまで両地震が、一定の間隔(90~150年)でほぼ同時に発生してきたことがわかる。そして、東海地震に関しては、静岡県袋井市教育委員会による坂尻遺跡の発掘調査において、古墳時代前期末頃の液状化現象の痕跡が検出されている(寒川, 1992)。また、南海地震については、天理市教育委員会が平成14年度に調査した赤土山古墳の墳丘に認められる地滑りの痕跡が、古墳築造直後の古墳時代前期末頃に生じた可能性が高いと考

えられている。当遺跡の地滑りの痕跡は、これらに相当する年代なので、かつての南海地震によって生じた可能性もある。

IV. まとめ

久宝寺遺跡（多目的広場）の発掘調査において、地震の痕跡が検出された。

最も顕著なのは液状化現象の痕跡で、南北方向にのびる埋設河道に沿って最大幅 42cm の砂脈が数多く発達していた。砂脈内部には河道を埋積した砂礫から供給された砂・礫で満たされていたが、上昇の過程で上ほど粒子が細くなる級化が認められた。液状化現象の発生年代は縄紋時代晩期頃に限定される。

最大幅 60cm の地割れの痕跡も認められたが、柔らかい粘土層を境にして、それより上位の地層が水平方向に移動したために生じた空間に堆積物が落下したもので、広い意味の地滑りに伴う痕跡である。この発生年代は中世末期である。

その他、小規模の地滑りの痕跡（落差最大 6cm）も認められた。柔らかい粘土の変形と、これを覆う砂層の液状化によって、古墳時代前期末に生じたものである。

大阪平野の北縁を限る有馬-高槻構造線活断層系が 1596 年（伏見地震発生）と縄紋時代晩期に活動して大地震を引き起こしたことが判明しているため、液状化跡と地割れ跡はこれに対応したものと考えられる。また、地滑りの痕跡は、古墳時代前期末に発生した南海地震の爪痕の可能性もある。

謝辞

本報告をまとめるに当たり、大阪府文化財センターの西村 歩氏と南條直子氏には、多くのご教示とご助力を頂きました。心より感謝申し上げます。

文献

Ando, M (1975) Source Mechanism and Tectonic Significance of Historical Earthquake

Long the Nankai Trough, Japan. *Tectonophysics*, 27, 119-140.

地質調査所 (1996) 平成 7 年度活断層研究調査概要報告書。地質調査所研究資料集, 259, 98p.

服部敏之 (1998) 愛知県地震と遺跡。古代学研究, 144, 52-61.

理文関係支援連絡会議・埋蔵文化財研究会編 (1996) 『発掘された地震痕跡』。825p.

文部省震災予防評議会編 (1941) 増訂大日本地震史料。第 1 巻, 鳴鳳社, 945p.

日本港湾協会 (1979) 港湾施設の技術上の基準・同解説。

寒川 旭 (1992) 地震考古学 遺跡が語る地震の歴史。中公新書, 251p.

寒川 旭 (1999) 遺跡に見られる液状化現象の痕跡。地学雑誌, 108, 391-398.

寒川 旭 (2000) 地震考古学に関する成果の概要。古代学研究, 150, 121-126.

寒川 旭 (2001a) 地震 なまぜの活動史。大巧社, 173p.

寒川 旭 (2001b) 遺跡で検出された地震痕跡による古地震研究の成果。活断層・古地震研究報告, No.1, 287-300.

宇佐美龍夫 (2003) 最新版 日本被害地震総覧 416-2001。東京大学出版会, 605p.

大阪府文化財調査研究センター (2001) セツ門古墳。大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第 60 集, 78p.

第8章 河内平野における古墳の出現

—久宝寺1号墳の事例をもとに—

はじめに

久宝寺1号墳は、これまでに実施された久宝寺墳墓群の調査例の中で、最も遺存状況に恵まれた古墳のひとつに数えられ、古墳時代の開始期前後における地域共同体の墳墓の姿をよく伝えている。ほぼ完全な状態で検出された1号主体部の割竹形木棺は、全国的にみても稀有な遺存例であるほか、出土した関連遺物群なども示唆に富むものであった。本稿では久宝寺1号墳における埋葬原理について整理を行い、久宝寺墳墓群の中での位置づけを試みる。

なお、久宝寺墳墓群は弥生的な周溝墓から古墳へと、墓制の変質を伴う時代に形成された墓域と認識され、ここでは周溝墓と古墳の総称として墳墓の語を用いる。また、久宝寺墳墓群と隣接する加美遺跡の同時期の墳墓群を加美墳墓群とし、両者を久宝寺・加美墳墓群とする。

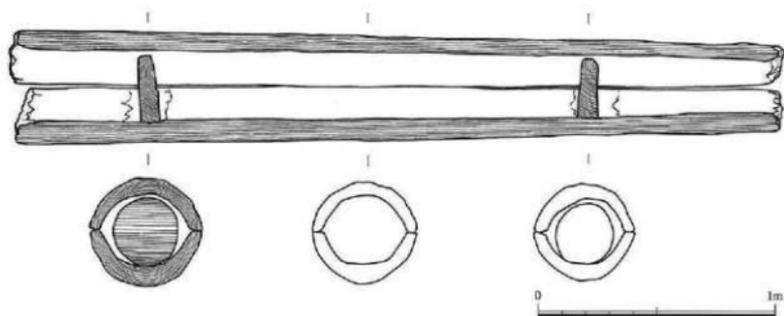
第1節 1号墳主体部の検討

合計8基に及ぶ埋葬主体部は、その構築場所が墳頂部と周溝内のいずれかに分かれて分布する。前者を墳頂部埋葬、後者を周溝内埋葬と称する。

1. 墳頂部埋葬

墳頂部で検出された合計3基の主体部のうち、1・2号の主軸方向は墳丘主軸とほぼ一致している。構築の順序は、主体部掘形の切合いから1号が2号に先行することが分かっている。主体部の位置は墳丘中軸に近い位置を1号が占め、2号はやや東へ偏っている。以上の状況や割竹形木棺の採用などの事象から推して、1号主体部が本墳の中核をなすとみなしてよい。1号主体部の割竹形木棺の中軸は、墳丘のそれより50cm以上西方向へずれており、これを挟んで二分される墳頂部の面積は、東側が西側より僅かに広がっている。主体部の中軸線からのずれは、設置時点での単なる誤差か、あるいは1・2号両主体部の形成時期に時間差を認めるとすれば、1号主体部の東側をあらかじめ追葬のための空間として用意する意識が働いた結果とも解される。

1号主体部の埋葬施設である割竹形木棺の検出は、本墳墓群においては久宝寺(その2)F2グリッド第4遺構面a第4号墓(一瀬1987)に次ぐ2例目である。しかし本例はその構造体がほぼ完存し、また現存最古の稀少例である。木棺は棺身・棺蓋と2枚の仕切板で構成されている(第96図)。棺身と棺蓋はともに法量と形状がほぼ一致することから、芯もち一木材の上下を縦割りにした後、棺の厚みを残して内部を挟り、身と蓋とを作り出したものとみられる。内面の断面形状はおよそ蓋がU字状を呈するのに対し、身が緩やかなコの字状を呈している。これは棺身の加工に際し、床面が意識されたことを示す。また外面では棺身底面の中軸線に沿って、僅かではあるが削り込みが観察された。設置の際の安定を目的としたものであろう。さらに仕切板は下方の設置面側の幅を厚く作り、やはり棺身への設置にあたっての安定性が意図されたことがわかる。仕切板は原木の芯を外した木取りが行われ、設置時に柁目の木目が水平になるように作られている。また両仕切板とも木目の粗い木表面が北側、木目の詰まった木裏面が南側を向くが、意図的なものか否かは不明である。このように棺体は計画性をもって加工され、棺身と仕切板との組合せにも一定の設置法が存在したことを窺わせる。棺の内法幅は30～40cm前後で人体埋葬を行うにはやや狭い感があるが、仰臥位対向の2体埋葬が行われていた。その埋葬順序は遺骸が朽ち果



第96図 割竹形木棺・横断面模式図

ていたため把握できなかった。これら2体の被葬者は他では確認されなかった朱彩が顔面に施してあり、本墳における一連の被葬者群の中でも特別な地位にあった人物群と考えられる。

2号主体部の主軸は1号主体部とほとんど一致する。成人の1体埋葬で、頭位を北側に向けている。主体部の木棺は準構造船材の二次利用と考えられ、1号主体部の埋葬のために製作された割竹形木棺とは構造上の格差がある。棺体は1号主体部と比べて短く、また埋葬に際し朱の使用がみられない。

3号主体部の土器棺は、嬰兒もしくは小児埋葬用の棺体である。棺身に讃岐地域産の精緻な大形複合口縁壺が使用され、また大形甕の体部を転用した棺蓋を備える。棺体は1号主体部の西側にあり、主軸を1号主体部のそれと直交させ、口縁部を1号主体部の反対方向に向けて設置されていた。このような配置は1号主体部を意識したものであり、これに付随する扱いを受けたものと解される。3号主体部は切合いをもたないため、他の主体部との前後関係を検証できないが、少なくとも1号主体部を意識した配置になっているため、その埋設が1号より後とみるのが妥当であろう。棺蓋に用いられた大形甕の体部については、これと接合する口縁部が本墳周溝外縁の南東隅角部から検出された。このことは土器棺埋設に先立ち、口縁部検出地点において棺蓋用に選ばれた大形甕を切断、棺身との位置合わせが行われたことの証明となろう。なお3号主体部と同様の讃岐系土器を棺体に用いた例は、周辺では亀井北(その2)遺跡2号方形周溝墓(奥・山上ほか1986)、久宝寺遺跡第22次2号方形周溝墓(原田2001a)があり、また周溝出土例には久宝寺遺跡周溝墓3-1(小林・西川1992)などがある。

本墳において、1号主体部の幅は北が広く南が狭く、北向きが埋設正位置と考えられること、また単次葬である2号主体部の被葬者が北頭位であることから、墳丘の北方向が重視された形跡がある。したがって、1号主体部における北頭位の第1被葬者が、本墳の中心埋葬の位置を占めたであろうことは首肯されよう。切合いからみれば1号主体部における2体埋葬の完了は、2号主体部の設置に先行する。このように墳頂部埋葬においては、1号主体部第1被葬者を頂点とした序列関係の存在を窺わせ、複数の主体部はその序列にしたがって、計画性をもって配置されている。本墳が寿陵の形態をとっていた可能性も皆無とは言いが切れないが、第1被葬者の死が造墓契機となったとみてよい。

2. 周溝内埋葬

周溝内埋葬では5基の主体部が確認されており、そのほとんどが墳丘の東側に付設された陸橋部に集中する。陸橋部の基幹となる部分は、ベース層以下の砂層を掘り残して形成された部分があり、墳丘の付属施設として、本墳築造当初から予め設計に組み込まれていた可能性が高い。ここに主体部が集中す

ることから、埋葬空間および墳頂部への通路を兼ねた施設と捉えることができる。

周溝内埋葬の構築順序については、墳頂部と周溝内は遺構の切合いからみれば直接的な接点をもたないが、1号主体部の構築が本墳の造墓契機と捉える以上、周溝内埋葬はこれに後続するものでなければならぬ。また周溝内埋葬の内部では主体部相互の切合い関係は確認できず、先行する埋葬主体を避けて後続の埋葬が行われた可能性がある。埋葬位置は4号主体部が陸橋部の中心に位置し、その北に7号、西に5・6号主体部、やや離れた周溝外周に8号主体部がある。土器棺は5号が弥生系の広口壺、6号が布留式の複合口縁壺で、土器型式からみれば5号より6号の壺が新しい。また5号は陸橋の中央に近い位置を占有するが、6号は陸橋南側の裾付近に埋設されている。これは被葬者の死亡順に陸橋部の埋葬空間が埋められていったことの証左と捉えられる。陸橋部分から順次、埋葬区画が埋まっていったと想定すれば、その中心位置にある4号主体部が最も古く、7号もしくは5号主体部がこれに次ぎ、陸橋部の埋葬空間が埋め尽くされた後、やや外れた位置に6号ないしは8号主体部が構築された過程が復元できる。また被葬者は主体部の規模などから、5・6号は嬰兒、4号は小児、7・8号は成人と考えられる。埋葬頭位の判明した土墳墓では、7号が南西、8号が北北東方向に頭位を向ける。

以上のように周溝内埋葬の配置は、被葬者の年齢構成とは無関係に死亡順位で決定されたと思われる、また主体部の方向は埋葬地点の地形の起伏に影響されていること以外、一貫した規則性を認めることができない。このように周溝内埋葬では、陸橋部を中心に埋葬主体が群在する基本原則が看取できるが、主体部相互の相関関係においては無秩序的であるといえる。

3. 主体部にみられる二元性

以上、検証したように1号墳内に存在する主体部群は、構造等において様々な多様性をもつが、埋葬区画は墳頂部埋葬と周溝内埋葬の二箇所に集約でき、主体部はこのいずれかに属している。また、これらの埋葬区画の内容は、相互に格段の差が存在する。最も顕著な相違は空間利用である。墳頂部埋葬では少数の被葬者が広い空間を占有するのに対し、周溝内埋葬では範囲を限られた狭い空間に多くの被葬者が混み合って埋葬されている。このような主体部の空間利用における二元性は、すなわち共同体内部における階層構造の具現化に他ならない。しかしこの両者が同一の墳墓に葬られている以上、何らかの紐帯原理によって相互に結ばれた関係にあったことは確実で、さらに周溝内の被葬者群が墳頂部被葬者群に対して従属的な立場にあった階層構造を有する共同体社会として捉え得る。

第2節 1号墳出土土器群の検討

主体部としての土器棺以外に、本墳からは特殊な状況で土器が検出されている。これらは墳頂部および周溝北側から出土したものに大別でき、前者を墳頂土器群、後者を周溝北土器群とする。

1. 墳頂土器群

墳頂土器群は4個体の直口壺である。これらは全て生駒西麓産の胎土で、形態や調整、技法上の特徴など、個体識別が困難なほど相互に類似する。同じ作り手によって同時に製作された一群の土器である可能性すら否定できない。これらは体部に焼成前穿孔、底部に焼成後穿孔をもち、外面には朱彩が施されるなど、日常土器ではなく、特別な意味を与えられた土器群であることは明らかである。さらに墳頂部の四隅に配置されていたことも、これらの土器群の特異性を裏付けている。もちろん埴輪の範疇で捉えられるものではないが、穿孔による土器の儀器化行為や埋葬空間を方形に区画するような意図的配置は、後の埴輪祭祀との関連性を窺わせる。その目的は、埴輪祭祀の一環として特別な意匠を施した

土器を配置し、墳頂部における埋葬区画の明示や外界からの分離、ひいては葬送儀礼の場を演出することにあつたと考えられる。

2. 周溝北土器群

墳頂部の土器群と対照的な位置にあるのが、周溝北側から集中して出土した土器群である。分布は周溝の方向に沿って長さ3.6m、幅1.3mの範囲で、周溝底中央から墳丘斜面の裾にかけて土器および土器片が点在する。周溝底と墳丘北斜面の土器片には接合例があるが、これに対して、周溝の外周寄り斜面には破片もみられなかった。

出土土器は小形丸底土器、有段口縁鉢、庄内形甕の3種に限定されている。個体数は小形丸底土器7点、有段口縁鉢4点、庄内形甕2点である。器種構成にこのような偏りがみられることは、器種の意図的な選択を窺わせる。ほぼ完存する個体が多いが、小形丸底土器4点については個体の一部が破片で残存する。庄内形甕のうち1点は底部に焼成後穿孔がある。有段口縁鉢や小形丸底土器は同一器種内でほぼ同形・同大で型式差が認められない。またほとんどの土器は周溝の底に密着した状態で出土しており、堆積土で周溝が埋没する以前、すなわち墳墓の築造から間もない時点のもので、共存を認め得る一括性の高い土器群と見なすことができる。

これらの土器群は溝底を中心に散乱した状態で出土しており、原位置を保つものは皆無とみられる。出土状況等を勘案すると、周溝北土器群は墳丘上にあつた土器が風雨などの影響で周溝内に転落したもので、本来は墳頂部の北斜面からほど近い位置に、完形の状態で置かれていたと考えられる。同じく北側斜面からは樺材を組んだ木製品が出土している。滋賀県服部遺跡では古墳の周溝とみられる古墳時代後期前半の方形、円形の周溝状遺構から、箱形容器や曲物容器を用いた供献形態が知られており、「神事において、祭具などを容れるために使用される、「御供櫃」の先駆的なもの」と解されている(大橋1984)。久宝寺1号墳の場合でも、木製品と土器群とは位置的に接近しており、祭祀土器群を載せた設置台の残欠などの可能性を考慮する余地がある。

周溝北土器群は一括性が高く、器種や出土位置が限られ、また底部穿孔土器を含むことから、何らかの目的をもって選択された土器群であり、墓所という本墳の性格を考慮すると、葬送儀礼の反映として捉え得るものである。これらの土器は特に1号主体部の直北を中心として分布し、この被葬者を対象に葬送儀礼が行われた痕跡と考えられる。さらに限定すると、第1被葬者の頭位が北向きであり、その祭祀関連の行為が同じく北方向を重視して行われていたことになる。すなわち本墳の場合、墳丘北面が葬送儀礼上の正面としての扱いを受けたとみてよく、また第1被葬者が最も手厚く葬られていることから、既述の如く本墳の中心的位置を占める人物であつたことを裏づけている。

3. 築造時期

久宝寺1号墳の築造時期については、これまでの検証のように墳丘に伴う祭祀関連土器が鍵となる。周溝北土器群の組成中には庄内形甕が含まれるが、布留式甕は存在しない。有段口縁鉢は口径が比較的大きく器高も高い。胎土は精良で焼成はきわめて良好である。小形丸底土器は口縁部の立ち上がりが未発達である。墳頂土器群の直口壺は丸底で体部がほぼ球形である。型式学的変化が他器種より比較的現れやすい小形丸底土器は、菅原遺跡井戸SE03出土資料(大野1983)の同器種と比べて口縁部が僅かに短い、おおむね併行すると見なしてよく、土器編年上の布留式古段階、時代区分で古墳時代前期古段階に相当する。布留式甕は出土していないが、中河内では庄内形甕への執着が強く、この段階では組成中に残り得るので矛盾はない。実年代は3世紀第3～第4四半期、270～280年前後としておきたい。

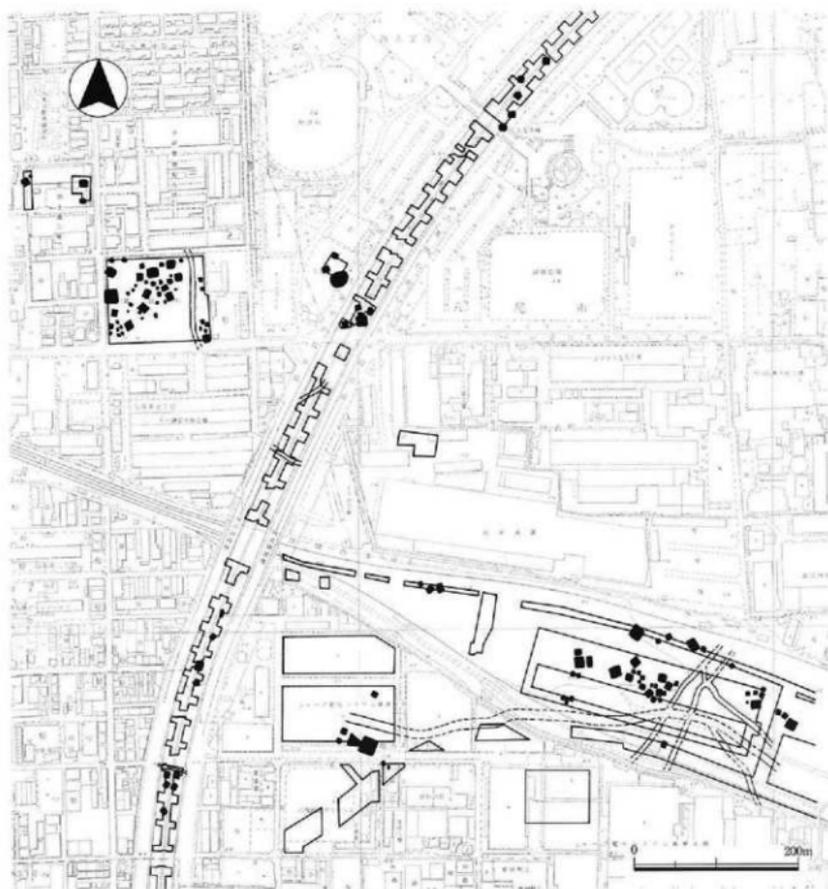
第3節 久宝寺墳墓群の構造

久宝寺墳墓群の全体像はまだ完全には解明されていないが、過去の調査結果に加え、その後の周辺地区を含めた調査(財)大阪府文化財センター編2002ほか)によって、遺跡の具体的様相が明らかになりつつある(第97図)。遺跡一帯ではこれまでに数十基に及ぶ墳墓が検出されており、その形成は少なくとも弥生時代後期新段階～末まで遡り、また新しいものは布留式後半の段階まで存続する。墳墓群は方形周溝墓・方墳・前方後方墳などで構成されており、その墓域は住居や田畑などの生活圏、生産域を交えながら東西・南北方向ともに数百mに及ぶ規模で広がることが判明している。これらの墳墓は均質に分布するのではなく、溝などによる区画や分布密度の疎密などにより、数基～10数基からなる幾つかの支群を形成する。なお、久宝寺1号墳は周辺調査区を含めて最も東で検出された墳墓であるが、竜華地区内における今回の調査区以東の調査によれば、本墳より東側一帯は布留式期を含め幾時期にもわたる大規模な河道が存在し、墳墓の形成のみならず安定した生活圏の存在を認めたい地形環境であったことが分かっている(後藤・本田1996、後藤・島崎・長田1998、原田2001ほか)。庄内～布留式期の遺構面は稀薄となり、墳墓も検出されていない。したがって久宝寺1号墳が、本墳墓群における東限の一部をなすものとみてよい。

久宝寺墳墓群の墳墓の形態には、正例的多数を占める方形と、ごく少数の前方後方形がある。方形墳墓の規模は、最小で一辺が2m、通常は数m前後の規模のものが最多で、10数m規模のものが前者より少なく存在する。いずれも高さは1m前後、あるいはそれ以下の低墳丘である。墳丘の方位は統一されておらず、計画性を窺うことはできない。おそらく地形や墳墓相互の占地関係などの制約を受けたものであろう。調査中のものを含め未整理・未発表の資料が多いため具体例の提示はできないが、およそ規模の比較的小さいものが庄内式期、大きいものが布留式期に属する傾向が強い。ただし庄内式期に大きい墳丘、布留式期に小さい墳丘をもつなどの例外もある。墳墓の築造期間の問題もあるが、布留式期には庄内式期と比べ、相対的に築造数が減少するようである。前方後方形の墳墓は、久宝寺墳墓群内では久宝寺南(その2)F地区第4遺構面第1号墓、および久宝寺遺跡第9次調査久宝寺古墳(成海・岡田・藤田1992)の2基である。F地区第1号墓は第V様式新～末段階の築造とされており、この時期における前方後方形周溝墓として注目される。また加美墳墓群では14号墓が前方後方形を呈する(大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会編1985)。一方、古墳時代前期前半とみられる久宝寺古墳は、久宝寺1号墳の西500mの位置に所在する。推定値で墳丘全長35m以上、周濠を含めて50mと、墳墓群内で卓越した規模を誇る。この時期では河内平野で最大級の墳丘をもつことから首長クラス古墳と考えられており、またこれには壘形埴輪を伴う。

墳墓群内で最も多用された木棺型式は組合式木棺であるが、1号墳ほか割竹形木棺も一部に採用されている。1号墳の割竹形木棺は墓壇内に直葬されており、他例でもほとんどの主体部が1号墳と同様に埋設されている。しかし第22次調査2号方形周溝墓では、棺底のみが遺存する組合式木棺において、棺の下部に粘土床の存在が確認された(原田2001a)。したがって一部の墳墓では、主体部の構築に際し粘土床ないしは粘土層が採用された可能性もある。しかし全体として副葬品は皆無もしくは稀薄で、管玉など極微量の遺物以外は検出されていない。

墳丘祭祀に関わる実態の一端は、久宝寺1号墳において墳頂土器群として把握することができた。周辺における過去の調査では久宝寺南(その1)3号墓(松岡1987)、加美3号墓・14号墓、亀井北(その2)1号方形周溝墓など、同じく布留式期墳墓の墳丘や周溝内に底部穿孔壺を伴うことが知られている。ま



第97図 久宝寺・加美墳墓群分布状況

た久宝寺墳墓群の近年の調査においても、同様の新例が次々と認知されるに至っている。これらの壺の形態は、いわゆる茶臼山型複合口縁壺であることが多い。こうした土器の機能については、ほぼ完全に原位置を保つ久宝寺1号墳の事例から還元して、1号墳に準じた墳丘祭祀に伴う蓋然性が極めて高まったといえる。

第4節 周溝墓から古墳へ

久宝寺墳墓群では庄内式の段階において、墳墓はおおむね小規模で、また築造数は造営時期幅を考慮しても多いようである。こうした小墳丘の様相は、家族など共同体を構成する小単位、あるいはこれに準じた集団によって造墓活動が行われた可能性を窺わせる。しかし群内には同時期に比較的大きな墳丘をもつ墳墓も築造されており、少なくとも他の小墳丘とは規模の上で一線を画し、上位に位置づけられ

るべき階層の存在を認め得る。したがって、血縁や地縁などの関係を紐帯とした小集団が各支群を形成し、次第に墓域を拡大させていったのが墳墓群の発展過程の基本的な実態であろうが、その中で優越的な規模をもつ墳墓の存在は、おそらく弥生後期後葉頃から庄内式期にかけて、後の地域首长層につながる有力階層が成長し、階層分化が進行しつつある証左として捉えられよう。

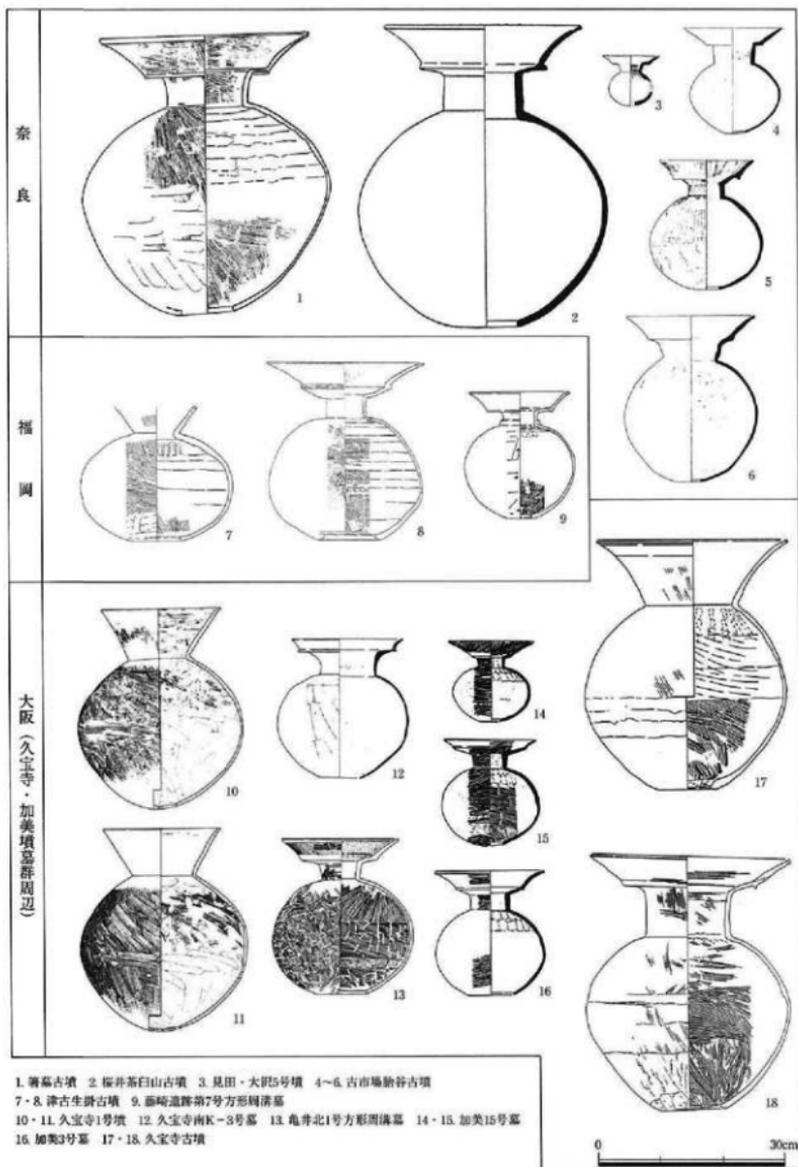
布留式の段階に入ると造墓活動に変化が現れ、傾向として墳丘規模が相対的に拡大し、築造数が減少する。こうした実態は被葬者層の整理統合を暗示するもので、またこれと連動して埴輪に通じる新たな墳丘祭祀形態の出現、割竹形木棺の採用など、古墳の葬送デザインの部分的受容などが付随する。

特に注目すべきは底部穿孔土器の存在である(第98図)。底部穿孔土器を墳丘祭祀に用いる風習は庄内式併行以前の段階から東海、吉備などの地域でもみられるが、特に「茶白山型」の複合口縁壺に底部穿孔をもつものが、定型化した出現期の大型墳に散見されることはよく知られている。その名祖となった桜井茶白山古墳では、後円部墳頂において連続的に並べられた底部穿孔複合口縁壺が、主体部の周りを方形に圍繞していた(中村・上田1961)。また箸墓古墳(中村・笠野1976)や福岡県津古生掛古墳(宮田1988)でも墳丘や周濠などから同様の壺が出土しており、埴輪祭祀定着以前の葬送儀礼の一端を示すものといえる。久宝寺1号墳で用いられた底部穿孔直口壺は、方形区画の形成に必要な最低限の4個体が使用されており、土器と土器の間は区画を意識した仮想線で結ばれていたと推定できる。このような状況は出現期古墳における底部穿孔壺を用いた方形圍繞の簡略形と見なし得る。同様の底部穿孔壺が、久宝寺・加美墳墓群やその周辺域にみられることは前記した通りである。したがって布留式期の中河内地域平野部において、普遍性をもった祭祀形態と捉えることができ、大和をはじめ有力地域における出現期の古墳と、淵源を同じくする葬送儀礼の実態のあったことが判明した。

久宝寺古墳では直口壺と複合口縁壺を象った壺形埴輪が墳丘上を巡る状況が確認されており、こうした祭祀形態の祖形を久宝寺1号墳の墳丘祭祀まで遡らせることが可能である。したがって直接的には埴輪祭祀の概念が外部から移植されたものであっても、久宝寺墳墓群内で前段階の祭祀行為が伝統的に継承されていたことが窺える。底部穿孔壺の器種は久宝寺1号墳が直口壺であること以外、他はすべて複合口縁壺であり、数量的には後者が圧倒的に多い。穿孔の状態を比較すると久宝寺1号墳の直口壺が小さく不定形であるのに対し、他の墳墓の複合口縁壺には比較的安定した円形の穿孔が設けられている。したがって久宝寺1号墳はその築造時期も含めて、墳墓群内でも古い段階の祭祀形態をとどめたものと解し得る。直口壺に底部穿孔を設けた例は、複合口縁壺に比べてはるかに少ないが、津古生掛古墳でも検出例がある(7)。したがって墳丘祭祀にあたっては、複合口縁壺と直口壺の2系統の底部穿孔壺が存在したと考えられ、また久宝寺古墳では壺形埴輪に直口壺形(17)、複合口縁壺形(18)が共存することから、墳墓群内において直口壺による祭祀が命脈を保っていたことを暗示する。

一方、大和では大型墳の他にも、見田・大沢古墳群など丘陵尾根上の小規模な墳墓に、底部穿孔土器を伴う例が知られている(亀田ほか1982)。同古墳群における布留式期初頭の方墳は一辺10数mで、主体部に割竹形木棺を採用する。また5号墳の掘割りからは底部穿孔複合口縁壺が出土している。このような布留式期における小規模墳は、丘陵上のものが台状墓系、平地部のものが周溝墓系と系譜が異なるが、基本的には立地環境の相違だけで、墳丘規模や主体部構造などの点で両者に明確な差引きはできない。また副葬品は墳墓ごとに個性があるが、墳丘祭祀の側面から共通の原理を抽出できよう。

以上のような変化は、伝統的墓制が単に自律的展開の結果として到達したものとは捉え難く、その背後に古墳祭祀を意識した葬送デザインの移植を想定しなければならない。したがって、墳墓群の変遷上



第98図 前期古墳に伴う底部穿孔土器・壺形埴輪

の画期を布留式古段階に求め、この時点で周溝墓から古墳への墓制の変化と捉える。なお、前方後方墳で埴輪を有する久宝寺古墳の築造はやや下るが、この段階でも方形墳が継続して築造されている。これらは同一の集団が、共通の造墓思想下に形成した墳墓群のはずであり、その一方を古墳、他方を周溝墓とする定義づけは自ら矛盾を包括する。したがって当該期における周溝墓や台状墓の流れを汲む墳墓は、共に大形墳と併行する時期に築造された小形墳のグループとして包括すべきであろう。

まとめ

久宝寺1号墳の築造は、既に大和中枢部で有力首長層の連合政権が構築され、首長系列の表徴たる大形前方後円墳が続々と造営されつつある時代に相当する。しかしながら、1号墳をはじめ久宝寺墳墓群の墳丘や副葬品などは、大和その他の有力地域における前方後円墳など、定型化した首長系列の古墳とは外貌、内容とも比べようもなく劣っている。久宝寺墳墓群の動態は、あくまでも地方の在地勢力の範囲で捉えるべき事象であり、布留式における群構造の画期をもって周溝墓から古墳へと、墳墓の定型化を伴わない地域レベルでの変容が成立したと解しておく。

久宝寺墳墓群と加美墳墓群の相互関係については、それぞれの群構造が基本的に連動しながら変遷しているものとみてよい。この両者は地理的に接近して線引きが困難であり、その造営集団は同一あるいは近縁の共同体を母胎とする可能性が高い。しかし副葬品がほとんど皆無の久宝寺墳墓群に比べ、加美墳墓群では主体部に編組座組内行花文鏡の破片(2号墓)や小型仿製鏡(5号墓)を伴うなど、現状では内容に相違が認められ、系譜を異にする可能性も捨てきれない。なお、久宝寺・加美墳墓群において前方後方形の墳丘は、少なくとも弥生時代後期新段階に出現している。加えて墳墓群内では布留式期に至るまで方形を主体とし、また布留式期において卓越した墳丘規模をもつ墳墓が前方後方墳であることなど、畿内、しかも河内という立地でありながら前方後円墳が採用されていない。この事実は久宝寺・加美墳墓群の造営集団が、前方後円形を主導する倭政権の古墳築造原理とは、本来の系譜関係を異にする可能性を示唆している。久宝寺・加美墳墓群における旧来の墳形の温存と、倭政権が推進した古墳葬送デザインの一部採用との共存は、本墳墓群造営集団の政治的統合プロセスを暗示するものであり、また土着的な様相が根強く残存することから、政治的には下位に甘んじた共同体であったことは否めない。

これまでは資料の量的な問題もあって、久宝寺・加美墳墓群は庄内式期・布留式期の区別なく周溝墓と認識されてきた。しかし既述の如く、布留式期段階の造墓活動は地域的紐帯の域を脱し、より広域な政治社会の中で位置づけが可能である。単に墳形の大小のみならず、倭政権の成立による古墳社会の到来に伴った墓制変化を重視すべきであろう。したがって伝統的な周溝墓系墳墓の遺制と見なすのではなく、政治的に再編され序列づけられた底辺クラスの古墳という新たな概念で捉え直すべきである。河内平野において小古墳が群在する様は、古墳中期の長原古墳群などで周知されているが、久宝寺・加美墳墓群はその先駆形態とも捉え得る内容を備えていた。本例を含め、徐々に姿を現しつつある久宝寺墳墓群の様相は、これまで詳細ではなかった平野部における出現期古墳の実態を示すものであり、その定義づけや周辺の諸問題について再考すべき段階に至ったと考える。

本考察をまとめるにあたり、岡野哲紀・原田昌則・福岡澄男各氏から有用なご助言を賜った。記して感謝の意を表する。

文献

- 一瀬和夫 1987「第三章 調査の成果－検出遺構－」『久宝寺南(その2)－久宝寺・加美遺跡の調査－』(財)大阪文化財センター
- 大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会編 1985「加美遺跡現地説明会資料」(文献①)
- (財)大阪府文化財センター編 2002「久宝寺遺跡現地説明会資料」
- 大野 薫 1983「萱振遺跡出土の古式土師器について」『萱振遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 大橋信弥 1984「供献の諸形態」『服部遺跡発掘調査報告書V』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 奥 和之・山上 弘ほか 1986『亀井北(その2)』(文献②)
- 亀田 博ほか 1982『見田・大沢古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第44冊 奈良県立橿原考古学研究所 (文献③)
- 後藤信義・本田奈都子 1996『久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第6集
- 後藤信義・島崎久恵・長田芳子 1998『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第26集
- 小林義孝・西川寿勝『久宝寺遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1992
- 中村春寿・上田宏範 1961『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊 (文献④)
- 中村一郎・笠野 毅 1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号 (文献⑤)
- 成海佳子・岡田清一・藤田道子 1992「久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- 浜石哲也 1982『磯崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 (文献⑥)
- 原田昌則 2001a『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告68
- 原田昌則 2001b『久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告69
- 藤井淳弘 1998「久宝寺遺跡(96-641)の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告58 八尾市教育委員会
- 松岡良彦 1987「第三章 B、Cトレンチの調査成果」『久宝寺南(その1)』(財)大阪文化財センター (文献⑦)
- 宮田浩之 1988『津古生掛遺跡II』小郡市文化財調査報告書第44集 小郡市教育委員会 (文献⑧)

土器図面出典

1. 文献⑤ 2. 文献④ 3～6. 文献③ 7・8. 文献⑧ 9. 文献⑥ 10・11. 本書 12. 文献⑦ 13. 文献② 14～16. 文献① 17・18. 原田昌則 2001「河内平野における古墳時代の墳墓」『第43回大阪府埋蔵文化財研究会資料』(財)大阪府文化財センター

調査番号	調査名称	層位	地区	調査種別	調査内容	調査高	調査径	色調	調査要	崩土	構成
25	30 45 SK092	2-2面	c5 I	須志部 高杉並	(125)	5.1	(2.6)	外 N6.0M 内 NG.0M	ココナテ、天井部(板ナズ)	崩密(長石含む)	良好
26	30 46 - SK092	2-2面	c5 I	須志部 高杉並	(133)	(6.4)	-	外 NG.0M 内 NG.0M	ココナテ、天井部(板ナズ)	崩密(極小な長石含む)	良好
27	36 46 -	3-1層	c5IV	須志部 壺	-	(12.8)	-	外 N3.0M 内 N3.0M	口縁部外面流状、体部外面ココナテ、底面平行タテキ	崩密	良好
28	36 46 -	3-2層	b4 II	土師器 壺	10.9	16.3	-	外 5YR6/4L-2.0i,黄褐色 内 5YR5.4L-2.0i,黄褐色	口縁部ココナテ、体部外面ハナ、ナズ、口縁部流状	崩密(0.5~2mm程度の長石含む)	良好
29	36 46 -	3-3層	b9 I	土師器 壺	(12.3)	(8.0)	-	外 5YR6.4L-2.0i,黄褐色 内 7.5YR5.4L-2.0i,黄褐色	口縁部外面流状、体部外面ハナ、内面ナズ、布理火炎	やや粗(0.5~2mmの長石含む)	良好 (やや粗)
30	36 -	3-3層	c6 III	土師器 壺	-	(2.1)	-	外 10YR6.3L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.3L-2.0i,黄褐色	ユビナサエ、脚台3式	極小~3mm程度の長石含む	良好
31	36 -	3-3層	c6 III	土師器 壺	-	(2.0)	-	外 10YR6.7L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.7L-2.0i,黄褐色	ユビナサエ、脚台3式	極小~3mm程度の長石含む	良好
32	36 -	3-3層	c6 II	土師器 壺	-	(1.9)	-	外 10YR7.1L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.2L-2.0i,黄褐色	ユビナサエ、脚台3式	極小~3mm程度の長石含む	良好
33	36 -	3-4層	c7 II	土師器 壺	-	(2.4)	-	外 2.5Y7.1L-1.0i 内 2.5Y7.1L-1.0i	ユビナサエ、脚台3式	極小~3mm程度の長石含む	良好
34	40 46 -	4-1面	a7 II	土師器 壺	15.5	(18.1)	-	外 2.5Y5.2L-2.0i,黄褐色 内 2.5Y4.2L-2.0i,黄褐色	口縁部ココナテ、体部外面タテキ、内面ハナナズ	崩密(1~4mmの長石、石英、角閃石含む)	良好
35	40 46 -	4-1面	c6 I	土師器 壺	15.3	22.9	-	外 7.5YR6.4L-2.0i,黄褐色 内 7.5YR6.4L-2.0i,黄褐色	口縁部ココナテ、体部外面タテキ、内面ハナナズ	崩密(1mm以内の角閃石、石英、石英含む)	良好
36	40 46 -	4-1面	c4 I	土師器 壺	13.9	18.7	-	外 10YR6.3L-2.0i,黄褐色 内 5YR5.6L-2.0i,黄褐色	口縁部ココナテ、体部外面タテキ、内面ナズ、ココナテ	崩密(0.5~2mmの長石、石英、角閃石含む)	良好
37	40 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	14.8	(6.7)	-	外 5YR5.6L-2.0i,黄褐色 内 5YR5.6L-2.0i,黄褐色	口縁部ココナテ、体部外面ハナ、ナズ、内面ハナナズ	やや粗(1~5mmの長石含む)	良好
38	40 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	(16.5)	(7.06)	-	外 10YR6.2L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.2L-2.0i,黄褐色	口縁部ココナテ、体部外面タテキ、内面ナズ、ココナテ	やや粗(0.5~3mmの長石、石英、角閃石含む)	良好
39	40 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	-	(17.3)	3.9	外 10YR6.2L-2.0i,黄褐色 内 2.5Y7.2L-2.0i,黄褐色	底面外面タテキ、内面ナズ	1~4mm程度の長石含む	やや甘い
40	40 47 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	-	(11.0)	瓶径(9.7)	外 2.5Y7.2L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.3L-2.0i,黄褐色	底面外面タテキ、内面ハナ	2mm以下の長石含む	やや甘い
41	40 47 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	(16.6)	(6.15)	-	外 7.5YR6.4L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.4L-2.0i,黄褐色	体部外面タテキ	やや粗(0.5~2mmの長石、石英、角閃石含む)	良好
42	40 47 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	-	(7.0)	瓶径(10.8)	外 10YR6.3L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.2L-2.0i,黄褐色	外内面ハナナズ、ハナ、透孔3方向	極小~2mm程度の長石含む	良好
43	40 47 -	4-1層	a5 I	土師器 壺	-	(7.0)	瓶径(10.6)	外 10YR6.3L-2.0i,黄褐色 内 10YR6.3L-2.0i,黄褐色	外内面ハナナズ、ハナ、透孔3方向	1~4mm程度の長石含む	良好
44	47 -	大塚跡2	a7 III	赤生土器 壺	-	-	-	外 2.5Y7.2L-2.0i,黄褐色 内 2.5Y7.2L-2.0i,黄褐色	ナズ	極小~3mm程度の長石、石英含む	良好
45	47 -	5-2層	c7 IV	赤生土器 壺	(9.5)	(2.9)	-	外 7.5YR7.3L-2.0i,黄褐色 内 10YR7.1L-2.0i,黄褐色	外内面ハナ、内面ナズ	極小~1mmの長石、石英含む	良好
46	47 -	5-2層	a7 IV	赤生土器 壺	19.0	(12.0)	-	外 2.5Y5.2L-2.0i,黄褐色 内 2.5Y5.2L-2.0i,黄褐色	外内面ハナ、内面ナズ	やや粗(0.5~3mmの長石含む)	良好
47	47 -	5-2層	c8 I	赤生土器 壺	-	(2.2)	5.6	外 2.5Y5.2L-2.0i,黄褐色 内 2.5Y5.2L-2.0i,黄褐色	外内面ハナ、内面ナズ	極小~1mmの角閃石と極小~2mmの長石含む	良好
48	47 -	5-2層	a7 I	赤生土器 壺	-	6.7	(6.7)	外 2.5Y4.2L-2.0i,黄褐色 内 5Y4.2L-2.0i,黄褐色	外内面ハナ、内面ナズ	密(0.5~3mmの長石、石英、角閃石含む)	良好
49	48 -	6-1層	-	赤生土器 壺	(16.6)	(6.2)	-	外 7.5YR6.4L-2.0i,黄褐色 内 2.5Y5.2L-2.0i,黄褐色	外内面ナズ、須志部流状(線以上)、体部ナズ	やや粗(0.5~3mmの長石含む)	良好

検出 番号	図面 番号	道橋名	層位	地区	種類	残存部	口径 (cm)	残存長 (cm)	壁厚 (cm)	調査・取扱要素	胎土	色 調	脆性	備考
49	49	48	-	c5-1	深鉢	口縁部	-	293	0.6	外 頸口突帯	5cm以下の石炭・長石	外 10YR4/2黄褐色 内 10YR3/3赤褐色	無	長期未調査
50	49	48	-	6-1層	深鉢	口縁部	-	87	0.6	外 頸口突帯	1cm以下の石炭・角閃石	外 25Y4/2黄褐色 内 25Y5/3黄褐色	無	長期未調査
51	49	48	-	6-1層	深鉢	体部	-	9.5	0.6	外 頸口突帯	3cm以下の角閃石・石英	外 25Y4/2黄褐色 内 25Y5/3黄褐色	無	長期未調査
52	49	48	SD154	6-1層	深鉢	体部	-	6.5	0.5	外 頸口突帯	2cm以下の石炭・長石	外 25Y4/2黄褐色 内 25Y5/3黄褐色	無	長期未調査
53	49	48	-	6-1層	深鉢	体部	-	6.0	0.6	外 頸口突帯	3cm以下の石炭・長石	外 25Y4/2黄褐色 内 5Y2/2黄褐色	無	長期未調査
54	49	48	-	c5-1	深鉢	体部	-	6.5	0.5	外 頸口突帯	2cm以下の石炭・角閃石	外 25Y5/2黄褐色 内 25Y6/1黄褐色	無	長期未調査
55	49	48	-	c8-1	深鉢	体部	-	4.5	0.6	外 頸口突帯	3cm以下の石炭・角閃石	外 25Y5/2黄褐色 内 10YR5/2黄褐色	無	長期未調査 長径分帯付
56	49	48	-	6-1層	深鉢	口縁部	-	11.0	0.6	外 頸口突帯	3cm以下の石炭・長石・角閃石・雲母	外 25Y6/2黄褐色 内 25Y6/2黄褐色	無	追加未調査
57	49	48	-	6-1層	深鉢	口縁部	-	7.7	0.5	外 頸口突帯	2cm以下の石炭・雲母	外 25Y4/1黄褐色 内 25Y4/1黄褐色	無	追加未調査
58	49	48	-	6-1層	深鉢	体部	-	11.1	0.7	外 頸口突帯	3cm以下の石炭・1mm以下の角閃石	外 25Y4/2黄褐色 内 25Y4/2黄褐色	無	追加未調査
59	49	48	-	6-1層	異形	底部	(底径) 3.7×4.0	0.6	0.6	外 ナテ	2cm以下の角閃石・長石・雲母	外 25Y6/2黄褐色 内 25Y6/2黄褐色	無	追加未調査
61	52	48	SK171	6-2層	深鉢	体部	(底径) (24.9)	0.5	0.5	外 頸口突帯・ケズリ	4cm以下の石炭・角閃石・雲母	外 10YR5/3赤褐色 内 25Y6/2黄褐色	無	長期未調査
62	52	48	SK181	6-2層	深鉢	体部	(底径) (26.5)	0.7	0.7	外 頸口突帯・条痕	3cm以下の石炭・長石・角閃石	外 25Y5/2黄褐色 内 25Y6/2黄褐色	無	長期未調査
63	54	49	NR201	6-3-4層	深鉢	口縁部	-	8.2	0.6	外 液状口縁	5cm以下の石炭・長石	外 25Y6/2黄褐色 内 10YR5/3赤褐色	有	後期中盤
64	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	口縁部	-	4.6	0.5	外 液状口縁	3cm以下の石炭・長石・雲母	外 25Y6/2黄褐色 内 25Y7/2黄褐色	有	後期中盤
66	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	口縁部	-	4.5	0.7	外 液線状	5cm以下の石炭・長石	外 10YR5/3赤褐色 内 10YR5/3赤褐色	有	後期中盤
67	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	口縁部	-	6.5	0.8	外 液線状	2cm以下の石炭・長石	外 25Y5/2黄褐色 内 25Y5/4黄褐色	有	後期中盤
68	54	49	NR201	6-4層	鉢	口縁部	-	6.0	0.7	外 液線・塊状	2cm以下の石炭・石英	外 25Y4/1黄褐色 内 25Y6/2黄褐色	無	後期後盤
69	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	体部	-	7.0	0.4	外 液線・塊状	2cm以下の石炭・雲母	外 25Y6/2黄褐色 内 25Y6/2黄褐色	有	後期後盤
70	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	口縁部	-	7.3	0.5	外 不明	2cm以下の石炭・長石	外 25Y5/1黄褐色 内 25Y5/2黄褐色	有	後期後盤
71	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	口縁部	-	6.0	0.4	外 不明?	1cm以下の石炭・長石	外 25Y5/2黄褐色 内 5Y6/1灰	有	後期後盤
72	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	体部	-	6.2	0.5	外 四層	2cm以下の石炭・長石	外 25Y4/2黄褐色 内 10YR5/4赤褐色	有	後期未調査
73	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	口縁部	-	4.8	0.8	外 四層・口唇部凹線	2cm以下の石炭・長石	外 25Y5/2黄褐色 内 25Y5/2黄褐色	有	後期未調査
73	54	49	NR201	6-3-4層	鉢	体部	-	4.0	0.5	外 四層	1cm以下の石炭・長石・角閃石	外 10YR4/3赤褐色 内 10YR4/3赤褐色	有	後期未調査

採石場番号	採石場名称	所在地	地区	種類	形状	口径 (cm)	坑深 (cm)	採石量 (cm)	調整・設備要素	結土	色調	図説	備考
74	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	4.0	0.6	外 沈積砂 内 ナテ	1.5m以下の石英-長石	外 2.5Y5.3/2.0灰黄 内 2.5Y3.2/0.8灰黄	無	後期末期 宮尾 後期末期
75	54 49 NR201	63-4層	-	外	体部	-	6.0	0.5	外 凹縁 内 ナテ	1m以下の石英-ナテ	外 10YR7/2-2.5黄 内 2.5Y6.2/0.8黄	有	後期末期
76	54 49 NR201	64層	-	外	口縁部	-	5.5	0.6	外 三又板、礫板 内 ナテ	1m以下の石英-長石	外 2.5Y6.2/0.8黄 内 2.5Y4.1/0.8灰	有	後期末期
77	54 49 NR201	63-4層	-	外	体部	-	3.0	0.6	外 ナテ 内 ナテ	1m以下の石英-長石	外 10YR5.2/2.5黄褐 内 2.5Y6.2/0.8黄	有	後期末期
78	54 49 NR201	64層	-	外	体部	-	6.5	0.4	外 三又板 内 ナテ	1.5m以下の石英-長石	外 2.5Y4.1/0.8灰 内 2.5Y4.2/0.8灰黄	有	晚期
79	54 49 NR201	64層	-	外	体部	-	4.0	0.4	外 条板 内 ナテ	0.5m以下の石英-長石	外 2.5Y5.2/0.8灰黄 内 2.5Y5.2/0.8灰黄	無	晚期
80	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	8.2	0.6	外 割田口縁、条板 内 ナテ	1m以下の石英-黒色砂	外 2.5Y5.2/0.8灰黄 内 2.5Y5.2/0.8灰黄	無	晚期
81	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	8.7	0.5	外 割田口縁、条板 内 ナテ	1m以下の石英-長石	外 2.5Y6.2/0.8黄 内 5Y7.2/0.6白	無	晚期
82	54 49 NR201	64層	-	外	口縁部	-	5.7	0.5	外 条板 内 ナテ	3m以下の石英-長石	外 2.5Y5.2/0.8灰黄 内 2.5Y4.2/0.8灰黄	有	晚期
83	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	8.5	0.5	外 割田口縁、条板 内 ナテ	1m以下の石英-長石	外 10YR6.0/0.9黄 内 N4.0/0.6	無	晚期
84	54 49 NR201	64層	-	外	口縁部	-	8.0	0.7	外 割田口縁 内 ナテ	2m以下の石英-黒雲母	外 2.5Y6.2/0.8黄 内 2.5Y6.1/0.8灰	有	晚期
85	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	5.2	0.5	外 凹縁 内 ナテ	2m以下の石英-長石-角閃石	外 2.5Y4.2/0.8灰黄 内 2.5Y5.2/0.8灰黄	有	晚期
86	54 49 NR201	64層	b8Ⅲ	外	口縁部	-	12.5	0.6	外 凹縁 内 ナテ	2m以下の石英-黒雲母	外 2.5Y6.2/0.8黄 内 2.5Y5.2/0.8灰	無	晚期
87	54 49 NR201	63-4層	-	外	体部	-	8.5	0.5	外 凹縁 内 ナテ	1m以下の石英-長石-雲母	外 2.5Y6.2/0.8黄 内 2.5Y5.2/0.8灰	有	晚期
88	54 49 NR201	64層	-	外	体部	-	6.8	0.6	外 條板 内 ナテ	1.5m以下の石英-長石	外 2.5Y5.2/0.8灰黄 内 2.5Y5.1/0.8灰	有	晚期
89	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	5.6	0.5	外 ナテ 内 ナテ	2m以下の石英-長石	外 2.5Y5.2/0.8灰黄 内 2.5Y3.1/0.8灰	有	晚期
90	54 49 NR201	64層	b5Ⅱ	外	口縁部	-	3.5	0.5	外 口縁部沈積 内 ナテ	1.5m以下の石英-長石	外 2.5Y6.2/0.8黄 内 2.5Y5.2/0.8灰黄	有	晚期
91	54 49 NR201	64層	-	外	口縁部	-	3.8	0.4	外 口縁部沈積 内 ナテ	1m以下の石英-長石	外 2.5Y4.2/0.8灰黄 内 N3.0/0.6	有	晚期
92	54 49 NR201	64層	-	外	口縁部	-	8.0	0.5	外 口唇部沈積 内 ナテ	3m以下の石英-黒雲母	外 10YR5.2/2.5黄褐 内 10YR5.2/2.5黄褐	有	晚期
93	54 49 NR201	64層	a6Ⅰ	外	体部	-	22.5	0.5	外 割田条部、ケズリ 内 ナテ	4m以下の石英-角閃石	外 10YR5.2/2.5黄褐 内 10YR5.2/2.5黄褐	無	後期末期
94	54 49 NR201	63-4層	-	外	口縁部	-	5.5	0.6	外 ナテ 内 ナテ	1m以下の石英-長石	外 2.5Y7.2/0.8黄 内 2.5Y7.2/0.8黄	有	晚期
95	54 49 NR201	64層	-	外	体部	-	6.5	0.5	外 ナテ 内 ナテ	1.5m以下の石英-長石	外 5Y3.1/0.7黄 内 5Y3.1/0.7黄	有	晚期
96	54 49 NR201	63-4層	-	外	底部	(底径) 2.5 (底径) 3.6	0.4	0.4	外 ナテ 内 ナテ	1.5m以下の石英-長石	外 10YR6.2/2.5黄褐 内 10YR6.2/2.5黄褐	無	晚期
97	54 49 NR201	64層	-	外	底部	(底径) 3.6 (底径) 5.0	0.5	0.5	外 ナテ 内 ナテ	2m以下の石英-角閃石	外 5Y5.2/0.8ナテ 内 2.5Y5.2/0.8黄	無	後-晚期

番号	図版 番号	地区	器種・形式	流量	口調整		調整		体部		色調	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面	外面	内面			
98	78	52	b9Ⅱ	有段口線鉢 口径 器高 6.4	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.4(1)に赤い隈 7.5YR6.4(1)に赤い隈	0.5mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
99	78	52	b9Ⅱ	有段口線鉢 口径 7.1	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.3(1)に赤い隈 10YR7.2(1)に赤い隈	0.5mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
100	78	52	b9Ⅱ	有段口線鉢 口径 17.7 器高 6.8	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.3(1)に赤い隈 2.5Y7.1(1)白	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器 上縁打欠
101	78	52	b9Ⅲ	有段口線鉢 口径 17.2 器高 9.5	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.3(1)に赤い隈 7.5YR6.3(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
102	78	52	b9Ⅰ	小形 丸底土器 口径 10.9 器高 7.7	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	5YR3.1(1)に赤い隈 2.5YR6.3(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
103	78	52	b9Ⅱ	小形 丸底土器 口径 10.7 器高 7.9	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.4(1)に赤い隈 10YR7.2(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
104	78	52	b9Ⅱ	小形 丸底土器 口径(11.2) 器高 8.5	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.4(1)に赤い隈 10YR7.2(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
105	78	52	b9Ⅲ	小形 丸底土器 口径(10.7) 器高(8.0)	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	欠損	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR4.3(1)白 7.5YR5.4(1)に赤い隈	0.5mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器 体部外縁にへろ番号?
106	76	53	b9Ⅲ	小形 丸底土器 口径 9.9 器高 8.2	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	10YR8.2(1)赤黒 2.5Y7.6(1)黄灰	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
107	78	53	b9Ⅰ	小形 丸底土器 口径 10.5 器高 8.4	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	7.5YR5.4(1)に赤い隈 7.5YR6.3(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	周器内土器
108	76	-	b9Ⅱ	小形 丸底土器 口径 7.0	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB 下半横方向ケズリ後、横方向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	10YR5.3(1)に赤い隈 10YR7.2(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒、赤色 酸化物を器かみに含む が粗良	周器内土器
109	76	53	b9Ⅱ	庄内形甕 口径 18.7 器高 28.8	外面 横方向ハナ コナテ	外面 横方向ハナ コナテ	外面 内面	右上方の顔面ケズリ後、横方向ハナ コナテ	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	10YR5.2(1)赤黒 10YR6.2(1)赤黒	2mm以下の内角石、石 葉などを器か	周器内土器
110	76	53	b9Ⅲ	庄内形甕 口径 20.4	外面 横方向ハナ コナテ	外面 横方向ハナ コナテ	外面 内面	右上方の顔面ケズリ後、横方向ハナ コナテ	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	2.5Y7.6(1)黄灰	約四石、五石、五石含 生跡を器か	周器内土器 口縁打欠 生跡を器か
111	76	53	c10Ⅲ	甕口壺 口径 10.2 器高(10.3)	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	外面 内面	横方向ミヤキB 横方向ミヤキB	欠損	丸底 ケズリ後、不定方 向ミヤキB	5YR3.1(1)に赤い隈 7.5YR6.3(1)に赤い隈	1mm以下の砂粒を器か みに含むが粗良	横口甕

番号	図号 番号	地区	種類・形式	法要	口縁部		調整体部		底面	色調	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面				
112	79	b10Ⅲ	直口壺	口径(141) 器高 33.2	外面 内面	縦方向ハケ 横方向ハケ	外面 内面	縦方向ハケ、体部中央部淺溝穿孔 上半部方向ハケ後、下半部ナズ	丸底 ナズ、燒成底面	外 2.5Y6.2/赤黄 内 2.5Y6.2/赤黄	4mm以下の角四石、長石など多量に含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
113	79	b9Ⅲ	直口壺	口径 18.8 器高 33.6	外面 内面	縦方向ハケ(厚縁) ナズ、ヨコナズ	外面 内面	縦方向ハケ、下半に燒成底面穿孔 上半部方向ハケ後、下半部ナズ	丸底 ナズ、燒成底面 穿孔	外 2.5Y7.2/赤黄 内 2.5Y7.2/赤黄	1mm以下の角四石、4mm以下の石灰など多量に含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
114	79	c9Ⅱ	直口壺	口径 18.4 器高 32.7	外面 内面	縦方向ハケ ナズ、ヨコナズ	外面 内面	縦方向ハケ、下半部ナズ	丸底 ナズ、燒成底面 穿孔	外 10YR5.3/赤い黄褐 内 10YR5.2/赤黄褐	1mm以下の角四石、5mm以下の石灰など多量に含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
115	79	b10Ⅲ b9Ⅲ	直口壺	口径(17.4) 器高 34.2	外面 内面	縦方向ハケ	外面 内面	縦方向ハケ、下半部ナズ、下半部ナズ	丸底 ナズ、燒成底面 穿孔	外 2.5Y6.2/赤い黄褐 内 2.5Y6.2/赤黄	4mm以下の角四石、長石など多量に含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
116	82	c9Ⅰ b10Ⅲ	大形壺	口径 28.5 器高 36.5	外面 内面	ヨコナズ 縦方向ハケ	外面 内面	上半部方向ハケ、下半部方向ハケ、上半部に多量の小さな器の足取部	丸底 ナズ	外 2.5Y7.2/赤黄 内 2.5Y7.2/赤黄	5mm以下の石灰、角四石など多量に含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
117	81	b10Ⅲ c10Ⅰ	瓶口口縁壺	口径 22.4 器高 61.6	外面 内面	上半部、下半部方向ハケ 上半部方向ハケ、下半部ナズ	外面 内面	縦方向ハケ、上半部分のナズ	深いハケ 底径5.6cm	外 7.5Y5.4/赤い黄褐 内 10YR5.4/赤い黄褐	3mm以下の長石、角四石、赤黄など含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
118	82	c9Ⅰ	直口壺	口径 14.4 器高(23.0)	外面 内面	ナズ、ヨコナズ	外面 内面	右上部9/16年後、縦方向ハケナズ	欠損	外 10YR5.3/赤い黄褐 内 10YR5.2/赤黄褐	2mm以下の石灰、赤黄	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
119	82	c9Ⅲ	瓶口口縁壺	口径 24.9 器高 33.1	外面 内面	縦方向ハケナズ、上半部方向ハケ、下半部ナズ	外面 内面	縦方向ハケ、縦方向ハケナズ	丸底 ナズ	外 2.5Y7.2/赤黄 内 2.5Y7.2/赤黄	4mm以下の長石、黒色石灰、赤色酸化鉄などを含む	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍
120	82	c9Ⅲ	注内形壺	口径 15.1 器高(4.5)	外面 内面	ヨコナズ	外面 内面	右上部9/16年後、下半部ナズ	欠損	外 10YR5.3/赤黄 内 10YR5.2/赤黄	1mm以下の石灰、角四石、赤黄	埴土 口縁部、体部外面に赤黄、生動黄藍

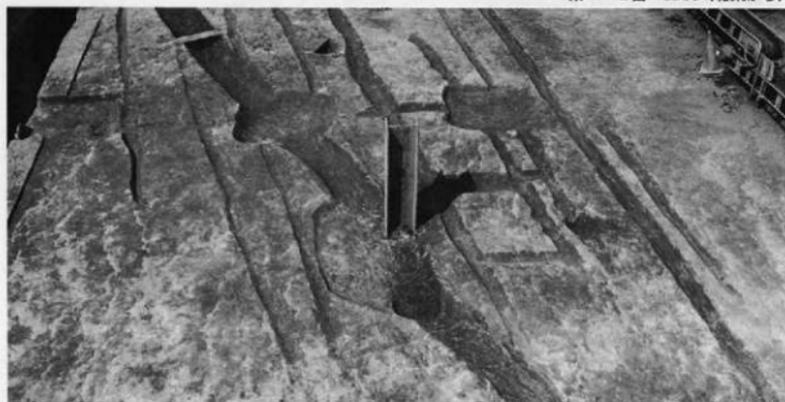
第13表 石器観察表

番号	図号 番号	通称名	層位	地区	種類	法要(cm)		材質	時代
						全長	最大幅		
S1	47	50	-	c5Ⅰ	石盤	(32)	1.3	0.3	弥生時代中期
S2	47	50	-	c5Ⅱ	石盤	(3.3)	1.3	0.3	弥生時代中期
S3	47	50	-	b9Ⅱ	石盤	(4.3)	1.6	0.4	弥生時代中期
S4	47	50	-	b9Ⅲ	石盤	5.1	1.5	0.5	弥生時代中期
S5	47	50	-	b9Ⅱ	石盤	(4.1)	1.7	0.6	弥生時代中期
S6	47	50	-	a8Ⅲ	陶器	8.6	3.1	1.1	弥生時代中期
S7	49	50	SD/65	c7Ⅱ	石盤	5.6	1.4	0.8	縄文時代後期?

图 版



第1-2面 SD004(北東から)



第1-3面 SD002・耕作溝群(南から)

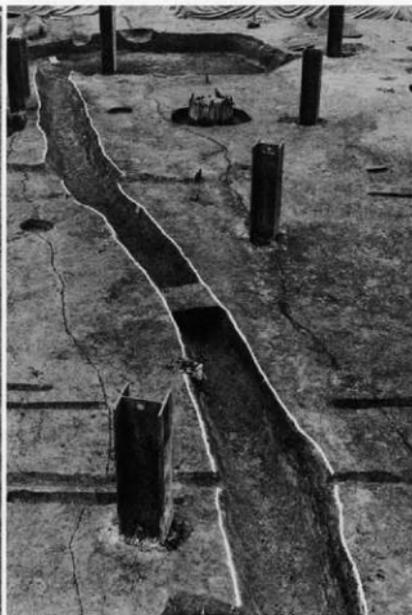


第1-3面 SD005・006(北から)

図版2 第1-3面



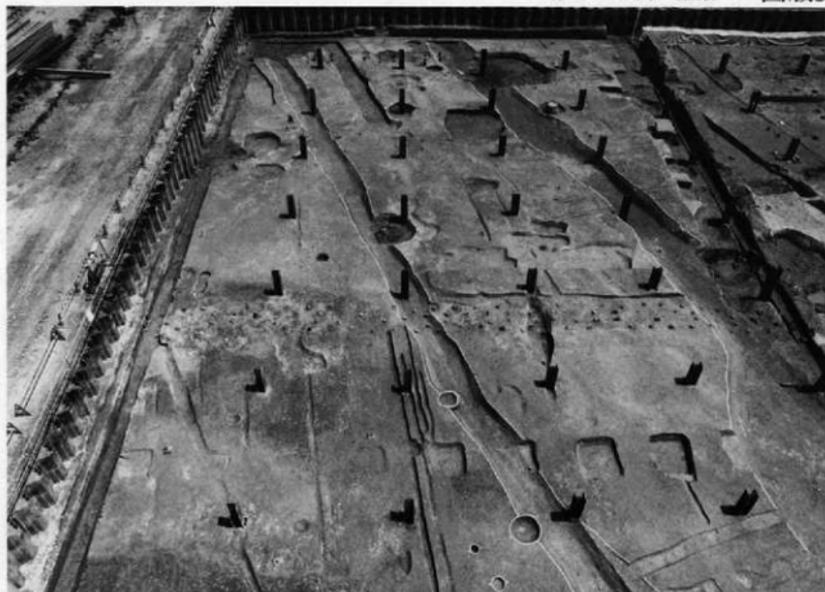
SD074(北から)



(南から)



SD007(東から)



I区(南から)



II区(南から)

図版4 第2-1面



上 NR071(南東から)
下 しがらみ検出状況(北東から)

大刀形木製品検出状況(北東から)



SD074・078(南から)



SD074・078 断面(南から)



SD081底で検出した足跡(南から)

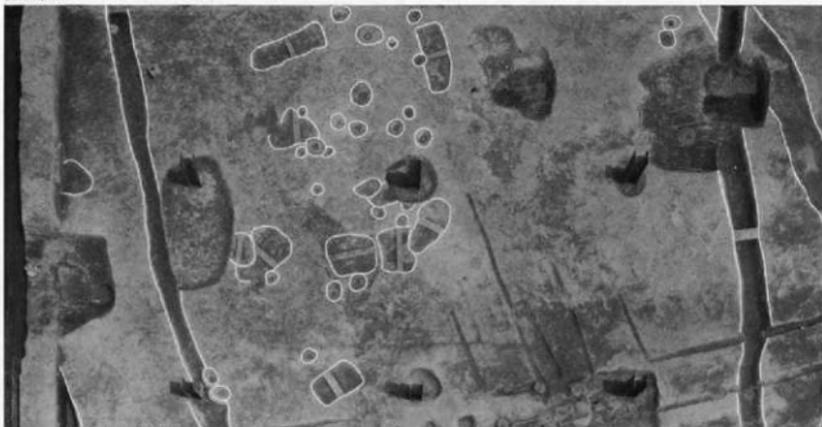


SD081(南から)



SD081 断面(南から)

図版6 第2-1面



土坑・ピット群(南から)



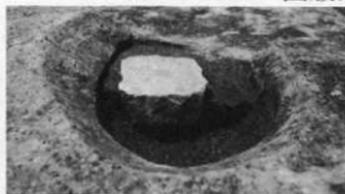
SD008・012・SK044～046(南から)



- 上 SK044 断面(南から)
中 SK045 断面(南東から)
下 SK046 断面(南から)



SK001(北から)



SP072(南から)



SK095(西から)



SK001 土器出土状況(東から)



SK088(西から)



SD010 断面(南から)



SK093(北から)



SD008 断面(南から)



SD011 断面(北から)

図版8 第2-2面



全景 I区(南から)



SK018(東から)



SK091(東から)



SK018 土器出土状況(東から)



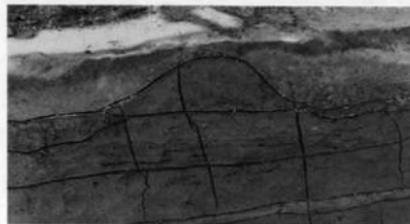
全景 I区(南から)



水田(北から)



(北西から)



水田畦畔断面(東から)



(西から)

図版10 第3-2・3面

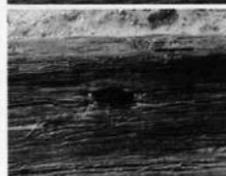


全景 I区(南から)



NR054準構造船検出状況

◀(西から)
▼(東から)



準構造船納穴

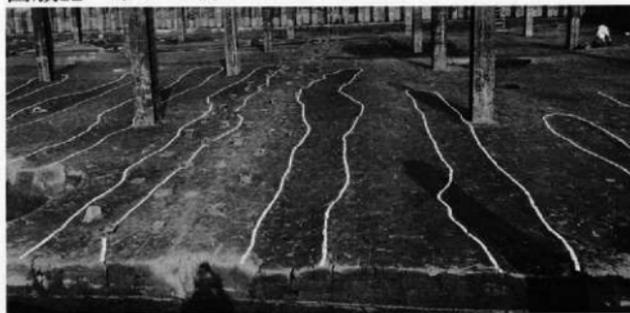


I区(南から)



II区(南から)

図版12 第4-1面



耕作溝群(西から)



耕作溝群(南西から)



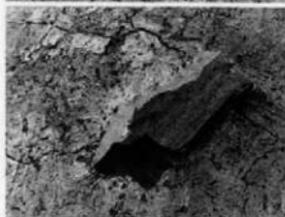
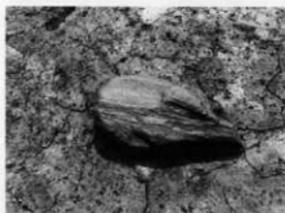
耕作溝群断面(西から)



SD119・120(北から)

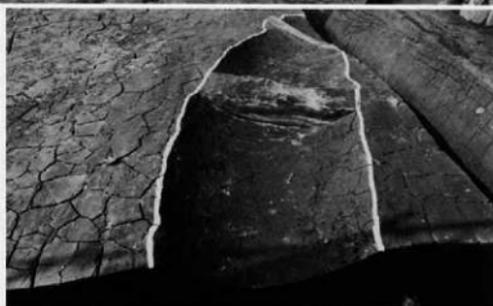


SD115・117(南東から)

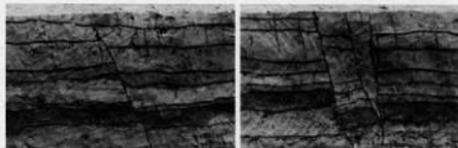


上 石塊1(北から)

下 石塊2(東から)



SD118(南から)



断層土層断面

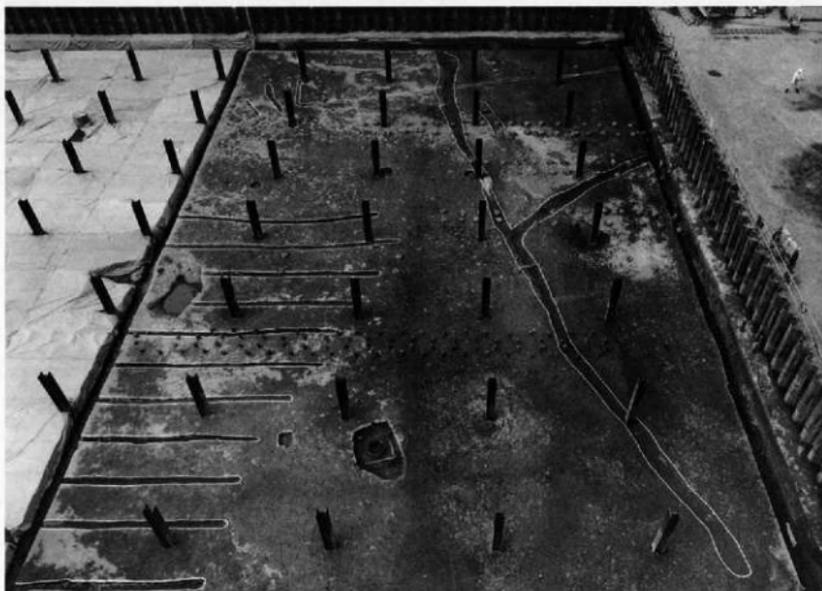


断層(南東から)

図版14 第4-2面 全景



I区(南から)

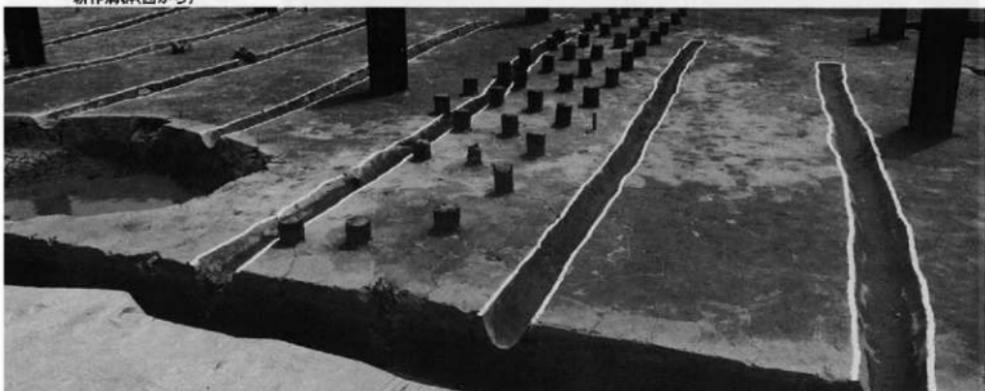


I区(南から)

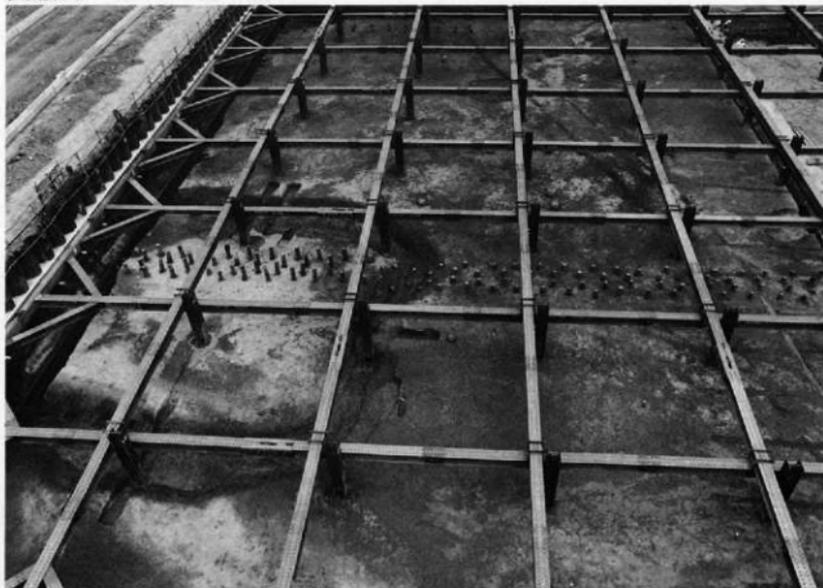


道路状遺構
SD130(右)・131(左)
(南から)

耕作溝群(西から)



図版16 第4-3面 全景



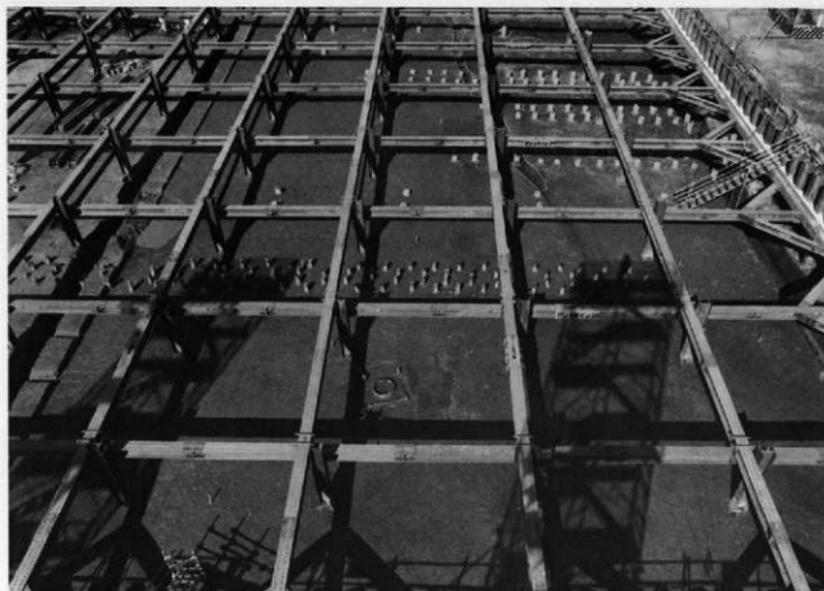
I区(南から)



II区(南から)

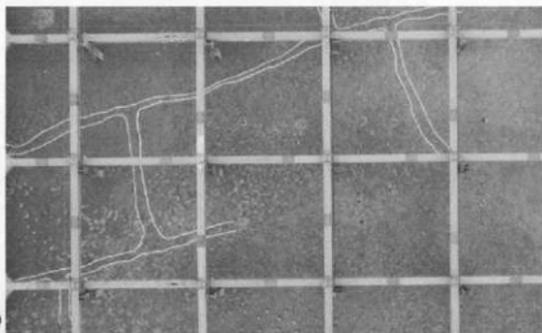


I区(南から)



II区(南から)

図版18 第5-1面 水田



(南から)



(南東から)



(南西から)



水田内で検出した足跡



I区(南から)

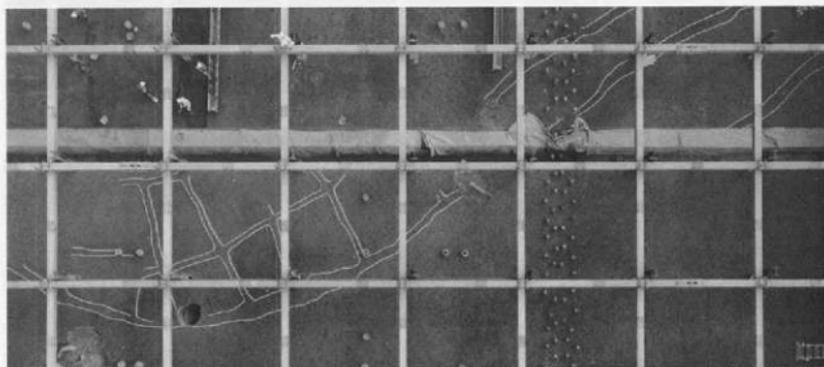


II区(南から)

図版20 第5-2面 水田



大睦畔2(北西から)



I区水田(西から)



SD160(北から)



大睦畔1(北から)



I区(南から)



II区(南から)

図版22 第6-2面



SK171(北から)



SK181(北から)



SP140～143(南西から)



SD138(左)・SD144(右)(東から)



填砂(南から)



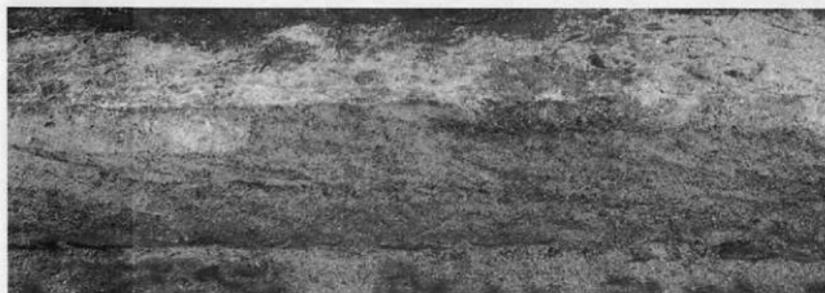
填砂断面(東から)



全景 I区(南から)



全景 II区(南から)



NR201土層断面 自然堤防部分

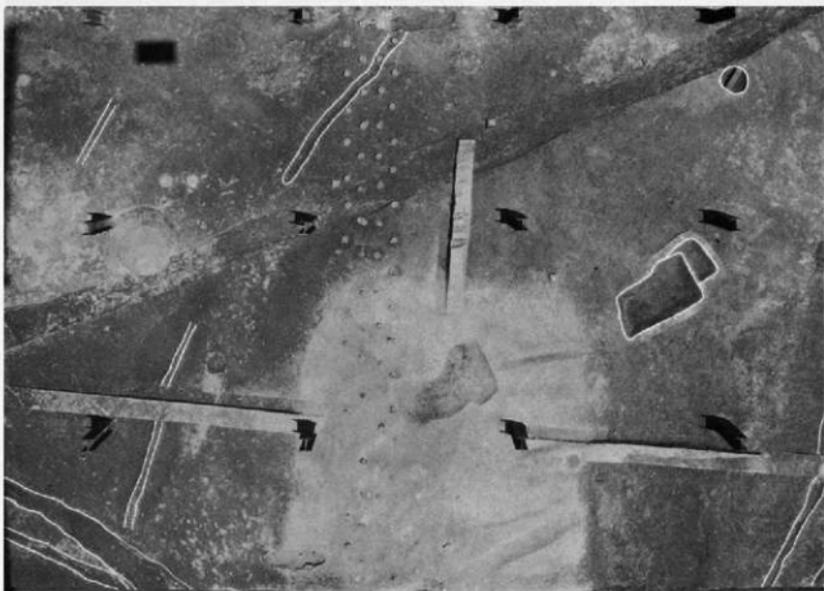


後背湿地部分

図版24 久宝寺1号墳検出過程 (西から)



第2-1面



第3-1面



第4-1面



第4-2面

図版26 第4-1面 久宝寺1号墳



(北から)



(南から)



上 陸橋部(北から)
中 (東から)



1号墳検出作業風景(南東から)

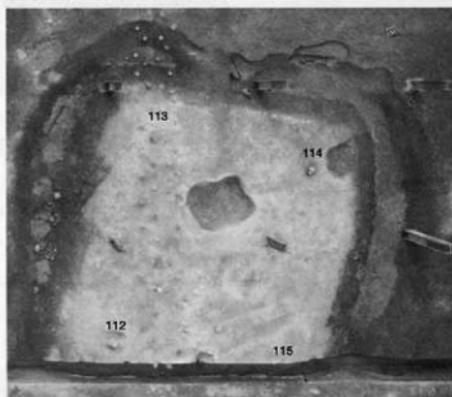
図版28 墳頂土器群



墳頂土器 113(北東から)



墳頂土器 114(北東から)



墳頂土器出土位置(西から)



墳頂土器 112(北から)



墳頂土器 115(西から)



(北西から)



(北西から)

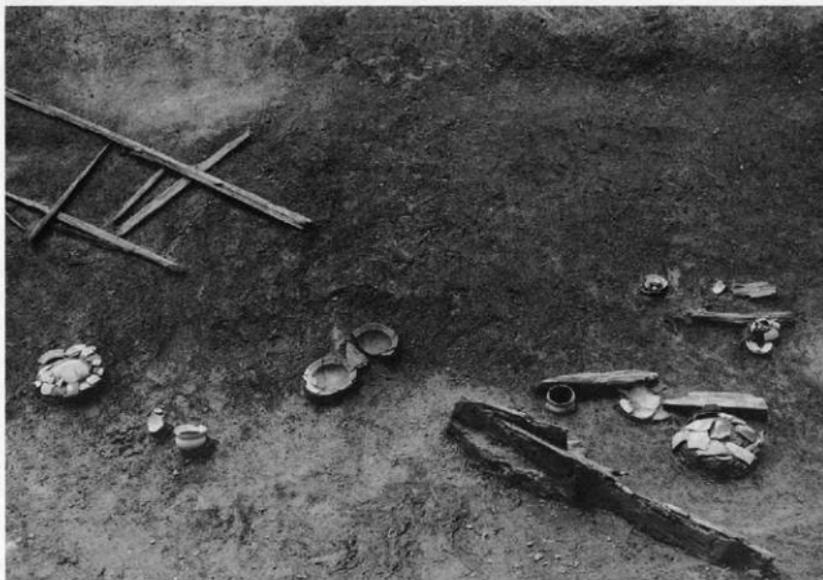
図版30



北辺周溝断面(西から)



南辺周溝断面(西から)



北辺周溝土器出土状況(北から)



(北から)

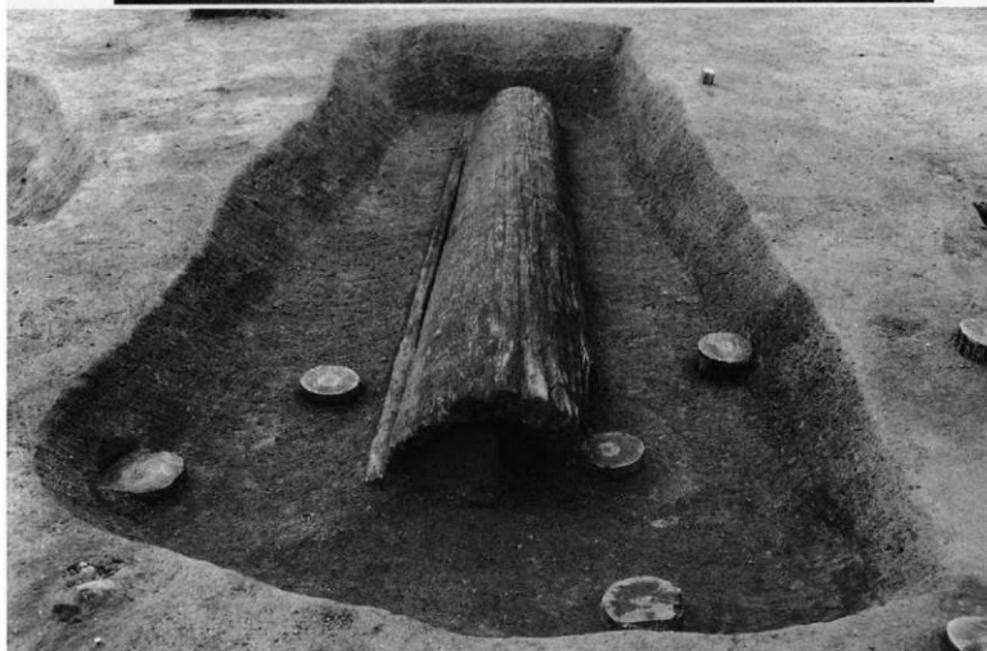


(北から)



用途不明木製品出土状況(北から)

図版32 1号主体部検出状況



上(南から) 中(北から) 下(東から)



1号主体部棺蓋除去直後(北から)



木棺北側小口部内堆積土(西から)

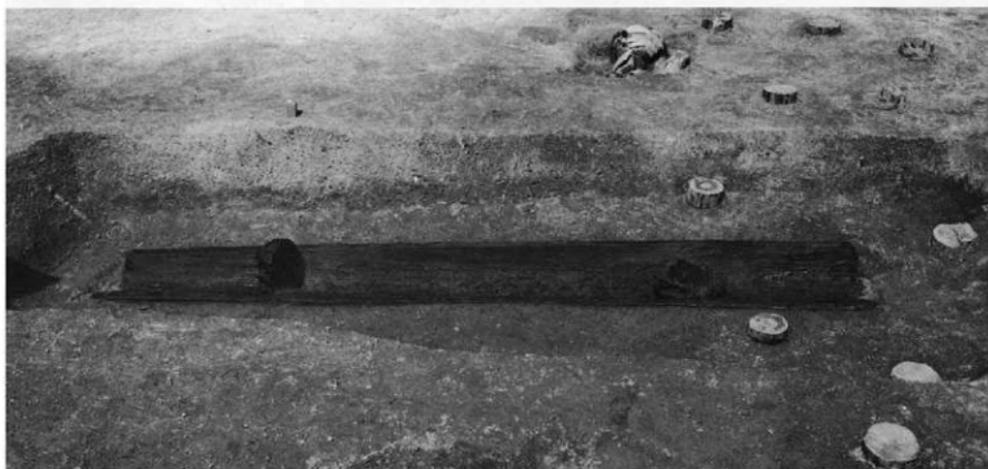


木棺南側小口部内堆積土(西から)

図版34 仕切板検出状況



(南から)



(東から)



上(北から)
中(西から)



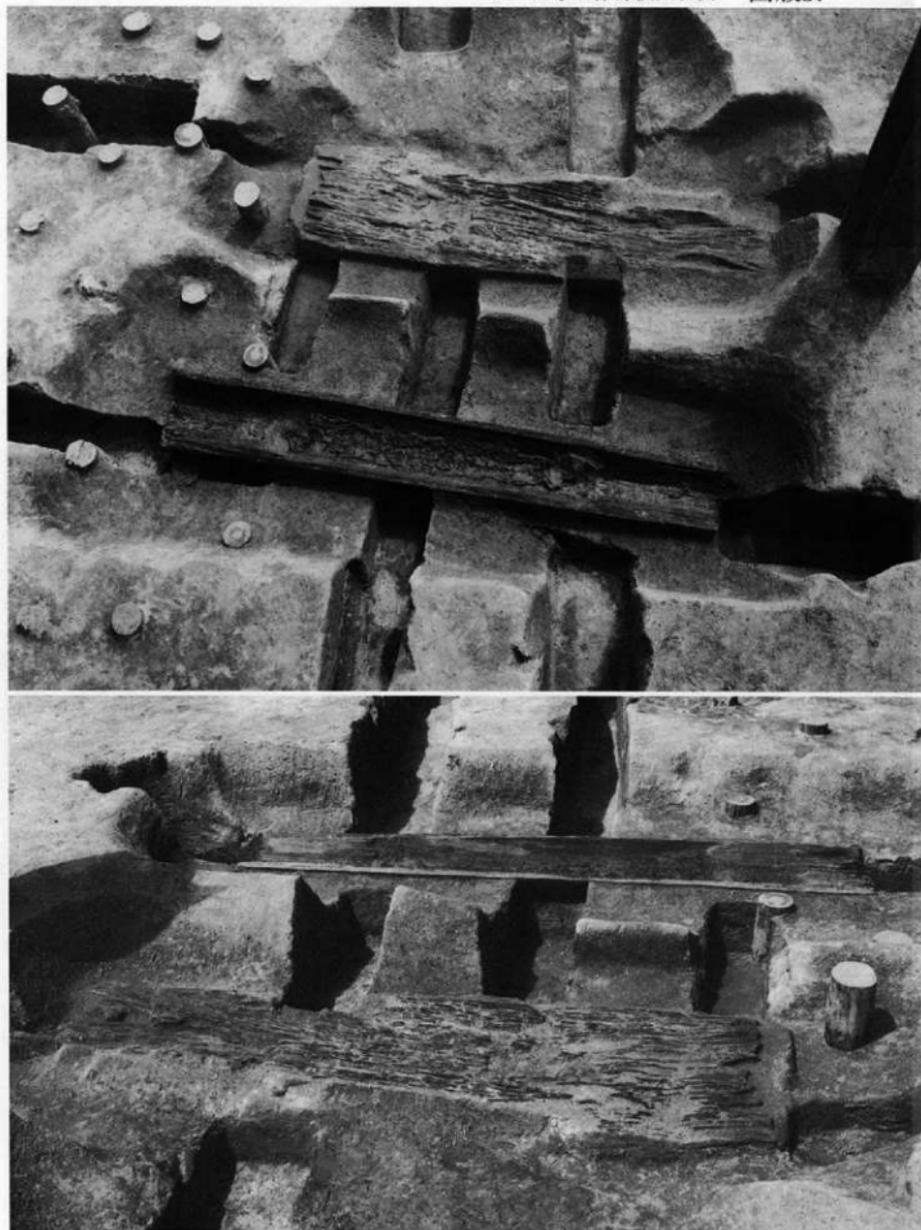
(北から)

図版36



上 第2被葬者頭部検出状況(南から)
下 歯牙(北から)

上 第1被葬者頭部検出状況(北から)
中 (南から)
下 歯牙(南から)



上(西から) 下(東から)

図版38 2号主体部

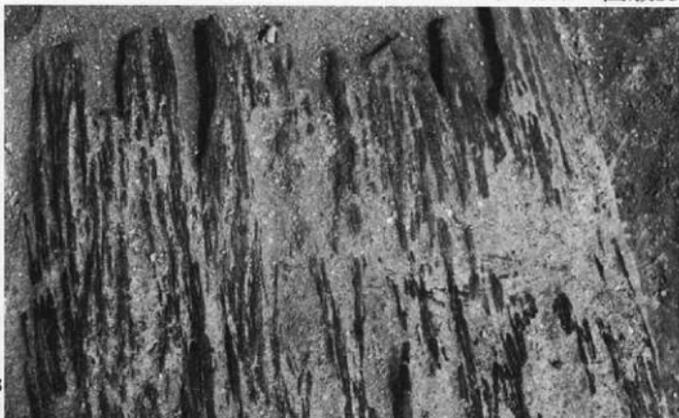


棺蓋(北から)



棺身(北から)

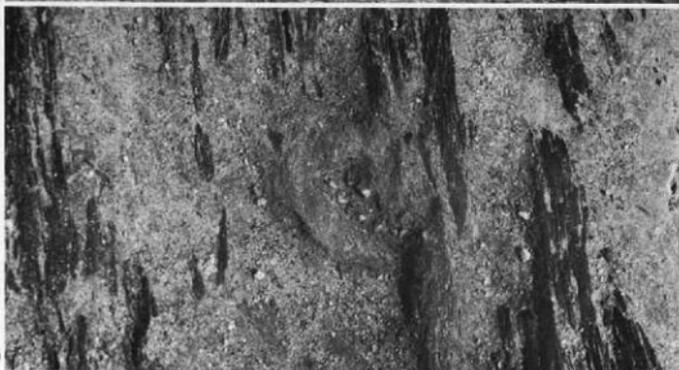
棺蓋小口部
(南から)



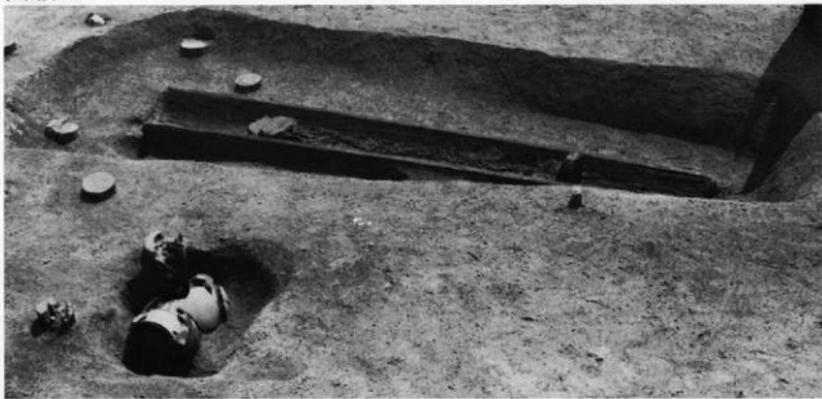
仕切板(西から)



歯牙(南から)



図版40



上 1・3号主体部(西から)
中 3号主体部(南から)

周溝外土器(116b)出土状況(西から)



4号主体部検出状況(南から)



4号主体部周辺土層断面(西から)



5号主体部(北から)

図版42



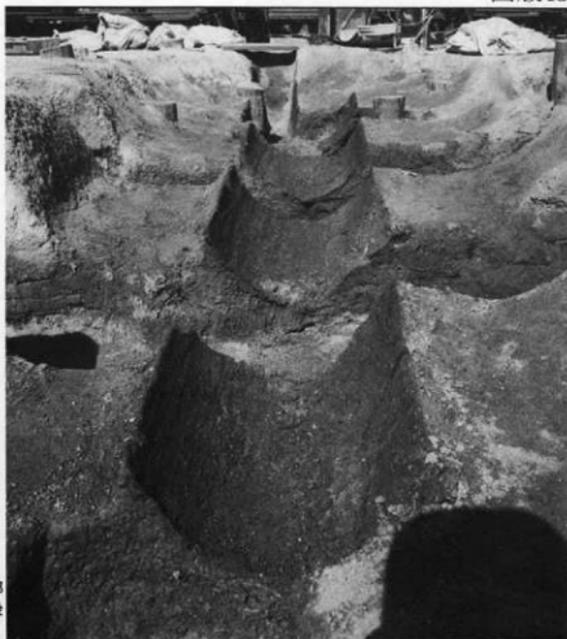
6号主体部(東から)



7号主体部(北から)



8号主体部(北から)



1号主体部
棺身除去後
(南から)



1・2号主体部基礎完備状況(北東から)

図版44 周溝完掘状況



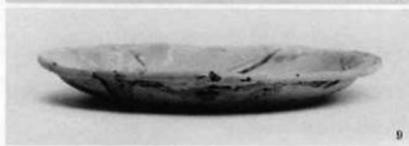
(東から)



(北東から)



8



9



11



13



24



25



16



18



21



20

图版46



27



28



29



31

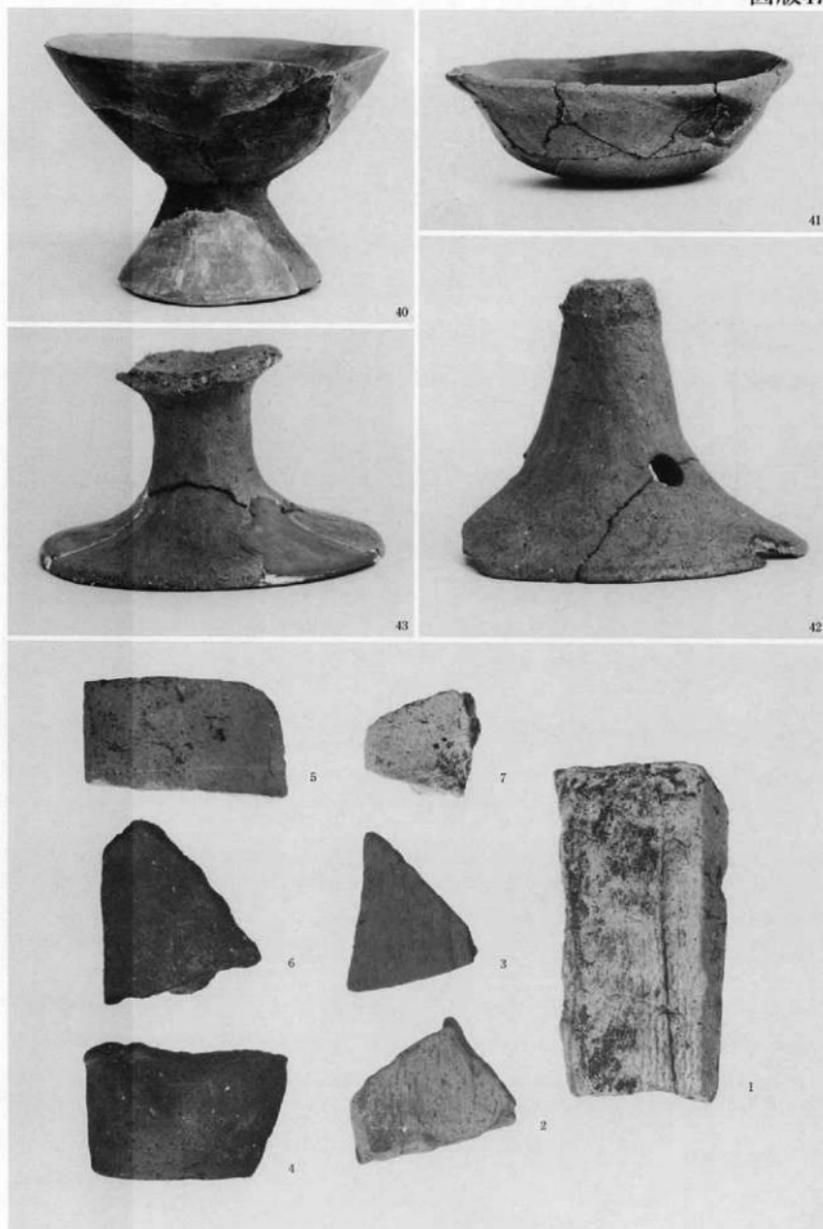


36



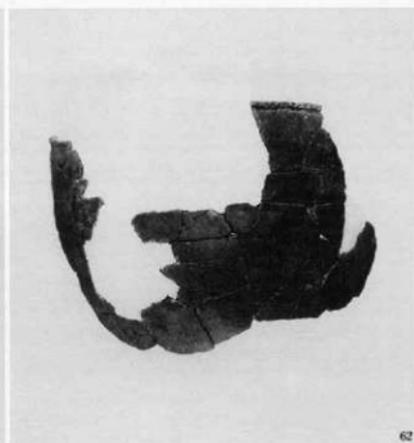
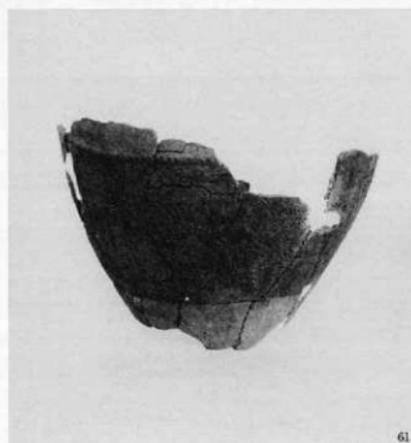
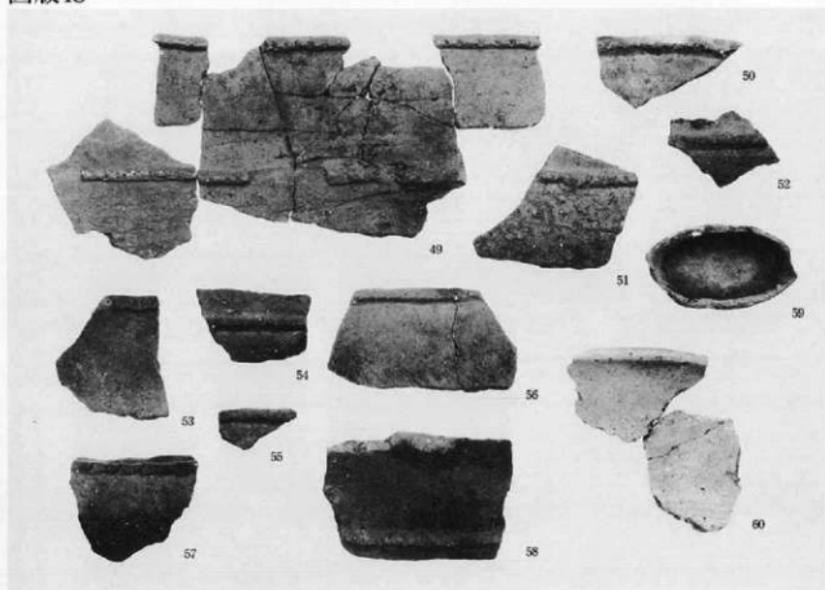
35

第3-1·2层、第3-3·4-1面出土土器

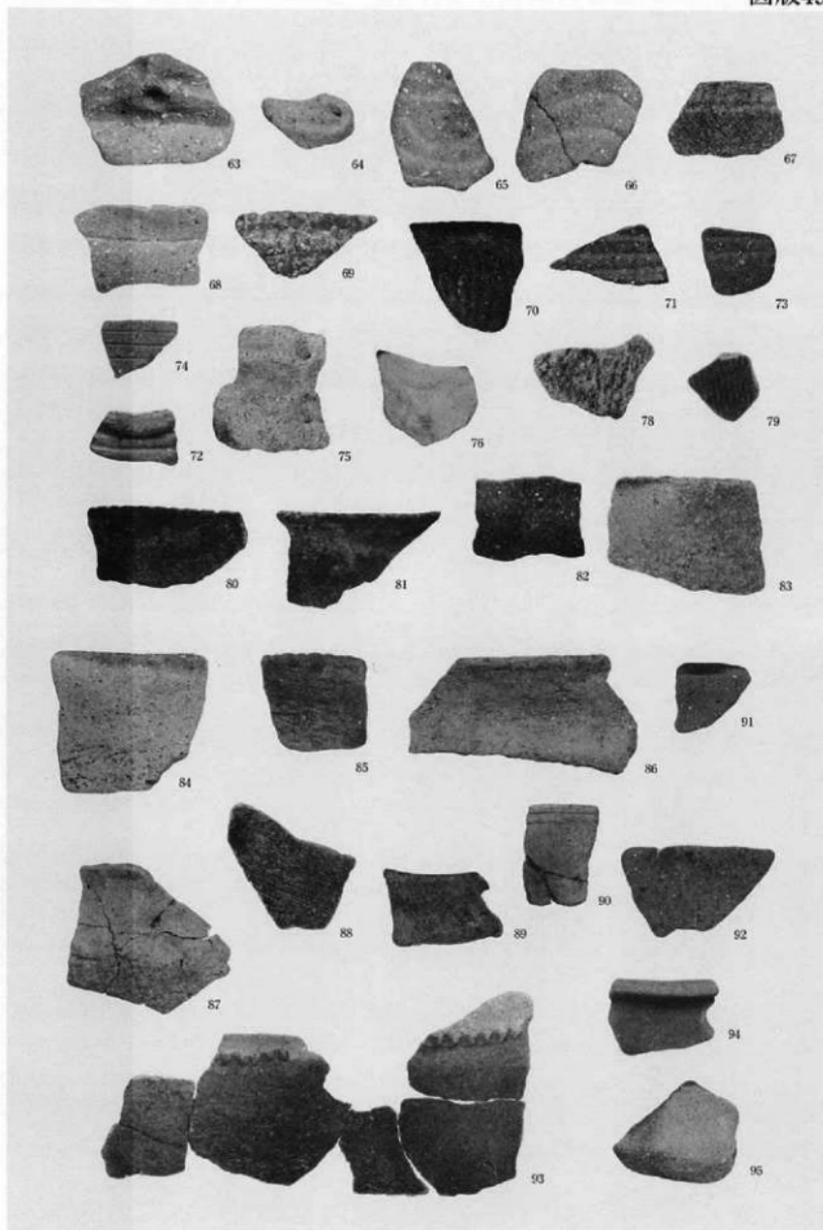


第4-1層出土土器、第1-3層出土瓦

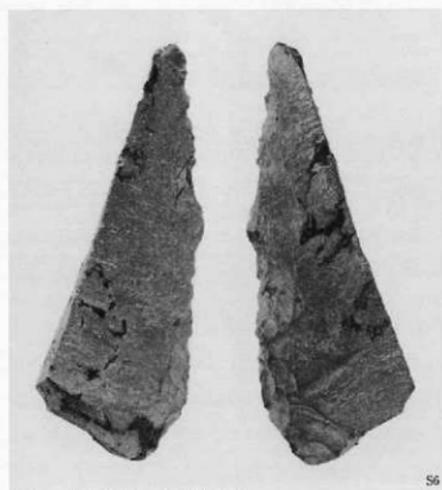
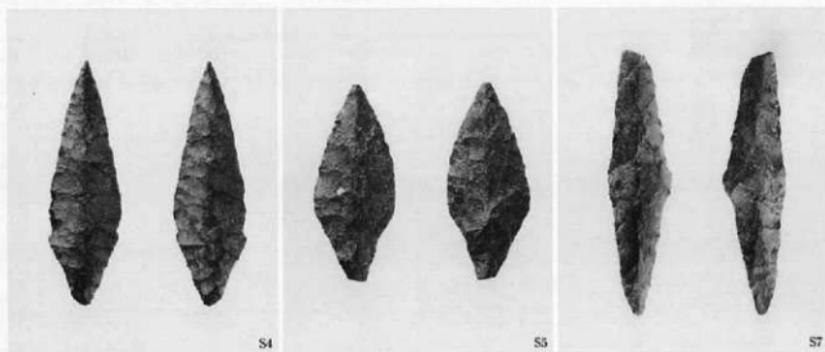
图版48



第6-1層、第6-2面出土土器

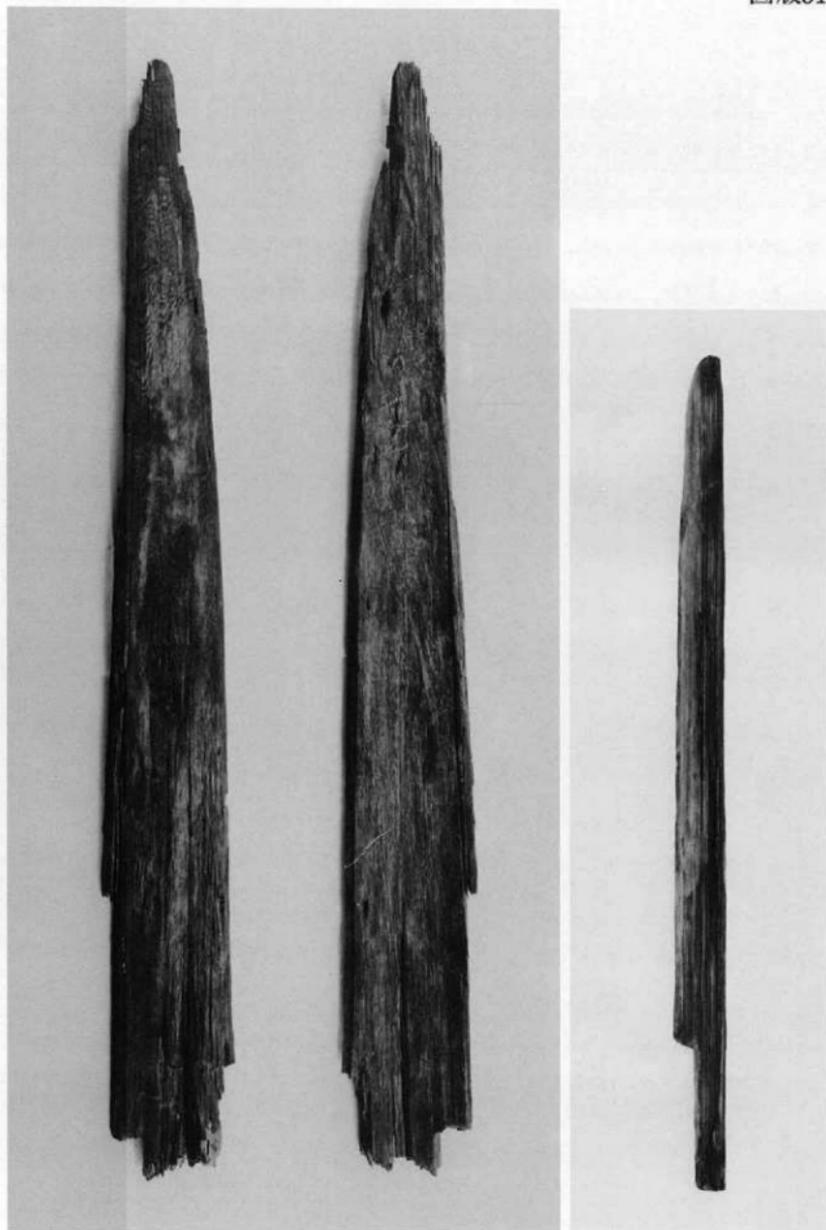


图版50



第5-2層・第6-1面出土石器

S6



NR054 準構造船・NR071 大刀形木製品





106



107



109



110



111





118



119



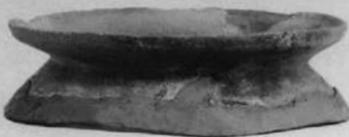
116b



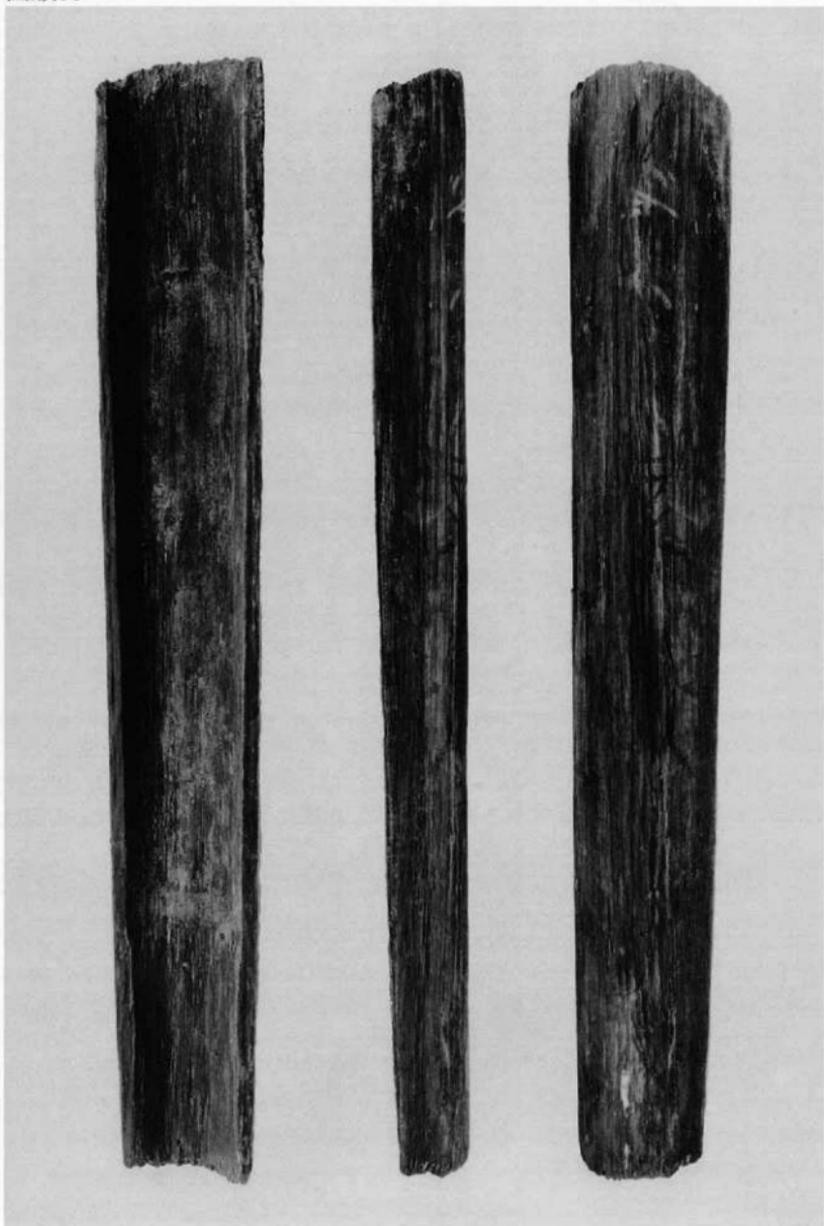
117



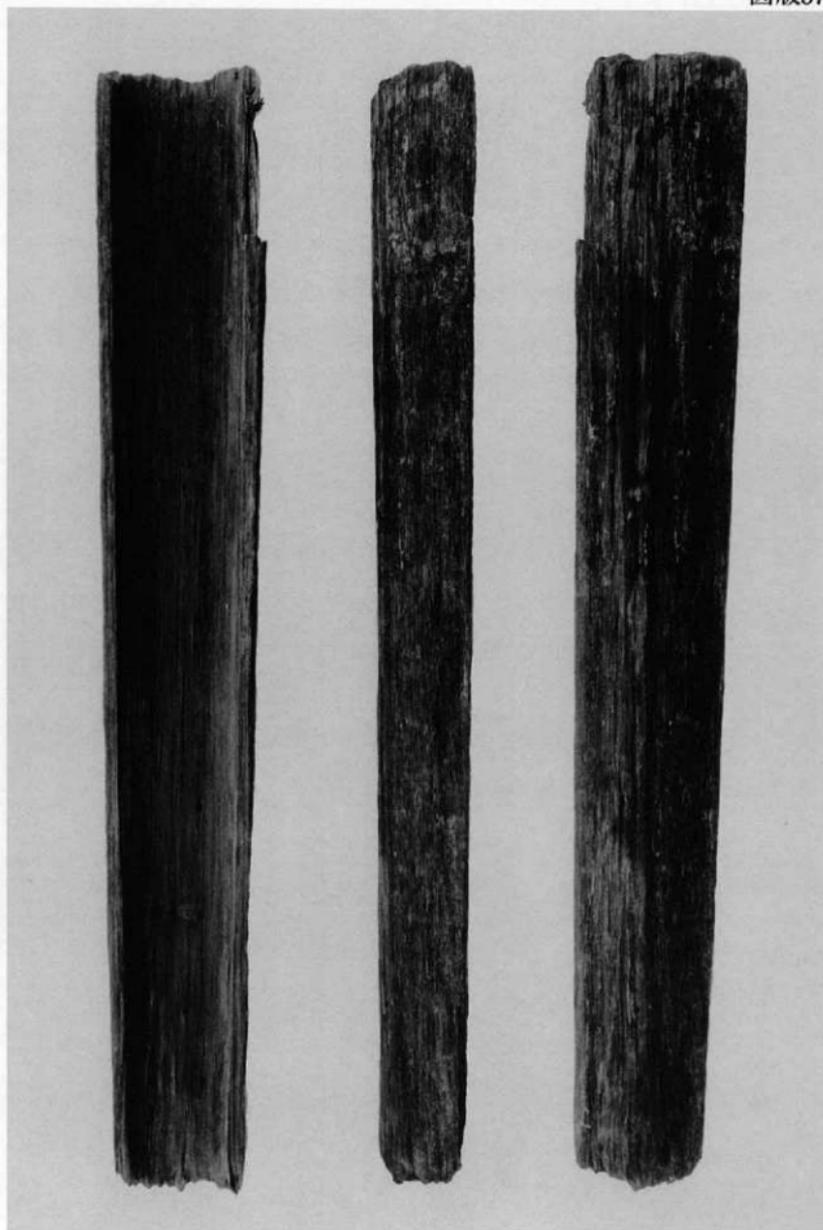
116a



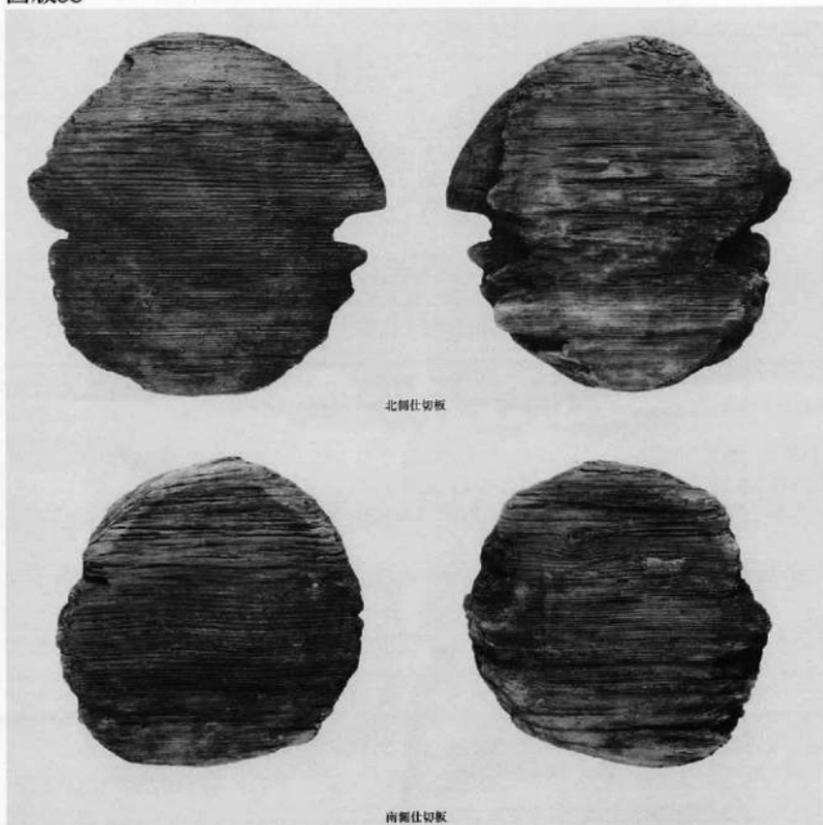
120



剖竹形木棺榫身



割竹形木棺棺蓋



割竹形木棺仕切板・第4-1面出土石塊

報告書抄録

ふりがな	きゅうほうじいせき・りゅうげちくはくつちょうさほうこくしょ 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V								
書名	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V								
副書名	大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査								
巻次	103								
シリーズ名	5								
編著者名	西村 歩・南條直子／阿部みき子・寒川 旭・山口誠治								
編集機関	(財)大阪府文化財センター								
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目2番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所内								
発行年月日	2003年10月31日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡	おおさかふ 大阪府	やまし 八尾市	27212	23	34 度 37 分 08 秒	135 度 35 分 10 秒	2001.02.27 ～ 2002.02.28 2002.02.12 ～ 2002.03.22	3.156㎡	大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う
たもくてきひろば 多目的広場	かめいちない 亀井地内								
たもくてきひろば に 多目的広場その2									
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物		特記事項		
久宝寺遺跡	集落	古代～中世	高畠・溝・耕作溝 土坑・ピット		土師器皿・黒色土器・ 瓦器椀		近世高畠内に中世包 含層が遺存		
	河川	古墳時代	自然河川		準構造船舶材		船底の一部		
	水田	古墳時代前 ～中期	畦畔・土坑・溝		土師器・須恵器				
	古墳	古墳時代前期	久宝寺1号墳		割竹形木棺・古式土 師器・木製品		埋没古墳をほぼ完全 な状態で検出 主体部に割竹形木棺 が完存		
	水田	弥生時代中～後期	畦畔・溝		弥生土器		足跡多数		
	包含層	弥生時代前期			縄紋土器 前期弥生土器		長原式縄紋土器と前 期弥生土器が同一層 から出土		
	遺構面	縄紋時代晩期	土坑		縄紋土器深鉢				
	河川	縄紋時代晩期	自然河川		縄紋土器深鉢・浅鉢				

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第103集

久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ

—大阪竜華都市拠点土地地区面整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査—

発行：2003年10月31日

編集：財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

TEL 072-299-8791

印刷・製本：株式会社 三協印刷社